

市道中村桑原線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3

# 束 本 遺 跡

－ 9次・10次調査－

# 小 坂 遺 跡

－ 1次～6次調査－

# 中 村 松 田 遺 跡

－ 5次・6次調査－

－本文編－

2011

財団法人松山市文化・スポーツ振興財団  
埋蔵文化財センター



# 東 本 遺 跡

－ 9 次・10次調査－

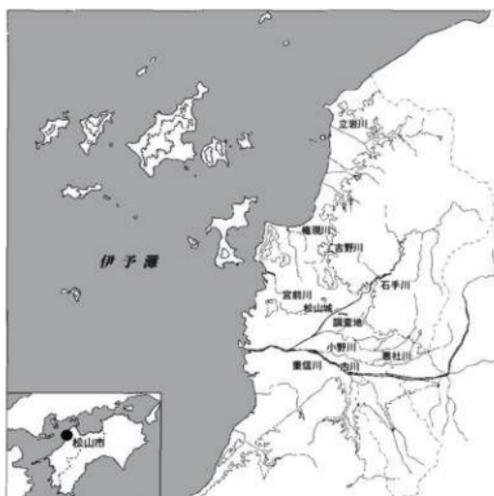
# 小 坂 遺 跡

－ 1 次～6次調査－

# 中 村 松 田 遺 跡

－ 5 次・6次調査－

－ 本文編－

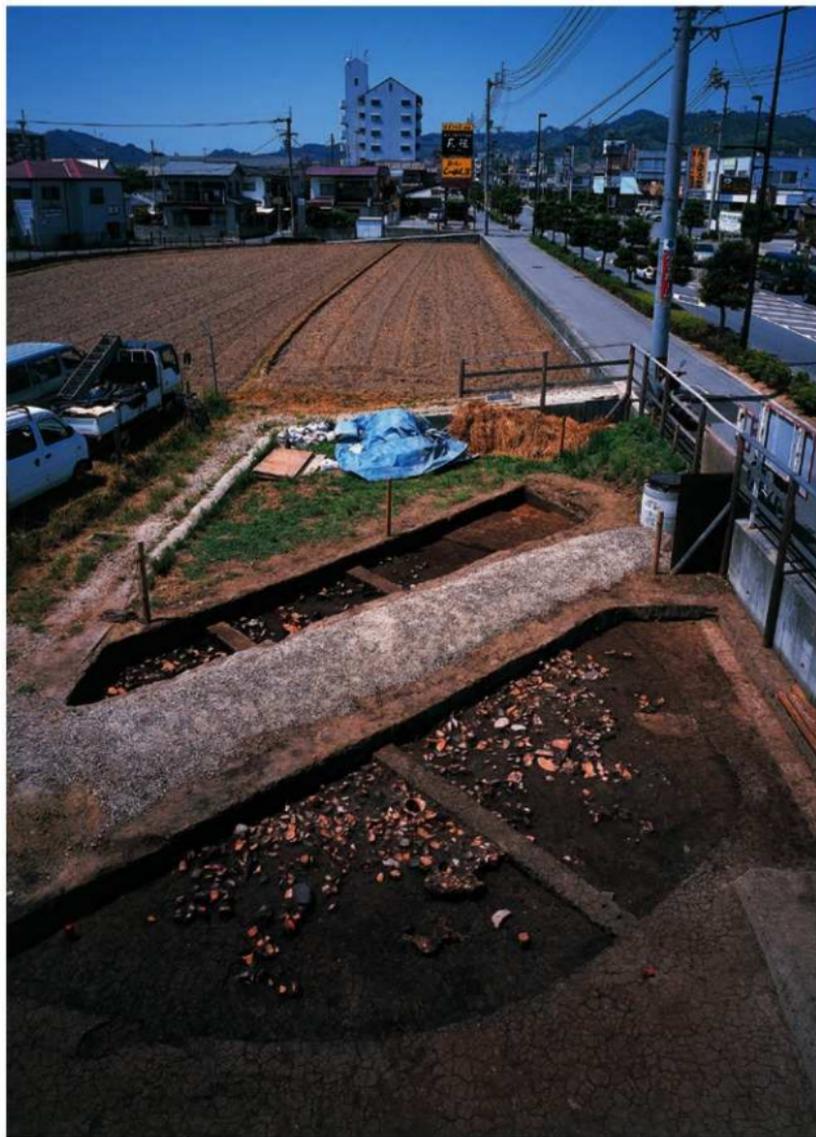


2011

財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

埋蔵文化財センター





巻頭図版1 東本遺跡9次調査 SB101遺物出土状況(南より)





卷頭図版2 東本遺跡9次調査 SB101出土遺物



## 序

本書は、市道中村桑原線3工区の道路改良工事に伴い、旧財団法人松山市生涯学習振興財団が松山市の委託を受けて実施した発掘調査報告書です。

市道中村桑原線に伴う発掘調査は、平成11年度～14年度に1工区、平成14年度～16年度に2工区、平成17年度～21年度に3工区、計17遺跡の調査が行われ、これまでの成果から松山平野の中心部を貫流する石手川左岸の弥生時代後期の大規模集落の発見をはじめ、弥生時代から近世にいたる数多くの遺構・遺物など、各時代にわたり継続的な人々の営みが行われてきたことが明らかになっています。

今回の発掘調査の主な成果としては、東本遺跡9次調査で弥生時代後期の竪穴住居の廃絶に伴い多種・多量の土器や装飾品などが一括して投棄される状況が確認されるなど、松山平野における竪穴住居の廃棄・廃絶に伴う儀礼のあり方を知る上で、貴重な発見となっています。また、中村松田遺跡5次調査では、鎌倉時代の集落遺跡として青磁や土師器・瓦器などとともに井戸3基が見つかり、そのうち1基からは完全な形の小刀が発見されるなど、井戸にまつわる祭祀や武士階級の生活の一端を復元できる貴重な資料を得ることができたものと考えています。

調査並びに報告書の作成にご協力いただきました関係各位に心より感謝申し上げますとともに、本書が埋蔵文化財の保護思想の啓発や調査・研究にご活用いただければ幸いに存じます。

平成23年3月31日

財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

理事長 一色哲昭

## 例 言

1. 本報告書は、松山市小坂二丁目210番1外において松山市都市整備部道路建設課の委託を受け、財団法人 松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センターが実施した松山市道中村桑原線3工区の道路改良工事に伴う発掘調査報告書である。(財団法人 松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センターは平成22年4月1日の合併により財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団 施設利用推進部 埋蔵文化財センターに改称)
2. 調査は、松山市道中村桑原線3工区の道路改良工事に先立ち事前調査として、2006(平成18)年2月1日～2009(平成21)年5月15日までの間に実施された。
3. 本書にかかる図面の作成は、担当者の責任のもと岩本美保、木下奈緒美、木西嘉子、佐伯利枝、田崎真理、多知川富美子、中村紫、西本三枝、丹生谷道代、平岡直美、本多智絵、村上真由美、矢鋪妙子、矢野久子、山下満佐子、岡崎政信、黒田竜弥、保島秀幸、山邊進也が行った。
4. 遺構の撮影は、担当調査員と大西朋子が行い、遺物撮影・写真図版の作成は大西朋子が行った。
5. 遺構図・遺物図の縮尺は、縮分値を記した。
6. 略号で記した遺構は基本的には以下である。  
堅穴住居：S B 土坑：S K 柱穴：S P 溝：S D 性格不明：S X 自然流路：S Rである。  
(※堅穴住居内の土坑、柱穴についてはSを除いて土坑はK、柱穴はPと表記した遺跡もある)
7. 使用した方位は、国土座標第IV系に基づく座標北(世界測地系)を基本としている。
8. 本報告にかかわる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターに保管されている。
9. 本報告の発掘担当者及び執筆者は以下である。  
東本遺跡9次調査：相原秀仁(現 松山市総合コミュニティセンター)・相原浩二  
東本遺跡10次調査・小坂遺跡2次・3次・5次調査：相原浩二  
小坂遺跡1次調査：山之内志郎  
小坂遺跡4次調査：栗田茂敏  
小坂遺跡6次調査：高尾和長  
中村松田遺跡5次・6次調査：宮内慎一
10. 本報告の編集は調査担当者の協力のもと相原浩二が行った。

# 本文目次

第1章	はじめに [相原]	1
	第1節 調査に至る経緯	
	第2節 刊行組織	
	第3節 環境	
第2章	調査の概要 [相原]	8
	第1節 調査の経緯	
	第2節 調査地一覧	
第3章	東本遺跡 - 9次調査 - [相原]	9
	第1節 調査の経緯	
	第2節 層位	
	第3節 遺構と遺物	
	第4節 小結	
第4章	東本遺跡 - 10次調査 - [相原]	71
	第1節 調査の経緯	
	第2節 層位	
	第3節 遺構と遺物	
	第4節 小結	
第5章	小坂遺跡 - 1次調査 - [山之内]	95
	第1節 調査の経緯	
	第2節 層位	
	第3節 遺構と遺物	
	第4節 小結	
第6章	小坂遺跡 - 2次調査 - [相原]	125
	第1節 調査の経緯	
	第2節 層位	
	第3節 遺構と遺物	
	第4節 小結	
第7章	小坂遺跡 - 3次調査 - [相原]	137
	第1節 調査の経緯	
	第2節 層位	
	第3節 遺構と遺物	
	第4節 小結	
第8章	小坂遺跡 - 4次調査 - [栗田]	151
	第1節 調査の経緯	
	第2節 層位	
	第3節 遺構と遺物	
	第4節 小結	
第9章	小坂遺跡 - 5次調査 - [相原]	173
	第1節 調査の経緯	
	第2節 層位	
	第3節 遺構と遺物	
	第4節 小結	
第10章	小坂遺跡 - 6次調査 - [高尾]	185
	第1節 調査の経緯	
	第2節 層位	
	第3節 遺構と遺物	
	第4節 小結	
第11章	中村松田遺跡 - 5次調査 - [宮内]	213
	第1節 調査の経緯	
	第2節 層位	
	第3節 遺構と遺物	
	第4節 小結	

第12章 中村松田遺跡 - 6次調査 - [宮内] .....	277
第1節 調査の経緯	
第2節 層位	
第3節 遺構と遺物	
第4節 小結	
第13章 まとめ [相原] .....	311

## 挿図目次

### 第1章 はじめに

第i図 調査地位置図 (縮尺1:25,000) .....	1
第ii図 松山市包蔵地地図と中村桑原線・調査地位置図(数字内が包蔵地)(縮尺1:12,500) ..	2
第iii図 調査地位置図と周辺の遺跡 (縮尺1:5,000) .....	4

### 第3章 東本遺跡9次調査

第1図 調査地位置図 (縮尺1:1,000) .....	11
第2図 1区東壁・南壁、2区南壁土層図 (縮尺1:40) .....	13
第3図 1区遺構配置図 (縮尺1:100) .....	14
第4図 2区遺構配置図 (縮尺1:50) .....	15
第5図 S B 101測量図 (縮尺1:60) .....	17
第6図 S B 101遺物出土状況図 (甕・鉢) (縮尺1:150、1:20) .....	18
第7図 S B 101遺物出土状況図 (壺) (縮尺1:150、1:20) .....	19
第8図 S B 101遺物出土状況図 (高坏・器台・支脚) (縮尺1:150、1:20) .....	20
第9図 S B 101遺物出土状況図 (石・玉類) (縮尺1:150、1:16、1:8) .....	20
第10図 S B 101出土遺物実測図 (1) (縮尺1:4) .....	21
第11図 S B 101出土遺物実測図 (2) (縮尺1:4) .....	22
第12図 S B 101出土遺物実測図 (3) (縮尺1:4) .....	23
第13図 S B 101出土遺物実測図 (4) (縮尺1:4) .....	24
第14図 S B 101出土遺物実測図 (5) (縮尺1:4) .....	26
第15図 S B 101出土遺物実測図 (6) (縮尺1:4) .....	27
第16図 S B 101出土遺物実測図 (7) (縮尺1:4) .....	28
第17図 S B 101出土遺物実測図 (8) (縮尺1:4) .....	29
第18図 S B 101出土遺物実測図 (9) (縮尺1:4) .....	31
第19図 S B 101出土遺物実測図 (10) (縮尺1:4) .....	32
第20図 S B 101出土遺物実測図 (11) (縮尺1:4) .....	33
第21図 S B 101出土遺物実測図 (12) (縮尺1:4) .....	34

第22図	S B101出土遺物実測図 (13)	(縮尺1:4)	35
第23図	S B101出土遺物実測図 (14)	(縮尺1:4)	37
第24図	S B101出土遺物実測図 (15)	(縮尺1:4)	38
第25図	S B101出土遺物実測図 (16)	(縮尺1:4)	39
第26図	S B101出土遺物実測図 (17)	(縮尺1:4)	40
第27図	S B101出土遺物実測図 (18)	(縮尺1:4)	42
第28図	S B101出土遺物実測図 (19)	(縮尺1:4)	43
第29図	S B101出土遺物実測図 (20)	(縮尺1:4)	44
第30図	S B101出土遺物実測図 (21)	(縮尺1:4)	45
第31図	S B101出土遺物実測図 (22)	(縮尺1:4)	46
第32図	S B101出土遺物実測図 (23)	(縮尺1:4)	48
第33図	S B101出土遺物実測図 (24)	(縮尺1:4)	49
第34図	S B101出土遺物実測図 (25)	(縮尺1:4)	51
第35図	S B101出土遺物実測図 (26)	(縮尺1:4)	52
第36図	S B101出土遺物実測図 (27)	(縮尺1:4)	53
第37図	S B101出土遺物実測図 (28)	(縮尺1:4)	54
第38図	S B101出土遺物実測図 (29)	(縮尺1:4)	55
第39図	S B101出土遺物実測図 (30)	(縮尺1:4)	56
第40図	S B101出土遺物実測図 (31)	(縮尺1:4)	57
第41図	S B101出土遺物実測図 (32)	(縮尺1:4、1:2)	59
第42図	S B101出土遺物実測図 (33)	(縮尺1:4)	60
第43図	S B101炉跡測量図・出土遺物実測図	(縮尺1:40、1:4)	61
第44図	S B101内S K101測量図・出土遺物実測図	(縮尺1:40、1:4)	62
第45図	S B101内S K103測量図・出土遺物実測図	(縮尺1:40、1:4)	63
第46図	S B101内S K104・S P147出土遺物実測図	(縮尺1:4)	63
第47図	S K201測量図	(縮尺1:20)	65
第48図	S K201出土遺物実測図 (1)	(縮尺1:3)	65
第49図	S K201出土遺物実測図 (2)	(縮尺1:3)	66
第50図	S K203測量図・出土遺物実測図	(縮尺1:40、1:3)	66
第51図	S P測量図	(縮尺1:40)	67
第52図	S P出土遺物実測図	(縮尺1:3、1:2)	69

#### 第4章 東本遺跡10次調査

第1図	調査地位位置図	(縮尺1:1,000)	73
第2図	南壁土層図	(縮尺1:40)	74
第3図	遺構配置図	(縮尺1:100)	75
第4図	S B 1 測量図	(縮尺1:60)	77

第5図	S B 1 柱穴測量図 (縮尺1:40) .....	78
第6図	S B 1 炉1・炉2測量図 (縮尺1:40) .....	79
第7図	S B 1 内土坑測量図 (縮尺1:40) .....	80
第8図	S B 1 遺物出土状況図 (縮尺1:100、1:8、1:16) .....	81
第9図	S B 1 出土遺物実測図 (1) (縮尺1:4) .....	82
第10図	S B 1 出土遺物実測図 (2) (縮尺1:4) .....	83
第11図	S B 1 出土遺物実測図 (3) (縮尺1:4) .....	84
第12図	S B 1 出土遺物実測図 (4) (縮尺1:4) .....	85
第13図	S B 1 出土遺物実測図 (5) (縮尺1:4、1:8、1:2) .....	86
第14図	S B 1 出土遺物実測図 (6) (縮尺1:4) .....	87
第15図	S K 3 測量図・出土遺物実測図 (縮尺1:40、1:4) .....	88
第16図	古代以降遺構配置図 (縮尺1:100) .....	89
第17図	S K 1 測量図・出土遺物実測図 (縮尺1:40、1:3) .....	90
第18図	S P 測量図 (縮尺1:40) .....	91
第19図	S P 出土遺物実測図 (縮尺1:3、1:4) .....	92
第20図	その他出土遺物実測図 (縮尺1:4、1:3) .....	93
第21図	S B 1 構築時と改築状況 (縮尺1:80) .....	94

## 第5章 小坂遺跡1次調査

第1図	調査地位置図 (縮尺1:1,000) .....	98
第2図	遺構配置図 (縮尺1:150) .....	99
第3図	北壁土層図 (1) (縮尺1:40) .....	100
第4図	北壁土層図 (2) (縮尺1:40) .....	101
第5図	南壁土層図 (1) (縮尺1:40) .....	102
第6図	南壁土層図 (2) (縮尺1:40) .....	103
第7図	掘立1測量図・出土遺物実測図 (縮尺1:100、1:3) .....	105
第8図	掘立1-P2測量図 (縮尺1:10) .....	105
第9図	掘立2測量図 (縮尺1:100) .....	106
第10図	掘立3測量図 (縮尺1:100) .....	107
第11図	掘立3出土遺物実測図 (縮尺1:3) .....	108
第12図	掘立3-P17測量図 (縮尺1:10) .....	108
第13図	S K 1 測量図・出土遺物実測図 (縮尺1:30、1:3) .....	110
第14図	S K 2 測量図・出土遺物実測図 (縮尺1:30、1:3) .....	110
第15図	S K 3 測量図・出土遺物実測図 (縮尺1:30、1:3) .....	111
第16図	S K 5 測量図・出土遺物実測図 (縮尺1:30、1:3) .....	111
第17図	S K 4・S K 6 測量図 (縮尺1:30) .....	113
第18図	S K 8 測量図 (縮尺1:30) .....	113

第19図	畑1・畑2測量図(縮尺1:100) .....	115
第20図	畑1・畑2出土遺物実測図(縮尺1:3、1:2) .....	116
第21図	畑1畝溝1g測量図・出土遺物実測図(縮尺1:20、1:2) .....	118
第22図	畑3測量図(縮尺1:100) .....	118
第23図	S P出土遺物実測図(縮尺1:3、1:2) .....	120
第24図	包含層出土遺物実測図(1)(縮尺1:3) .....	121
第25図	包含層出土遺物実測図(2)(縮尺1:2) .....	122

## 第6章 小坂遺跡2次調査

第1図	調査地位置図(縮尺1:1,000) .....	127
第2図	調査区位置図(縮尺1:200) .....	128
第3図	1区土層図(縮尺1:40) .....	129
第4図	2区西壁・南壁土層図(縮尺1:40) .....	130
第5図	1区遺構配置図(縮尺1:100) .....	131
第6図	2区遺構配置図(縮尺1:100) .....	132
第7図	S D101測量図・出土遺物実測図(縮尺1:100、1:3) .....	133
第8図	畑状遺構測量図(縮尺1:50) .....	133
第9図	S K101・S K102・S K103測量図(縮尺1:40) .....	134
第10図	S K103出土遺物実測図(縮尺1:3) .....	134
第11図	S P測量図(縮尺1:20) .....	135
第12図	S P出土遺物実測図(縮尺1:3) .....	136

## 第7章 小坂遺跡3次調査

第1図	調査地位置図(縮尺1:1,000) .....	139
第2図	北壁土層図(縮尺1:50) .....	140
第3図	遺構配置図(縮尺1:150) .....	141
第4図	SD1・SD1-1・SD1-2・SD1-3・SD1-4測量図(縮尺1:100) .....	142
第5図	SD1・SD1-1・SD1-2・SD1-3・SD1-4土層図(縮尺1:40) .....	143
第6図	S D 1出土遺物実測図(1)(縮尺1:3) .....	144
第7図	S D 1出土遺物実測図(2)(縮尺1:3) .....	146
第8図	S D 1出土遺物実測図(3)(縮尺1:2) .....	147
第9図	SD1-1・SD1-2・SD1-4出土遺物実測図(縮尺1:3) .....	148
第10図	S D 3・S D 4・S D 5測量図(縮尺1:50) .....	149
第11図	S D 2測量図(縮尺1:50) .....	149
第12図	その他出土遺物実測図(縮尺1:3) .....	150

## 第8章 小坂遺跡4次調査

第1図	調査地位置図 (縮尺1:1,000)	153
第2図	2区北壁土層図 (縮尺1:50)	154
第3図	遺構配置図 (縮尺1:250)	155
第4図	2区東壁土層図 (縮尺1:50)	156
第5図	S B 1 測量図 (縮尺1:50)	157
第6図	S B 1 遺物出土状況図 (縮尺1:40)	158
第7図	S B 1 出土遺物実測図 (縮尺1:4)	159
第8図	S D 1 測量図 (縮尺1:40)	160
第9図	S D 2 測量図 (縮尺1:40)	161
第10図	S D 2 出土遺物実測図 (縮尺1:4)	161
第11図	S D 3 測量図 (縮尺1:40)	162
第12図	S D 3 遺物出土状況図 (縮尺1:40)	163
第13図	S D 3 出土遺物実測図 (1) (縮尺1:4)	164
第14図	S D 3 出土遺物実測図 (2) (縮尺1:4)	165
第15図	S D 3 出土遺物実測図 (3) (縮尺1:4)	166
第16図	S D 3 出土遺物実測図 (4) (縮尺1:4)	167
第17図	S K 1 測量図 (縮尺1:20)	168
第18図	S K 1 出土遺物実測図 (縮尺1:4)	168
第19図	S K 2 測量図 (縮尺1:20)	169
第20図	S K 2 出土遺物実測図 (縮尺1:4)	169
第21図	S X 2 測量図 (縮尺1:30)	170
第22図	S X 2 出土遺物実測図 (縮尺1:4)	170
第23図	S X 1 測量図 (縮尺1:20)	171
第24図	S P・現代坑・表採出土遺物実測図 (縮尺1:4、1:3)	171

## 第9章 小坂遺跡5次調査

第1図	調査地位置図 (縮尺1:1,000)	175
第2図	南壁土層図 (縮尺1:40)	176
第3図	遺構配置図 (縮尺1:100)	177
第4図	S K 1 測量図 (縮尺1:20)	178
第5図	S K 1 出土遺物実測図 (縮尺1:4、1:2)	178
第6図	S D 2・S D 2-1・S D 3 測量図 (縮尺1:100、1:50)	179
第7図	S D 2・S D 2-1・S D 3 出土遺物実測図 (縮尺1:4、1:2)	180
第8図	S B 1・S D 1 測量図 (縮尺1:40)	181
第9図	S B 1 出土遺物実測図 (縮尺1:3)	181
第10図	S D 1 出土遺物実測図 (縮尺1:4)	181

第11図	S P測量図 (縮尺1:40) .....	183
第12図	畑状遺構測量図 (縮尺1:40) .....	183

## 第10章 小坂遺跡6次調査

第1図	調査地位置図 (縮尺1:1,000) .....	187
第2図	区割図 (縮尺1:400) .....	188
第3図	東壁・西壁土層図 (縮尺1:40) .....	189
第4図	遺構配置図 (縮尺1:200) .....	190
第5図	S D 1・S D 2測量図 (縮尺1:80) .....	192
第6図	S D 1・S D 2上層遺物出土状況図 (縮尺1:80、1:12) .....	193
第7図	S D 1・S D 2中層遺物出土状況図 (縮尺1:80、1:12) .....	194
第8図	S D 1・S D 2下層遺物出土状況図 (縮尺1:80、1:12) .....	195
第9図	S D 1・S D 2接合遺物出土状況図 (縮尺1:80、1:12) .....	196
第10図	S D 1上層出土遺物実測図 (縮尺1:4) .....	197
第11図	S D 1中層出土遺物実測図 (縮尺1:4) .....	198
第12図	S D 1下層出土遺物実測図 (縮尺1:4、1:2) .....	199
第13図	S D 1層位不明出土遺物実測図 (縮尺1:4) .....	199
第14図	S D 2上層出土遺物実測図 (縮尺1:4) .....	201
第15図	S D 2上層・中層出土接合遺物実測図 (縮尺1:4) .....	201
第16図	S D 2中層出土遺物実測図 (1) (縮尺1:4) .....	202
第17図	S D 2中層出土遺物実測図 (2) (縮尺1:4) .....	203
第18図	S D 2中層出土遺物実測図 (3) (縮尺1:4、1:2) .....	205
第19図	S D 2下層・層位不明出土遺物実測図 (縮尺1:4) .....	206
第20図	S D 1・S D 2出土接合遺物実測図 (1) (縮尺1:4) .....	206
第21図	S D 1・S D 2出土接合遺物実測図 (2) (縮尺1:4) .....	207
第22図	S D 3測量図・出土遺物実測図 (縮尺1:300、1:40、1:2) .....	208
第23図	S D 6測量図 (縮尺1:80、1:40) .....	209
第24図	S D 5測量図 (縮尺1:100、1:40) .....	210
第25図	S X 1・S X 2測量図 (縮尺1:40) .....	211
第26図	掘立1測量図 (縮尺1:80) .....	211
第27図	S P出土遺物実測図 (縮尺1:4、1:3) .....	211
第28図	出土地点不明遺物実測図 (縮尺1:4) .....	211
第29図	小坂遺跡4次・6次調査遺構配置図 (縮尺1:300) .....	212

## 第11章 中村松田遺跡5次調査

第1図	調査地位置図 (縮尺1:1,000) .....	216
第2図	調査地測量図 (縮尺1:400) .....	217

第3図	1区北壁・東壁土層図 (縮尺1:60) .....	220
第4図	1区西壁・南壁土層図 (縮尺1:60) .....	221
第5図	2区北壁・東壁・南壁①土層図 (縮尺1:60) .....	222
第6図	2区南壁②・西壁土層図 (縮尺1:60) .....	223
第7図	3区北壁・東壁土層図 (縮尺1:60) .....	224
第8図	3区西壁・南壁土層図 (縮尺1:60) .....	225
第9図	1区遺構配置図〔第Ⅶ層上面〕 (縮尺1:80) .....	226
第10図	1区遺構配置図〔第Ⅸ層上面〕 (縮尺1:80) .....	227
第11図	2区遺構配置図 (縮尺1:100) .....	228
第12図	3区遺構配置図〔第Ⅶ層上面〕 (縮尺1:100) .....	229
第13図	3区遺構配置図〔第Ⅷ層上面〕 (縮尺1:100) .....	230
第14図	S D101・S D102測量図 (縮尺1:50) .....	232
第15図	S D103・S D104測量図、S D104出土遺物実測図 (縮尺1:50、1:4) .....	233
第16図	S K101測量図・出土遺物実測図 (縮尺1:40、1:3) .....	234
第17図	S K102測量図・出土遺物実測図 (縮尺1:40、1:3) .....	235
第18図	S K103～S K105測量図・出土遺物実測図 (縮尺1:40、1:4、1:3) .....	237
第19図	S K106測量図・出土遺物実測図 (縮尺1:40、1:3) .....	238
第20図	S E101測量図・出土遺物実測図 (縮尺1:40、1:3) .....	239
第21図	S D201測量図・出土遺物実測図 (縮尺1:50、1:3) .....	240
第22図	S D202測量図 (縮尺1:50) .....	241
第23図	S D202出土遺物実測図 (縮尺1:4、1:3、1:1) .....	242
第24図	S K201測量図・出土遺物実測図 (縮尺1:40、1:4、1:3) .....	243
第25図	S E201測量図・出土遺物実測図 (1) (縮尺1:40、1:4、1:3) .....	245
第26図	S E201出土遺物実測図 (2) (縮尺1:3) .....	246
第27図	S E202測量図 (縮尺1:40) .....	248
第28図	S E202出土遺物実測図 (1) (縮尺1:3) .....	249
第29図	S E202出土遺物実測図 (2) (縮尺1:3) .....	250
第30図	S E202出土遺物実測図 (3) (縮尺1:3、1:4) .....	251
第31図	S B301測量図 (縮尺1:50) .....	253
第32図	S B301出土遺物実測図 (縮尺1:4) .....	254
第33図	S D301～S D304測量図 (縮尺1:50) .....	256
第34図	S D301～S D304出土遺物実測図 (縮尺1:4、1:3) .....	257
第35図	S D305測量図 (縮尺1:50) .....	260
第36図	S D305出土遺物実測図 (1) (縮尺1:4) .....	261
第37図	S D305出土遺物実測図 (2) (縮尺1:4) .....	262
第38図	S D305出土遺物実測図 (3) (縮尺1:4) .....	263
第39図	S D305出土遺物実測図 (4) (縮尺1:4) .....	264

第40図	S D305出土遺物実測図(5)(縮尺1:4、1:2) .....	265
第41図	柱穴出土遺物実測図(縮尺1:3、1:4、1:6) .....	267
第42図	包含層・トレンチ・近現代坑出土遺物実測図(縮尺1:4、1:3) .....	269

## 第12章 中村松田遺跡6次調査

第1図	調査地位置図(縮尺1:1,000) .....	282
第2図	調査地測量図(縮尺1:300) .....	283
第3図	北壁土層図(縮尺1:60) .....	284
第4図	南壁土層図(縮尺1:60) .....	285
第5図	東壁・西壁土層図(縮尺1:60) .....	286
第6図	遺構配置図(縮尺1:150) .....	287
第7図	S D 1測量図(縮尺1:100) .....	290
第8図	S D 1断面図(縮尺1:50) .....	291
第9図	S D 1上層検出状況図(縮尺1:100) .....	292
第10図	S D 1下層出土遺物実測図(縮尺1:4) .....	293
第11図	S D 1上層出土遺物実測図(1)(縮尺1:3) .....	294
第12図	S D 1上層出土遺物実測図(2)(縮尺1:3) .....	295
第13図	S D 1トレンチ出土遺物実測図(縮尺1:3) .....	296
第14図	S D 2・S D 3・S D 7測量図(縮尺1:100) .....	297
第15図	S D 2出土遺物実測図(縮尺1:4) .....	298
第16図	S D 3出土遺物実測図(縮尺1:4、1:3) .....	299
第17図	S D 4測量図・出土遺物実測図(縮尺1:100、1:3) .....	300
第18図	S D 5測量図・出土遺物実測図(縮尺1:100、1:4) .....	301
第19図	S D 6測量図・出土遺物実測図(縮尺1:100、1:4、1:3) .....	302
第20図	S D 8測量図・出土遺物実測図(縮尺1:100、1:3、1:4) .....	304
第21図	鋤跡測量図(1)(縮尺1:80、1:20) .....	305
第22図	鋤跡測量図(2)(縮尺1:80、1:20) .....	306
第23図	柱穴測量図・出土遺物実測図(縮尺1:20、1:4) .....	308
第24図	包含層出土遺物実測図(縮尺1:4、1:3、1:1) .....	309

## 表 目 次

### 第11章 中村松田遺跡5次調査

表1	検出遺構一覧	219
表2	柱穴一覧	266
表3	竪穴住居一覧	271
表4	溝一覧	271
表5	土坑一覧	271
表6	井戸一覧	271
表7	1区検出の柱穴一覧	272
表8	2区検出の柱穴一覧	273
表9	3区検出の柱穴一覧	274

### 第12章 中村松田遺跡6次調査

表1	溝一覧	310
表2	柱穴一覧	310

## 写真図版目次

巻頭図版 1	東本遺跡9次調査	SB101遺物出土状況(南より)
巻頭図版 2	東本遺跡9次調査	SB101出土遺物

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

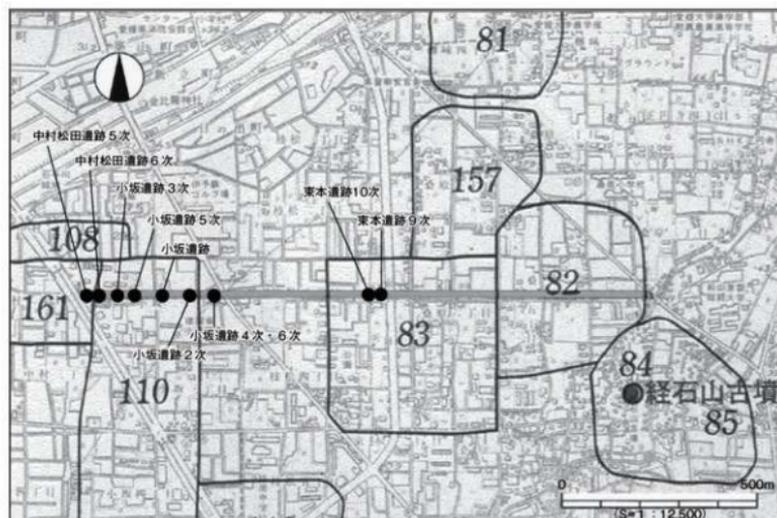
2003(平成15)年6月16日、松山市都市整備部道路建設課(以下、道路建設課)より松山市道中村～桑原線3工区(東本町～中村町)の道路改良工事に伴う埋蔵文化財の確認願いが、松山市教育委員会文化財課(以下、文化財課)に提出された。中村～桑原線はこれまでに1工区と2工区の埋蔵文化財の調査が行われ、埋蔵文化財調査報告書は道路建設の委託を受けて1工区の調査報告書を平成17年度に、2工区の調査報告書を平成20年度に刊行している。

今回の申請地は、一部を除いた大半が松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地「No83 枝松遺物包含地」、 「No110 中村二丁目遺物包含地」、 「No161 釜ノ口遺跡」内にあり、周知の遺跡として知られる。申請地周辺はこれまでに数多くの調査が行われ、主に弥生時代～古墳時代にかけての集落関連遺構が確認されており、松山平野の主要な遺跡地帯となっている。

文化財課では、確認願いが提出された地番について遺跡の有無と、さらにはその範囲や性格を確認するために、試掘調査を行う事となった。試掘調査は、文化財課指導のもと(財)生涯学習振興財団埋蔵文化財センター(平成22年4月1日より財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団 埋蔵文化財センター、以下、埋蔵文化財センター)が土地の所収状況に応じて2005年12月より部分的に確認調査を実施していった。調査の結果、遺跡と認められた地番について道路建設課と文化財課は、遺跡の取り扱いについて協議を行い、工事により遺跡が失われる部分について記録保存のため順次本格調査を実施する事となった。調査は、道路建設課より調査委託を受けて埋蔵文化財センターが主体となり、2006(平成18)年2月より小坂遺跡1次調査を開始し、2009(平成21)年5月までの間に中村松田遺跡6次調査までの10遺跡の調査を行った。



第1図 調査地位置図 (S=1:25,000)



第Ⅱ図 松山市包蔵地地図と中村桑原線・調査地位位置図（数字内が包蔵地）

## 第2節 刊行組織（平成23年3月31日現在）

財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

理 事 長	一 色 哲 昭
事 務 局 局 長	松 澤 史 夫
次	長 砂 野 元 昭
施設利用推進部長	中 越 敏 彰

埋蔵文化財センター

所長兼考古館館長	重 松 佳 久
主 査	栗 田 茂 敏
調 査 担 当	栗 田 茂 敏
調 査 担 当	高 尾 和 長
調 査 担 当	宮 内 慎 一
調 査 担 当	山之内 志 郎
調 査 担 当	相 原 浩 二
調 査 担 当	相 原 秀 仁（現 総合コミュニティセンター）

### 第3節 環境

#### 1. 地理的環境

松山平野は、主に重信川やそのほか大小の河川によって形成された扇状地や氾濫原、三角州性の堆積物や海岸部の海浜堆積物で構成されている。重信川の支流である石手川は、高縄山塊の水ヶ峠に源を発し平野の北東部を南西方向に流れ、小野川と重信川に合流し伊予灘に注ぐ河川である。石手川は、平野への入り口である岩堰から江戸時代のはじめに河川の改修によって流路を代えられ現在に至っている。東本遺跡・小坂遺跡・中村松田遺跡は、この石手川中流域の左岸にあたる標高34.00m～28.00mの主に石手川によって形成された扇状地上に展開している。本遺跡のある扇状地面は、約23,000年前の始良（A/T）の降下・堆積期にはすでに段丘化していたと推定されている。その後は部分的に小規模な洪水があったものの、石手川本流による激しい洪水に襲われることなく、縄文時代や弥生時代の遺跡の立地については、安定した地形環境であったとされている〔平井1989〕。

#### 2. 歴史的環境（第三図）

本遺跡周辺では、開発による埋藏文化財の発掘件数の増加に伴い数多くの遺跡が存在し、注目される遺構・遺物がたくさん見つかる。これまでの調査で弥生時代～古代にかけての竪穴住居、掘立柱建物、土坑、溝などの集落遺構のほか、東の丘陵部では古墳時代中期～後期の古墳が多数検出されている。調査地の北東部にある榑味町内では「貸泉」の出土があった榑味立添遺跡、「船」を描いた弥生時代後期の線刻土器が出土した榑味高木3次調査地、古墳時代初頭の大規模掘立柱建物が見つかった榑味四反地遺跡6次、8次、13次調査地など貴重な遺構・遺物が見つかる。ここでは中村桑原線の1工区と2工区の遺跡や調査地周辺の東本町、小坂町、中村町、枝松町、桑原町の遺跡を中心に時代毎の遺跡を概説する。

##### 縄文時代

東本遺跡4次調査では、縄文早期にあたるアカホヤ火山灰の層中と下層の上面から先土器時代末から縄文時代早期以前の石器が見つかる。また、アカホヤ以前の堆積層中から焼土を検出している。これらのことから縄文時代早期以前の遺跡が存在したことが想定されている〔高尾1996〕。晩期では桑原田中遺跡で突帯文系の深鉢片が出土している。

##### 弥生時代

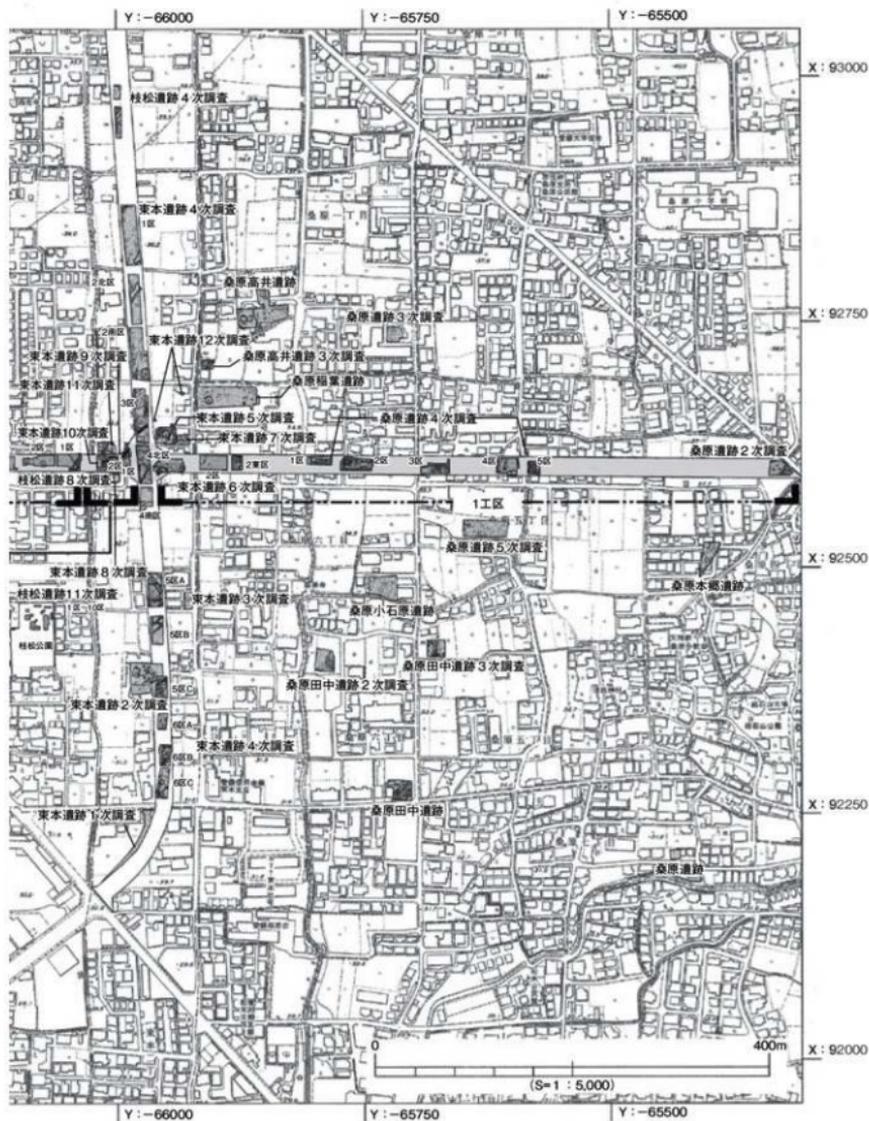
前期では、桑原田中遺跡2次調査地で土器片を検出している〔梅木・山本1994〕。桑原遺跡4次調査では自然流路SR401より大型の石包丁が出土している〔相原・武正2005〕。

中期では枝松町、東本町、桑原町とも遺物は散見されるものの明確な遺構は少ない。枝松遺跡6次では中期後半の土坑2基を検出している〔加島2007〕。中期後半～後期初頭にかけての遺構は桑原地区内では標高の高い北東部の榑味町で検出されている。榑味高木遺跡2次調査〔栗田1994〕、榑味四反地5次調査〔高尾2002〕、榑味高木7次調査地では大型円形竪穴住居や小型の方形住居を検出している。榑味高木9次調査地では中期後半の掘立柱建物1棟、土坑2基を検出している。榑味四反地7次調査地では土坑2基を検出している〔加島2007〕。

後期になると遺跡数は増加する。桑原田中遺跡で素掘りの井戸と考えられるSK1より後期後葉の一括性の高い遺物が出土している〔松村1992〕。桑原高井遺跡では竪穴住居5棟、土坑、溝を検出している。竪穴住居の平面形は円形と方形があり、そのうちSB2はベッド状遺構を付設し六角形を呈している〔森1980〕。桑原高井遺跡3次調査では後期末と考えられる中型の円形竪穴住居SB001を検出している。



第 Ⅲ 図 調査位置図と



周辺の遺跡

S B001の全容は不明であるが「張り出し部」を伴うものとも考えられている〔小笠原2003〕。桑原稲葉遺跡では円形と方形の竪穴住居が検出されている。方形竪穴住居からは後期終末の土器が出土している〔岡田他1990〕。後期後葉～末の竪穴住居の枝松遺跡3次調査で後期後葉の隅丸方形住居にベッド状を付設する竪穴住居1棟を検出している〔梅木1992〕。調査地の南に隣接する枝松遺跡5次調査では、後期後葉の方形竪穴住居1棟と円形周溝状遺構を検出している〔河野1997〕。枝松遺跡8次調査では方形竪穴住居2棟、溝、土坑を検出している。方形竪穴住居S B201の埋土より廃棄された多量の土器が出土している。これら土器群のほか、注目する遺物として皮袋形土器1点、破損品であるが環状石斧1点が出土している。枝松遺跡10次調査のS D301より後期前葉～末の遺物が出土している〔相原・武正2008〕。東本遺跡では竪穴住居の一部と溝状遺構が検出されている。東本遺跡2次調査では竪穴住居2棟、土坑、掘立柱建物などが検出されている。竪穴住居の平面形態は方形と円形の2種類があり、いずれにもT字状の炉跡が備えられている〔森1986〕。桑原高井遺跡3次調査では後期末と考えられる中型の円形竪穴住居S B001を検出している。S B001の全容は不明であるが「張り出し部」を伴うものとも考えられている〔小笠原2003〕。東本遺跡4次調査では大型・中型・小型の竪穴住居19棟を検出している。このうち注目するものに周堤帯を検出した大型の円形竪穴住居S B203、破鏡が出土した大型円形竪穴住居S B302がある。報告書では調査で得られた資料をもとに住居規模・形態・構造・住居変遷について論じられている〔高尾1996〕。東本遺跡5次調査では円形竪穴住居5棟、方形竪穴住居2棟が検出されている。このうち方形竪穴住居1棟を除く全てにベッド状施設が付設されている。東本遺跡6次では大型の円形竪穴住居1棟と方形の竪穴住居1棟を検出している。方形の竪穴住居は、三角状鉄片が出土したことから鍛冶関連遺構の可能性をもつと考えられている。大型の円形住居は後期末に、方形竪穴住居は後期後葉とされる。東本遺跡7次調査では方形竪穴住居2棟と大型円形竪穴住居1棟を検出している。このうち方形竪穴住居1棟を除く2棟は東本遺跡5次で検出されている大型竪穴住居と方形竪穴住居の東部分である〔河野2004〕。東本遺跡8次調査では後期末のベッド状遺構を付設した方形竪穴住居1棟を検出している〔宮内2007〕。枝松遺跡8次調査では後葉の隅丸方形の竪穴住居2棟を検出している。このうちS B201は住居廃絶後に多量の土器が廃棄されている〔相原2008〕。枝松遺跡11次調査では竪穴住居の一部を検出している〔相原2009〕。東本遺跡11次調査では後葉の隅丸方形の竪穴住居S B1を検出している。このS B1は焼失住居と考えられている〔相原2010〕。

#### 古墳時代

前期では桑原遺跡3次調査の溝より弥生時代末～前期の遺物が出土している〔相原2001〕。桑原遺跡4次調査の自然流路S R401では前期～後期の遺物が出土している〔相原・武正2005〕。枝松遺跡7次調査のS D101より初頭の遺物が出土している。そのほか、土坑2基より前期の甕が出土している〔相原2008〕。

中期では桑原田中遺跡で須恵器樽形甕が出土している。桑原本郷遺跡では竪穴住居、掘立柱建物が検出されている。そのほか包含層中より須恵器と伴に滑石製の白玉100点余りが出土しており祭祀遺構と考えられている〔栗田2002〕。

後期では桑原町内に前方後円墳である三島神社古墳、経石山古墳が存在する。三島神社古墳は宅地造成により発掘調査が実施され初期畿内型の横穴式石室を内部主体にもつ全長45mの前方後円墳である〔森1986〕。桑原遺跡5次調査では杓子状木製品、木錘、齋串が出土している〔吉岡2004〕。

#### 古代

東本遺跡6次調査では、古代末に埋没したと考えられる川幅が30mを超える自然流路S R201を検

出している。S R201の埋土より近江系の縁軸が出土している〔相原2005〕。

#### 中世

桑原田中遺跡3次調査では土坑状遺構を検出している〔山本1997〕。桑原遺跡2次調査で溝、土坑を検出している。土坑S K 1より土師器椀、瓦器、青磁が出土している。桑原遺跡4次調査4区では、祭祀遺構と考えられる柱穴1基を検出している。3区では掘立柱建物や土坑、溝を検出している。桑原高井遺跡では「首塚」とされる土坑墓が数基検出されている。東本遺跡6次調査でも同様な土坑墓1基を検出している〔相原・武正2005〕。桑原遺跡5次調査では掘立柱建物4棟を検出している〔吉岡2004〕。枝松遺跡4次調査では、土坑S K 1より松山平野では珍しい茶釜が出土している〔大森1996〕。枝松遺跡7次・9次・10次調査では土坑や柱穴などを検出している。

#### 〔参考文献〕

- 松山市史料集編纂委員会 1980松山市史第1巻抜刷 自然編  
 森 光晴 1972「三島神社古墳」松山市教育委員会  
 森 光晴 1980「桑原高井遺跡」「浮穴・西石井荒神堂・東本Ⅱ・Ⅲ・桑原高井遺跡」松山市文化財報告書14  
 1986「東本遺跡」「経石山古墳」「愛媛県史 資料編 考古」  
 岡田 敏彦 1990「桑原稲葉遺跡」「桑原住宅埋蔵文化財調査報告書」  
 松村 淳 1992「桑原田中遺跡」「桑原地区の遺跡」松山市文化財報告書26  
 梅木 謙一 1992「枝松遺跡3次調査」「桑原地区の遺跡」松山市文化財報告書26  
 山本 山本 1994「桑原田中遺跡2次」「桑原地区の遺跡Ⅱ」松山市文化財報告書46  
 栗田 正芳 1994「柳味高木遺跡2次調査地」「桑原地区の遺跡Ⅱ」松山市文化財報告書46  
 高尾 和長 1996「東本遺跡4次調査地」「東本遺跡4次調査地・枝松遺跡4次調査地」松山市文化財報告書54  
 河野 史知 1997「枝松遺跡5次」「桑原地区の遺跡Ⅲ」松山市文化財報告書58  
 山本 健一 1997「桑原田中遺跡3次」「桑原地区の遺跡Ⅲ」松山市文化財報告書58  
 相原 浩二 2001「桑原遺跡3次調査地」「松山市埋蔵文化財調査年報12」  
 栗田 茂敏 2002「桑原本郷遺跡」「桑原地区の遺跡Ⅳ」松山市文化財報告書86  
 小笠原 彰 2003「桑原高井遺跡3次調査地」「松山市埋蔵文化財調査年報14」  
 吉岡 和哉 2004「桑原遺跡5次調査地」松山市文化財報告書99  
 河野 史知 2004「東本遺跡7次調査地」「松山市埋蔵文化財調査年報16」  
 相原・武正 2005「東本遺跡6次・桑原遺跡2次・桑原遺跡4次調査地」松山市文化財報告書105  
 加島 次郎 2007「枝松遺跡6次調査」「東野森ノ木遺跡1・2・3・4次調査地 他」松山市文化財報告書117  
 宮内 慎一 2007「東本遺跡8次調査地」「松山市埋蔵文化財調査年報19」  
 相原・武正 2008「枝松遺跡-7次・8次・9次・10次調査-」松山市文化財調査報告書125  
 相原 浩二 2009「枝松遺跡-11次調査-」松山市文化財調査報告書125  
 相原 浩二 2010「東本遺跡-11次・12次調査-」松山市文化財調査報告書143

## 第2章 調査の概要

### 第1節 調査の経緯

今回の調査対象地（3工区）は、東本町の東部環状線との交差点から西へ約40mの範囲と県道334号線（旧国道11号線）に接する小坂町から国道11号線バイパスに接する中村町までの約370m、道路幅員18mである。松山市道中村桑原線の発掘調査としては最終の調査となる。調査にあたっては、土地の買収状況や家屋の撤去に伴って試掘調査を実施した。試掘調査の結果、遺構・遺物が確認され遺跡と認められた地点について順次本格調査を行った。

遺跡名については、町名を使用した。小坂町内では小坂遺跡として小坂遺跡1次から小坂遺跡6次までの遺跡名を、東本町内では東本遺跡9次調査、東本遺跡10次調査とし、中村町内では中村松田遺跡として中村松田遺跡5次調査、中村松田遺跡6次調査として調査を進めた。

### 第2節 調査地一覧

遺跡名、調査地、調査面積、調査期間は以下である。

遺跡名	調査地	調査面積	調査期間
1. 東本遺跡9次調査	松山市東本町	476㎡	平成19年5月16日～平成19年8月31日
2. 東本遺跡10次調査	松山市東本町	190㎡	平成19年9月3日～平成19年10月15日
3. 小坂遺跡1次調査	松山市小坂町	549㎡	平成18年2月1日～平成18年4月28日
4. 小坂遺跡2次調査	松山市小坂町	600㎡	平成18年6月1日～平成18年7月31日
5. 小坂遺跡3次調査	松山市小坂町	700㎡	平成18年10月20日～平成18年12月27日
6. 小坂遺跡4次調査	松山市小坂町	約780㎡	平成18年12月1日～平成19年1月31日
7. 小坂遺跡5次調査	松山市小坂町	約550㎡	平成19年5月16日～平成19年7月13日
8. 小坂遺跡6次調査	松山市小坂町	約511㎡	平成19年10月16日～平成19年12月27日
9. 中村松田遺跡5次調査	松山市中村町	約573㎡	平成20年10月16日～平成21年1月31日
10. 中村松田遺跡6次調査	松山市中村町	約632㎡	平成21年2月2日～平成21年5月15日

## 第3章

# 東 本 遺 跡

- 9次調査 -



## 第3章 東本遺跡9次調査

### 第1節 調査の経緯

#### 1. 調査に至る経緯（第1図）

調査地は松山市埋蔵文化財包蔵地【No.83 枝松遺物包含地】内に所在する。調査地の東側は東本遺跡4次調査に、北側は東本遺跡11次調査に、西側は東本遺跡10次調査に接する。試掘調査は平成18年11月1日、2日の二日間実施した。試掘調査の結果、遺構・遺物が検出され、弥生時代、中世の集落関連遺跡があることを確認した。この結果を受け、松山市都市整備部道路建設課と（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターは協議を行い、工事に伴って消失する遺跡に対し記録保存のための発掘調査を実施する事となった。発掘調査は弥生時代、中世の集落構造の解明を主目的とし、埋蔵文化財センターが主体となって2007（平成19）年5月16日より本格調査を実施した。

#### 2. 調査の経過

野外調査期間は、平成19年5月16日～同年8月31日である。調査に際しては、下水道管敷設箇所を先行してトレンチ状の調査を行った後、調査地を2区画に分けて行った。下水道管敷設箇所を含めた東側を1区、西側を2区として調査を実施した。以下、調査行程を略記する。

平成19年5月16日 発掘用具、機材の準備を行う。調査区に縄張り等の安全対策を行う。重機による1区の掘削を開始し、17日までの二日間に重機による土砂の掘削・運搬を行う。掘削に並行して人力による遺構検出作業を行う。堅穴住居や柱穴を

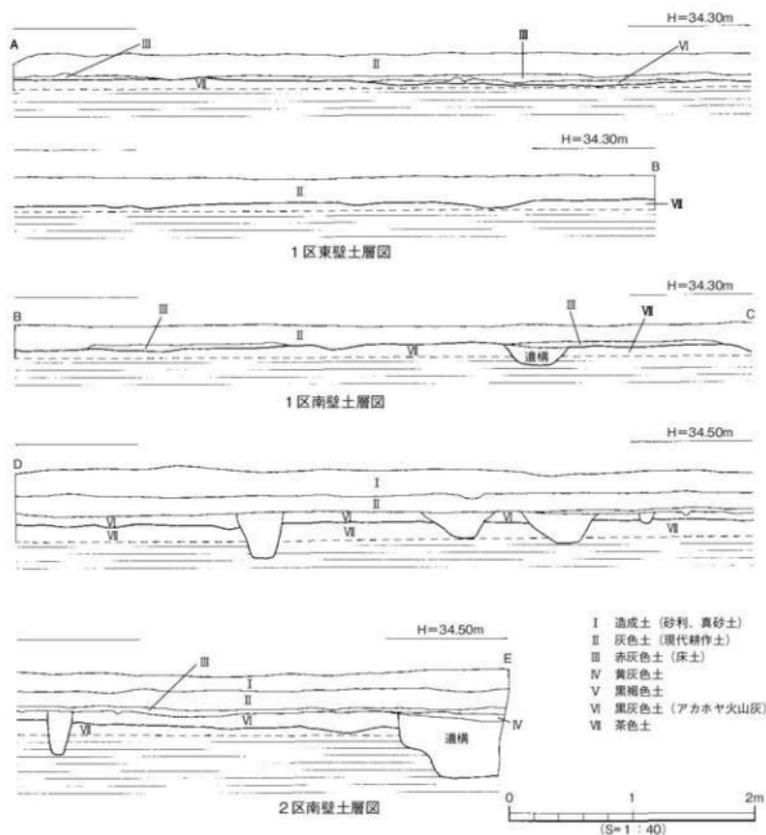


第1図 調査地位置図

- 検出する。
- 5月23日 ローリングタワーを利用し、堅穴住居や柱穴の検出写真を撮影する。
- 5月24日 堅穴住居SB101の掘り下げを開始する。住居内に土層観察用ベルトを設定する。調査地内に世界測地第4系のメッシュ杭を設置する。
- 5月28日 住居埋土より多量の弥生土器のほか、ガラス小玉が出土する。以後、6月5日まで遺物の検出作業を行う。
- 6月6日 ローリングタワーを利用し、SB101遺物出土状況の写真撮影を行う。撮影終了後、遺物の測量作業を開始する。
- 6月12日 SB101の遺物測量を終了し、1回目の遺物取り上げ作業を行う。
- 6月19日 住居内の精査を行い高床部、周壁溝、土坑などを検出する。
- 6月20日 住居内の2回目の遺物検出作業を開始する。
- 6月26日 SB101遺物出土状況の2回目の写真撮影を行う。遺物の測量を行い2回目の遺物の取り上げを行う。住居内の柱穴などの検出作業を行う。
- 7月10日 SB101内で土坑、柱穴、周壁溝などを検出する。ローリングタワーを利用し、SB101住居内の土坑や柱穴の検出状況の写真撮影を行う。撮影終了後、土坑や柱穴の掘り下げを開始する。
- 7月20日 SB101の測量作業を行う。
- 7月26日 SB101の土層観察用のベルトを撤去する。
- 8月4日 市民を対象にした現地説明会を行う。
- 8月7日 重機により2区の掘削を開始する。遺構の検出作業を行う。
- 8月9日 重機による掘削を終了する。
- 8月16日 2区の遺構検出状況の写真撮影を行う。
- 8月20日 1区、2区の測量を終了する。
- 8月24日 1区、2区の完掘状況の写真撮影を行う。
- 8月30日 重機による埋戻しを行う。発掘道具や器材の撤去を行い、野外調査を終了する。

## 第2節 層位（第2図）

調査地は石手川左岸の標高34.0～34.30mに立地する。調査以前は宅地であった。調査区の基本層位は第Ⅰ層造成土、第Ⅱ層灰色土、第Ⅲ層赤灰色土、第Ⅳ層黄灰色土、第Ⅴ層黒褐色土、第Ⅵ層黒灰色土、第Ⅶ層茶色土である。第Ⅰ層は、現代の造成に伴う客土である。層厚は15cmを測る。第Ⅱ層は、現代の水田耕作に伴う耕作土である。調査区全域に見られる。層厚5～27cmを測る。第Ⅲ層は、水田耕作に伴う床土である。層厚1～8cmを測る。第Ⅳ層は、層中より中世の遺物が出土する。層厚1～20cmを測る。第Ⅴ層は、黒褐色土で層厚4～26cmを測る。隣接する調査地ではこの層より弥生土器が出土するが、今回の調査地では削平のため殆ど消失している。第Ⅵ層は、層厚21cmを測る。アカホヤ火山灰層で2区に厚く堆積する。1区では削平のため、殆ど見られない。第Ⅶ層は、茶色土で調査区全域に見られる。一般に地山と呼ばれる層である。遺構の検出は、この第Ⅶ層上面で行った。

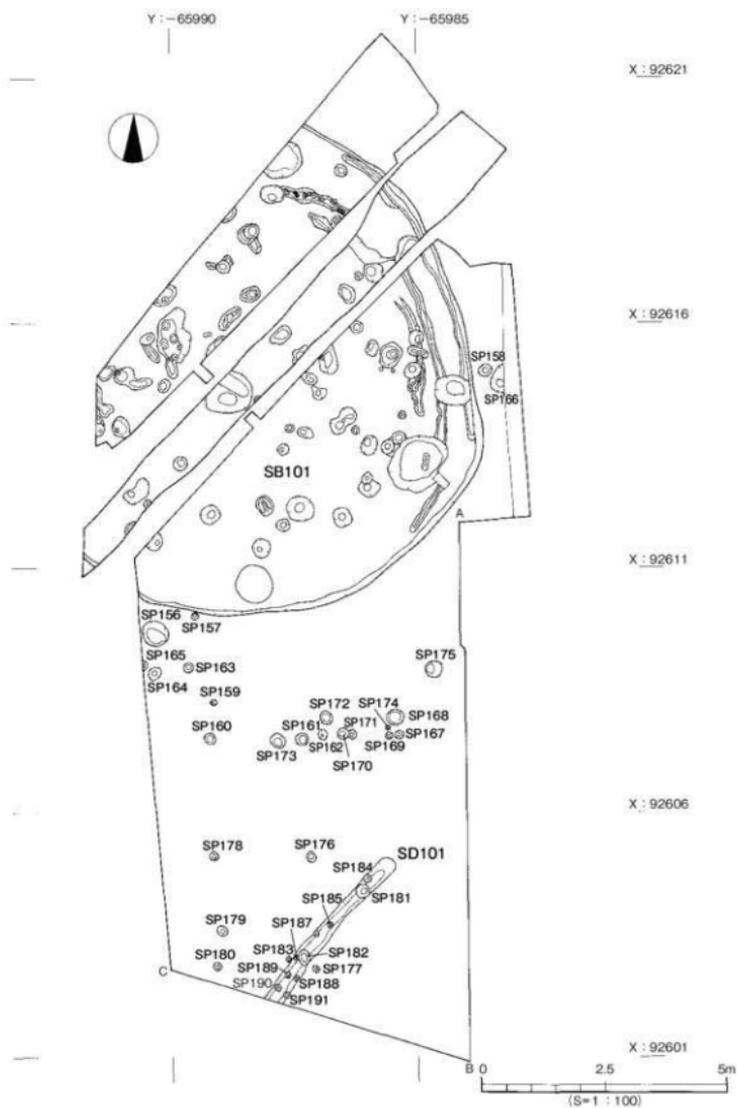


第2図 1区東壁・南壁、2区南壁土層図

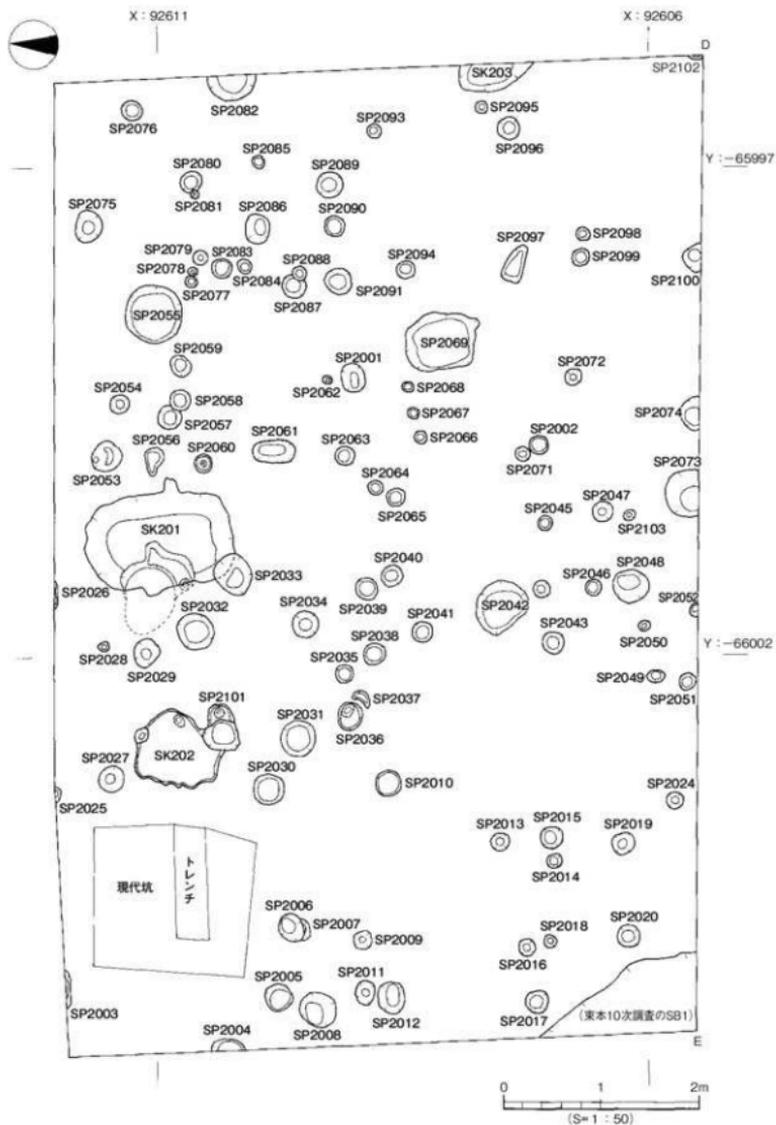
### 第3節 遺構と遺物

本調査で検出した遺構は竪穴住居1棟、溝1条、土坑3基、柱穴142基である。検出した遺構の時期は弥生時代～中世である。遺物では弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、青磁、石包丁、石鎌、砥石、ガラス小玉、水晶玉、水晶片などが出土した。遺構名称については、1区で検出した遺構には数字の1を付し（例101、102・・・）、2区で検出した遺構には2を付し（例201、202・・・）、下水道管敷設部で検出した遺構には0を付し（例001、002・・・）呼称した。

今回の調査では、別の竪穴住居の一部を2区の西側で検出したが、この竪穴住居は東本遺跡10次調査のSB1として調査を行ったため、9次調査では取り扱わず、調査の遺構検出数としても含んでい



第3図 1区遺構配置図



第4図 2区遺構配置図

ない。以下時代毎に主な遺構について記述する。

## 1. 弥生時代

弥生時代の遺構には竪穴住居SB101がある。調査の結果、改築や建て替えが行われたと考えられる竪穴住居である。

### (1) 竪穴住居（第3・5～9図、図版1～6）

#### SB101

1区で検出した竪穴住居である。SB101は、北部～南西部にかけては調査区外となるため全容は不明である。住居中央部の南北方向には、下水道管敷設時の未掘部が細いベルト状となって残存する。平面形態は、住居東側がやや直線的となるものの円形を呈している。検出規模は直径10.40m、深さ0.33mを測る。埋土は大きく上層と下層の二層に大別できる。上層は暗褐色土でレンズ状に堆積する。層厚は0.23mを測る。下層は暗茶褐色土（黄色土が混じる）である。層厚は0.14mを測る。屋内施設として柱穴、炉跡、高床部、土坑、周壁溝を検出した。そのほか住居内上層埋土より、多量の土器や石器などの遺物が出土している。

柱穴は、住居床面で54基を検出した。平面形態は円形、楕円形を呈する。規模は直径10～48cm、深さ4～40cmを測る。埋土は暗褐色土と黄色土の混合土である。柱穴のうち柱痕を検出したのは僅かである。柱痕規模は直径15cmを測る。埋土色は黒色土である。主柱穴については、柱穴数が多いため確定できないが、1棟分の可能性が高い主柱穴を第5図に想定した。

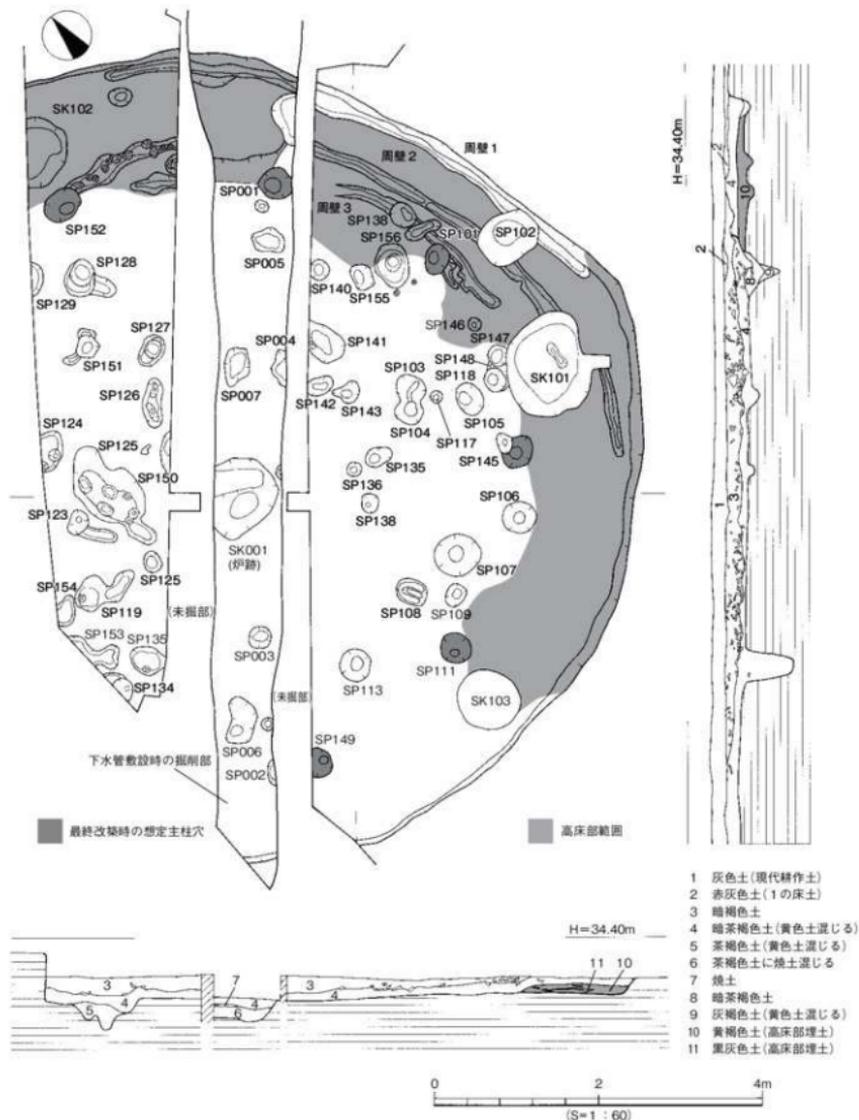
炉跡は、住居中央部で検出した。北側は一部未検出である。平面形態は円形を呈する。掘り方は段掘りとなり、東側が浅くなっている。規模は直径58cm、深さ22～36cmを測る。埋土中には、焼土と炭を検出している。

高床部は、住居の北部～南東部にかけて検出した。検出規模は幅1.0～1.9m、住居床面より高さ（厚さ）0.1mを測る。南西部では検出していない。黄褐色土（A T火山灰泥じり）や黒灰色土を使用し盛土によって構築している。

周壁溝は、住居の北東部で周壁溝1～周壁溝3の計3条を検出した。検出状況は、3条とも全周はせず途切れている。周壁溝1は、壁体に沿って検出された。検出規模は幅9～25cm、深さ5～10cmを測る。周壁溝2、周壁溝3は高床部の盛土を撤去したのち検出されたものである。周壁溝に伴う壁体は改築・建て替えによって失われている。周壁溝2は、周壁溝1から内側約50～60cmに位置する。検出規模は幅5～20cm、深さ3～7cmを測る。周壁溝3は、周壁溝2から内側5～20cmに位置する。検出規模は幅5～20cm、深さ2～5cmを測る。検出状況からは、周壁溝1が最も新しいものである。

土坑は、高床部の上面で3基（SK101～SK103）を確認した。SK101は住居の南東部で検出した。周壁溝2を切る。平面形態は楕円形を呈する。断面形態は逆台形状となる。検出規模は長軸1.30m、短軸0.98m、深さ0.60mを測る。SK102は、住居の北部で検出した。西側は調査区外となり、全容は不明である。検出規模は長軸0.82m、短軸0.50m、深さ0.46mを測る。SK103は住居の南部で検出した。平面形態は円形を呈する。断面形態は袋状となる。埋土色は暗茶褐色土である。

遺物は、住居内埋土から多量に出土している。麩、壺、鉢、高坏、器台などが出土したほか石鏃、石包丁、砥石、台石などの石器類やガラス小玉、水晶製小玉や水晶の剥片が出土している。そのほか、住居内の炉跡や土坑からも土器が出土している。以下住居内埋土から出土した遺物、遺構からの出土



第5図 SB101測量図

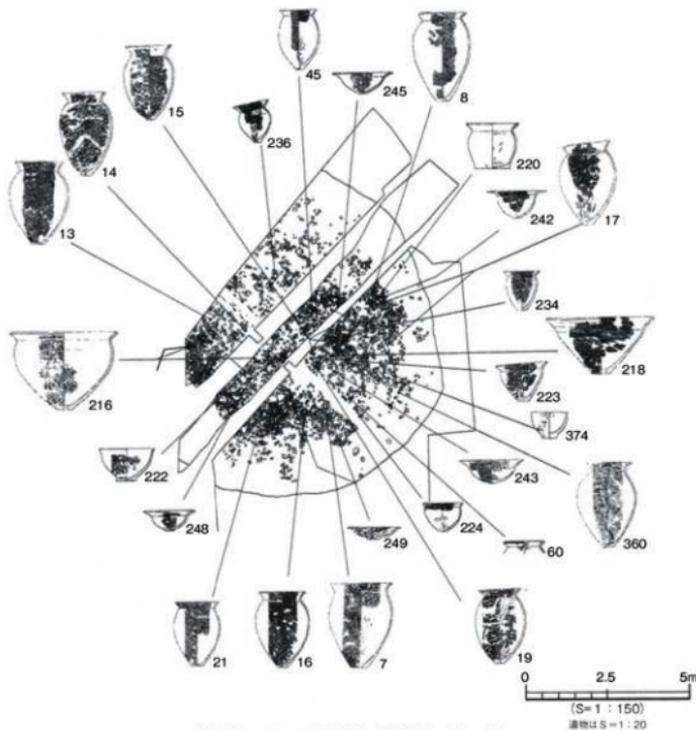
遺物の順に記述する。

出土遺物（第10～42図、図版9～22）

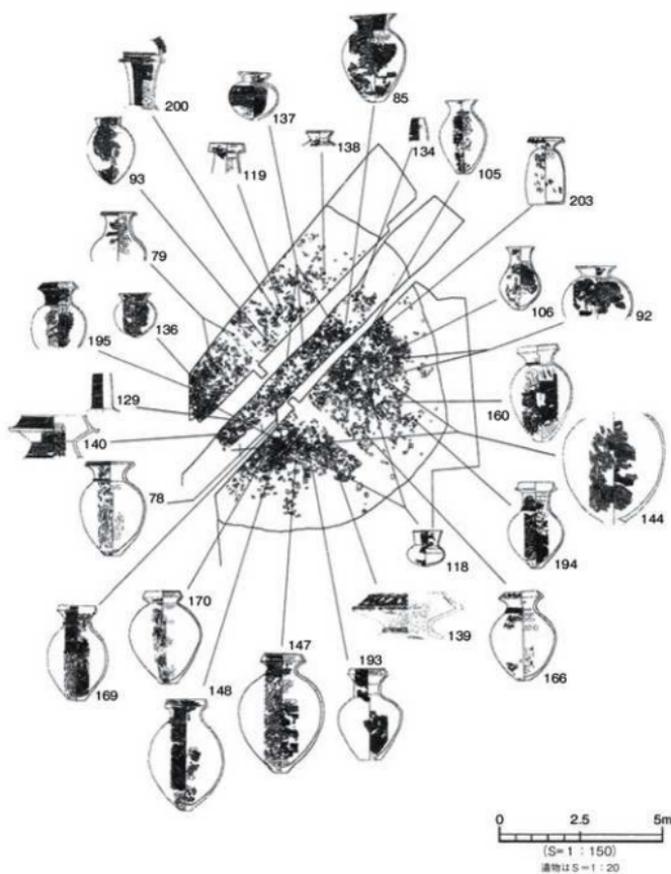
1～359は住居内埋土より出土した遺物である。

甕形土器（1～77）

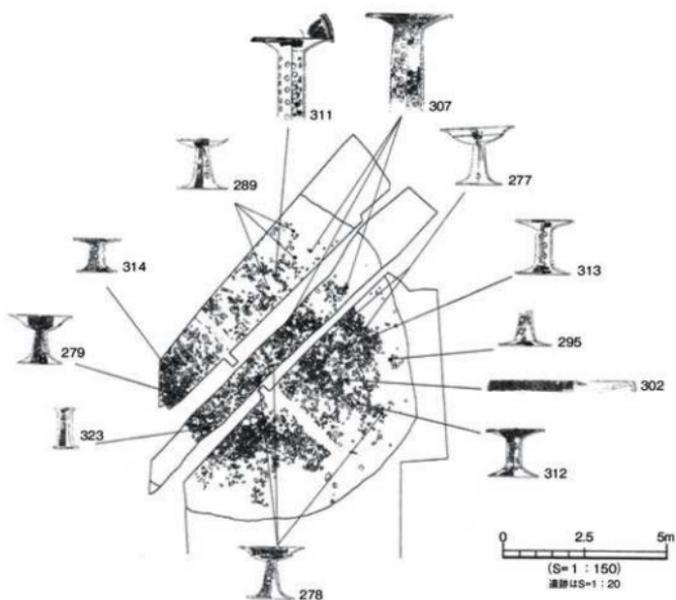
1～12は口径20cmを超える大型品である。1は緩やかに内湾する胴部で肩の張りが弱い。口縁部は外上方にのびる。調整は外面ハケ目、内面はハケ目のちなデ調整である。2はやや肩が張る胴部。口縁部は外上方にのびる。調整は内外面ともハケ目調整である。3の口縁部は外上方にのびる。口縁端部は僅かに肥厚する。肩部に「ノ」字状の押圧文が施される。4は外反する口縁部。5は肩の張りが弱い。口縁部は外反して長くのびる。6は短く外反する口縁部。調整は外面がハケ目のちなデ、内面はハケ目調整である。7はやや肩の張りが弱く頸部の締まりは弱い。口縁部は外反する。底部は平底。調整は外面ハケ目、内面は胴部上半をハケ目、下半はナデ調整である。8はやや肩が張る胴部。口縁部は外反する。胴部下半は締まりが強い。底部は平底。調整は内外面とも荒いハケ目調整が施される。



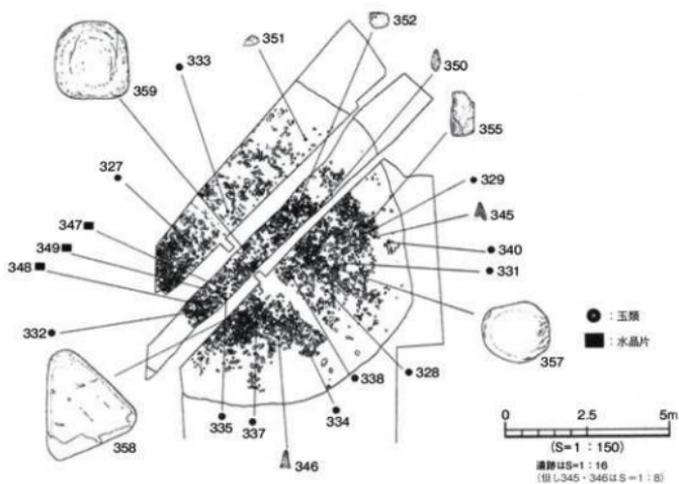
第6図 SB101遺物出土状況図（甕・鉢）



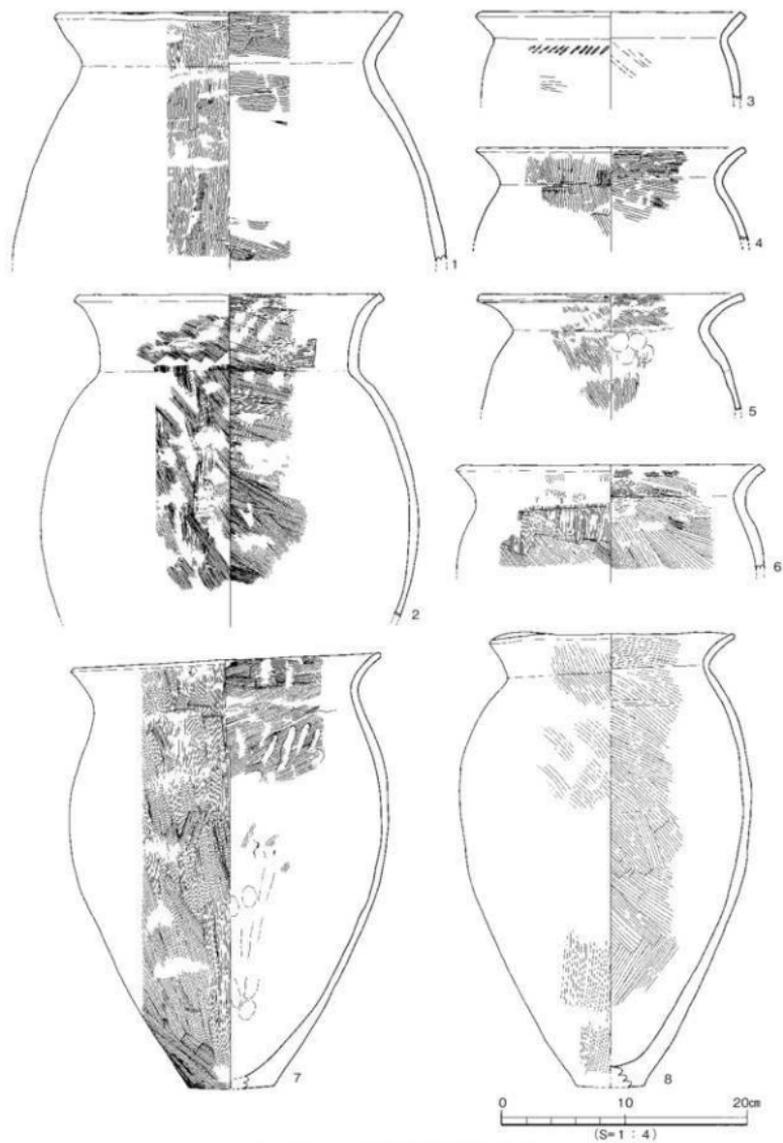
第7図 SB 101遺物出土状況図(要)



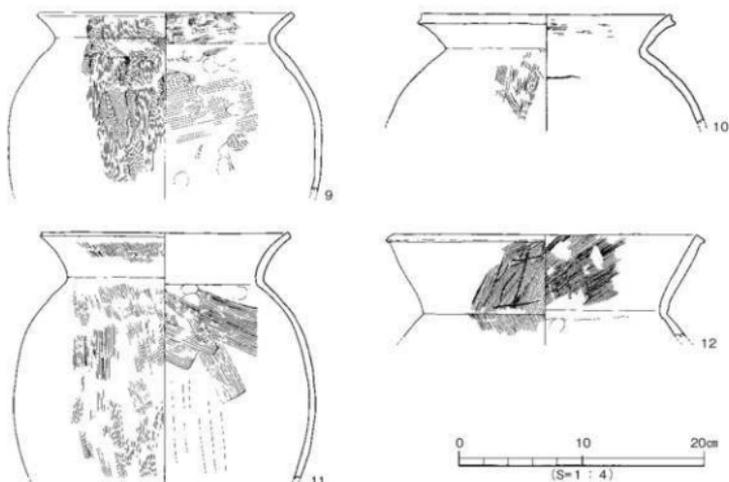
第8図 SB101遺物出土状況図 (高坏・器台・支脚)



第9図 SB101遺物出土状況図 (石・玉類)

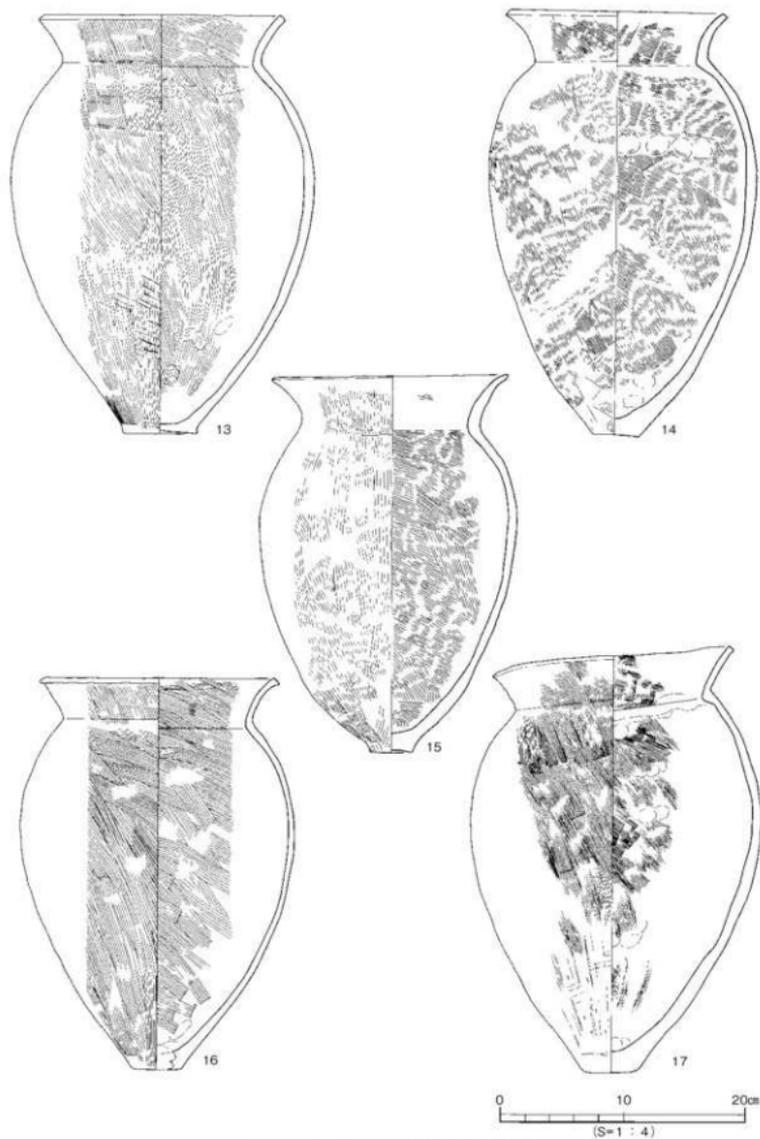


第10図 SB101出土遺物実測図(1)

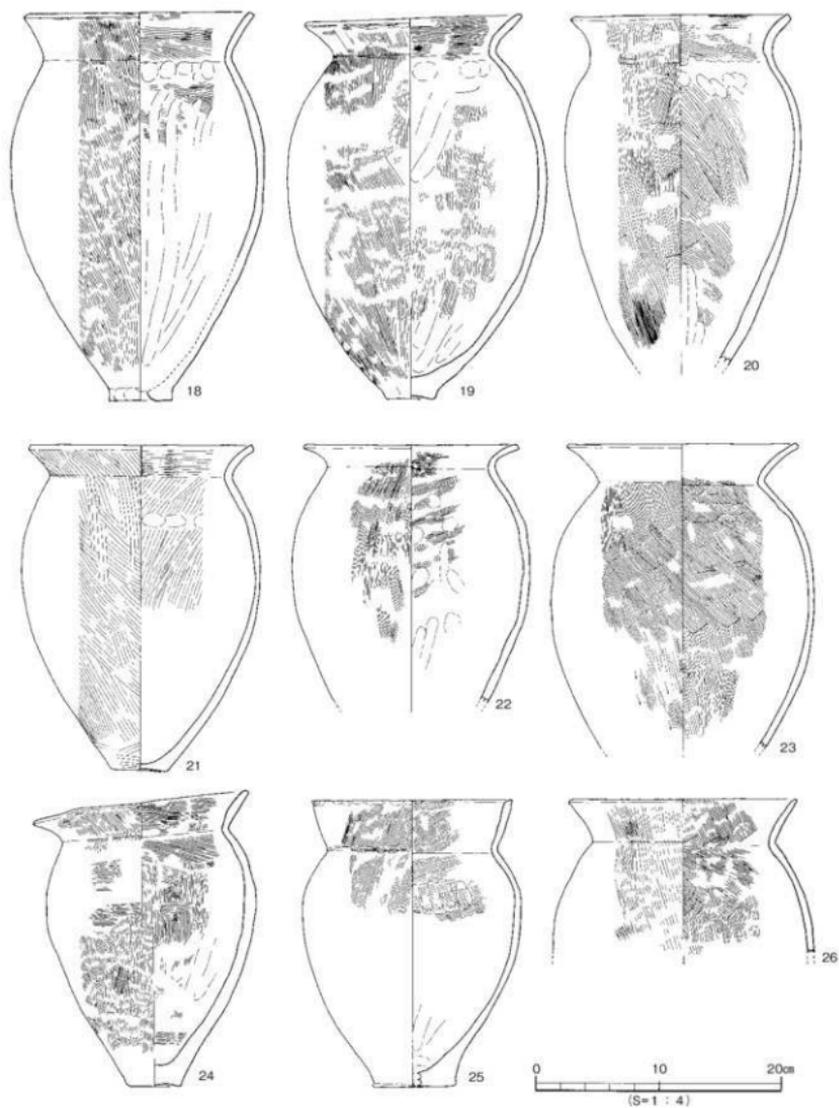


第11図 SB101出土遺物実測図(2)

外面には煤が付着する。9は肩の張る胴部。口縁部は「く」字状に短く外上方に短くのびる。調整は外面ハケ目、内面はハケ目のちナデ調整である。10は肩の張りが強い。口縁部は外反する。端部はナデにより僅かに肥厚する。11は肩の張りが弱い。頸部は短く直立し口縁部は外反する。内面の調整は胴部上半をハケ目調整、下半はナデ調整である。12の口縁部は外上方に長くのびる。端部は外に肥厚する。13は口径19.0cm、器高34.2cmを測る。肩の張りが強く胴下半は強く縮まる。底部はやや上げ底の底部。外面の調整は、ハケ目調整である。胴部下半にタタキ痕を残す。14は口径17.3cm、器高34.8cmを測る。短く直立する頸部に外反する口縁部。底部は小さな平底。調整は内外面ともハケ目調整が施される。15は口径18.9cm、器高31.0cmを測る。肩の張りが弱い。口縁部は外反し、端部は丸みをもつ。底部は小さく突出する上げ底の底部。外面の調整はハケ目のちナデ調整である。16は口径18.5cm、器高32.0cmを測る。やや肩が張る。口縁部は外反し、端部は外にやや肥厚する。胴部下半は強く縮まる。底部は小さな平底。調整は内外面ともハケ目調整である。17は口径19.1cm、器高34.9cmを測る。やや肩が張る。胴部下半は強く縮まる。調整は外面上半をハケ目調整、下半はタタキのちヘラケズリを施す。外面下半は被熱し、煤が付着する。18は口径18.0cm、器高31.6cmを測る。肩部の張りは弱い。底部は突出する。底部中央部には焼成後の直径1.2cmの円孔が穿たれる。胴部内面の調整はハケ目のち縦方向のナデ調整である。内外面とも煤が付着する。19は口径17.3cm、器高31.5cmを測る。口縁部は外反する。口縁端部は面をもつ。底部は小さな突出する上げ底の底部。調整は内面ハケ目のちナデ調整である。20は短く直立する頸部に外反する口縁部。外面に煤が付着する。21~23は外反する口縁部。外面に煤が付着する。21は口径17.8cm、器高26.7cmを測る。22は胴部内面の調整は胴部下半をナデ調整、上半はハケ目のちナデ調整である。23の調整は胴部内外面をハケ目調整、

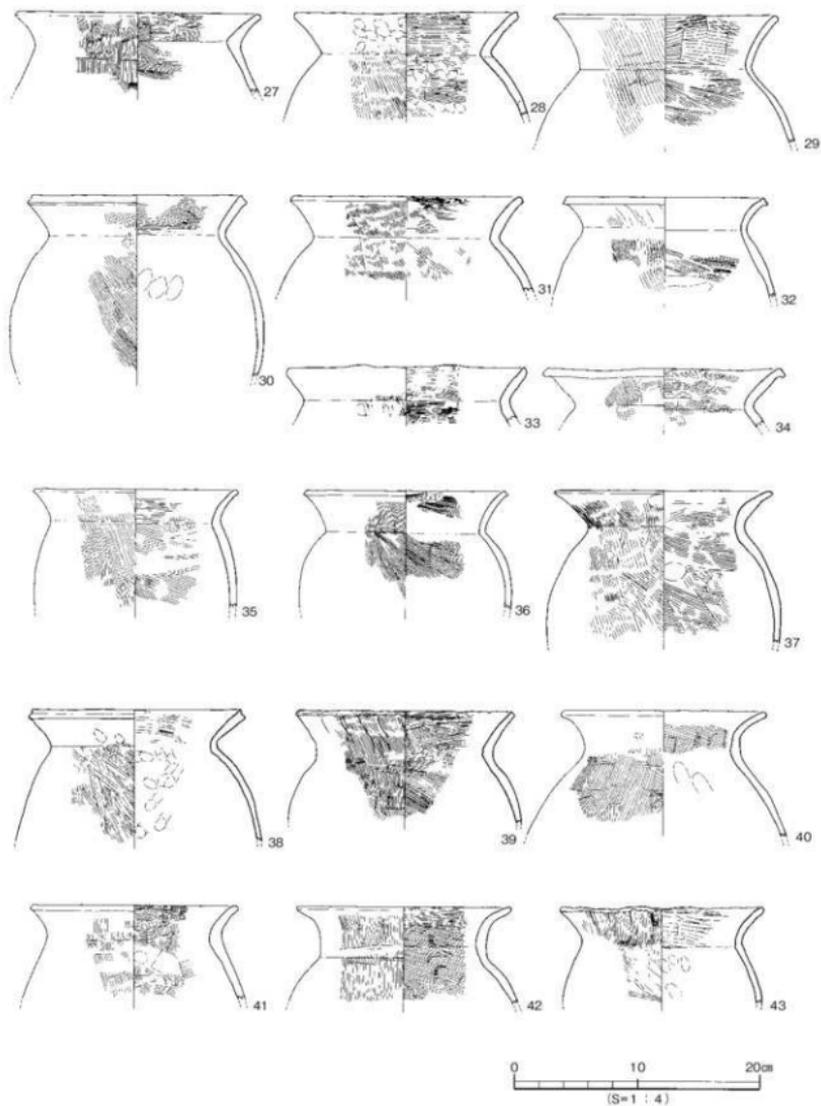


第12図 SB 101出土遺物実測図 (3)

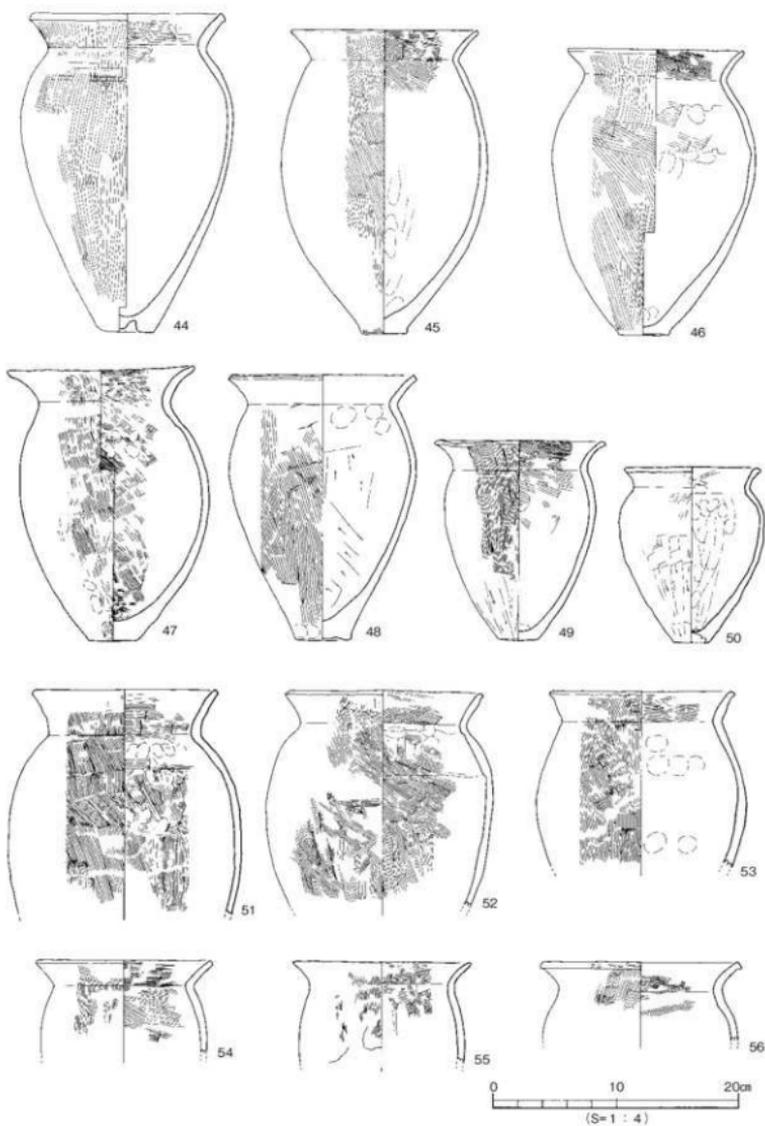


第13図 SB101出土遺物実測図(4)

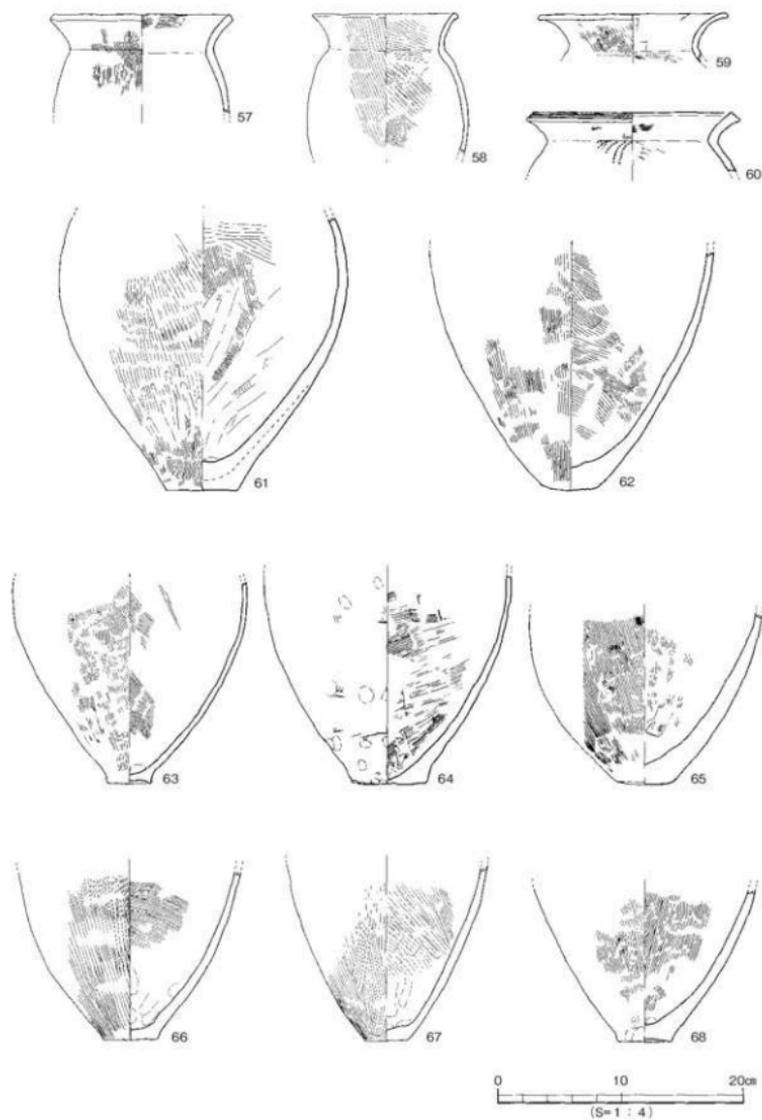
口縁部の内外面はナデ調整である。24は口径17.4cm、器高24.1cmを測る。胴部～口縁部にかけて焼け歪む。底部は若干の上げ底となる。外面に煤が付着する。25は口径16.0cm、器高23.5cmを測る。やや肩が張る。口縁部は内湾気味に上方に立ち上がる。口縁端部は面をもち内側に傾斜する。端部外面に指頭痕を残す。底部はくびれの平底である。胴部下半の調整は内外面ともナデ調整である。外面には煤が付着する。26は外反する口縁部。胴部外面には煤が付着する。27は頸部内面に稜をもって口縁部は短く外反する。28・29・31は外反する口縁部。30・32の口縁端部はナデにより凹面となる。33の口縁部は外上方に短くくびる。口縁端部は尖り気味。34の口縁端部は下方に肥厚する。35は肩の張りが弱く、口縁部は外反する。36は肩が張る。口縁部は外反する。口縁端部は下方に肥厚し凹面をもつ。調整は内外面ともハケ目調整である。37は外反する口縁部。口縁端部は丸みをもつ。調整は内外面ともハケ目のちナデ調整である。38は肩の張りが弱い。口縁部は外上方に立ち上がり、端部は上方に肥厚する。口縁端部は凹面をもつ。39はやや肩が張る。口縁部は外上方に立ち上がる。口縁部は面をもつ。調整は内外面ともハケ目調整である。40は肩の張りが弱い。頸部は直立して立ち上がり口縁部は外反する。口縁端部は面をもつ。41の口縁部は外反する。口縁端部は丸みをもつ。42は肩の張りが強い。頸部は直立して立ち上がり、口縁部は外反する。調整は内外面ともハケ目調整である。43は外反する口縁部。胴部内面の調整はナデ調整である。44は口径15.3cm、器高26.1cmを測る。やや肩が張る胴部。口縁部は外反し、口縁端部は下方に肥厚する。胴部下半は強く締まる。底部は平底である。底部外面に未貫通の孔が焼成前に穿たれる。調整は外面ハケ目、胴部内面はナデ調整である。外面には煤が付着する。45は口径15.0cm、器高24.8cmを測る。肩の張りは弱い。胴部下半は強く締め、底部は突出する小さな平底である。調整は外面ハケ目、胴部内面はハケ目のちナデ調整である。口縁部は内外面ともハケ目調整である。46は口径14.1cm、器高23.4cmを測る。底部は僅かに突出する上げ底の底部。胴部上半の内面には粘土輪積痕を残す。外面には煤が付着する。47は口径15.0cm、器高22.5cmを測る。胴部は歪んでいる。口縁部は外反し端部は丸くおさめる。底部は小さな平底である。胎土中には、大きめの石英粒を多量に含む。調整は内外面ともハケ目調整である。外面には煤が付着する。48は口径14.7cm、器高21.7cmを測る。口縁部は外反し、口縁端部は強いナデにより凹面となる。底部はややくびれる上げ底である。胴部の調整は外面ハケ目のちナデ調整である。内面は工具によるナデ調整が施される。口縁部は内外面ともナデ調整である。外面には煤が付着する。49は口径13.3cm、器高16.4cmを測る。口縁部は外反し、端部は面をもつ。調整は胴部外面下半から底部にかけてヘラケズリが施される。上半はハケ目調整である。50は口径10.3cm、器高14.3cmを測る。口縁部は外反し、口縁端部は外に肥厚する。調整は胴部外面の下半はヘラケズリ、上半はハケ目のちナデ調整、胴部内面はナデ調整である。口縁部は内外面ともハケ目調整である。51は肩が張る。頸部は短く直立し外反する口縁部。調整は内外面ともハケ目のちナデ調整である。52は肩が張る。口縁部は外反し、端部は面をもつ。調整は内外面ともハケ目調整である。53は肩の張りが弱い。口縁部は外反し、端部はやや肥厚する。調整は外面ハケ目、胴部内面はナデ調整である。54の胴部内面に粘土の巻上痕を残す。55は肩の張りが弱い。56の口縁部は外反し、端部は下方に肥厚する。57・58は肩の張りが弱い。口縁部は外反する。59は大きく外反する口縁部。口縁端部は僅かに肥厚する。60の口縁部には2条の凹線が施される。肩部には貝殻文が施される。61はくびれの平底。胴部外面



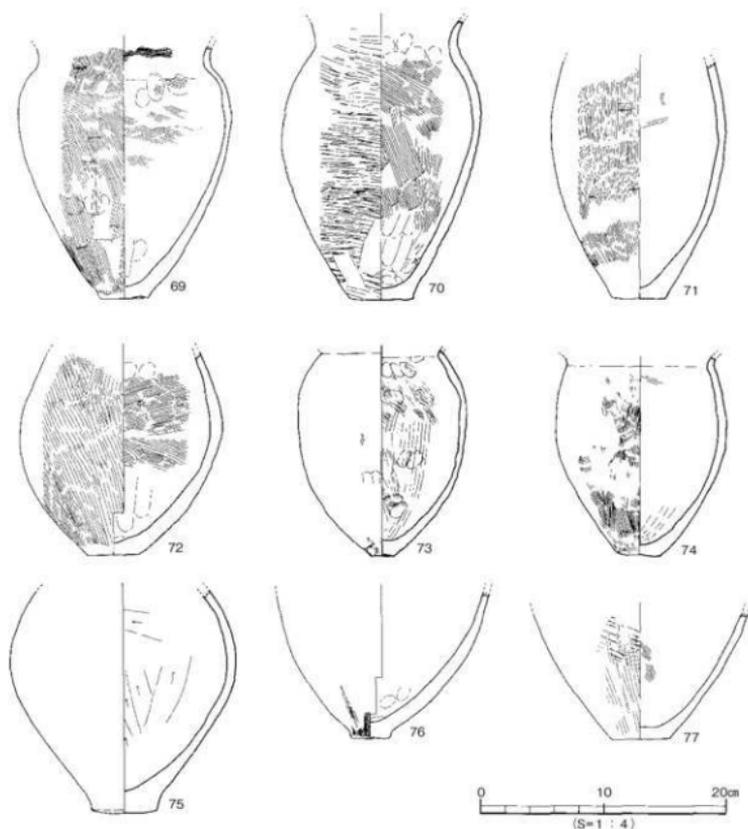
第14図 SB101出土遺物実測図 (5)



第15図 SB 101出土遺物実測図 (6)



第16図 SB101出土遺物実測図(7)



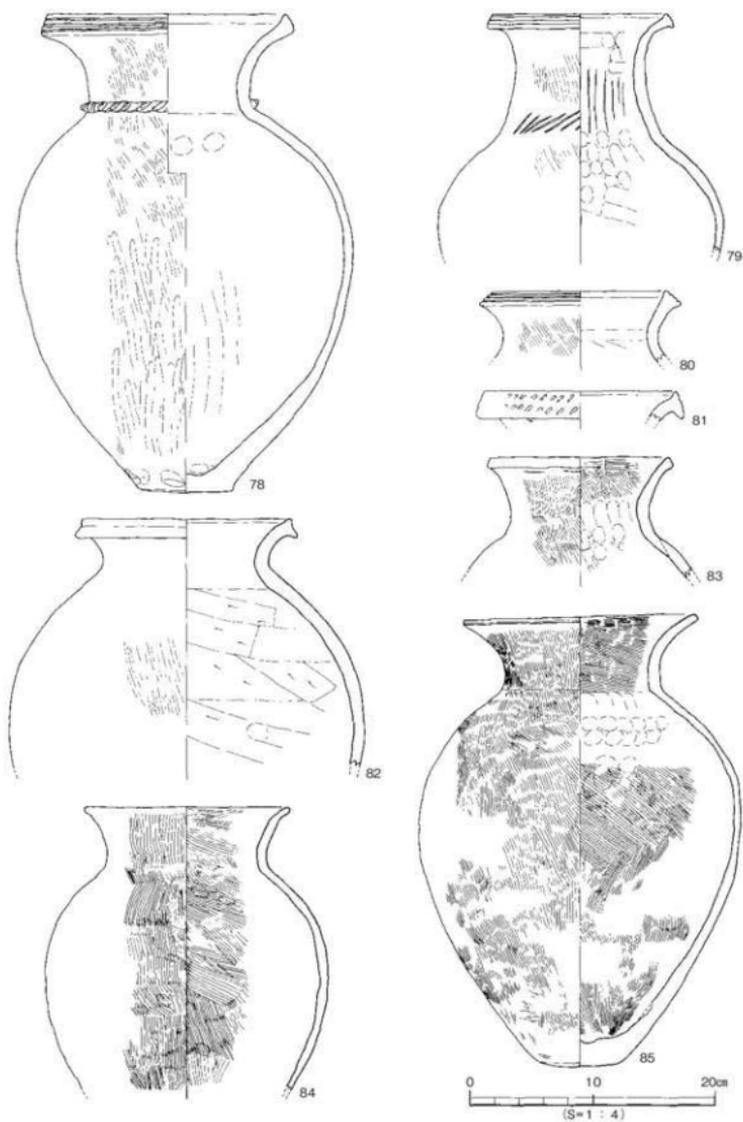
第17図 SB 101出土遺物実測図 (8)

の下半はヘラミガキが施される。62は小さな平底の底部。63は小さく突出する上げ底の底部。外面に煤が付着する。64は平底の底部。外面に煤が付着する。65の底部は厚い平底。胴部下半～底部は被熱のため赤色になる。66の底部は小さく突出する平底。内面下半はナデ調整である。67は小さな平底。68はやや突出する小さな上げ底の底部。外面は煤が付着する。69は肩が張る。底部は小さく突出する上げ底の底部。外面は煤が付着する。70は胴部～頸部にかけてタタキ痕を残す。胴部内面の調整は上半をハケ目調整、下半はナデ調整である。71は肩の張りが弱い。底部は平底。72は胴下半強く締まる。調整は外面ハケ目、内面下半はナデ調整である。73は小さく突出する底部。全体的に被熱を受けて赤色を呈する。74は肩の張りが弱い。底部は小さな平底。全体的に被熱を受けて赤色を呈する。外面に煤が付着する。75の胴部下半は強く締まる。底部は突出する平底。調整は胴部

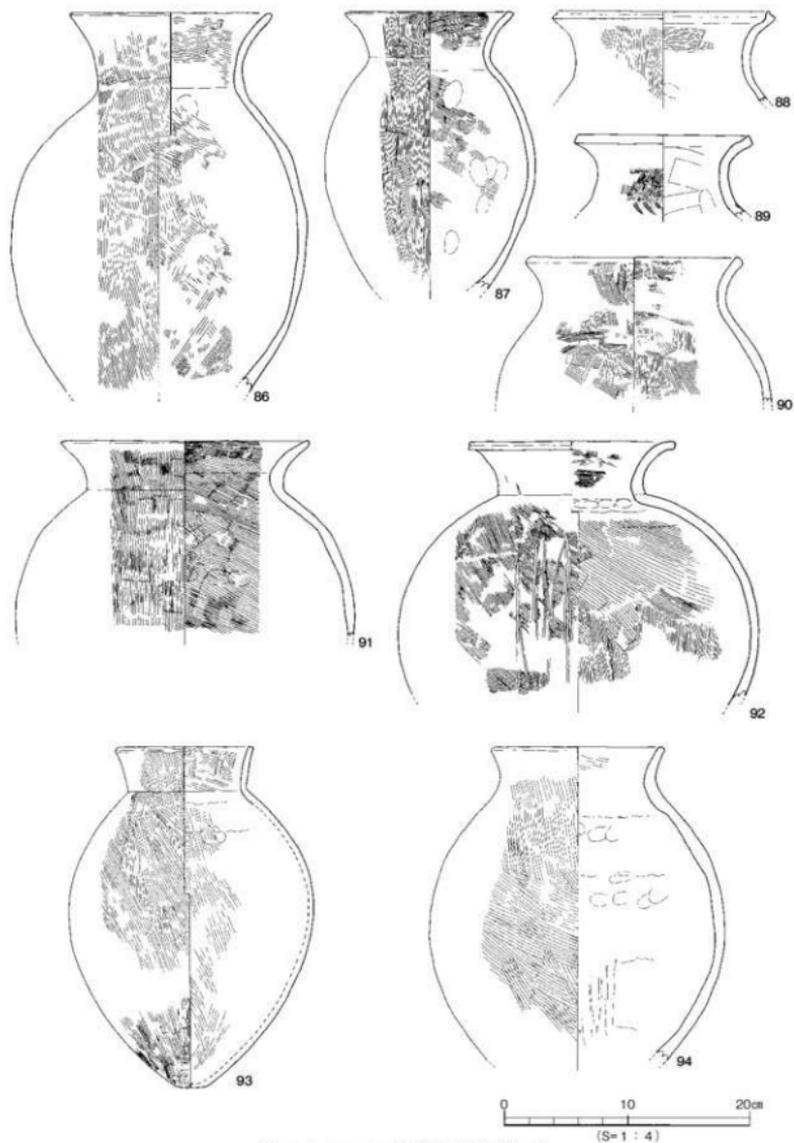
内面をヘラケズリ、外面は摩滅のため不明である。76の底部は小さく突出する不安定な底部。外面は被熱を受けて赤色を呈する。調整は内外面ともナデ調整である。外面に煤が付着する。77は平底の底部。

#### 壺形土器 (78-215)

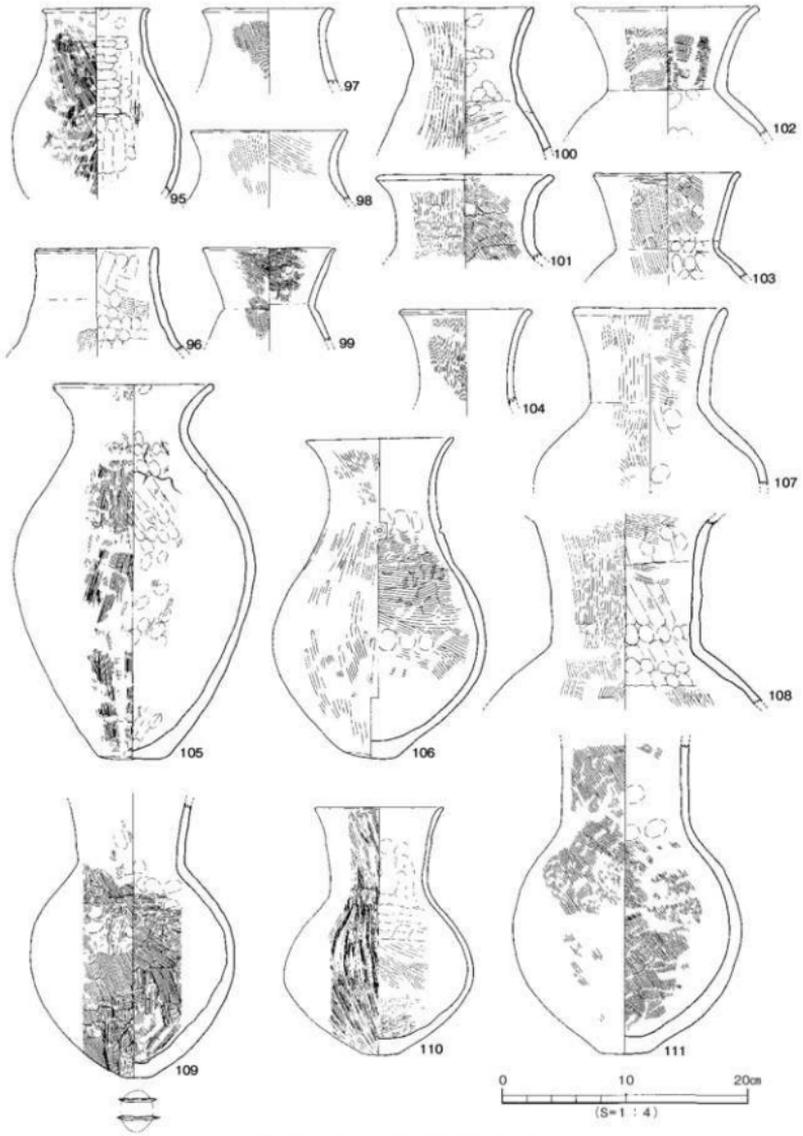
78は胴部最大径を中位にもつ。頸部は短く直立し、口縁部は外反する。口縁端部は拡張され端面に凹線文が施される。頸部には刻目突帯を施す。調整は胴部外面の下半はヘラケズリ、上半はハケ目調整である。底部外面に押圧痕を残す。79は長頸壺。口縁端部の拡張部に凹線文を、頸部に押圧文を施す。頸部内面にシボリ痕を残す。80は口縁端部に凹線文を施す。81の口縁端部は拡張され、刺突文が施される。82は大きく外反する口縁部。口縁部は上下に拡張される。胴部内面はヘラケズリが施される。83・84は短く直立する頸部に外反する口縁部。83の口縁端部は面をもつ。84の口縁端部は丸い。85・86・87の頸部は直立し口縁部は大きく外反する。85の底部は丸みをもった平底。胴部内面の肩部に指頭痕を残す。調整は内外面ともハケ目のちナデ調整である。87は小型品。88・89は直立する頸部に短く外反する口縁部。88の口縁部は上方に拡張される。89の肩部には「ノ」字状文が施される。90・91は短く直立する頸部に僅かに外反する口縁部。92は球形の胴部。短く直立する頸部に大きく外反する口縁部。口縁端面はナデにより凹面となる。調整は胴部外面にハケ目調整と一部にミガキが施される。内面はハケ目調整である。93は卵形の胴部に直立する口縁部。底部は小さな丸みをもった平底。胴部外面の下半にタタキ痕を残す。94は胴部内面の下半にケズリを施す。95・96は口縁部が上方にのびる。97・98は短く外反する口縁部。99は外上方にのびる口縁部。100は緩やかに外反する口縁部。101は直立する頸部に外反する口縁部。調整は内外面ともハケ目調整である。102・103は外傾する頸部に短く外反する口縁部。104は外反する口縁部。105は短く直立する頸部に外反する口縁部。胴部内面はハケ目のちナデ調整である。106は胴部最大径を中位にもつ。口縁部は外反する。底部は丸みをもって不安定である。調整は胴部外面にヘラミガキを施す。内面はハケ目のちナデ調整である。頸部に未貫通の孔を穿つ。107は外傾する頸部に僅かに外反する口縁部。調整は内外面ともハケ目のちナデ調整である。108は直立して長くのびる頸部。109は底部に2条のヘラ描き沈線が施される。110は偏球形の胴部。頸部は外傾する。口縁部は短く外反する。口縁端部は丸く仕上げる。底部は小さな丸みをもった平底。胴部外面の調整はハケ目のちヘラミガキが施される。内面はハケ目のちナデ調整である。胴部外面の下半は被熱により赤色を呈し、煤が付着している。111は突出する底部。頸部は直立して長く立ち上がる。112は肩の張る胴部。頸部に刻目突帯が施される。113は外面にヘラミガキが施される。114は偏球形の胴部にやや外傾して立ち上がる頸部。底部は丸みをもった平底。頸部に2条の沈線と刻目突帯が施される。外面の調整は頸部から胴部にかけてはハケ目のちヘラミガキが施される。内面はハケ目のちナデ調整である。115は外傾して内湾気味に立ち上がる頸部。口縁部は短く外反する。116は偏球形の胴部に内傾して立ち上がる頸部。底部は僅かに突出する。外面の調整はハケ目のちヘラミガキを施す。内面にはシボリ痕を残す。117は頸部に断面三角形の貼付突帯を施す。118は偏球形の胴部に小さく突出する上げ底の底部。頸部は外傾し、口縁部は僅かに外反する。外面の調整は胴部上半から頸部にかけてヘラミガキを施す。口縁部はヨコナデ調整である。119は偏球形の胴部に外傾して立ち上がる口縁部。調整は内外面ともハケ目のちナデ調整である。120は外面の調整はヘラミガキ、内面はナデ調整である。121は偏球形の胴部。底部は小さく突出する。外面には丁寧なヘラミガキが施される。内面はハケ目調整である。122は球形の



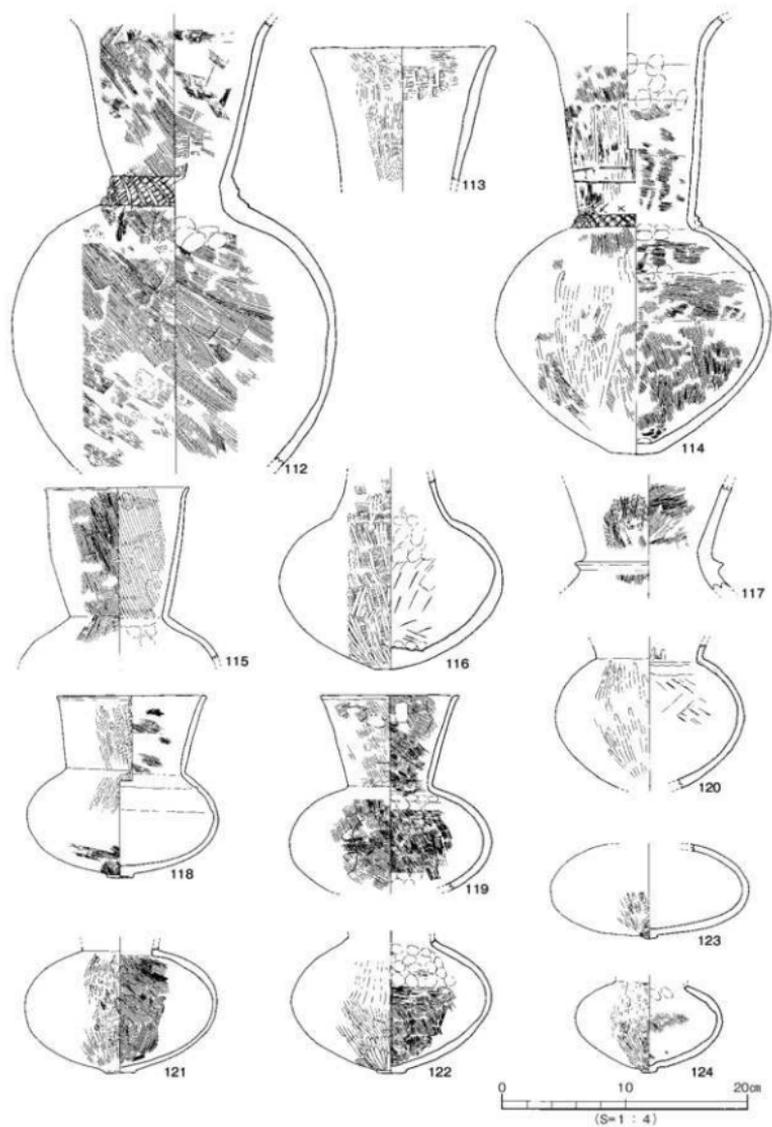
第18図 SB101出土遺物実測図(9)



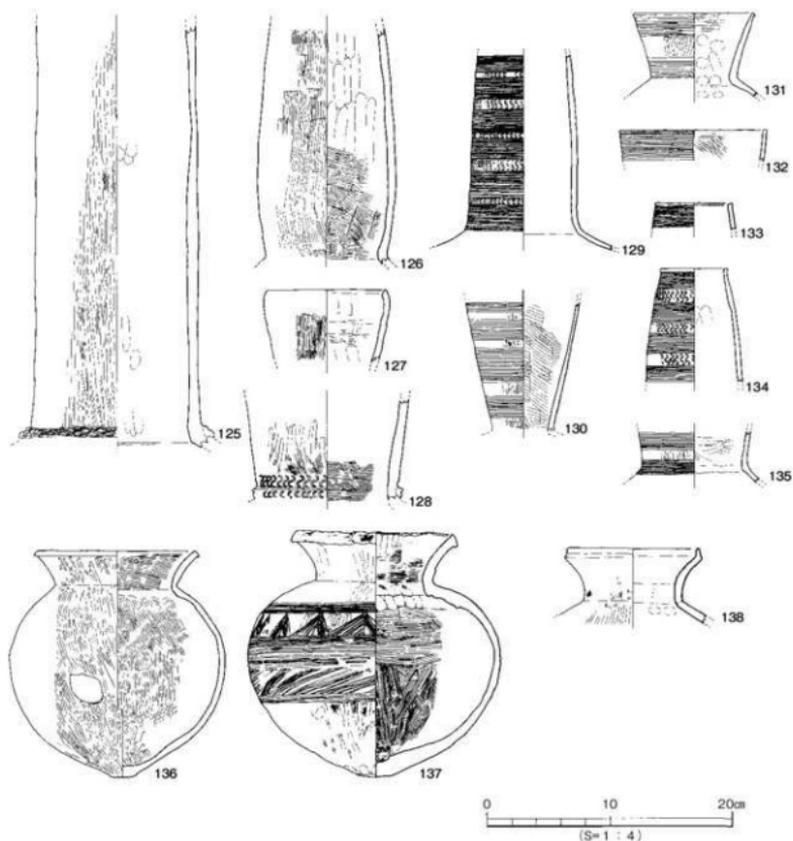
第19図 SB 101出土遺物実測図 (10)



第20図 SB 101出土遺物実測図 (11)



第21図 SB 101出土遺物実測図 (12)



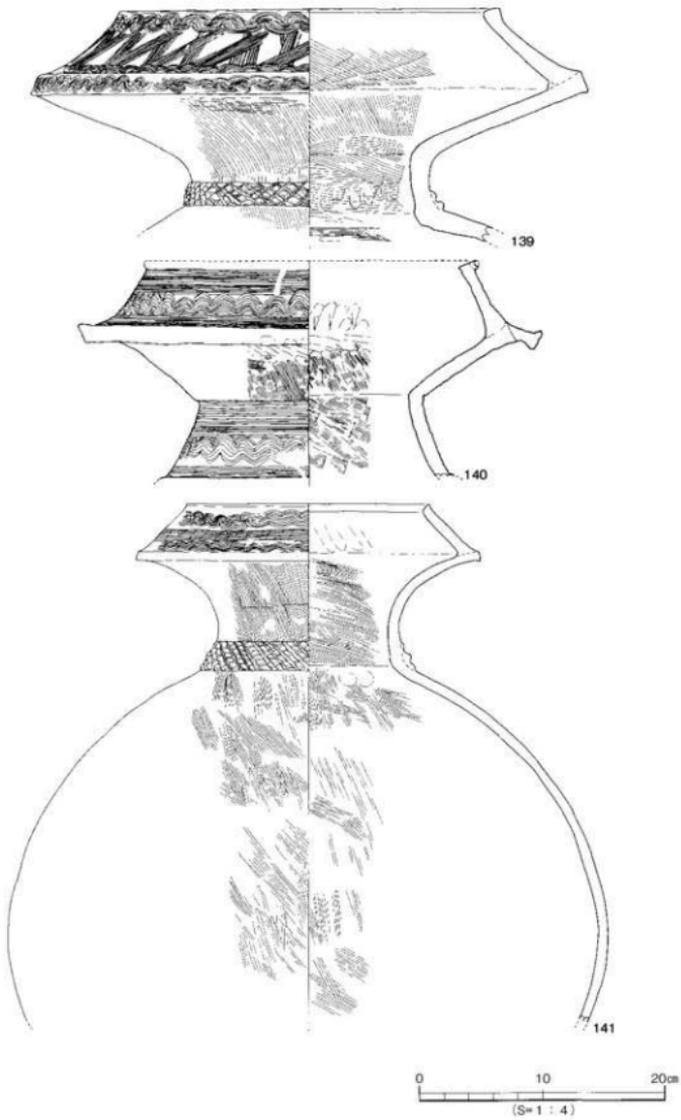
第22図 SB101出土遺物実測図(13)

胴部。底部は小さく突出する。外面にはヘラミガキが施される。内面下半はハケ目、上半はナデ調整である。123は著しい偏球形の胴部。底部はボタン状となる。調整は胴部外面の下半はヘラミガキである。上半は摩擦のため不明。内面はナデ調整である。124は偏球形の胴部。底部はボタン状となる。調整は外面ヘラミガキ、内面はハケ目のちナデ調整である。125は直立して長く立ち上がる頸部。頸部に刻目突帯を貼り付ける。頸部外面はヘラミガキが施される。126は内湾気味に上方に立ち上がる頸部。127は内湾する口縁部。口縁端部は尖り気味。外面はハケ目調整である。128は頸部の突帯に半裁竹管文を施す。その上の頸部にも半裁竹管による「S」字状文を施す。129は内傾して立ち上がる頸部。頸部に栴描文で区画した文様帯をつくる。文様帯には半裁竹管文が施されている。130は外傾する頸部。頸部には栴描文が施される。131は外傾する頸部。口縁部は外上方にのびる。口縁部と頸部に栴描文が施される。132は内湾して立ち上がる口縁部。口縁部に栴描文が施される。133の口

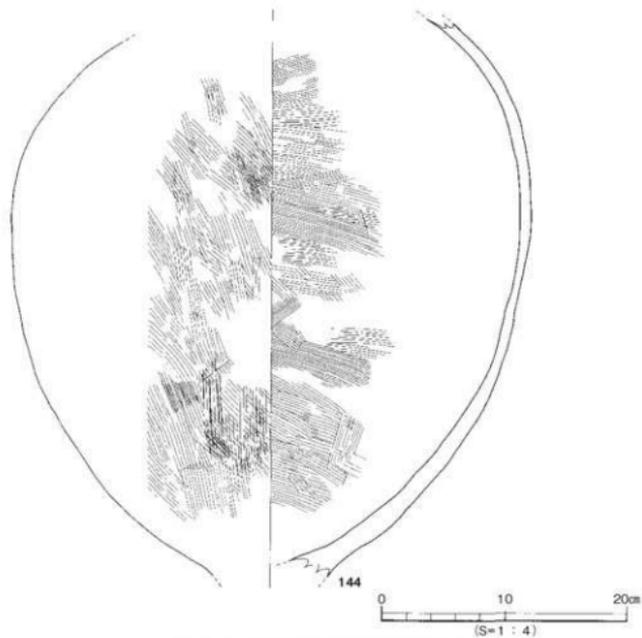
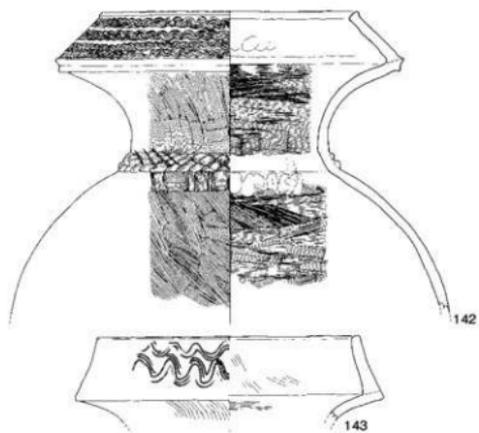
縁部は内傾する。口縁端部は肥厚する。口縁端部に櫛描文が施される。**134**は内傾する口縁部。頸部に櫛描文と半裁竹管文が施される。焼成は非常に良好である。**135**は頸部に櫛描文が施される。**136**は球形の胴部に小さく突出する底部。口縁部は外反する。**137**は肩の張りが強い。頸部は短く直立し、口縁部は外反する。底部は小さい平底。胴中にヘラ描沈線文、櫛描文、鋸歯文が施される。**138**は口縁端部が上方に拡張される。

#### 複合口縁壺 (139～203)

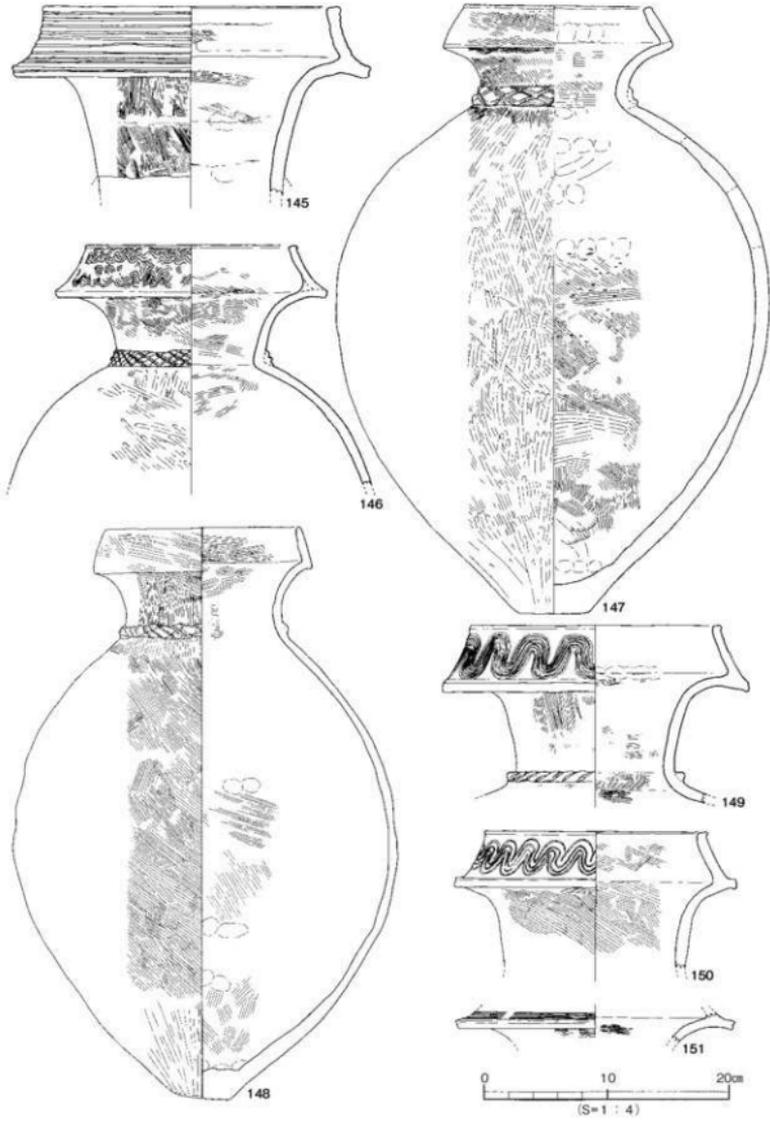
**139**は口径30.6cmを測る大型品。頸部は直立する。口縁接合部は面をもつ。口縁接合部は外反して上方に立ち上がる。施文は頸部に刻目突帯が施され、口縁接合部に波状文、拡張部には波状文と櫛描文が施される。**140**は推定口径27.0cmを測る。口縁接合部は拡張され断面「コ」字状となる。頸部は内傾して立ち上がる。施文は口縁複合部と頸部に施される。口縁複合部には櫛描文、波状文を施し、頸部にも櫛描文と波状文が施される。**141**は口径18.4cmを測る。胴部は球形を呈する。頸部は直立して外反する。施文は口縁複合部に波状文と櫛描文、頸部に刻目突帯を施す。胴部外面の調整はハケ目のちヘラミガキが施される。**142**は口径20.6cmを測る。頸部は直立して立ち上がる。調整は胴部外面をハケ目調整、内面はハケ目のちナデ調整である。頸部内面の接合部に指頭痕を残す。施文は口縁複合部に櫛描文と波状文が施され、頸部には刻目突帯が施される。**142**の口縁接合部は強いナデにより凹面となる。**143・144**は頸部が失われて復元接点をもたないが出土状況や胎土、焼成などから同一個体と考えられるものである。**143**の口縁複合部は内傾して立ち上がる。口縁部拡張部には2段の波状文が施される。**144**は残高45.7cmを測る。卵形を呈する胴部。底部は突出するものと考えられる。**145**の頸部は外反して長くのびる。口縁複合部は外反して上方に立ち上がる。口縁接合部は断面「コ」字状となる。頸部内外面に粘土接合痕跡を残す。頸部の調整は内外面ともハケ目のちナデ調整である。口縁複合部には10条の凹線文が施される。**146**は口縁複合部が外反して立ち上がる。胴部外面にはヘラミガキが施される。胴部内面はハケ目のちナデ調整である。施文は口縁部に波状文、頸部に刻目突帯を施す。**147・148**は卵形の胴部に小さな平底。頸部に刻目突帯が施される。口縁複合部には施文されない。**147**は口径14.4cm、器高49.8cmを測る。外面の調整は胴部下半～底部にかけてヘラケズリ、下半～上半にかけてハケ目のちヘラミガキが施される。胴部内面の下半はハケ目のちナデ調整、上半はナデ調整である。**148**は器壁の摩滅が著しい。口径15.6cm、器高46.9cmを測る。外面の調整は胴部下半をヘラケズリのちナデ、下半～上半にかけてハケ目調整である。**149・150・151**は口縁接合部がタガ状となる。**149・150**の口縁複合部には波状文が施される。**149**の頸部には刻目突帯が施される。**151**の口縁複合部には櫛描文が施される。**152**は肩の張りが弱い胴部。頸部は直立して立ち上がる。口縁複合部に波状文、頸部に刻目突帯が施される。**153・154・155**は口縁接合部が断面「コ」字状となる。**153**の口縁部拡張部は内湾して立ち上がる。**154**の口縁複合部内面に指頭痕を残す。施文は口縁複合部に櫛描文と波状文を施す。**155**の口縁複合部は内傾して短く立ち上がる。施文は口縁複合部と接合部外面に竹管文が施される。**156**の口縁複合部は内に傾斜し、外反して短く上方にのびる。口縁複合部に4条の凹線文が施される。施文は頸部に刻目突帯を施す。調整は頸部外面をハケ目調整、内面はナデ調整である。**157**の口縁複合部は器壁が厚い。施文は口縁複合部に凹線文が施される。**158**の頸部は僅かに内傾して立ち上がる。口縁複合部は外反して上方に立ち上がり、端部は外に肥厚する。施文は口縁複合部に波状文、頸部に刻目突帯を施す。**159**は直立して長くのびる頸部。口縁複合部は直立して短く立ち上がる。頸部の調整は内外面とも工具によるナデ調整である。口縁複合部は



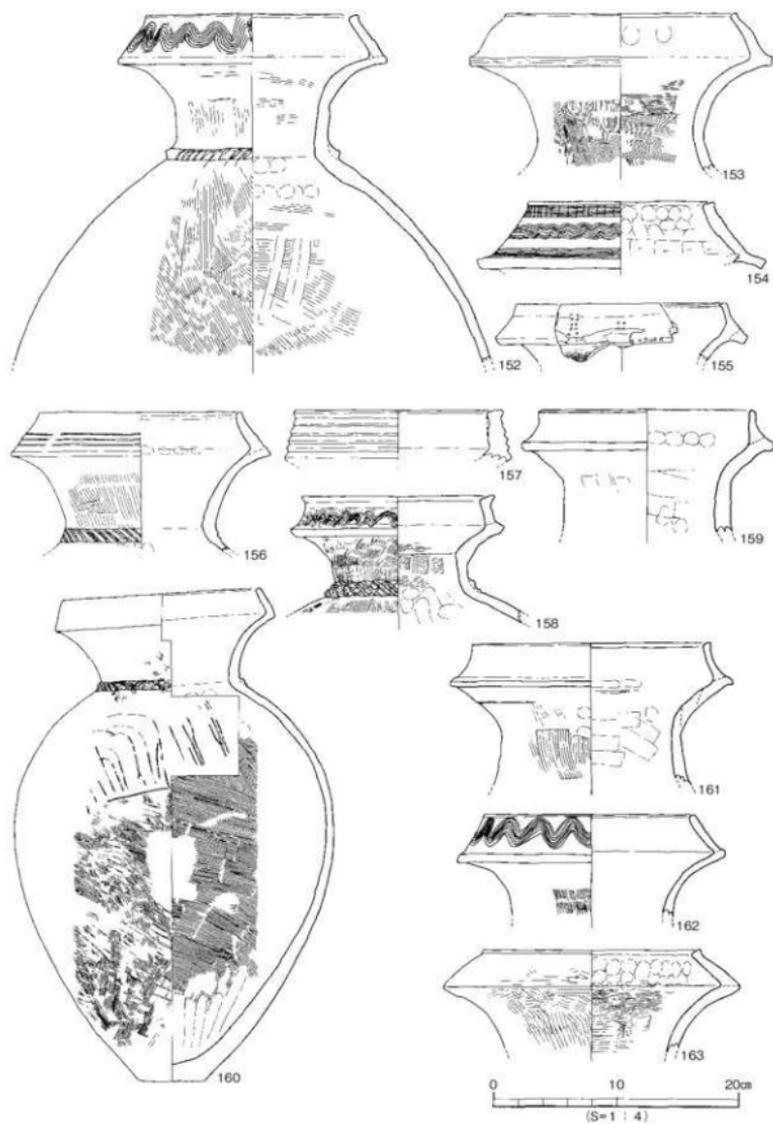
第23図 SB101出土遺物実測図(14)



第24図 SB101出土遺物実測図 (15)

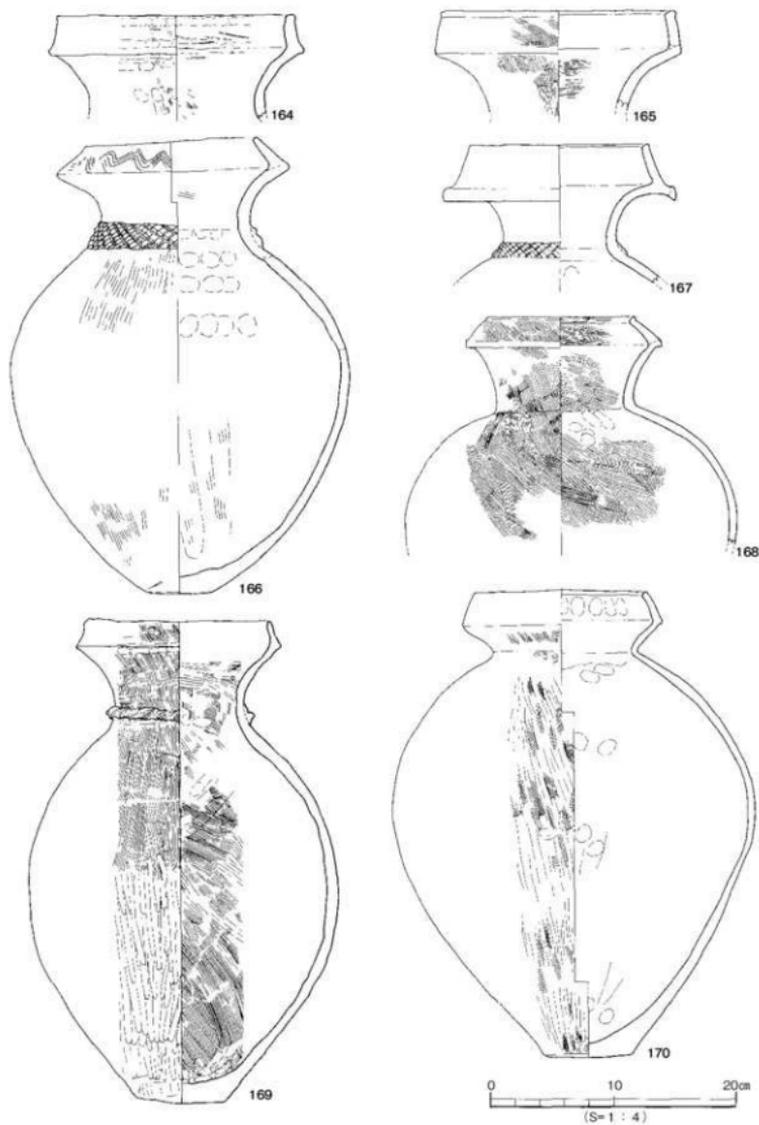


第25図 SB101出土遺物実測図(16)

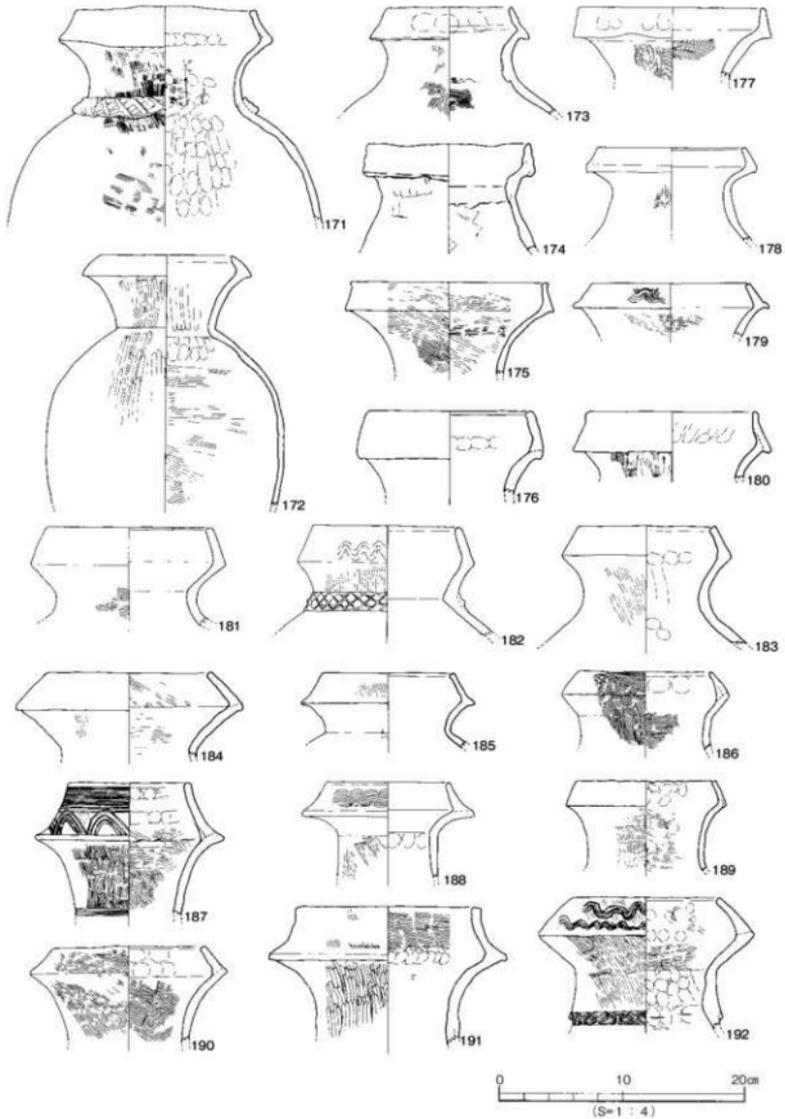


第26図 SB101出土遺物実測図 (17)

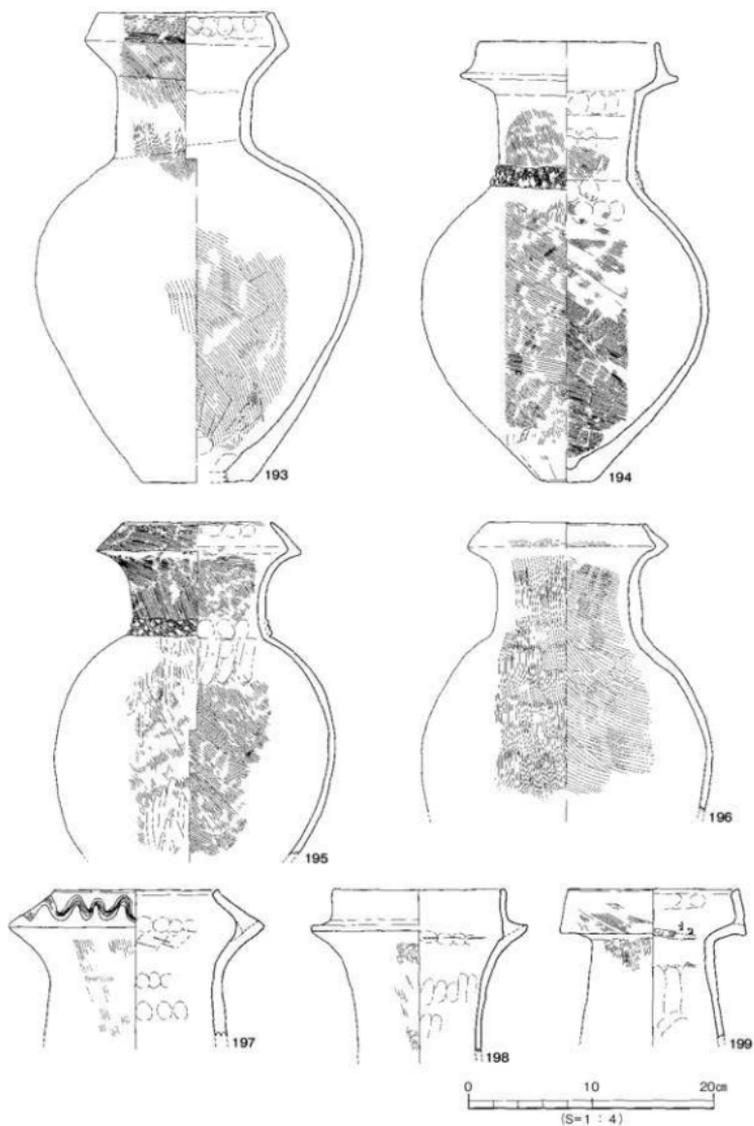
施文されない。160は口径15.4cm、器高40.4cmを測る。胴部は卵形を呈する。底部は不安定な小さな平底である。調整は胴中位以下をタタキのちハケ目調整、上半は摩滅が著しいが一部に粗いハケ目痕を残す。161は内傾する頸部。口縁複合部は無文である。162は口縁複合部に波状文が施される。163は口縁複合部が内湾する。端部は上方に肥厚する。口縁複合部は施文されない。164は口縁複合部が外反して直立する。165の口縁複合部は内湾気味に直立する。口縁複合部は施文されない。166は口径13.7cm、器高37.3cmを測る。やや肩の張る胴部。底部は丸みをもつ不安定な平底。調整は摩滅のため全体は不明であるが、胴部下半にハケ目調整、肩部にヘラミガキが看取される。施文は口縁複合部に波状文、頸部に刻目突帯を施す。167は口縁複合部が断面「コ」字状となる。施文は頸部に刻目突帯が施される。168は肩が張る胴部。頸部は外反する。口縁複合部は内湾し、端部は上方に肥厚する。調整は内外面ともハケ目のちナデ調整である。169は口径14.5cm、器高39.8cmを測る。胴部最大径を中位にもち肩の張りは弱い。底部は不安定な平底である。胴部外面の調整は下半をヘラミガキ、上半はハケ目調整である。胴部内面はハケ目のちナデ調整である。施文は頸部に刻目突帯を施す。口縁複合部には施文されない。170は口径14.0cm、器高38.2cmを測る。胴部は卵形を呈し、肩が張る胴部。底部は不安定な平底。頸部は「く」字状に短く屈曲する。胴部外面の調整はハケ目のちヘラミガキである。内面はナデ調整である。171はやや肩の張る胴部。口縁複合部の端部は外に肥厚する。胴部内面の調整はナデ調整である。施文は頸部に刻目突帯を施す。172は口径10.6cmを測る。頸部は外反し、口縁複合部は内湾して短く立ち上がる。胴部外面の調整は頸部から胴部上半にかけてヘラミガキが施される。胴部内面はハケ目のちナデ調整である。頸部内面にもヘラミガキが施される。173の口縁複合部は外傾し、短く立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げる。調整は口縁部はナデ調整、胴部は内外面ともハケ目のちナデ調整である。174は肩の張りが弱い。口縁複合部は直立する。175・177の口縁複合部は直立する。176の口縁部は内湾して立ち上がる。外面は綺麗なナデ調整である。178は内傾する頸部。口縁複合部は短く内傾する。179は口縁複合部が断面「コ」字状となる。口縁複合部に波状文が施される。180の口縁複合部は内傾して垂直に立ち上がる。181・183は外反する頸部。頸部、口縁複合部とも施文をもたない。182の頸部は短く外反する。施文は口縁複合部に波状文、頸部に刻目突帯が施される。184の口縁複合部は強く内傾する。185の口縁複合部は細い断面三角形となる。186の口縁複合部は内湾する。187～200は頸部が直立ないし内傾する長頸の複合口縁である。187は口径9.5cmを測る。頸部は直立して立ち上がる。口縁複合部は外反して上方に立ち上がる。施文は口縁複合部にヘラ描き沈線文、波状文を施す。頸部にはヘラ描き沈線文を施す。188の頸部はやや内傾して立ち上がる。施文は口縁複合部に波状文が施される。頸部外面の調整はハケ目のちヘラミガキが施される。189・190の口縁複合部の内面は指頭痕を顕著に残す。191の口縁複合部は外反して上方に立ち上がる。頸部外面は丁寧なヘラミガキが施される。口縁複合部内面に指頭痕を残す。192は口縁複合部が内湾する。施文は口縁複合部に波状文、頸部に刻目突帯が施される。頸部内面に指頭痕を顕著に残す。193は口径14.2cm、器高38.4cmを測る。肩の張る胴部。頸部は直立して立ち上がる。口縁複合部は内湾気味に立ち上がる。底部は平底である。胴部外面は摩滅が著しい。胴部内面の調整は胴下半をハケ目、上半はナデ調整である。口縁複合部内面に指頭痕を残す。194は口径14.2cm、器高36.0cmを測る。胴部最大径を中位にもつ。頸部はやや外傾して長くのびる。口縁複合部はタガ状となる。口縁複合部は内傾して上方に立ち上がる。底部は不安定な小さな平底。胴部の調整は内外面ともハケ目のちナデ調整である。胴部内面の肩部から頸部にかけて指頭痕や粘土接合痕を残す。施文は頸部に刻目突帯を施す。



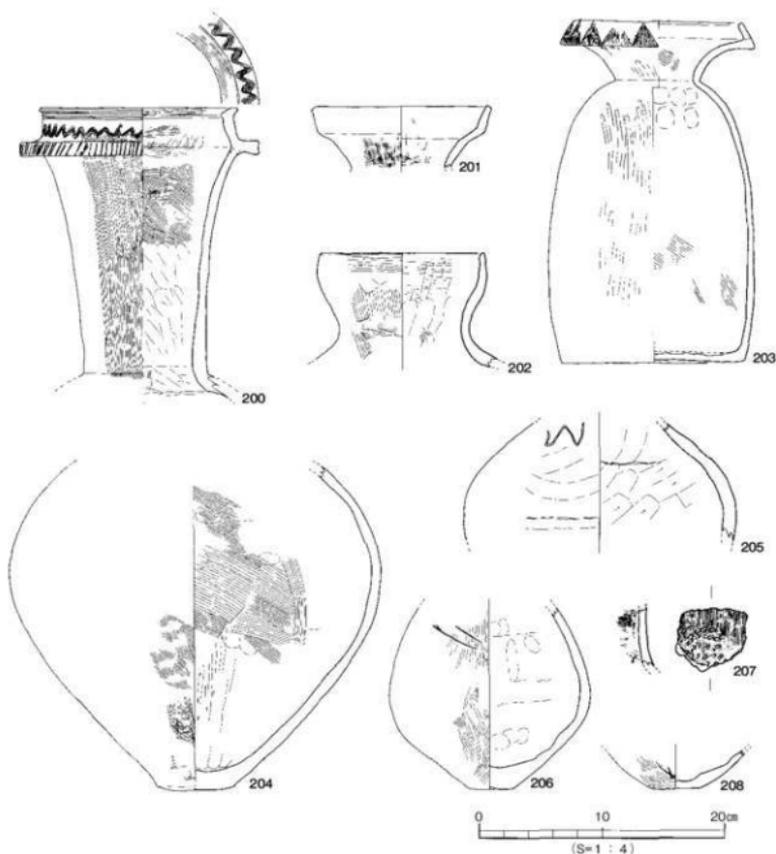
第27図 SB101出土遺物実測図(18)



第28図 SB101出土遺物実測図 (19)

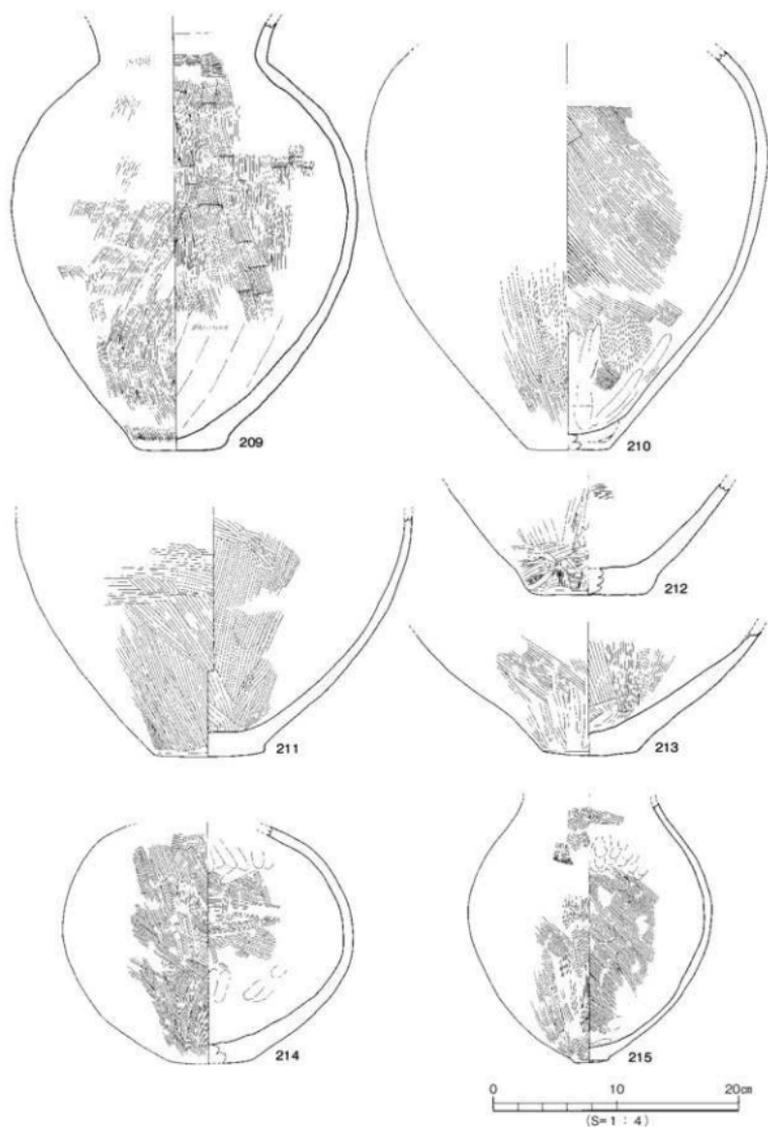


第29図 SB101出土遺物実測図(20)



第30図 SB 101出土遺物実測図 (21)

195は卵形を呈する胴部。胴部外面の調整はハケ目のちヘラミガキが施される。頸部から口縁部にかけてはハケ目調整である。施文は頸部に刻目突帯を施す。196は肩の張りが弱い胴部。口縁複合部は短く内傾する。外面に煤が付着する。197の口縁複合部には波状文が施される。198の口縁接合部は断面「コ」字状となる。口縁複合部は上方に立ち上がる。199の頸部は内傾する口縁部。口縁複合部は内湾して上方に立ち上がる。200は外傾して立ち上がる頸部。口縁複合部は断面「コ」字状となる。口縁複合部はやや内傾して上方に立ち上がる。端部は拡張される。調整は頸部外面をハケ目、頸部内面は下半をナデ、上半はハケ目調整である。口縁複合部に波状文と凹線、接合部端面に「ノ」字状のヘラ状工具による刺突文を施す。201は外上方に立ち上がる口縁部。202は口縁部が袋状となる。203は安定感のある平底から直立する胴部。肩部は緩やかに内湾し張りが弱い。頸部は短く外傾し、口縁

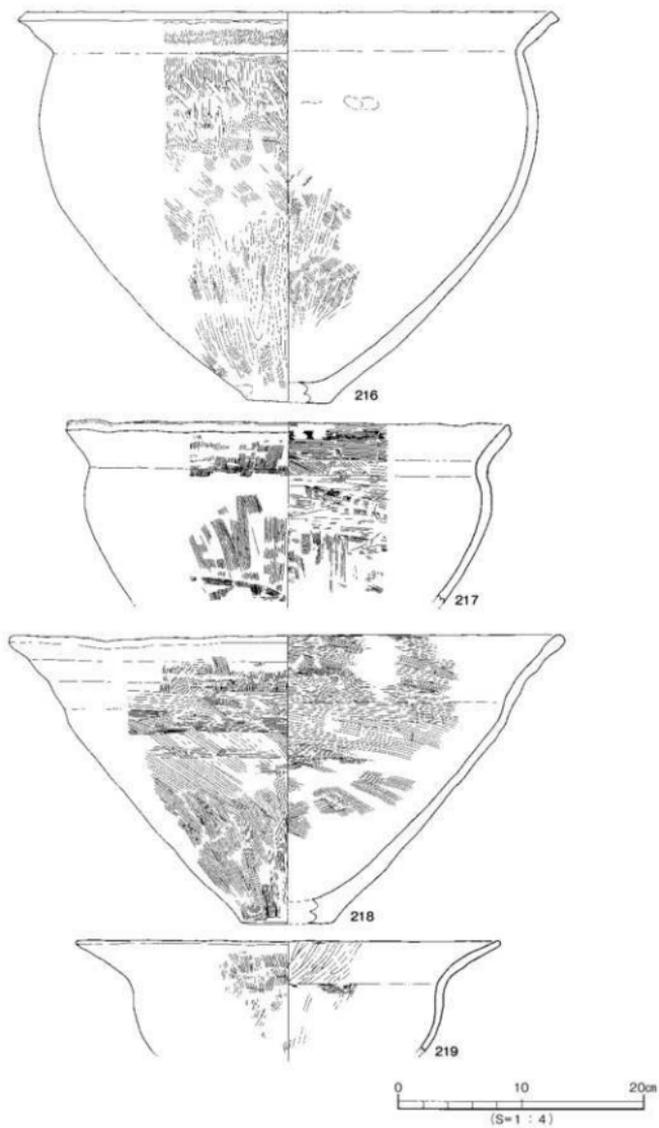


第31図 SB 101出土遺物実測図 (22)

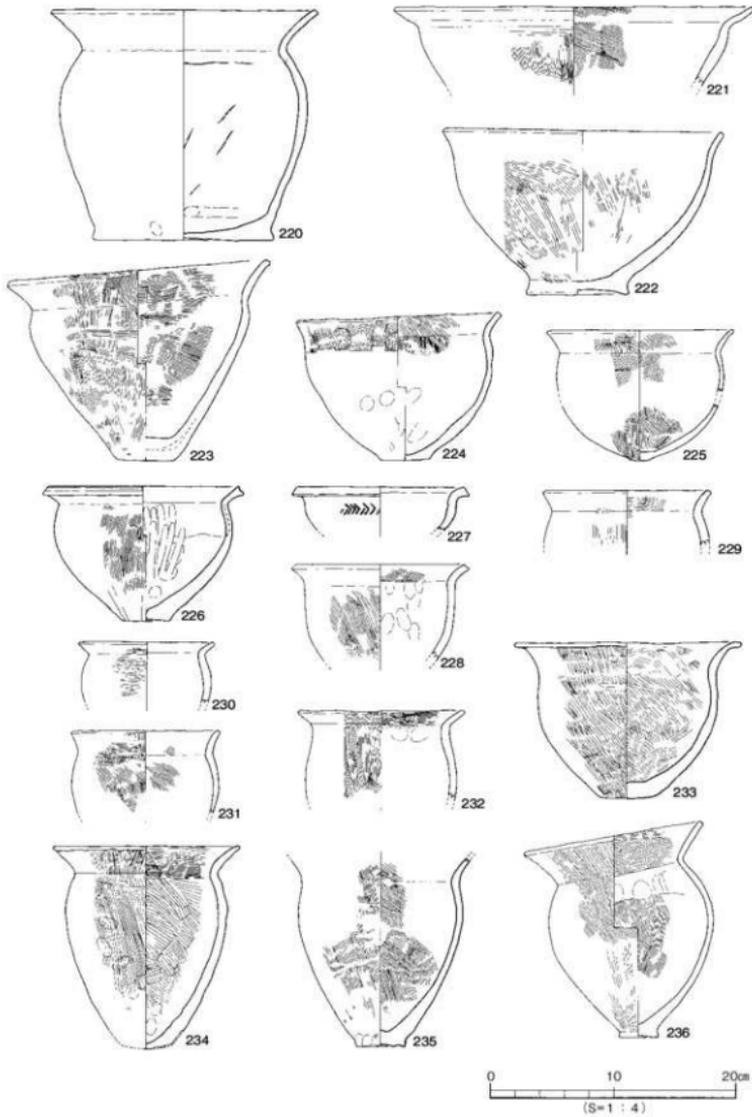
部は大きく外反する。口縁複合部は短く内傾する。調整は胴部外面をヘラミガキ、内面はハケ目のち丁寧なナデ調整が施される。口縁複合部に鋸歯文が施される。204~215は壺形土器の胴部及び底部である。204はやや突出する平底の底部。胴部最大径を中位にもつ。205は胴部片。肩部に線刻をもつ。206は胴部下半が膨らむ。底部は不安定な小さな平底。調整は外面ヘラミガキ、内面はナデ調整である。207は頸部片。半莖竹管文が施される。208は底部片。外面に線刻をもつ。209はやや突出する底部。調整は胴部外面の下半をハケ目、内面は下半をナデ調整、上半はハケ目調整である。210は小さな平底。胴部外面下半はヘラミガキが施される。211・212・213は突出する不安定な平底の底部。214は偏球形の胴部。底部は丸みをもつ。215は肩の張りが弱い。底部は小さく突出する。外面に煤が付着する。

鉢形土器 (216~274)

216~219は推定口径が30cmを超える大型品。216は推定口径42.4cm、器高32.0cmを測る。内湾して立ち上がる胴部に外傾して短く外上方に開く口縁部。底部は小さな平底である。調整は胴部外面をハケ目のちヘラミガキ、胴部内面は下半をハケ目のちヘラミガキ、上半はナデ調整である。217はやや外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。内外面の調整は、口縁部から胴部にかけてハケ目のちナデ調整である。218は直口口縁である。推定口径44.0cm、器高23.6cmを測る。平底の底部から外傾して立ち上がる胴部。調整は外面ハケ目、内面はハケ目のちナデ調整である。219は長く大きく外反する口縁部。調整は外面ハケ目のちナデ調整、内面はヘラミガキが施される。220は口径21.1cm、器高18.8cmを測る。底部は少しくびれをもった安定した平底である。胴部は内湾して緩やかに立ち上がる。頸部の締めりは弱く「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する。口縁端部は面をもつ。調整は内外面とも摩擦のため不明であるが、胴部内面に工具痕が看取される。221の口縁部は屈曲して外上方に立ち上がる。調整は内外面ともハケ目のちナデ調整である。222は口径22.3cm、器高13.7cmを測る。底部は安定した上げ底の底部。胴部は内湾して立ち上がる。口縁部は僅かに外反する。調整は口縁部の内外面ともナデ調整、胴部は内外面ともハケ目のちナデ調整である。223は口径20.7cm、器高16.5cmを測る。外反する口縁部。底部は不安定な平底。内外面の調整はハケ目調整のちナデ調整である。224は口径16.1cm、器高12.1cmを測る。底部は突出する不安定な平底の底部。口縁部は短く外反する。頸部から口縁部の調整は内外面ともハケ目調整。胴部は内外面ともナデ調整である。225は口径14.8cm、器高10.7cmを測る。外反する口縁部。口縁端部は丸くおさめる。底部はボタン状に小さく突出する。調整は内外面ともハケ目のちナデ調整である。226の口縁端部は強いナデによって上下に肥厚する。底部はやや上げ底。胴部外面の調整はハケ目のちナデ調整、内面は縦方向の強いナデ調整である。227は口縁部が短く大きく外反する。口縁端部は凹面をもつ。肩部には刺突文が施される。228は外反する口縁部。調整は胴部外面をハケ目のちナデ調整である。胴部内面は指頭痕を残す。229は外反する口縁部。230の口縁部は短く外方に開く。口縁端部は丸い。胴部外面はヘラミガキが施される。231は上方に外反する口縁部。調整は内外面ともハケ目のちナデ調整である。232は張りの弱い胴部。口縁部は外上方に開く。調整は外面ハケ目調整、内面は口縁部をハケ目調整、胴部はナデ調整である。233の底部は不安定な平底。口縁部は短く大きく外反する。調整は内外面ともハケ目調整のちヘラミガキが施される。234の口縁部は外反して上方にのびる。調整は内外面ともハケ目調整である。胴部外面は煤が付着する。235の底部は突出する。236は焼け歪む。外上方に開く口縁部。底部は小さく突出するやや上げ底の底部。底部外面に指頭痕を残す。調整は胴部、口縁部外面をハケ目のちナデ調整、内面は口縁部をハケ目調整、胴部はハケ目のちナデ調整である。頸部内面に指頭痕を残す。胴部外面には煤が



第32図 SB101出土遺物実測図(23)

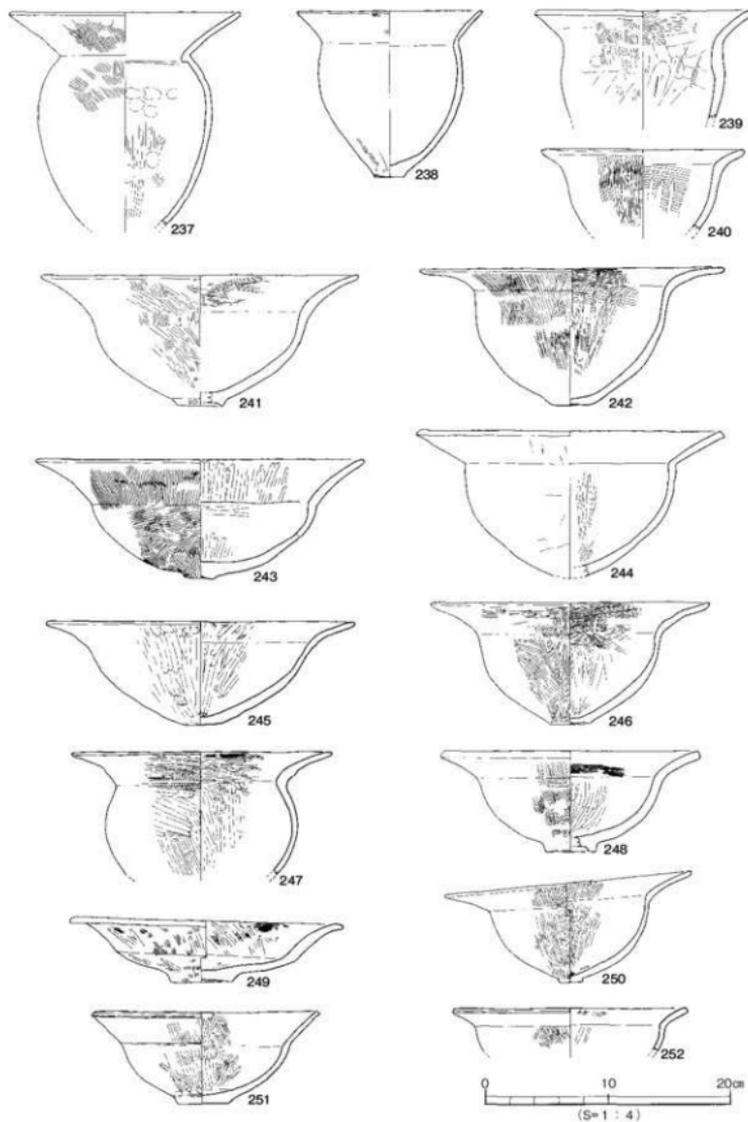


第33図 SB 101出土遺物実測図 (24)

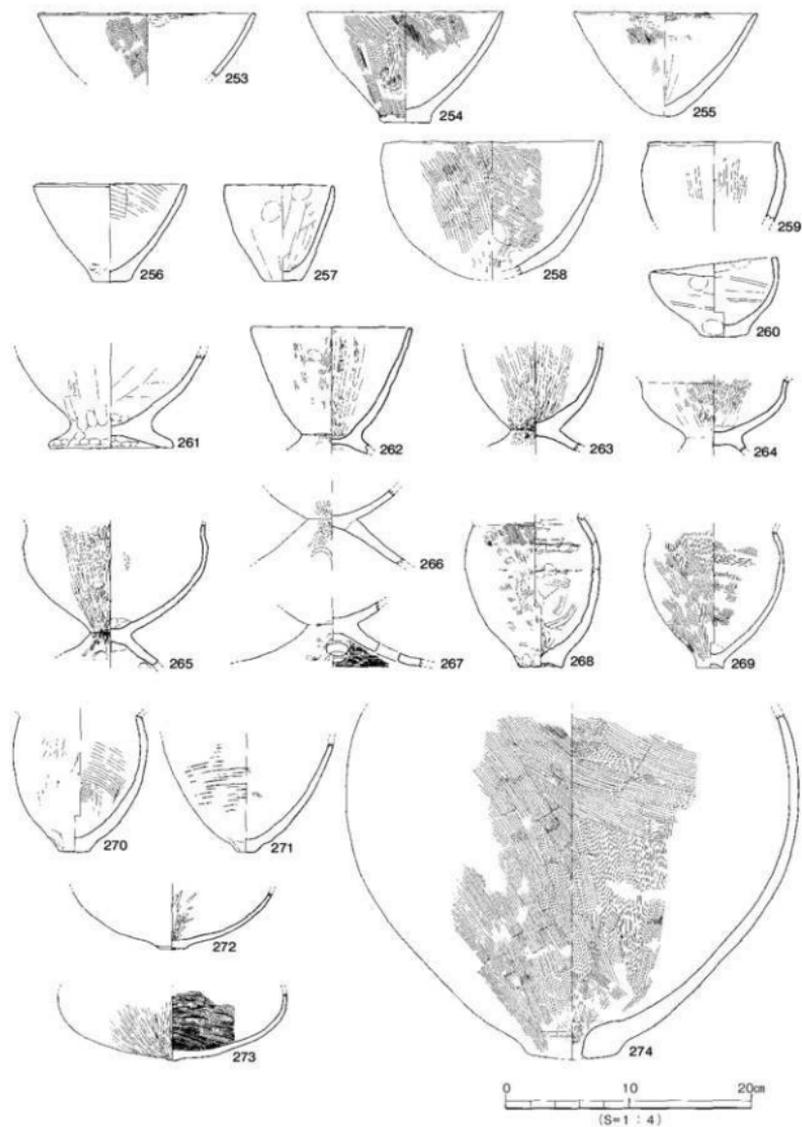
付着する。237の口縁部は長く外上方に開く。口縁端部は面をもつ。胴部外面と口縁部外面に煤が付着する。238は小さな平底の底部。底部は被熱し赤色を呈する。胴部外面には煤が付着する。239・240は外反する口縁部。239の口縁端部は面をもち、240の口縁端部は丸い。241～251は口縁部が長く、大きく外反する。241の底部は小さく突出する上げ底の底部。調整は外面をハケ目のちヘラミガキ、内面は口縁部をハケ目、胴部は摩滅のため不明。242の底部は突出する丸みをもった不安定な底部。調整は外面をハケ目調整、内面は口縁部をハケ目、胴部はヘラミガキが施される。243の底部は小さく突出する上げ底の底部。調整は外面ハケ目、内面はヘラミガキが施される。244は底部が欠失。胴部内面にヘラミガキが施される。245の底部は丸みをもった小さな平底。調整は内外面ともヘラミガキが施される。246は小さく突出するやや上げ底の底部。調整は外面ハケ目のちヘラミガキ、内面は口縁部をハケ目調整、胴部はヘラミガキを施す。247は偏球形の胴部。底部は欠失。外面の調整は口縁部から胴部にかけてはハケ目のちヘラミガキを施す。内面は口縁部をハケ目のちヘラミガキ、胴部は丁寧なヘラミガキを施す。248は上げ底の底部。口縁端部は面をもつ。調整は胴部外面をハケ目調整、口縁部はヘラミガキを施す。胴部内面はヘラケズリを施す。249は復元完形品。高坏の坏部に似た形状である。口径22.0cm、器高5.4cmを測る。底部は突出するやや上げ底の底部。調整は内外面ともハケ目調整のちヘラミガキを施す。250はボタン状に突出する底部。調整は内外面とも丁寧なヘラミガキが施される。251の口縁部は屈曲して外方に長くのびる。口縁端部は面をもつ。底部はやや突出する平底である。調整は内外面とも丁寧なヘラミガキが施される。252の口縁端部は面をもつ。外面は被熱を受け赤色を呈する。253～260は直口口縁の鉢である。253は内外面ともハケ目のちナデ調整である。254の底部は突出する底部。調整は外面ハケ目、内面の口縁部はハケ目、胴部はナデ調整である。255は丸みをもった底部。256の底部は不安定な平底。257は安定する小さな平底である。258の底部は欠失。外面の調整は底部をヘラケズリ、胴部はハケ目調整である。259は内湾して立ち上がる胴部に僅かに屈曲して上方に短くのびる口縁部。口縁端部は丸くおさめる。調整は内外面ともヘラミガキが施される。260は突出する不安定な底部。261～267は脚付の鉢である。261は低脚である。脚部の内外面に指頭痕を残す。262は直口口縁。口縁端部は丸くおさめる。調整は外面ハケ目のちナデ調整、内面はヘラミガキが施される。263・264は胴部内外面とも丁寧なヘラミガキが施される。265・266・267は脚部に円孔が穿たれる。265の外面はヘラミガキが施される。268～274は口縁部が欠失する。268は不安定な平底の底部。外面に指頭痕が残る。269・270・271は小さく突出する不安定な底部。269の胴部下半はハケ目のちヘラミガキ、上半はハケ目調整である。271の胴部外面の調整はタタキのちナデ調整である。272・273はボタン状に突出する底部。274は底部に円孔が穿たれる。調整は内外面ともハケ目のちナデ調整である。

#### 高坏形土器（275～301）

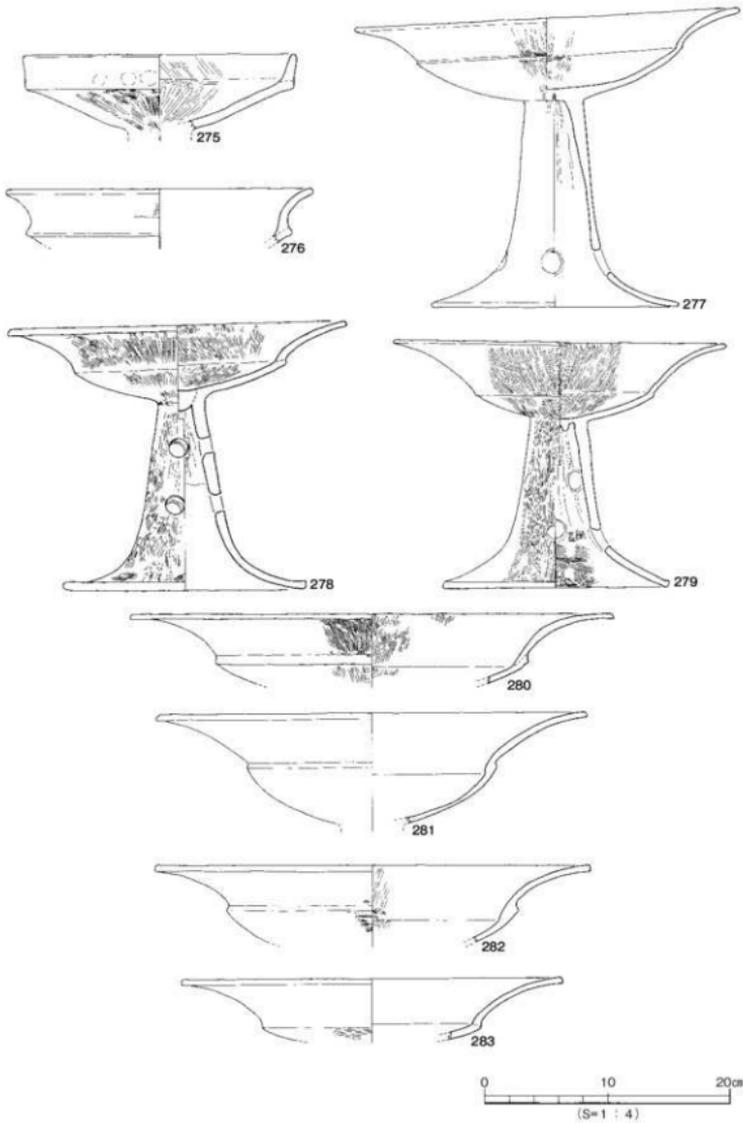
275は口縁部が短く上方に立ち上がる。坏部内面はヘラミガキが施される。276の口縁部は短く外反する。277～288は口縁部が長く大きく外反する。277は復元完形品である。口径30.9cm、器高24.4cmを測る。脚部には4方向の円孔が1段穿たれる。278はほぼ完形の高坏である。口径27.0cm、器高21.9cmを測る。脚部に3方向に2段の円孔が穿たれる。外面はハケ目のちヘラミガキ、坏部内面は丁寧なヘラミガキが施される。279は復元完形品。口径26.9cm、器高20.3cmを測る。脚部に2段の円孔が穿たれる。調整は坏部外面をハケ目、脚部外面と口縁部内外面、坏部内面は丁寧なヘラミガキが施される。280の調整は内外面ともハケ目のちヘラミガキが施される。281の調整は摩滅のため不明。282



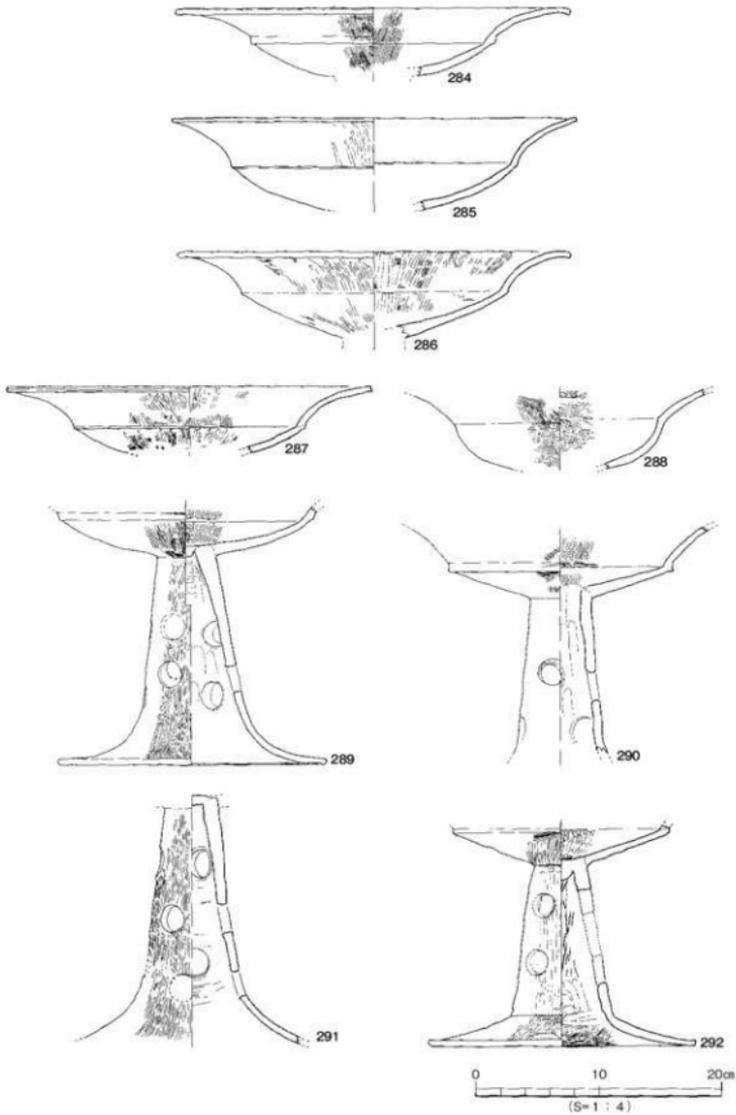
第34図 S B 101出土遺物実測図 (25)



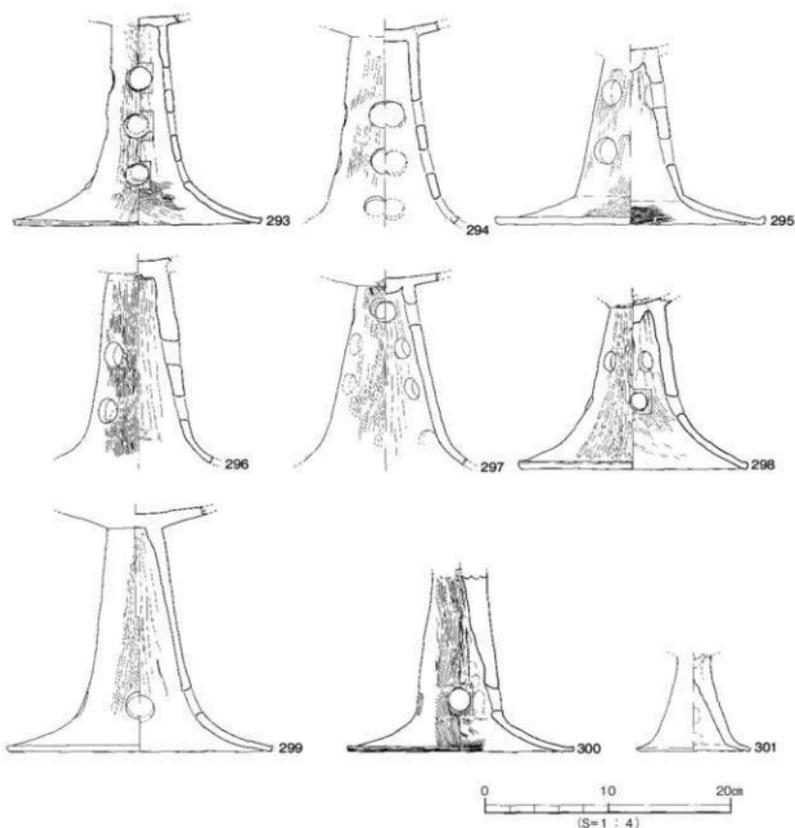
第35図 SB 101出土遺物実測図 (26)



第36図 SB101出土遺物実測図 (27)



第37図 SB101出土遺物実測図(28)

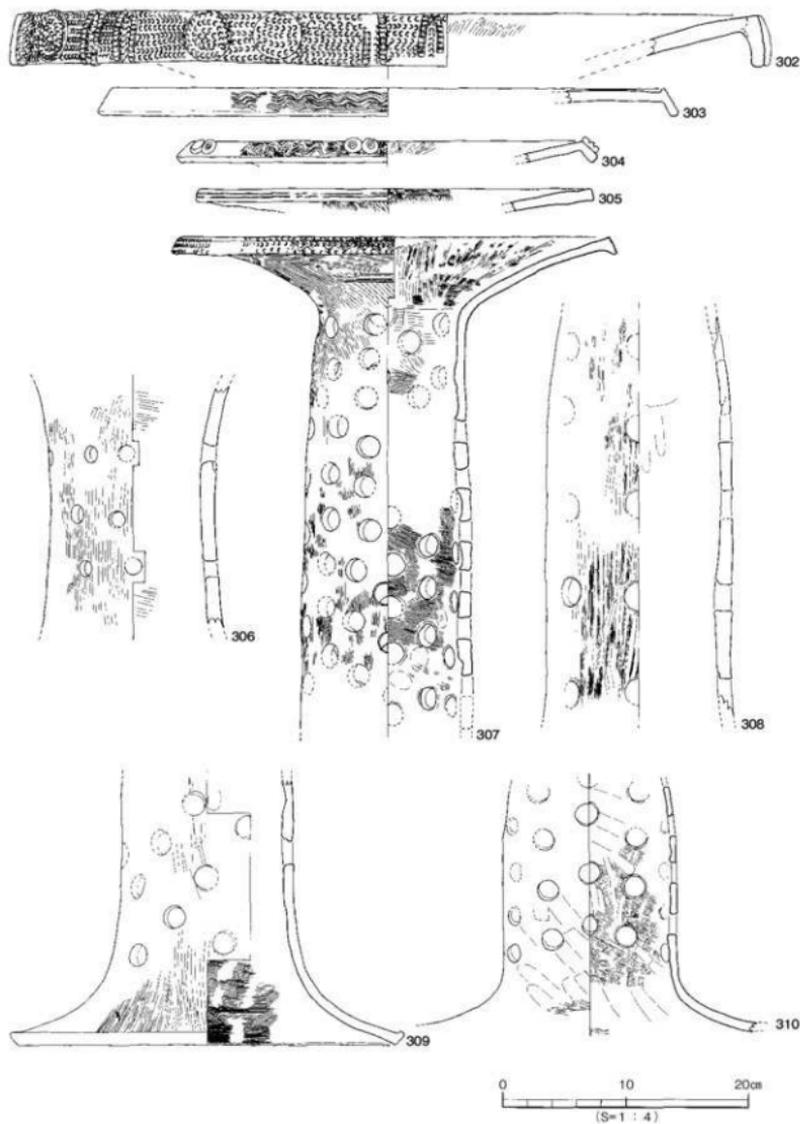


第38図 SB101出土遺物実測図(29)

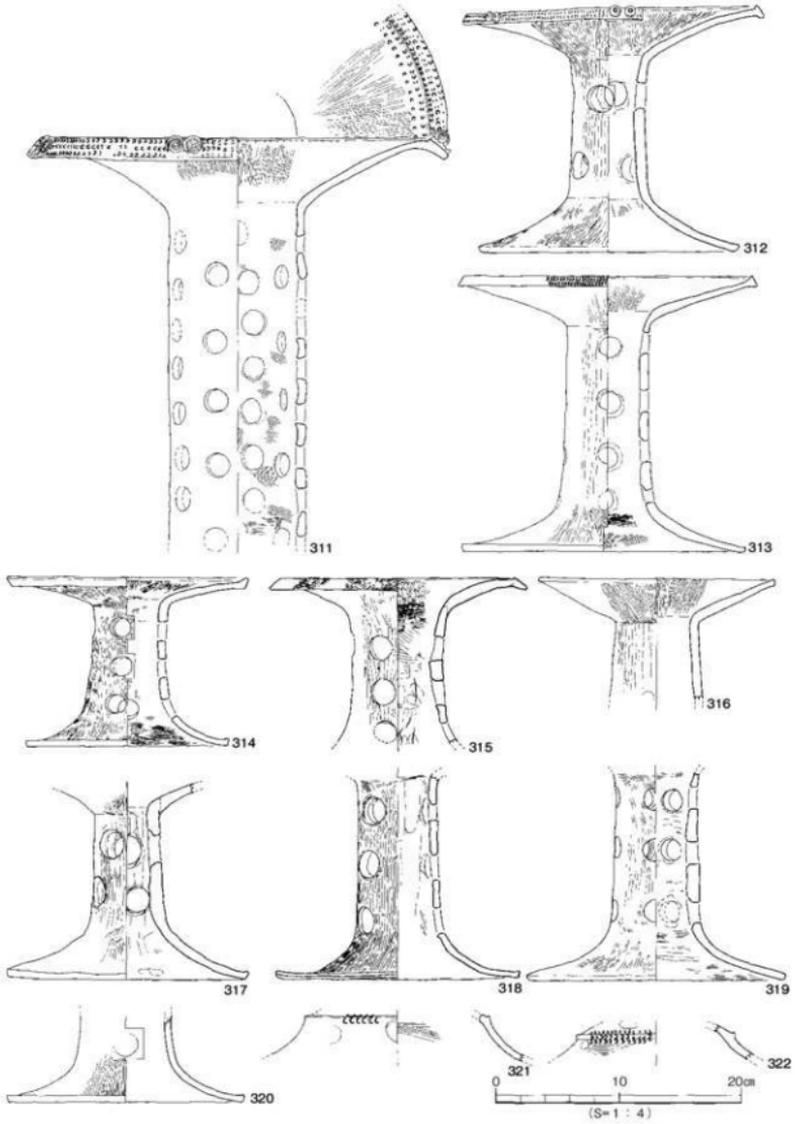
~288はハケ目のちへラミガキが施される。289の脚部には3段の不規則な円孔が穿たれる。291は柱部に3方向の4段の円孔が穿たれる。293・294は脚部に4方向の3段の円孔が穿たれる。290・292・295・296・298の脚部には2段の円孔が穿たれる。297の脚部には4段の円孔が穿たれる。299・300の脚部には1段の円孔が穿たれる。301は短く屈曲する脚裾部。

器台形土器(302~322)

302は受部片。推定口径は60.0cmを測る。受部は下方に拡張され、浮文と半截竹管文とで加飾される。受部内面はへらミガキが施される。303は受部拡張部に波状文を施す。304は受部拡張部に波状文と



第39図 SB101出土遺物実測図(30)



第40図 SB101出土遺物実測図 (31)

浮文を施す。受部内面の調整は丁寧なヘラミガキが施される。305の受部端部は拡張されない。端部には二条の沈線が巡る。調整は内外面ともハケ目のちヘラミガキが施される。306～311の柱部には円孔が穿たれる。306・308・309の外面の調整はハケ目のちヘラミガキである。308の内面はナデ調整である。310の内面はハケ目のちナデ調整である。307は受部径34.5cm、残高40.2cmを測る。受部は下方に短く拡張され、端面には1条の沈線を巡らせ波状文を施したのちに半截竹管文が3段施される。浮文が施されていたと思われる形跡が4か所に見られ、全体では6か所に施されていたものと思われる。受部内面は丁寧なヘラミガキが施される。311は受部径31.2cm、残高33.0cmを測る。柱部は長くのびる。受部端面には3段の半截竹管文と2個一對の円形浮文が施され、受部端上面にも2段の半截竹管文が施される。受部内面は丁寧なヘラミガキが施される。312は復元完形品。口径23.4cm、器高20.2cmを測る。受部は上下に短く拡張され、半截竹管文2段と2個一對の円形浮文が施される。柱部外面と受部内外面は丁寧なヘラミガキが施される。柱部には4方向に2段の円孔が穿たれる。313は受部推定径23.2cm、器高22.5cmを測る。受部端部に2段の半截竹管文が施される。柱部には4方向に4段の円孔が穿たれる。外面と受部内面はヘラミガキ、柱部内面はナデ調整、柱裾内面はハケ目のちナデ調整である。314は復元完形品。受部径19.4cm、器高13.9cmを測る。受部端部が上方に短く拡張される。施文は施されない。柱部外面、受部内外面とも丁寧なヘラミガキが施される。柱部には4方向に3段の円孔が穿たれる。315の受部には波状文が施される。柱部外面、受部内外面とも丁寧なヘラミガキが施される。柱部内面はハケ目調整のちナデ調整である。柱部内面には指頭痕やシボリ痕を残す。316は口径18.8cmを測る。受部端部が拡張されず、施文は施されない。柱部外面、受部内外面とも丁寧なヘラミガキが施される。柱部に円孔が穿たれる。317は受部が欠失。柱部外面は丁寧なヘラミガキが施される。内面はナデ調整である。柱部には3方向に2段の円孔が穿たれる。318の裾端部は凹面となる。柱部外面は丁寧なヘラミガキが施される。柱部には3方向の3段の円孔が穿たれる。319の柱部外面と柱裾内外面にヘラミガキが施される。柱部には5方向の3段の円孔が穿たれる。320は柱部の裾部片。円孔が穿たれている。321・322は有段の柱裾部。半截竹管文が施され、円孔が穿たれる。

#### 支脚形土器 (323・324)

323は中空の支脚である。上下対象の受部、脚部とも外反する。口径8.3cm、器高16.7cmを測る。外面の調整はハケ目調整である。324は中実の支脚。受部はやや傾斜する。受部径5.3cm、器高6.0cmを測る。

#### 線刻土器・器種不明土器 (325・326)

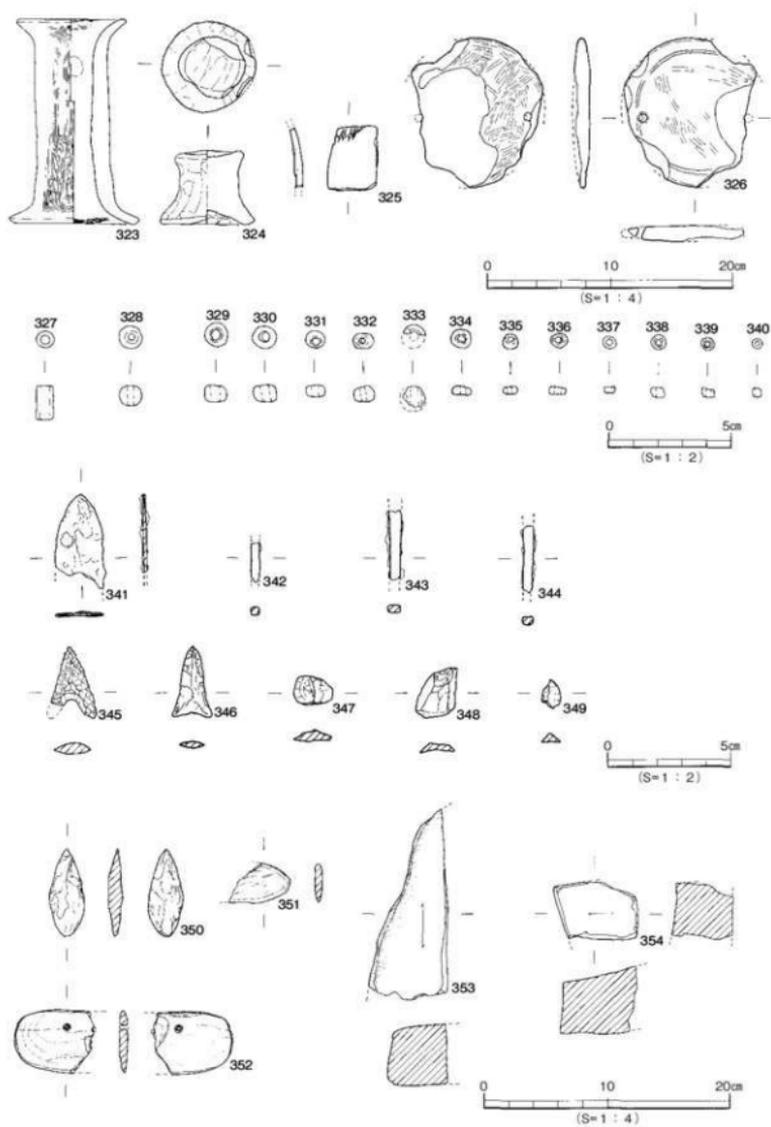
325は胴部片。線刻が施されるが内容は不明である。326は円板状の土製品。残存長12.2cm、厚さ1.3cmを測る。片面に1条の沈線が巡る。直径6mm程度の円孔が2か所に穿たれる。調整は両面ともナデのちヘラミガキである。蓋形土器とも考えられるが器種不明としておく。

#### 装飾品 (327～340)

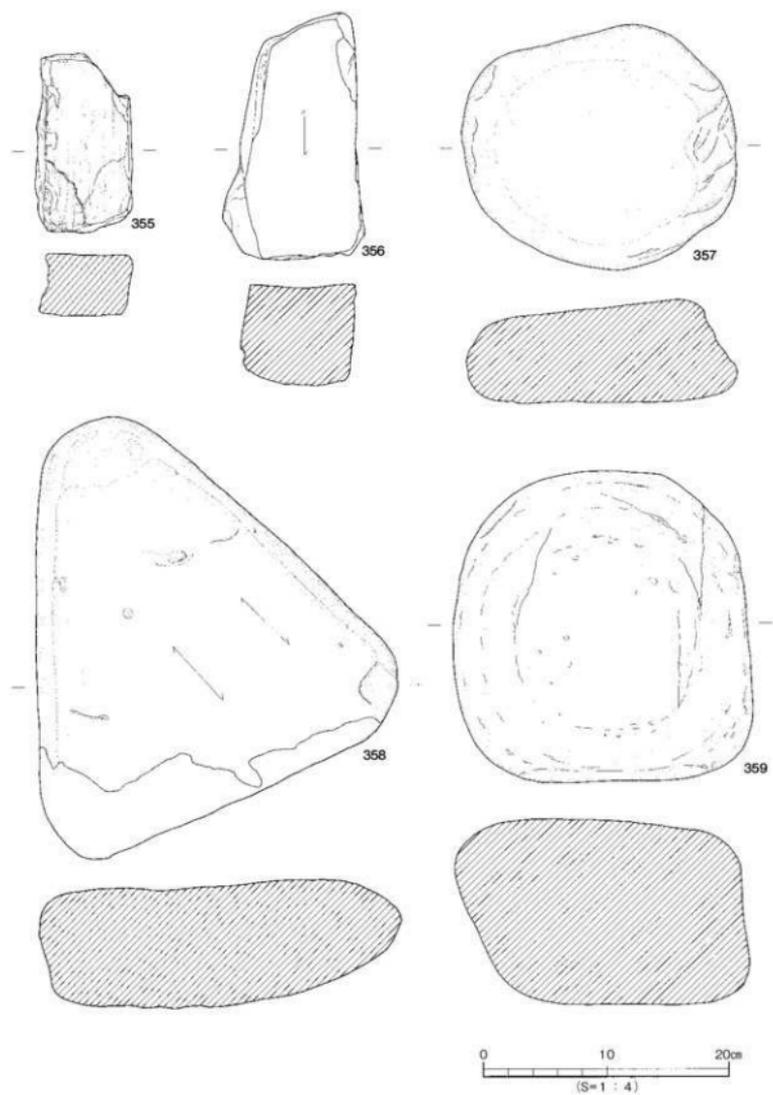
327は管玉。長さ6.9mm、直径3.1mmを測る。材質は碧玉製。328は水晶玉。高さ4.1mm、直径4.8mm、孔径は1.2mmを測る。329～340はガラス小玉。直径2.1～4.5mmを測る。色調は331・334が濃青色、他は水色を呈する。玉類の殆どは土洗いによって見つかったものである。

#### 鉄製品 (341～344)

341～344は鉄鏝。341は平造りの鏝身、342～344は莖部。



第41図 SB 101出土遺物実測図 (32)



第42図 SB101出土遺物実測図(33)

石製品 (345~359)

345・346は石鏃。材質は345が姫島産の黒曜石、346はサスカイトである。347・348・349は水晶の剥片である。炉跡近くの床面で出土したものである。350は石槍。材質はサスカイト。重さは19.94gを測る。351・352は石包丁。材質は緑色片岩。353~356は砥石である。材質は353・354・355が砂岩、356は頁岩である。357~359は台石。358は重さ14.4kgを測る。359は重さ15.9kgを測る。357の材質は花崗岩、358・359は砂岩である。

S B 101 炉跡出土遺物 (第43図、図版9)

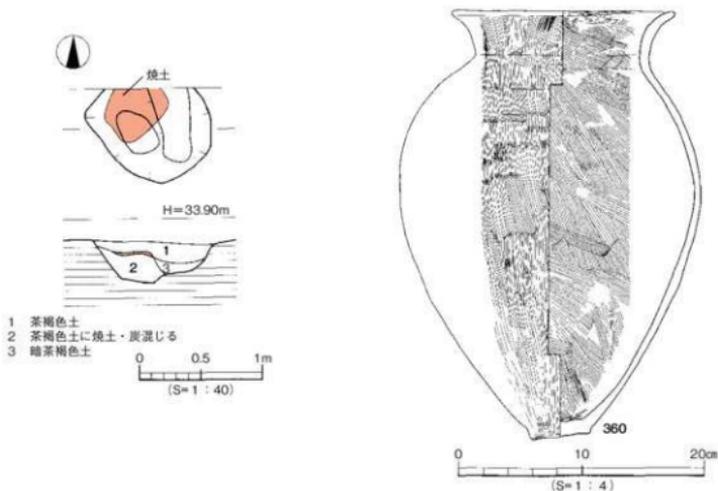
360は甕形土器。垂む胴部。頸部は短く直立し外反する口縁部。口縁端部は丸くおさめる。底部は突出する平底。調整は内外面ともハケ目調整である。

S B 101 内 S K 101 出土遺物 (第44図)

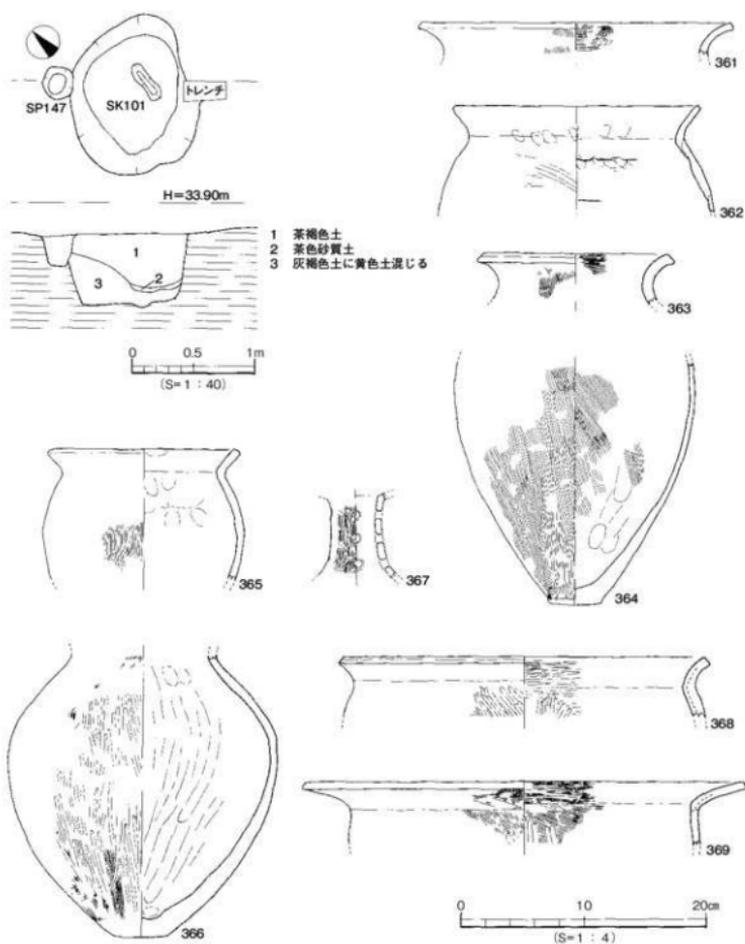
361・362・364・365は甕形土器。361は外反する口縁部。362は肩の張りが弱い。口縁部は外上方に立ち上がる。外面には煤が付着する。364は突出する小さな平底。外面胴部下半はハケ目調整である。365は短く外上方に開く口縁部。口縁端部は面をもつ。363・366は壺形土器。363は外反する口縁部。口縁端面はナデにより凹面をもつ。366は肩の張る胴部。底部は平底。外面の調整はハケ目のちヘラミガキが施される。内面は縦方向のナデが調整である。367は高坏の脚部。3段の円孔が穿たれる。外面の調整はヘラミガキが施される。368・369は鉢形土器。368の口縁部は短く屈曲する。口縁端部はナデくぼむ。胴部内外面にはヘラミガキが施される。369は大きく外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。

S B 101 内 S K 103 出土遺物 (第45図、図版17)

370は甕形土器。やや肩が張る胴部。口縁部は外反する。371は複合口縁壺。卵形の胴部。頸部は

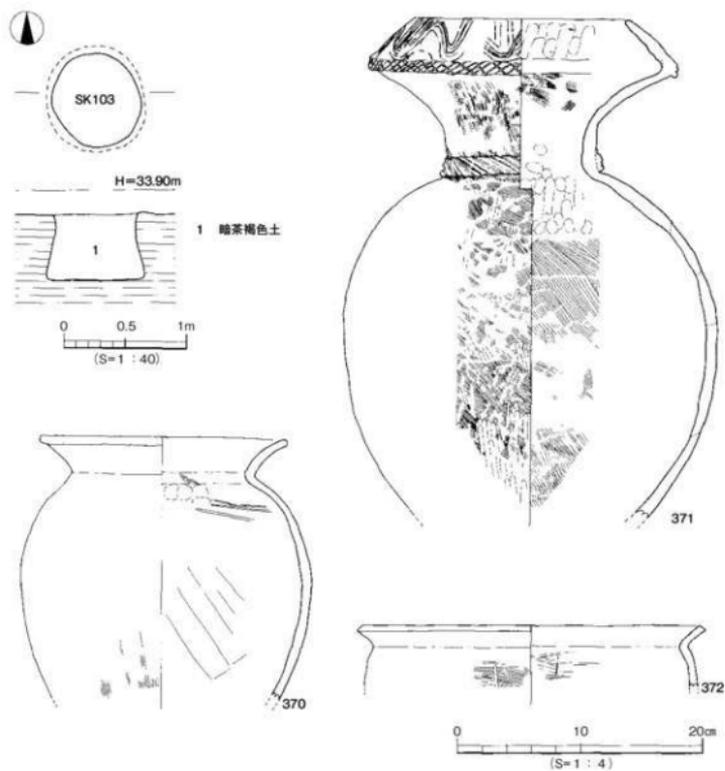


第43図 S B 101 炉跡測量図・出土遺物実測図

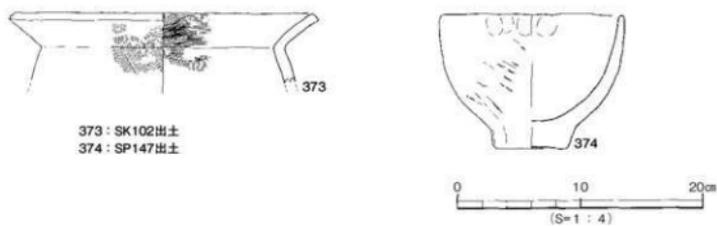


第44図 SB101内SK101測量図・出土物実測図

直立して立ち上がり大きく外反する。口縁接合部は面をもつ。口縁複合部は内傾してのびる。施文は口縁複合部に波状文とヘラ描きによる縦位の沈線文、口縁接合部に刻目文、頸部には刻目突帯が施される。調整は胴部外面をハケ目のちヘラミガキが施される。胴部内面はハケ目のちナデ調整である。頸部内面には指頭痕を顕著に残す。372は鉢形土器。短く外上方にのびる口縁部。



第45図 SB101内SK103測量図・出土遺物実測図



第46図 SB101内SK104・SP147出土遺物実測図

## SB101内SK102出土遺物（第46図）

373の口縁部は外上方に開く。口縁端部は面をもつ。調整は内外面ともハケ目調整である。

## SB101内SP147出土遺物（第46図、図版19）

374は直口口縁の鉢形土器。底部は突出するやや上げ底の底部である。

時期：SB101の時期は出土遺物より弥生時代後期後葉に比定される。

## (2) 溝

## SD101（第3図）

調査区の南側で検出した。北東～南西方向の溝である。溝の北東部は現代の削平によって消失している。検出規模は長さ3.8m、幅0.28～0.38m、深さ0.05mを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土色は暗褐色土の1層である。遺物は、土器の碎片しか出土せず時期比定できる遺物は出土していない。

時期：出土遺物は無いが、SB101の埋土色と同じことから同時期のものと考えられる。

## 2. 古代

古代の遺構には柱穴1基がある。

## 柱穴

## SP2048（第51図）

2区の南側中央部に位置する。平面形態は楕円形を呈する。検出規模は長軸36.0cm、短軸32.0cm、深さ22.0cmを測る。埋土は暗灰色土である。遺物は土師器が出土している。

## 出土遺物（第52図）

395は円盤高台の坏底部。底部の切り離しは糸切りである。

時期：出土遺物より10世紀と考えられる。

## 3. 中世

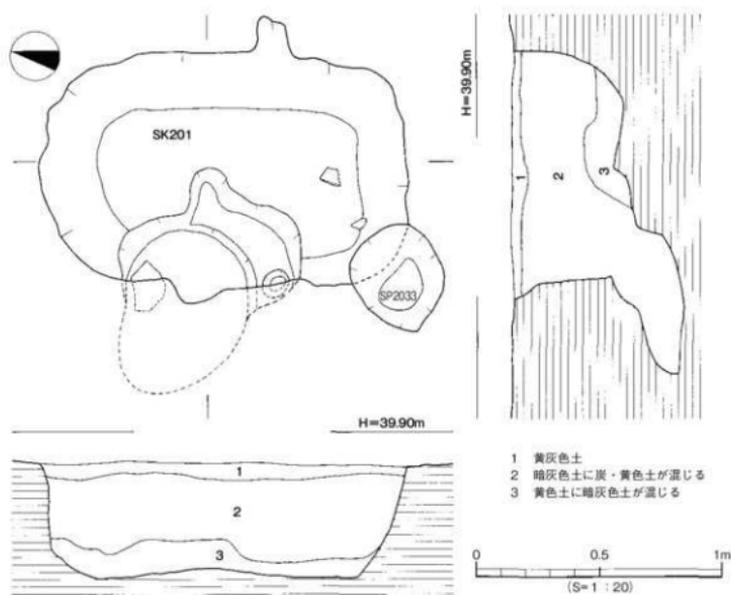
## (1) 土坑

## SK201（第47図、図版8）

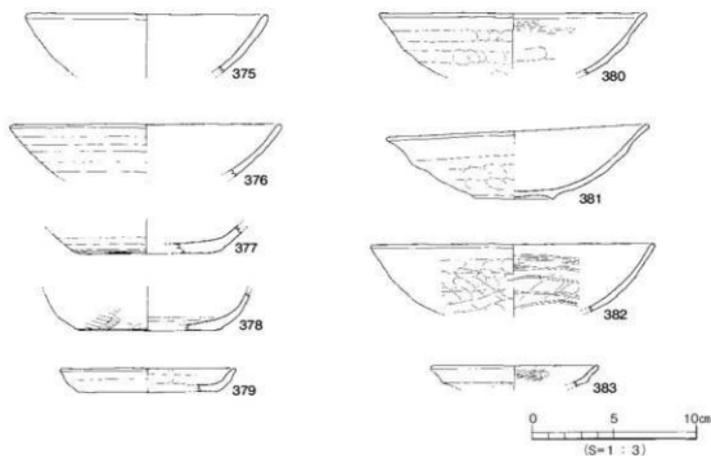
2区の北側中央部に位置する。平面形態は隅丸長方形を呈する。検出規模は長軸1.50m、短軸1.0m、深さ0.75mを測る。断面形態は逆台形状を呈する。土坑底の西側には、さらに西方向へ袋状となる掘り込みをもつ。埋土は3層に分かれる。上層より第1層黄灰色土、第2層暗灰色土に炭・黄色土が混じる、第3層黄色土に暗灰色土が混じるである。第2層と第3層の黄色土はAT火山灰である。土坑西側の袋状となる掘り込み部には第2層が堆積している。遺物は土師器、瓦器、須恵器が主に第2層中より出土している。

## 出土遺物（第48・49図、図版22）

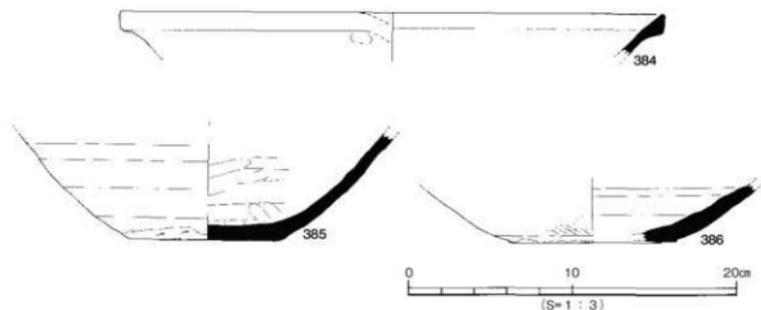
375～378は土師器坏。375は口縁部片。推定口径14.4cmを測る。調整は摩滅のため不明。376は口縁端部を丸くおさめる。377は底部片。底部の切り離しは回転糸切りである。378は底部片。底部の切り離しは摩滅のため不明である。379は土師器皿。推定口径10.4cm、器高1.4cmを測る。底部の調整は摩滅のため不明である。380～382は瓦器碗。380の外側は、指押さえの痕跡を顕著に残す。381は口径15.7cm、器高4.6cmを測る。高台は、低い断面三角形である。外面は指押さえの痕跡を顕著に残す。382は内面に間隔の広い圏線ミガキが施される。外面は指押さえの痕跡を顕著に残す。383は瓦器皿。



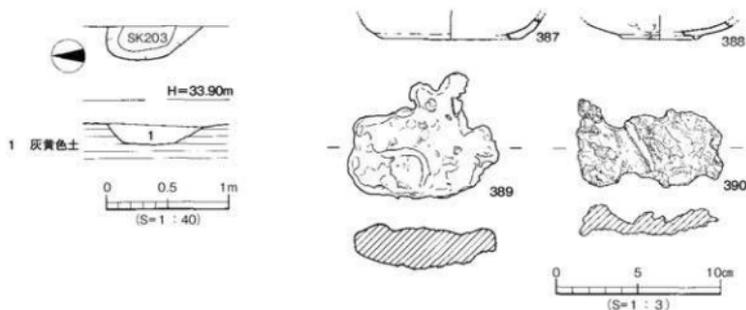
第47図 SK201測量図



第48図 SK201出土遺物実測図(1)



第49図 SK201出土遺物実測図(2)



第50図 SK203測量図・出土遺物実測図

推定口径10.0cm、残高1.3cmを測る。内面はヘラミガキが施される。384は東播系の片口鉢の口縁部。推定口径32.6cmを測る。口縁端部は僅かに下方に肥厚する。385・386は鉢の底部片。腰部は丸みをもって立ち上がる。

時期：出土遺物より13世紀。

SK203 (第50図)

2区の東側に位置する。東側は調査区外となり全容が不明である。検出規模は長軸0.78m、短軸0.28m、深さ0.16mを測る。埋土は灰黄色土の単一層である。遺物は土師器、瓦器、鉄滓が出土している。

出土遺物 (第50図)

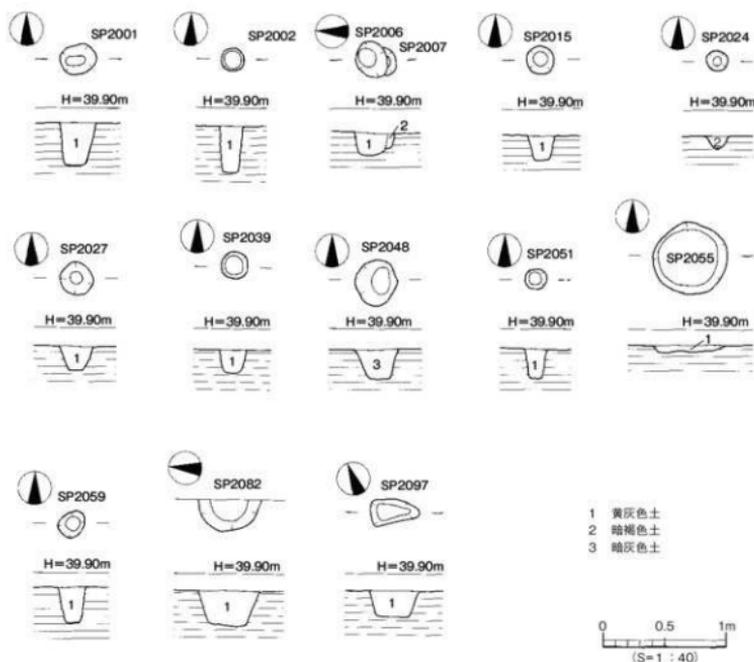
387は土師器杯の底部片。底部の切り離しは摩滅のため不明。388は瓦器碗の底部片である。高台は低い断面三角形を呈する。389・390は鉄滓。389は重さ179.91gを測る。390は重さ61.27gを測る。

時期：出土した瓦器碗の形態より13世紀前半。

(2) 柱穴

SP2001 (第51図)

平面形態は楕円形を呈する。検出規模は長軸29cm、短軸24cm、深さ35cmを測る。埋土は黄灰色土で



第51図 SP測量図

ある。遺物は埋土より青磁が出土した。

出土遺物 (第52図)

406は龍泉窯系の青磁碗。鎗蓮弁文が施される。

時期：出土遺物より13世紀前半。

SP2002 (第51図)

平面形態は円形を呈する。検出規模は直径19cm、深さ37cmを測る。埋土は黄灰色土である。遺物は埋土より鉄滓が出土した。

出土遺物 (第52図)

405は重量654.58gを測る。

時期：鉄滓を出土したSK201と埋土色が同一の事から13世紀頃と考えられる。

SP2006 (第51図)

平面形態は楕円形を呈する。検出規模は長軸29cm、短軸24cm、深さ19cmを測る。埋土は黄灰色土である。遺物は埋土より土師器が出土した。

出土遺物 (第52図)

392は土師器の皿。器面は摩滅しているため調整、切り離しも不明である。

時期：埋土色が黄灰色土を呈することから13世紀頃と考えられる。

S P2007 (第51図)

S P2006に切られる。検出規模は深さ12cmを測る。埋土は暗褐色土である。

出土遺物 (第52図)

407は1/4の遺存である。「政和通寶」初鑄年は政和元年(1111年)。

時期：埋土が暗褐色土を呈することから13世紀頃と考えられる。

S P2015 (第51図)

平面形態は円形を呈する。検出規模は直径23cm、深さ21cmを測る。埋土は黄灰色土である。遺物は弥生土器片と考えられる土器が1点出土したが、遺構の時期を示す遺物ではない。

出土遺物 (第52図)

400は器種不明品。柄杓形土器の柄部、もしくは角付の支脚とも考えられる。

時期：埋土色が黄灰色土を呈することから13世紀頃と考えられる。

S P2024 (第51図)

平面形態は円形を呈する。検出規模は直径18cm、深さ9cmを測る。埋土は暗褐色土である。

出土遺物 (第52図)

391は土師器の皿。底部の切り離しは摩滅のため不明。

時期：埋土色が暗褐色土を呈することから13世紀頃と考えられる。

S P2027 (第51図)

平面形態は円形を呈する。検出規模は直径27cm、深さ20cmを測る。埋土は黄灰色土である。

出土遺物 (第52図)

399は瓦器椀。口縁端部は丸くおさめる。

時期：出土遺物より13世紀前半。

S P2039 (第51図)

平面形態は円形を呈する。検出規模は直径23cm、深さ18cmを測る。埋土は黄灰色土である。遺物は出土していない。

時期：埋土色が黄灰色土を呈することから13世紀頃と考えられる。

S P2051 (第51図)

平面形態は円形を呈する。検出規模は直径17cm、深さ35cmを測る。埋土は黄灰色土である。

出土遺物 (第52図)

394は土師器環。底部の切り離しは回転糸切りである。

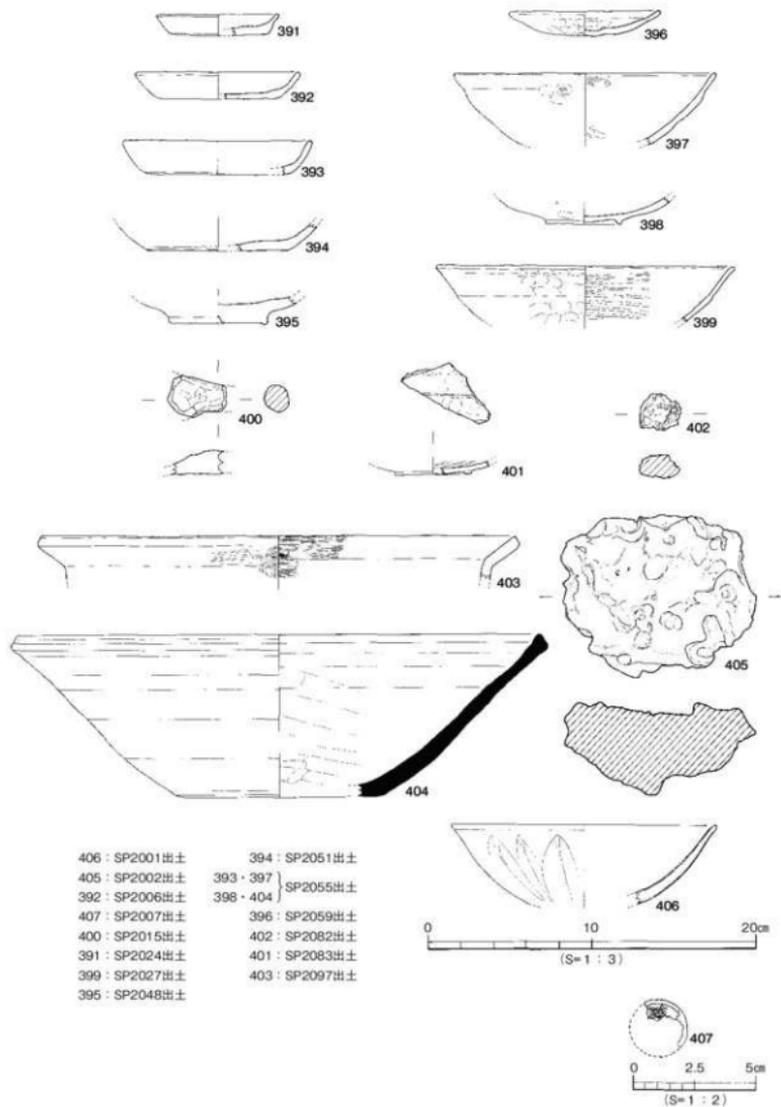
時期：出土遺物より13世紀。

S P2055 (第51図)

平面形態は円形を呈する。検出規模は直径60cm、深さ7cmを測る。埋土は黄灰色土である。遺物は土師器、瓦器、須恵器が出土した。

出土遺物 (第52図)

393は土師器の皿。397は瓦器椀。底部は欠失。内面の調整は摩滅のため不明。398は瓦器椀の底部



第52図 SP出土遺物実測図

片。高台は低い。404は東播系こね鉢。

時期：出土遺物より13世紀。

S P 2059 (第51図)

平面形態は円形を呈する。検出規模は直径22cm、深さ35cmを測る。埋土は黄灰色土である。

出土遺物 (第52図)

396は瓦器皿。口径8.8cm、器高1.5cmを測る。

時期：出土遺物より13世紀。

S P 2082 (第51図)

一部が調査地外のため全容は不明。検出規模は長軸50cm、深さ27cmを測る。

出土遺物 (第52図)

402は鉄滓である。重量10.67gを測る。

時期：埋土色が黄灰色土を呈することから13世紀頃と考えられる。

S P 2097 (第51図)

平面形は不整形である。検出規模は長軸39cm、短軸19cm、深さ23cmを測る。

出土遺物 (第52図)

403は土鍋の口縁部。口縁端部は面をもつ。

時期：出土遺物より13世紀。

## 第4節 小結

東本遺跡9次調査では、弥生時代～中世の遺構や遺物を確認した。特に注目される遺構は弥生時代の堅穴住居S B 101である。S B 101の平面形態は円形を呈し、推定直径が10.4mを測る。松山平野内では弥生時代の堅穴住居としては大型のものである。この堅穴住居は、周壁溝や柱穴の多さから2回以上の建て替えが行われ、順次規模が大きくなったものと想定される。このほか住居内埋土からは多量の土器が出土した。器種では甕、壺、鉢、高坏、器台といったものが多く、支脚形土器が少ない。これらの土器は土層観察により住居廃絶後に投げ込まれた物と考えられる。遺物は損傷のない完形品がなく、完形に近い土器はすべて破片の接合・復元作業によって複製されたものである。今回の調査では住居廃絶時の遺物と、後に廃棄された多量の遺物とを層位的に分けて取り上げる事ができなかった事は反省すべきところである。出土遺物は全体的にみると弥生時代中期後葉～後期中葉や後期末葉の土器相を示すものが若干出土しているがその殆どは弥生時代後期後葉に比定されるものである。住居内の炉跡や土坑から出土した遺物も後期後葉に比定されるものであった。このような廃棄行為は東本遺跡内や周辺の遺跡においても知られており新たな追加資料となるものである。

古代では柱穴より平安期の土器が出土している。また、中世では土坑や柱穴が見つかった。周辺域の調査では、古代の遺構は少ないものの10世紀～11世紀の遺物が散見されるほか、13世紀～14世紀にかけての遺構・遺物が見つかったことから、古代末～中世の集落域が今回の調査地にも及ぶ事が確認できた。

## 第4章

# 東 本 遺 跡

- 10次調査 -



## 第4章 東本遺跡10次調査

### 第1節 調査の経緯

#### 1. 調査に至る経緯（第1図）

調査地は松山市埋蔵文化財包蔵地【No.83 枝松遺物包含地】内に所在する。調査地の東側は、東本遺跡9次調査に接し、北側は東本遺跡11次調査に接する。試掘調査は平成19年8月6日に行なった。試掘調査の結果、調査地の東側の半分に遺構・遺物が検出され、弥生時代～中世の集落関連遺跡があることを確認した。この結果を受け、松山市都市整備部道路建設課と（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋蔵文化財センター）は協議を行い、工事に伴って消失する遺跡に対し記録保存のための発掘調査を実施する事となった。発掘調査は弥生時代～中世の集落構造の解明を主目的とし、埋蔵文化財センターが主体となって2007（平成19）年9月3日より本格調査を実施した。

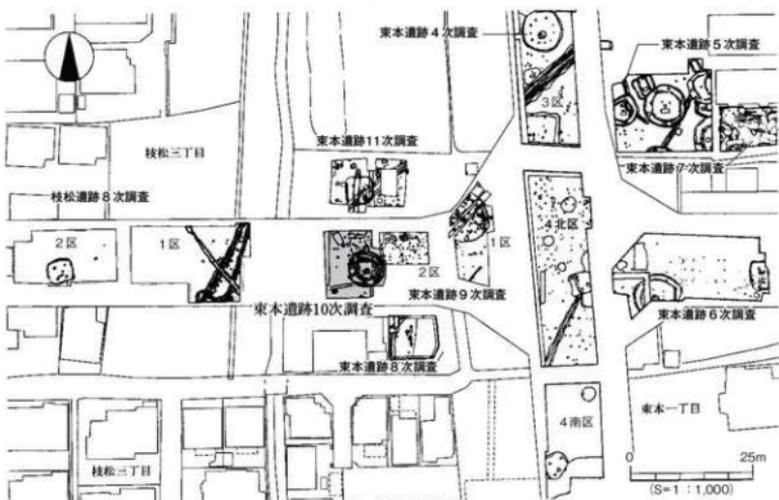
#### 2. 調査の経過

野外調査期間は、平成19年9月3日～同年10月15日である。以下、調査行程を略記する。

平成19年9月3日 発掘用具、機材の準備を行う。調査区に縄張り等の安全対策を行い重機による掘削を開始する。同月5日まで重機による掘削・運搬を行う。

9月6日 人力によって遺構検出作業を行う。遺構検出に伴って東壁・西壁に土層観察用のトレンチ掘削作業を行う。古代～中世の遺構配置図を作成する。  
遺構検出状況の写真撮影を行う。

9月7日 中世遺構の掘削を開始する。



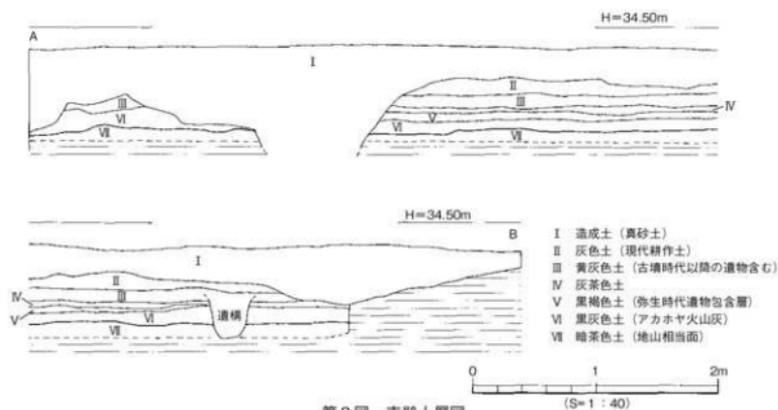
第1図 調査地位位置図

- 9月11日 国土座標軸（世界測地第4系）の杭打ちを行う。中世遺構の測量作業を順次行い、中世遺構の調査を終了する。
- 9月13日 弥生時代包含層の掘り下げを開始する。弥生時代の竪穴式住居SB1の平面プラン検出作業を行う。
- 9月26日 高所作業者により遺構検出状況の写真撮影を行う。SB1の掘削を行う。
- 10月1日 弥生時代の土坑SK3の精査を行い、測量図を作成する。
- 10月2日 SB1内の遺物検出作業を行う。床面近くより鉄鏝が出土する。
- 10月5日 SB1（円形）完掘状況写真撮影を行う。撮影後、貼り床、ベッド部の盛り土の撤去作業を開始する。
- 10月8日 貼り床、ベッド部から新たな周壁溝（方形）を検出する。検出写真を撮影後、掘削を行う。
- 10月12日 すべての測量作業を終了し、重機による埋め戻しを開始する。
- 10月15日 重機による埋め戻しを完了し調査を終了する。

## 第2節 層位（第2図）

調査区は、建築物の建設や撤去に伴う現代坑が多くの箇所で見られた。このため調査区の東壁、北壁、西壁では現代の攪乱土層が大部分を占めている。調査地周辺は、約6,300年前に噴出・降下した鬼界アカホヤ火山灰が広範に確認されている地域である。本調査地においてもアカホヤ火山灰を確認した。

調査区の基本層序は上から第Ⅰ層造成土、第Ⅱ層灰色土、第Ⅲ層黄灰色土、第Ⅳ層灰茶色土、第Ⅴ層黒褐色土、第Ⅵ層黒灰色土、第Ⅶ層暗茶色土である。第Ⅱ層は、現代の耕作土である。第Ⅲ層は古墳時代～中世の遺物を包含する。第Ⅴ層は弥生時代の遺物包含層である。上面で中世の遺構を検出した。第Ⅵ層はアカホヤ火山灰である。上面で弥生時代の遺構を検出した。第Ⅶ層以下は、いわゆる地

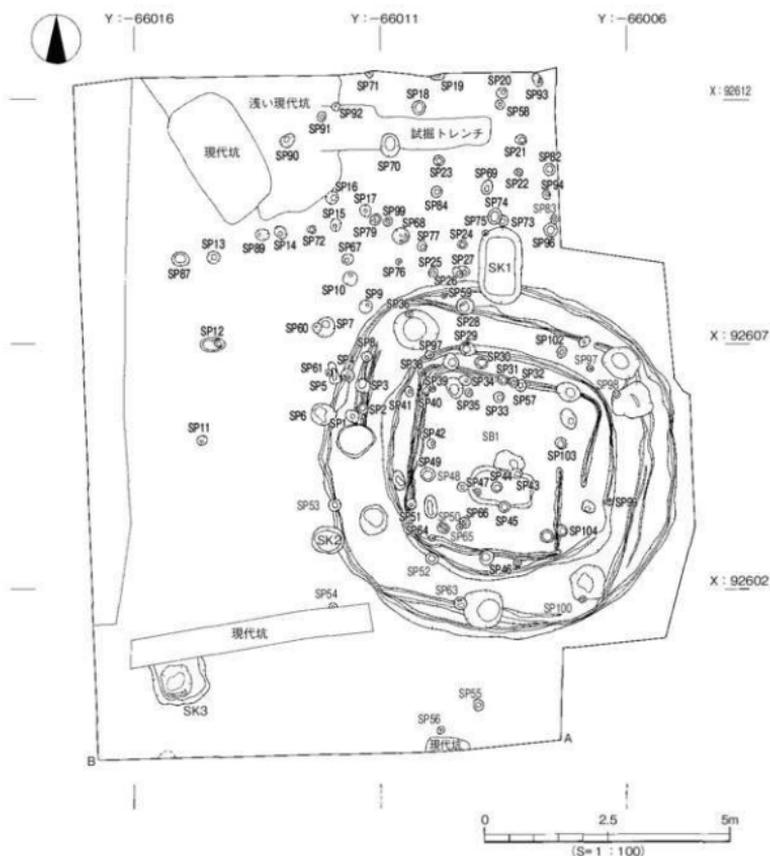


第2図 南壁土層図

山と呼ばれる層である。遺構の検出は中世の遺構を第V層上面で行い、弥生時代の遺構は第VI層上面で行った。

### 第3節 遺構と遺物 (第3図)

検出した主な遺構は竪穴式住居(SB)1棟、土坑(SK)3基、柱穴(SP)104基である。出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、青磁、石器が出土している。以下、時代毎に主な遺構について記述する。



第3図 遺構配置図

## 1. 弥生時代

弥生時代の遺構には竪穴住居1棟（SB1）、土坑1基（SK3）がある。

### (1) 竪穴住居

#### SB1（第4～7図）

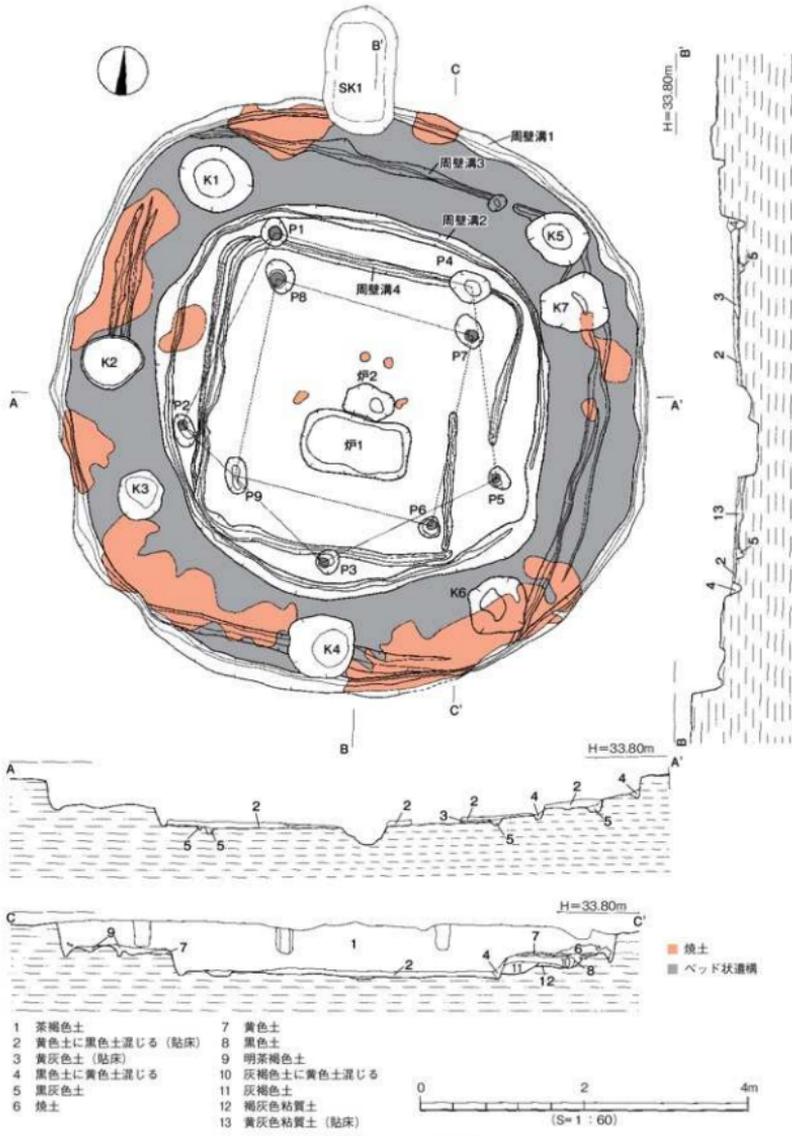
建て替えが想定される竪穴住居である。調査区の東側、第Ⅵ層上面で検出した。平面形態は円形を呈する。検出規模は直径7.60m、壁高0.29～0.37m、検出面から床面までの深さは最大で0.60mを測る。住居の内部施設として炉を二カ所もつほか、ベッド状遺構の付設、主柱穴、貼り床、周壁溝、土坑がある。

ベッド状遺構は幅0.90～1.16m、床面からの高さは0.18～0.23mを測る。地山（第Ⅵ層）の削りだしと盛り土によって成形されている。ベッド状遺構の上面には、壁体に沿って部分的に厚さ2～7cmの焼土が堆積している。

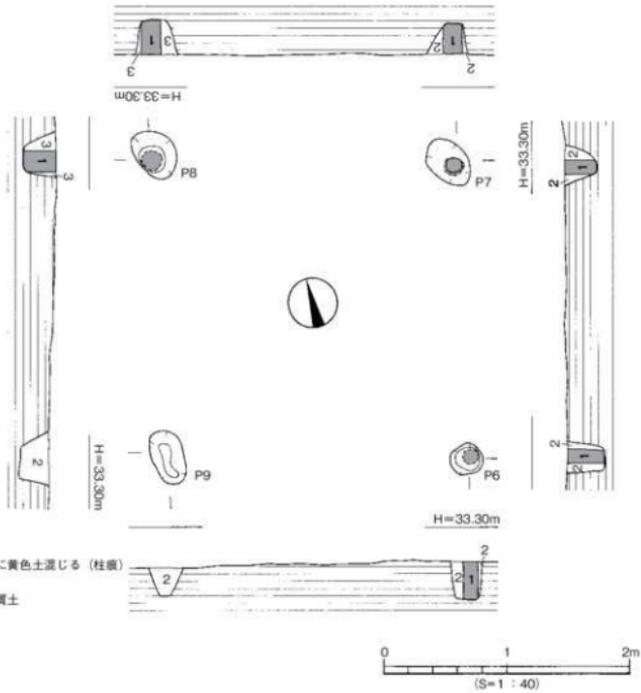
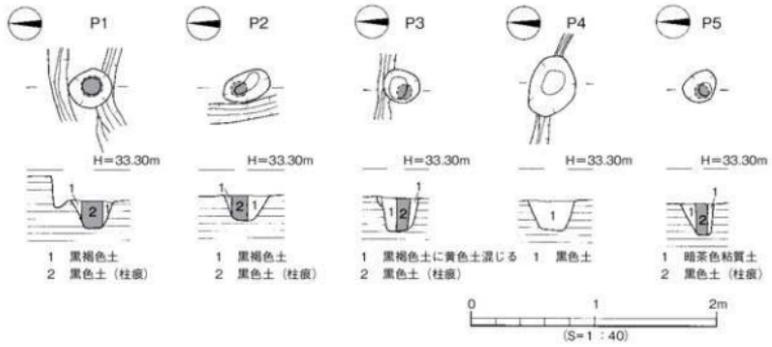
主柱穴は、P1～P9までの9基を検出した。検出状況からは新旧関係が認められ、柱の配列が五角形のもの、四角形のものに分けられる。新しいものは住居貼床の上面で検出した配列が五角形のP1～P5の5基がある。P1は平面形が円形を呈する。検出規模は直径35cm、深さ22cmを測る。埋土色は黒褐色土である。柱痕跡は直径16cm、深さ21cmを測る。埋土色は黒色土である。P2は平面形が楕円形を呈する。検出規模は長軸39cm、短軸22cm、深さ20cmを測る。埋土色は黒褐色土である。柱痕跡は直径13cmを測る。埋土色は黒色土である。P3は平面形が円形を呈する。検出規模は直径28cm、深さ26cmを測る。埋土色は黒褐色土に黄色土混じるである。柱痕跡は直径13cmを測る。埋土色は黒色土である。P4は平面形が楕円形を呈する。検出規模は長軸50cm、短軸37cm、深さ23cmを測る。埋土色は黒色土である。柱痕跡は検出していない。P5は平面形が楕円形を呈する。検出規模は長軸30cm、短軸25cm、深さ25cmを測る。埋土色は暗茶色粘質土である。柱痕跡は直径12cmを測る。埋土は黒色土である。古いものは貼り床を撤去した後に検出した配列が四角形のP6～P9の4基である。P6は平面形が円形を呈する。検出規模は直径26cm、深さ31cmを測る。埋土色は暗灰色土である。柱痕跡は直径12cmを測る。埋土色は黒灰色土に黄色土混じるである。P7は平面形が楕円形を呈する。検出規模は長軸45cm、短軸28cm、深さ26cmを測る。埋土色は暗灰色土である。柱痕跡は直径15cmを測る。埋土色は黒灰色土に黄色土混じるである。P8は平面形が楕円形を呈する。検出規模は長軸43cm、短軸31cm、深さ26cmを測る。埋土色は黄灰色砂質土である。柱痕跡は直径17cmを測る。埋土色は黒灰色土に黄色土混じるである。P9は平面形が楕円形を呈する。検出規模は長軸45cm、短軸25cm、深さ22cmを測る。埋土色は暗灰色土である。柱痕跡は検出していない。

炉跡（第6図）は、貼床上面で検出した。住居中央部のやや南側に位置する。南側の土坑（炉1）と北側の土坑（炉2）である。炉1は平面形が隅丸長方形を呈する。検出規模は長軸1.30m、短軸0.68m、深さ0.19mを測る。炉内には炭・焼土が遺存する。炉底の西側半分程度は被熱のため硬化している。炉2の平面形は不整形である。検出規模は長軸0.64m、短軸0.38m、深さ0.22mを測る。炉内には炭・焼土が遺存する。炉1の様に被熱のため硬化した面はみられなかった。

周壁溝は、4条を検出した。検出状況から平面形態の相違と新旧関係が認められた。平面形態は円形（周壁溝1・周壁溝2）と方形（周壁溝3・周壁溝4）に分けられ、円形の方が新しく、方形のものが古い。円形の周壁溝1・2は、ベッド状遺構を挟むように設けられる。周壁溝1は全周し、周壁溝2は東側で一部が浅くなる。規模は幅6～26cm、深さ2～8cmを測る。方形の周壁溝3はベッド



第4図 SB1測量図



第5図 SB1柱穴測量図

状遺構の上部や盛土を撤去したのち検出し、周壁溝4は貼床を撤去したのち検出した。周壁溝3は部分的に途切れる。周壁溝4は全周するが東側で接する事なく互い違いとなり、周壁溝2、柱穴P1、P3、P4に切られる。規模は幅5～15cm、深さ4～6cmを測る。

貼床は、黄色土（AT火山灰）に黒色土が混じった土や黄灰色土などである。ほぼ全面に認められる。厚さ1～8cmを測る。

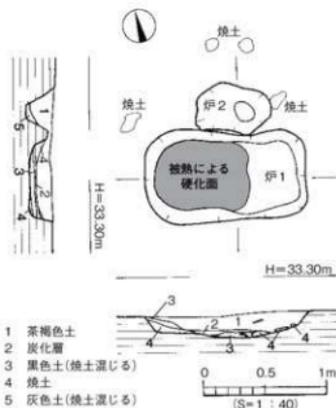
土坑は、ベッド状遺構の上面で7基（K1～K7）を検出した。土坑どうしの切り合いはなく、周壁溝3を切る土坑が5基認められた。埋土に焼土を含む土坑にK1、K2、K4、K6、K7がある。

K1の平面形態は楕円形を呈する。検出規模は長軸92cm、短軸80cm、深さ70cmを測る。埋土は黒褐色土である。K2の平面形態は楕円形を呈する。検出規模は長軸76cm、短軸65cm、深さ64cmを測る。埋土は黒褐色土である。K3の平面形態は円形を呈する。検出規模は直径59cm、深さ54cmを測る。埋土は黒褐色土である。K4の平面形態は不整形を呈する。検出規模は直径84cm、深さ65cmを測る。埋土は黒褐色土である。K5の平面形態は楕円形を呈する。検出規模は長軸73cm、短軸61cm、深さ70cmを測る。埋土は黒褐色土である。K6の平面形態は不整形を呈する。検出規模は直径70cm、深さ74cmを測る。埋土は上層から焼土、黒褐色土（焼土混じり）、黒色土（炭混じり）である。K7の平面形態は不整形を呈する。断面形はすり鉢状となる。検出規模は長軸81cm、短軸68cm、深さ40cmを測る。埋土は上層から黄色土（固くしまる）、茶色粘質土（黄色土+黒色土混じる）、褐灰色土（黄色土混じる）の3層である。遺物は住居内埋土、柱穴、灰跡、土坑から弥生土器、石器、鉄器などが出土している。

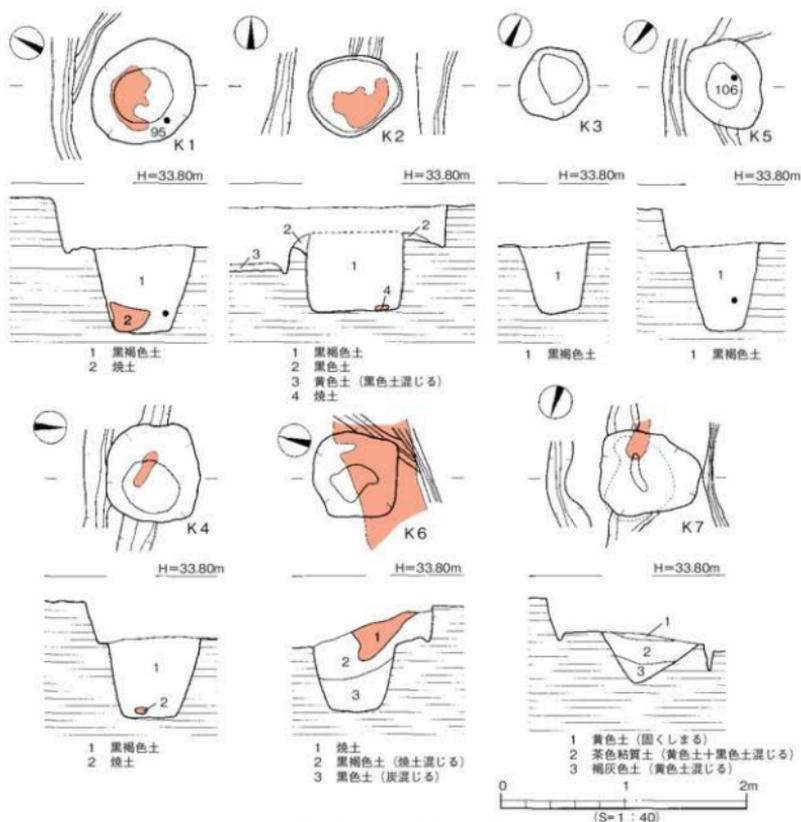
#### 出土遺物（第8～14図、図版9・10）

1～91は住居内埋土より出土した遺物である。甕、壺、鉢、高坏、器台、支脚、石器、鉄器がある。甕形土器（1～21）

1は口縁端部が上下に肥厚する。口縁端面はナデにより凹面となる。2は口縁端部に凹線文が施される。3～6は外反する口縁部。7は短く外方に開く口縁部。8・9は内面に稜をもって屈曲し外方に開く口縁部。10は胴部外面にタタキ目を残す。内面はハケ目のちナデ調整である。11は胴部外面にタタキ目を残す。内面はハケ目調整である。12は復元完形品。口径10.8cm、器高13.8cmを測る。口縁部は外上方に立ち上がる。胴部は著しく歪んでいる。底部は丸みをもった不安定な平底である。外面の調整はタタキのちハケ目調整である。内面はわずかにハケ目を残すナデ調整である。13は胴部外面にタタキ目を残す。14・15は口縁部片。15は内外面ともハケ目調整である。16は平底の底部。17は推定口径8.7cmを測る。外反する頸部から外傾気味に直立する口縁部である。吉備地域からの搬入品と考えられる。18は外面にタタキ目を残す。19は丸い小さな底部。外面にタタキ目を残す。20の底部には木葉文をもつ。21は小さな平底の底部。胴部外面にタタキ目を残す。



第6図 SB1炉1・炉2測量図



第7図 SB1内土坑測量図

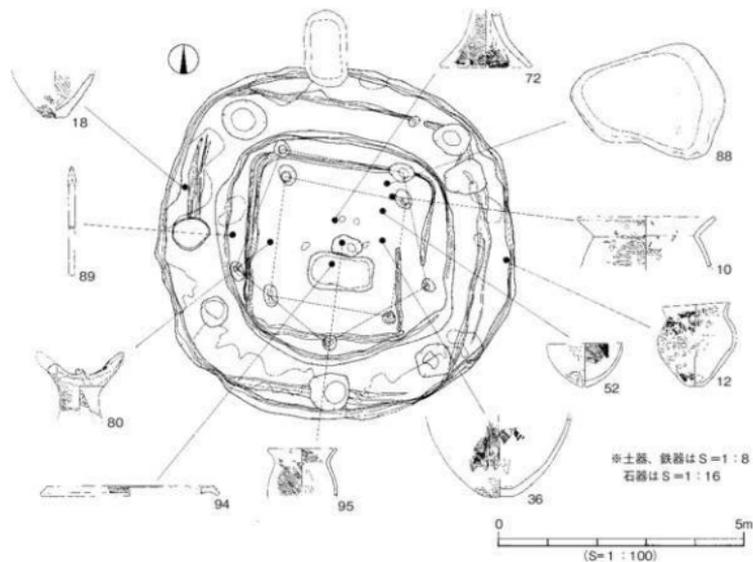
壺形土器 (22~36)

22の頸部は短く直立し、口縁部は大きく外反する。口縁端部はナデにより凹面となる。23は大きく外反する口縁部。24は大きく開く口縁部。口縁端面は下方に拡張し、押圧による斜格子文が施される。25は緩やかに外反する口縁部。26・27は長頸壺の口縁部片。26は内湾気味に立ち上がる口縁部。櫛描文が施される。調整は内外面ともヘラミガキである。27は外上方に開く口縁部。櫛描文と山形文が施される。調整は外面をヘラミガキ、内面はハケ目調整である。28~34は複合口縁壺。28の口縁接合部には斜格子文と半裁竹管文が施される。29の複合口縁部は内傾して上方に立ち上がる。口縁部に波状文が施される。調整は内外面ともヘラミガキが施される。30は外反する頸部である。調整は摩滅のため不明。31の複合口縁部は短く上方に立ち上がる。32・33は内傾して立ち上がる複合口縁部。34は直立して立ち上がる複合口縁部である。頸部も直立する。35は頸部に沈線文とヘラ状

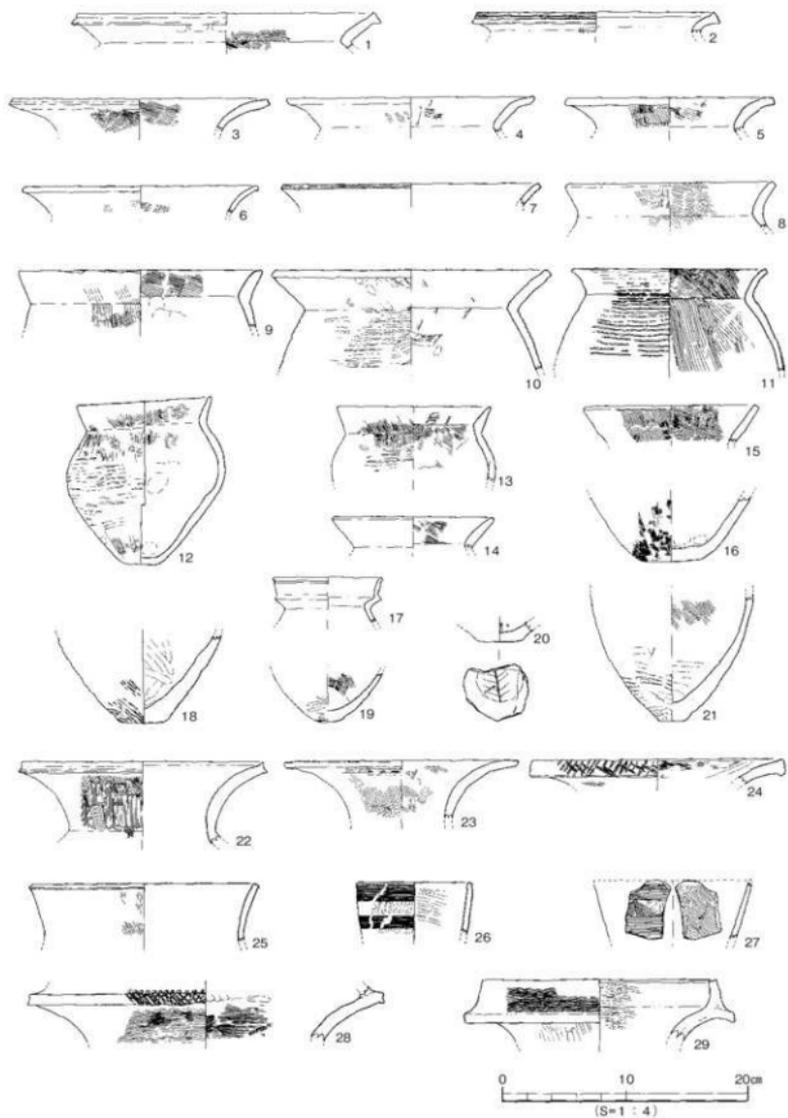
工具による刺突文が施される。36は丸みをもった平底の底部である。調整はタタキのちハケ目調整である。胴部下半にタタキ目を残す。

#### 鉢形土器 (37~66)

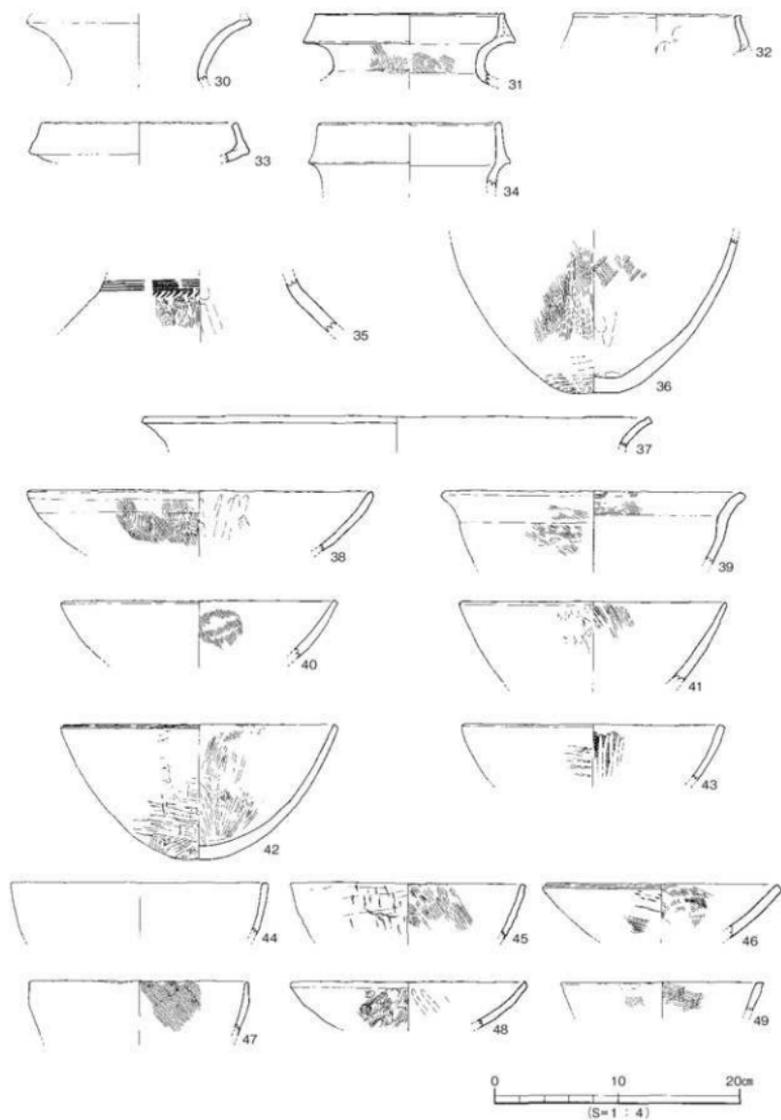
鉢形土器には大型品、中型品、小型品がある。形態は折り曲げ口縁 (37・39・55) のものと直口口縁 (38・40~54・56) がある。37は折り曲げ口縁の口縁部片。推定口径40.8cmを測る大型品である。38の調整は外面をハケ目のちナデ調整、内面はヘラミガキである。39の口縁部は短く外反する。内面の調整はナデ調整である。40の調整は外面をナデ調整、内面はハケ目のちナデ調整である。41の調整は外面をタタキのちナデ調整、内面はハケ目のちナデ調整である。42は復元完形品。口径21.8cm、器高11.1cmを測る。内面の調整はハケ目のちナデ調整と粗いヘラミガキが施される。外面にはタタキ目を残す。43の外面にはタタキ目を残し、内面はハケ目のちヘラミガキが施される。44は内外面ともナデ調整である。45の調整は外面をタタキのちナデ調整、内面はハケ目のちナデ調整である。46の口縁端部は凹線が巡る。外面の調整はタタキのちナデ調整、内面はハケ目のちナデ調整である。47の口縁端部は丸くおさめる。外面の調整はナデ調整、内面はハケ目のちナデ調整である。48の口縁端部は尖り気味である。外面の調整はハケ目のちナデ調整、内面はヘラミガキが施される。外面には指頭痕が顕著に残る。49は内外面ともハケ目のちナデ調整である。50の外面の調整はタタキのちナデ調整、内面はハケ目のち粗いヘラミガキが施される。51は口径11.5cm、器高7.5cmを測る。底部は丸底である。外面の調整はタタキのちナデ調整、内面はハケ目のちナデ調整である。口縁部には指頭痕を顕著に残す。52は口径11.9cm、器高7.1cmを測る。口縁端部は丸くおさめる。底部は丸底である。



第8図 SB1 遺物出土状況図



第9図 SB1出土遺物実測図(1)



第10図 SB 1 出土遺物実測図 (2)

外面の調整はタタキのちナデ調整、内面は胴部上半をハケ目調整、胴下半はナデ調整である。53は口径11.5cm、器高5.4cmを測る。外面の調整はタタキのちナデ調整、内面はハケ目のちナデ調整である。54は内外面ともハケ目のちナデ調整である。55の口縁部は短く外上方に開く。外面の調整はタタキのちナデ調整、内面はハケ目のちナデ調整である。56は口径9.1cm、器高5.1cmを測る。口縁端部は丸くおさめる。外面の調整はタタキのちナデ調整、内面はハケ目のちナデ調整である。57～66は胴部～底部片である。57は突出する底部。外面の調整はタタキのちナデ調整、内面は工具によるナデ調整である。58はやや上げ底の小さな底部である。59は突出する平底の底部である。外面にタタキ目を残す。60は丸底の底部である。外面の調整はタタキのちハケ目調整、内面はハケ目のちナデ調整である。内外面に指頭痕を残す。61は丸底の底部である。外面の調整はタタキのちナデ調整、内面はナデ調整である。62は丸く尖る底部である。外面の調整はタタキのちハケ目調整、内面はハケ目のちナデ調整である。63はやや突出する丸い小さな底部である。外面の調整はタタキのちナデ調整、内面はハケ目のちナデ調整である。64は丸底の底部。外面にタタキ目を残す。65は丸い底部。外面にタタキ目を残す。66は外面にタタキ目を残す。

## 高坏形土器（67～72）

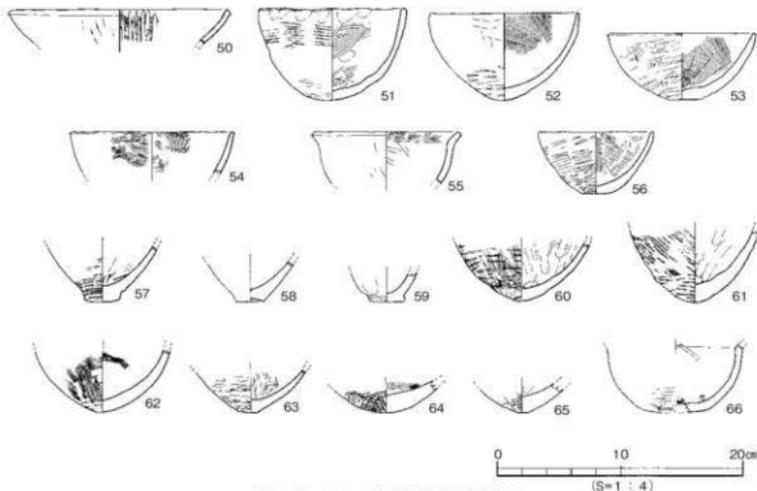
67～69は外反する口縁部片。外面はヘラミガキが施される。70は坏の有段部。71・72は脚柱部。72は緩やかに広がる裾部である。外面の調整はハケ目のちナデ調整である。

## 器台形土器（73～79）

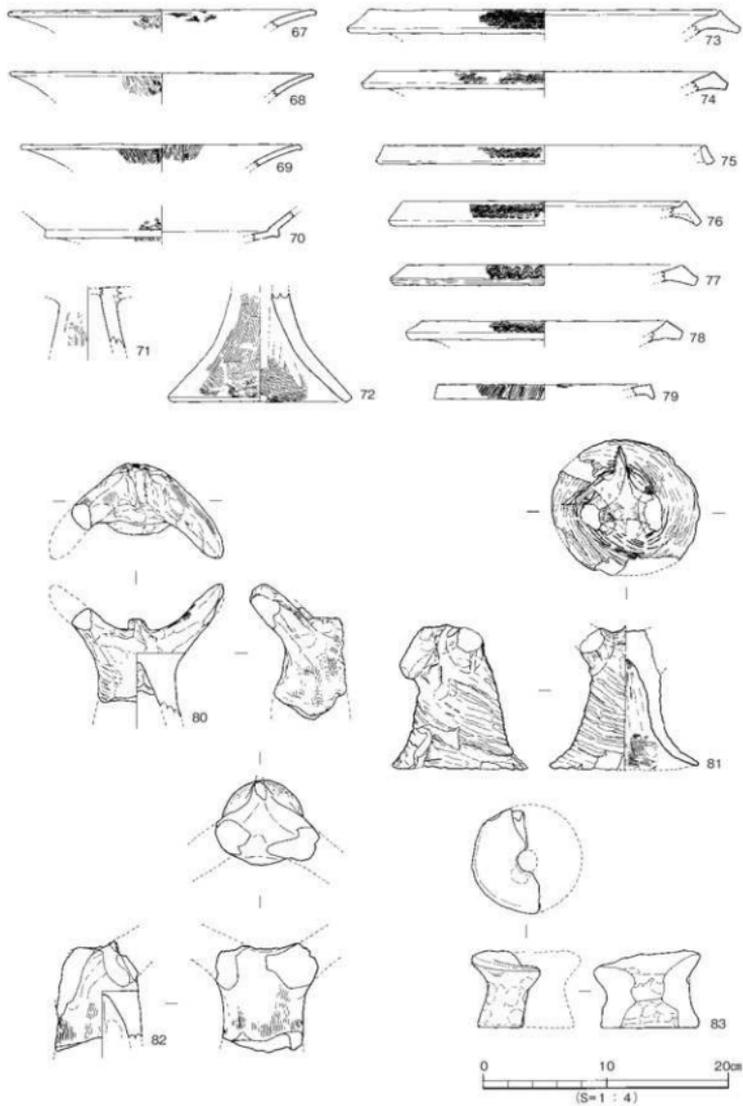
73～79は受部片。口縁端部は拡張され、73～78には波状文、79は斜位のヘラ描沈線文が施される。

## 支脚形土器（80～83）

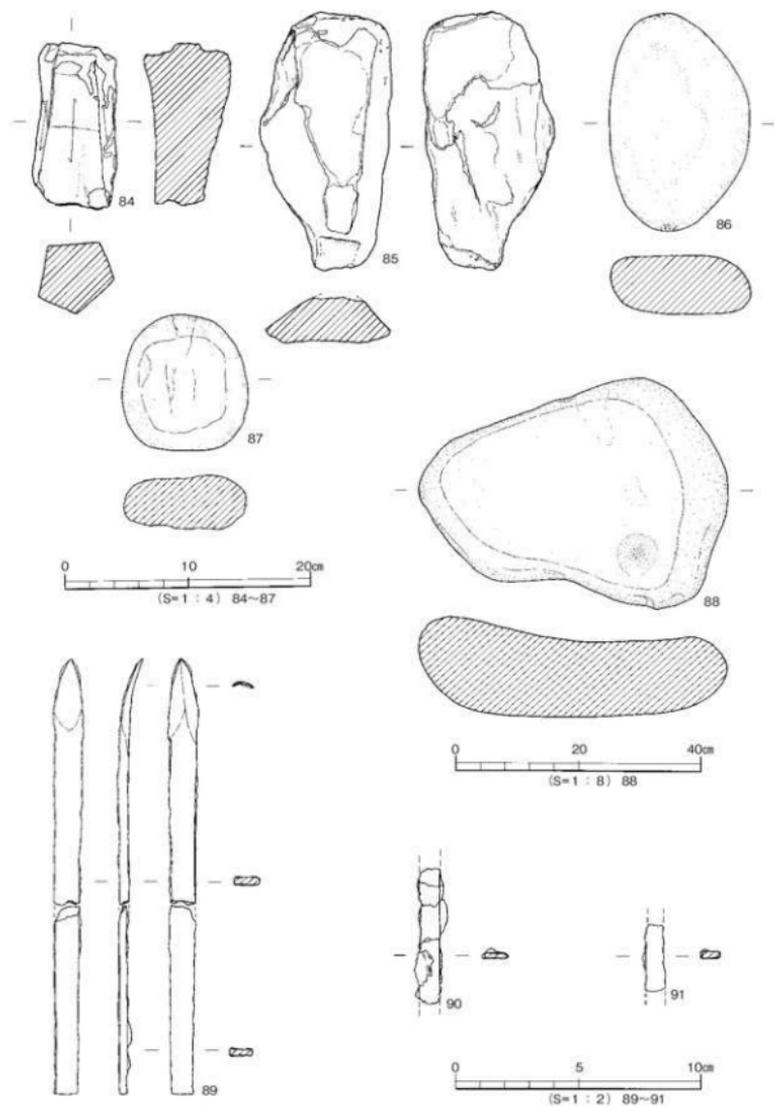
80～82は角状の突起が付く支脚である。背面にも鐮状の突起が付く。80・81はタタキ目を残す。83は中空の支脚である。受部は傾斜をもつ。



第11図 SB1出土遺物実測図(3)



第12図 SB1出土遺物実測図(4)



第13図 SB1出土遺物実測図(5)

石器 (84~88)

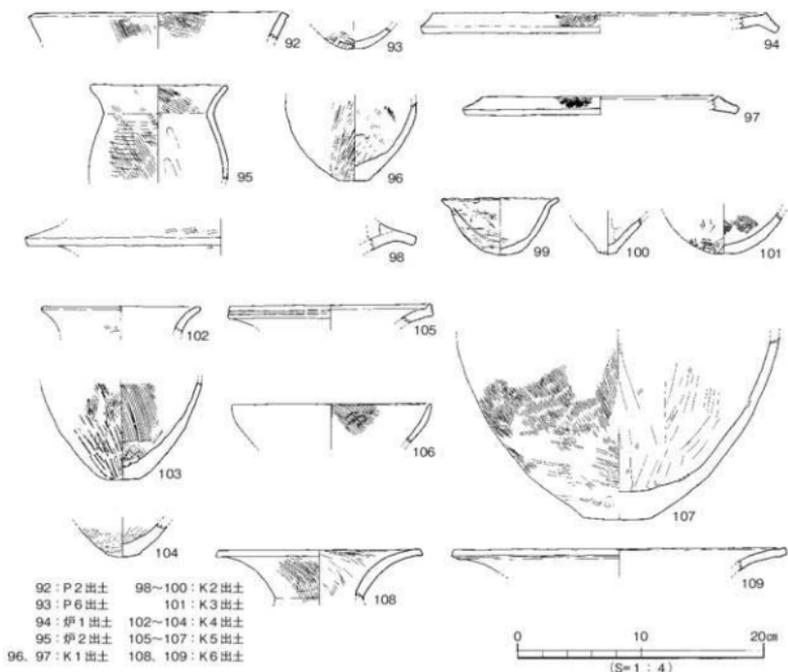
84は砥石である。色調は黄白色を呈する。砂岩製。85~87は磨石。85・86は砂岩、87は花崗岩製である。88は台石である。重量37.2kgを測る。砂岩製。

鉄器 (89~91)

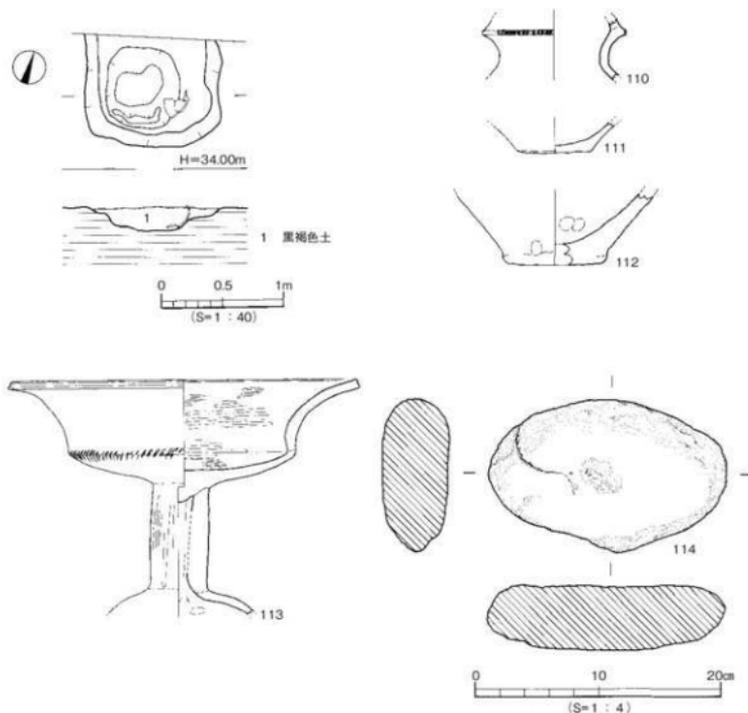
89は鉞である。長さ17.7cm、身幅1.2cm、最大厚0.5cmを測る。90・91は鉄鏝の基部とも考えられる。90には木質が残る。

92~109は住居内の柱穴 (P)、炉、土坑 (K) の埋土より出土した遺物である。

92はP 2より出土した甕の口縁部片である。93はP 6より出土した甕の底部片である。外面にタタキ目を残す。94は炉 1より出土した器台の口縁部片である。端部に波状文が施されている。95は炉 2より出土した甕である。外面の調整はタタキのちハケ目調整である。96・97はK 1より出土した甕と器台である。96は平底の小さな底部である。97の端部には波状文が施される。98~100はK 2より出土した。98は複合口縁壺、99・100は鉢である。101はK 3より出土した鉢である。外面にタタキ目を残す。102~104はK 4より出土した甕である。102は外反する口縁部。103・104の外面にはタタキ目を残す。105~107はK 5より出土した。105は壺の口縁部。端部に凹線が施される。106は



第14図 SB1出土遺物実測図 (6)



第15図 SK3測量図・出土遺物実測図

直口口縁の鉢。107は底部から胴部の破片。外面の調整はタタキのちハケ目調整である。108・109はK6より出土した。108は壺である。頸部から大きく外反する口縁部。109は高杯の口縁部である。

時期：SB1の時期は出土遺物より弥生時代後期末葉。

## (2) 土坑

### SK3 (第15図、図版4)

調査区の南西部での検出である。北側は、現代の現代坑によって失われており全容は不明である。遺構の掘り方は2段掘りとなる。検出規模は長軸1.10m、短軸0.88m、深さ0.08～0.20mを測る。埋土は黒褐色土である。遺物は埋土中より土器が出土している。

### 出土遺物 (第15図)

110は複合口縁壺。口縁接合部に刺突文を施す。111は甕の底部、112は壺の底部片。113は高杯。大きく外反する口縁部。杯の屈曲部に刺突文を施す。脚柱はエンタシス状である。114は凹石である。

時期：高杯の形態より弥生時代後期中葉と考える。

## 2. 中世 (第16図)

中世の遺構は第V層上面で検出した土坑や柱穴がある。

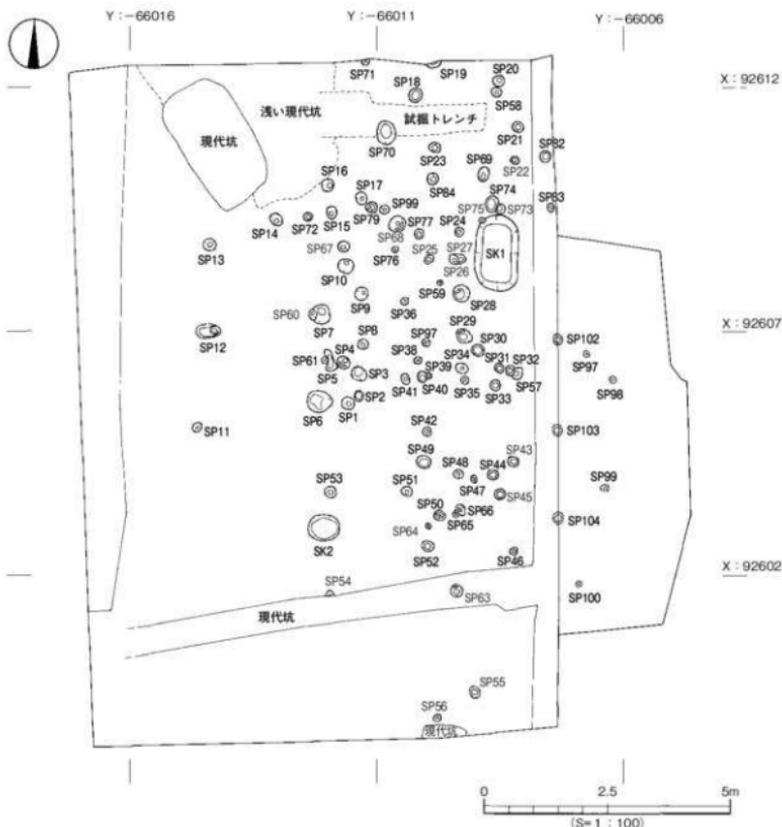
## (1) 土坑

## SK1 (第17図)

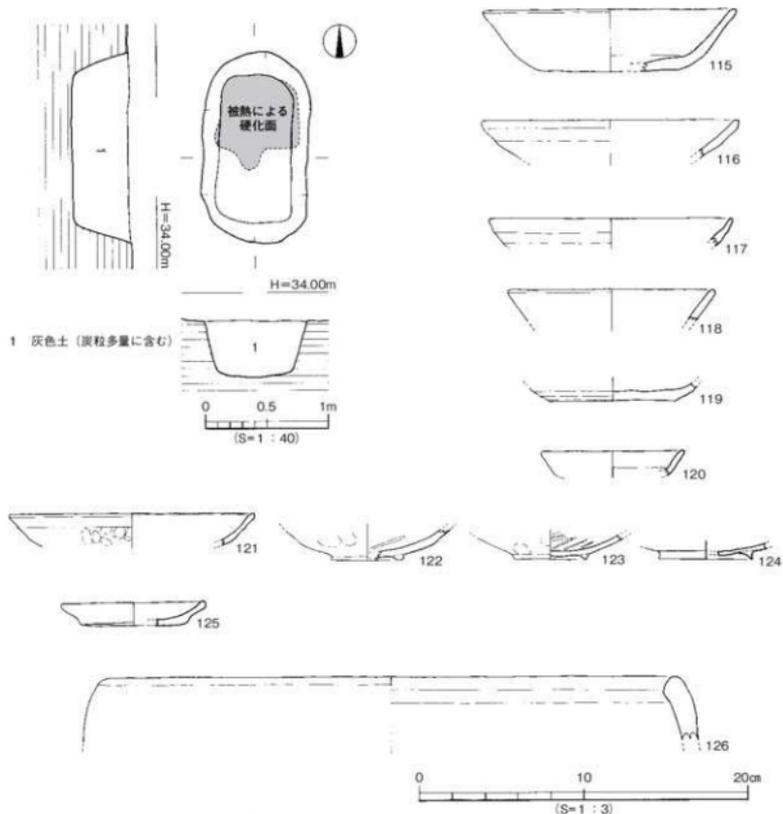
調査区の北東部で検出した土坑である。平面形は、隅丸長方形を呈する。検出規模は直軸1.57m、短軸0.82m、深さ0.45mを測る。遺構埋土は炭粒を多量に含む灰色土である。土坑北側の底面は被熱により硬化している。遺物は土師器、瓦器が出土している。

## 出土遺物 (第17図)

115~119は土師器坏。119の底部の切り離しは回転糸切りである。120は土師器皿。121~124は瓦



第16図 古代以降遺構配置図



第17図 SK1測量図・出土遺物実測図

器碗である。121は口縁部片である。口縁端部は丸い。122～124は底部片である。低い高台が施される。

125は瓦器皿である。126は羽釜の口縁部である。

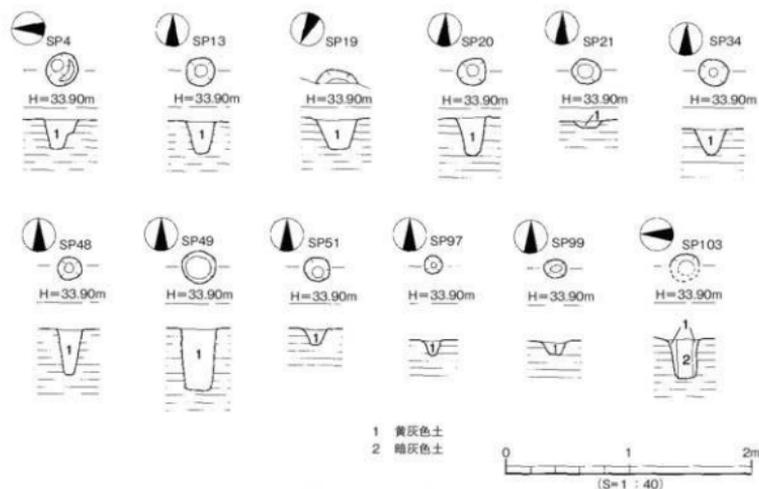
時期：出土した瓦器碗の形態より13世紀前半と考えられる。

(2) 柱穴 (第18・19図)

柱穴は黄灰色土を埋土にもつ一群を約90基検出している。建物の規模については復元できていない。柱穴の埋土からは遺物が出土しない柱穴が多かった。遺物の出土があった柱穴からは、11世紀～13世紀と考えられる遺物が出土している。

SP4

平面形態は円形を呈する。検出規模は直径25cm、深さ21cmを測る。埋土は黄灰色土である。柱痕は検出していない。遺物は瓦器碗137が出土している。



第18図 SP測量図

## SP13

平面形態は円形を呈する。検出規模は直径20cm、深さ27cmを測る。埋土は黄灰色土である。柱痕は検出していない。遺物は土師器皿135が出土している。

## SP19

北側は調査区外となり全容は不明である。検出規模は長軸32cm、深さ22cmを測る。埋土は黄灰色土である。柱痕は検出していない。遺物は土師器皿133、瓦器椀138が出土している

## SP20

平面形態は円形を呈する。検出規模は直径23cm、深さ28cmを測る。埋土は黄灰色土である。柱痕は検出していない。遺物は土師器杯132が出土している。底部は回転糸切りである。

## SP21

平面形態は円形を呈する。検出規模は直径21cm、深さ7cmを測る。埋土は黄灰色土である。柱痕は検出していない。遺物は砥石139が出土している。

## SP34

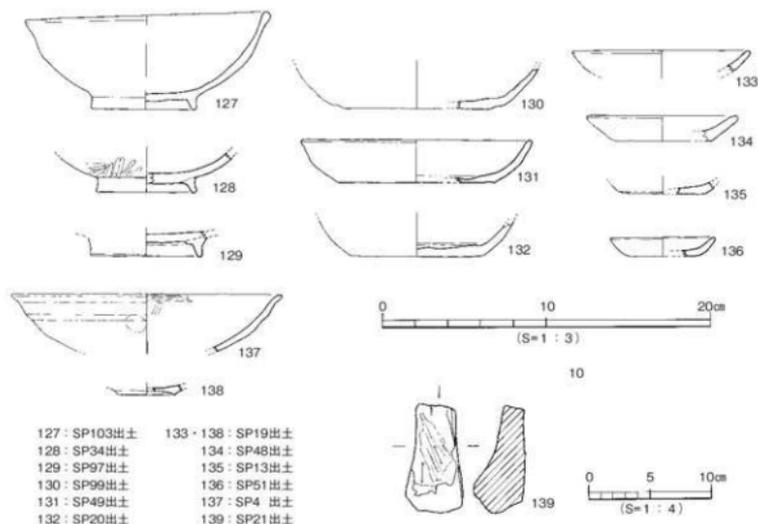
平面形態は円形を呈する。検出規模は直径23cm、深さ23cmを測る。埋土は黄灰色土である。柱痕は検出していない。遺物は土師器椀128が出土している。

## SP48

平面形態は円形を呈する。検出規模は直径20cm、深さ37cmを測る。埋土は黄灰色土である。柱痕は検出していない。遺物は土師器皿134が出土している。

## SP49

平面形態は円形を呈する。検出規模は直径27cm、深さ52cmを測る。埋土は黄灰色土である。柱痕は検出していない。遺物は土師器杯131が出土している。



第19図 SP出土遺物実測図

**SP51**

平面形態は円形を呈する。検出規模は直径20cm、深さ13cmを測る。埋土は黄灰色土である。柱痕は検出していない。遺物は土師器皿**136**が出土している。

**SP97**

平面形態は円形を呈する。検出規模は直径15cm、深さ11cmを測る。埋土は黄灰色土である。柱痕は検出していない。遺物は土師器椀**129**が出土している。

**SP99**

平面形態は円形を呈する。検出規模は直径18cm、深さ10cmを測る。埋土は黄灰色土である。柱痕は検出していない。遺物は土師器杯**130**が出土している。

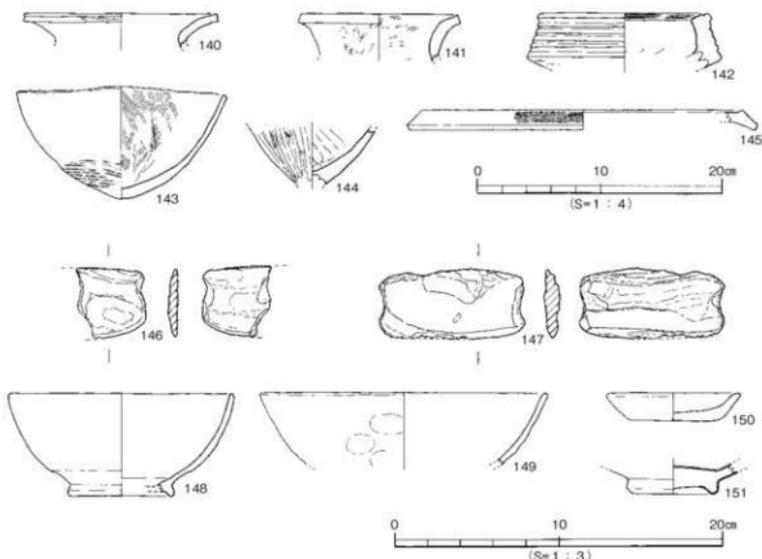
**SP103**

調査区の東側中央部で検出した。平面形は円形を呈するものと考えられる。検出規模は直径約20cm、深さ30cmを測る。柱痕は直径14cmを測る。遺物はほぼ完形の土師器椀**127**が柱痕埋土より出土した。

**3. その他出土遺物 (第20図)**

第三層～第五層にかけて出土した遺物である。**140～145**は弥生土器。**142**は複合口縁壺。口縁部に凹線文が施されている。**143**は直口口縁の鉢形土器。**145**は器台形土器。**146・147**は緑色片岩製の石包丁である。**148**は土師器椀、**149**は瓦器椀。**150**は土師器皿である。底部は回転糸切りである。**151**は龍泉窯系の青磁碗である。

遺構と遺物



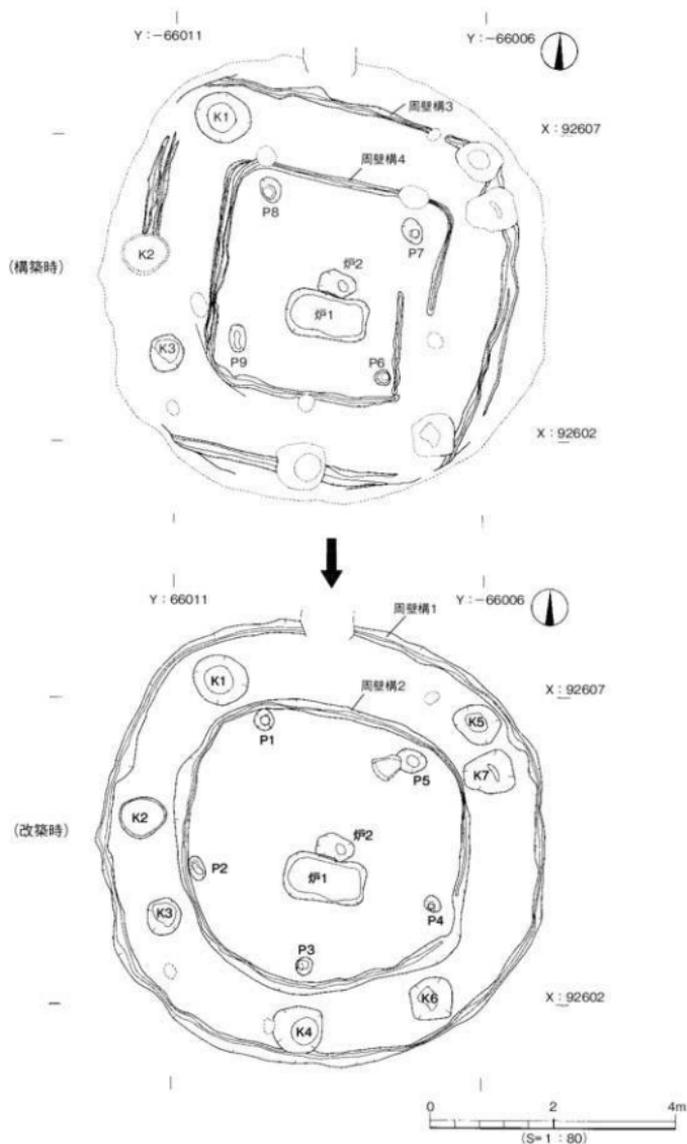
第20図 その他出土遺物実測図

第4節 小結

今回の調査では、中世から弥生時代の遺構・遺物を検出した。特に注目されるものに弥生時代の竪穴住居SB1がある。このSB1は、住居内施設の検出状況などから建て替えが想定される住居であった。住居内施設の周壁溝、貼床、柱穴、ベッド状遺構などの検出状況と関係を以下にまとめた。

1. 検出当初は円形の平面形態で切り合いはみられなかった。
2. 方形の周壁溝3はベッド状遺構の盛り土の下から検出した。
3. 方形の周壁溝4は貼床を撤去したのち検出した。
4. 貼床上面で検出した柱穴はP1、P2、P3、P4、P5の5基である。
5. 貼床を撤去したのち柱穴P6、P7、P8、P9の4基を検出した。
6. ベッド状遺構は最初の構築時にも付設されていた。炉は共有している。

以上の事などから周壁溝、柱穴には新旧関係が認められ、平面形態が方形を呈する周壁溝が古く、円形を呈する周壁溝が新しい。柱穴P6～P9は方形に属し、柱穴P1～P5は円形に属する。従って構築時の方形の住居は4本柱、建て替え時の円形の住居は5本柱という事になる(第21図)。このほか、周壁溝4の東側は隙間をもつことから入口の施設があったものと考えられる。今回の調査では、平面形態が方形から円形に変化する事が確認でき住居形態の変遷を考える上で貴重な資料を得た。中世では、柱穴S P103からは柱痕の埋土より11～12世紀に比定されるほぼ完形の土師器碗が出土した。このことは、建物廃絶時に柱を抜いた後に埋納されたものと考えられ、古代末～中世にかけての柱穴内祭祀の実態を知る事ができた。



第21図 SB 1 構築時と改築状況

## 第5章

# 小坂遺跡

- 1次調査 -



## 第5章 小坂遺跡1次調査

### 第1節 調査の経緯

#### 1. 調査に至る経緯（第1図）

2005（平成17）年5月、松山市都市整備部道路建設課（以下、道路建設課）より松山市小坂二丁目210番1 外における松山市道「中村桑原線」道路改良工事に伴う埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。申請地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地「No.110 釜ノ口遺跡」内に存在する。申請地周辺はこれまでに数多くの調査が行われ、弥生時代を中心とした集落関連遺構が確認されている。

そこで財団法人松山市生涯学習振興財団（現：財団法人松山市文化・スポーツ振興財団）埋蔵文化財センター（以下、センター）は申請地における埋蔵文化財の有無を確認するため、2005（平成17）年12月8・9日に試掘調査を実施した。試掘調査は、対象地内にT1～4の4本のトレンチを設定した。調査の結果、土坑と柱穴を検出し、中世と古代以前の包含層を確認した。この結果を受け道路建設課と文化財課・センターは、遺跡の取り扱いについて協議を重ね、工事に伴って消失する遺跡に対し記録保存のための発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、古代や中世の集落構造の解明を主目的とし、文化財課の指導のもとセンターが主体となり翌2006（平成18）年2月1日から本格調査を開始した。

#### 2. 調査の経過

調査は2006（平成18）年2月1日から4月28日までの約3か月間、屋外調査を行った。その際、掘削廃土置場の都合により調査地を東から西へ順に1区、2区、3区の3区画に区分して調査を行った。調査にあたっては、世界測地系の基準点を4mメッシュでグリッドを設置し調査地の区割りを行った。以下、調査工程を略記する。

2月1日、仮設事務所を設置するとともに発掘機材や道具の準備を行う。2日、重機により1区の表土掘削作業を翌3日まで行う。同時に北東壁下に土層観察用及び排水用のトレンチを設定する。以後、1区の遺構検出作業を行う。8日、1区に基準杭を打設する。9日、1区の遺構検出状況の写真撮影を行うと同時に遺構平面図を作成する。写真撮影後、遺構の掘り下げを開始する。21日、東壁の一部を拡張し、SK1全体を検出する。27日、畑から将棋の駒が出土する。28日、高所作業車を用い、1区遺構完掘状況の写真撮影を行う。撮影終了後、コンタ図を作成する。

3月6日、重機により1区の埋め戻しを行い、7～8日に2区の掘削を行う。以後、2区の遺構検出作業を行う。9日、2区の遺構検出状況の写真撮影を行う。写真撮影後、畑の掘り下げを開始し、同時進行で平板測量を行う。10日、2区に基準杭を打設すると同時に遺構平面図を作成する。29日、高所作業車を用い、2区遺構完掘状況の写真撮影を行う。撮影終了後、コンタ図を作成する。30日、重機により2区の埋め戻しを行うとともに、3区の掘削を行う。以後、3区の遺構検出作業を行い、遺構検出状況の写真撮影を行う。31日、畑の掘り下げを開始する。以後、順次各遺構の掘り下げを行い、同時進行で平板測量を行う。

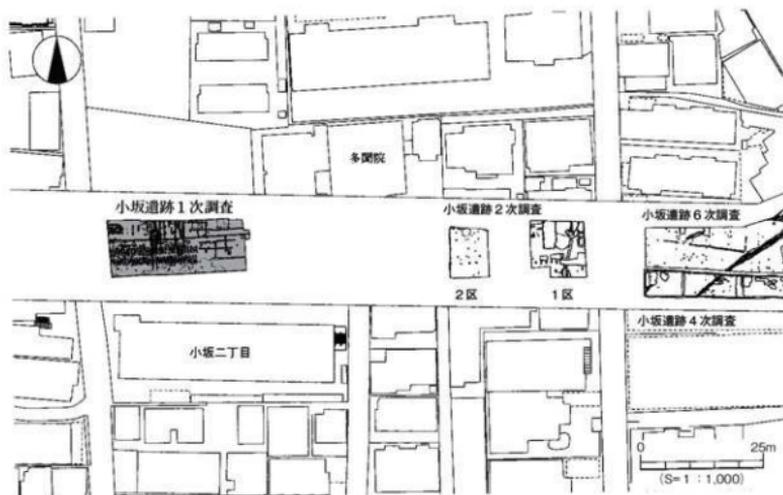
4月21日、3区遺構完掘状況の写真撮影を行い、コンタ図を作成する。24～27日の間、出土遺物や

測量図面の整理作業を行う。28日、全ての屋外調査を完了し、重機により3区を埋め戻す。出土遺物の整理を行うとともに、調査用具等を撤去する。仮設事務所を撤去し、屋外調査を終了する。

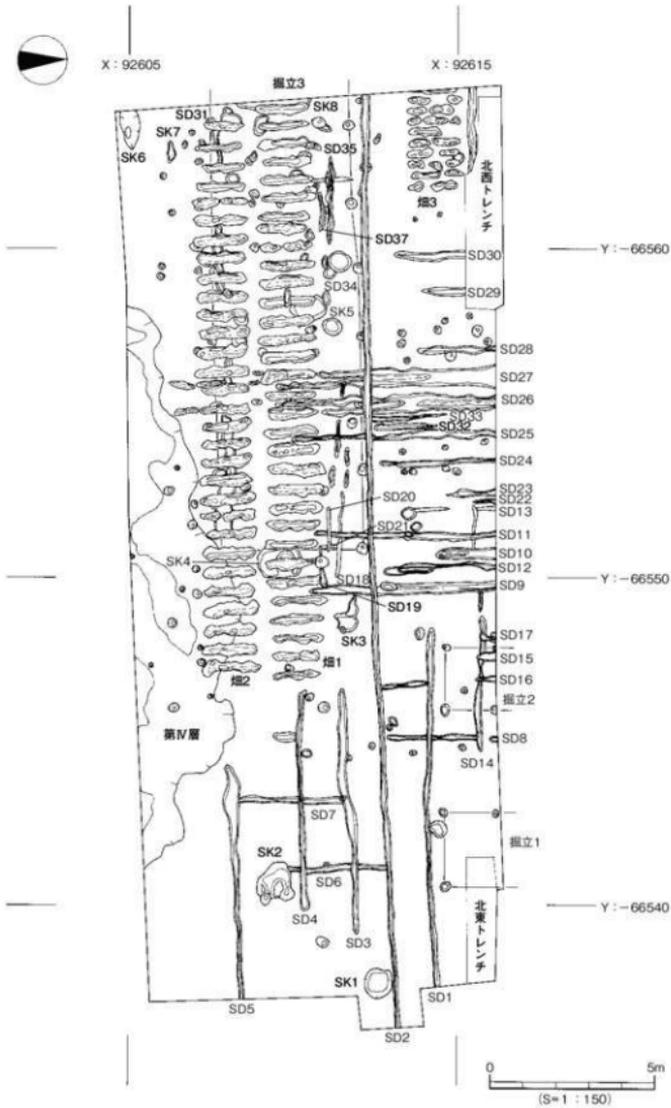
## 第2節 層位 (第3～6図)

本調査地は、石手川の氾濫によって形成された扇状地上の標高約29.70～29.95mに立地する。基本層位は、第Ⅰ-①層造成土、第Ⅰ-②層真砂土、第Ⅱ層耕作土、第Ⅲ層旧耕作土、第Ⅳ層黒色土、第Ⅴ層褐色粘質土、第Ⅵ層黄色土、第Ⅶ層灰色微砂質土である。

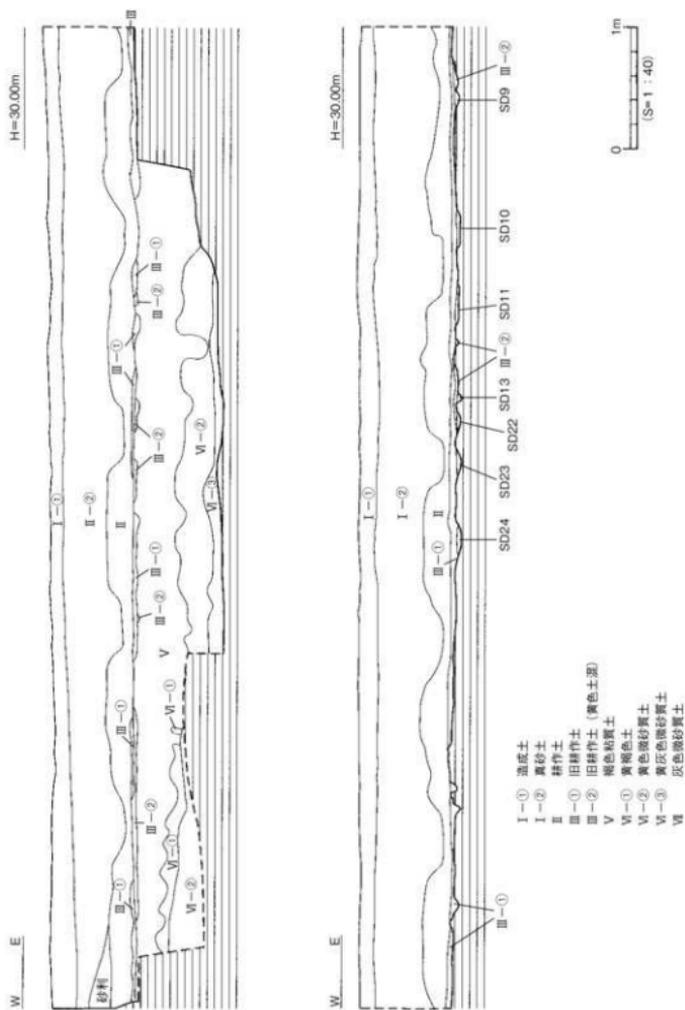
- 第Ⅰ-①層 - 駐車場として利用されていた際の造成土で、厚さ10～20cmを測る。調査区全域に広く堆積する。
- 第Ⅰ-②層 - 駐車場として利用されていた際の真砂土で、厚さ50～80cmを測る。調査区全域に広く堆積する。
- 第Ⅱ層 - 水田の耕作土で、厚さ10～20cmを測る。調査区全域に広く堆積する。
- 第Ⅲ-①層 - 旧耕作土で、厚さ5cm前後を測る。調査区全域に広く堆積する。
- 第Ⅲ-②層 - 第Ⅲ-①層に黄色ブロック土が混じる土層で、厚さ5cm前後を測る。調査区ほぼ全域に堆積する。



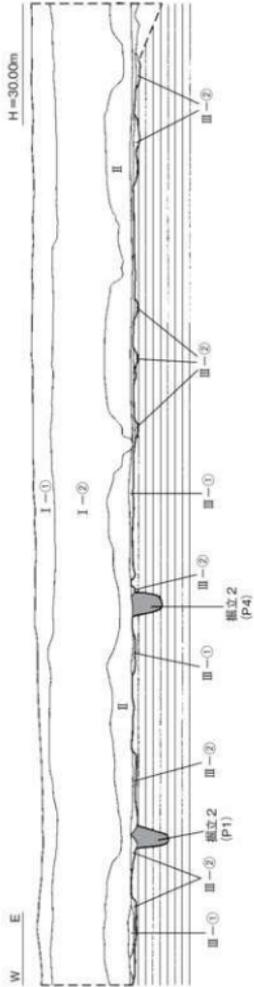
第1図 調査位置図



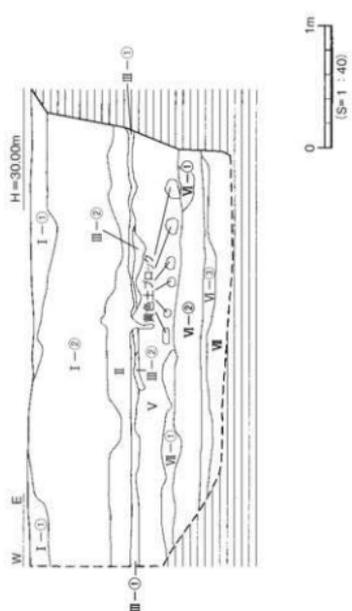
第2図 遺構配置図



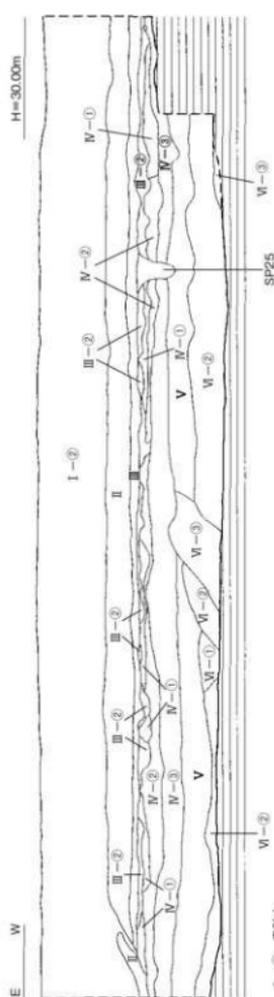
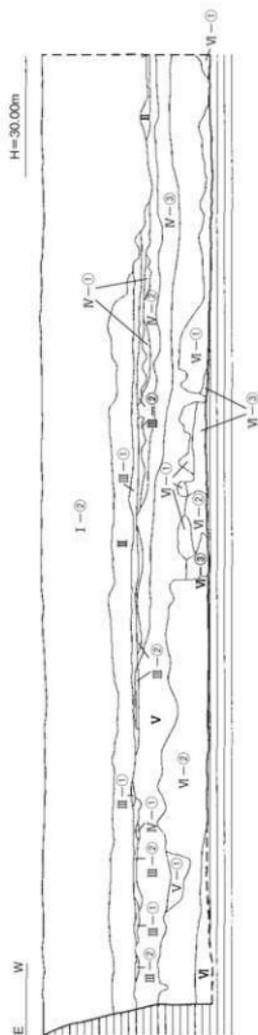
第3図 北壁土層図(1)



- I-0 透腐土
- I-2 真砂土
- II 耕作土
- III-0 旧耕作土 (黄色土層)
- III-2 褐色粘質土
- V V-0 青褐色土
- V-2 黄色微砂質土
- V-3 黄灰色微砂質土
- VI 灰黄色微砂質土



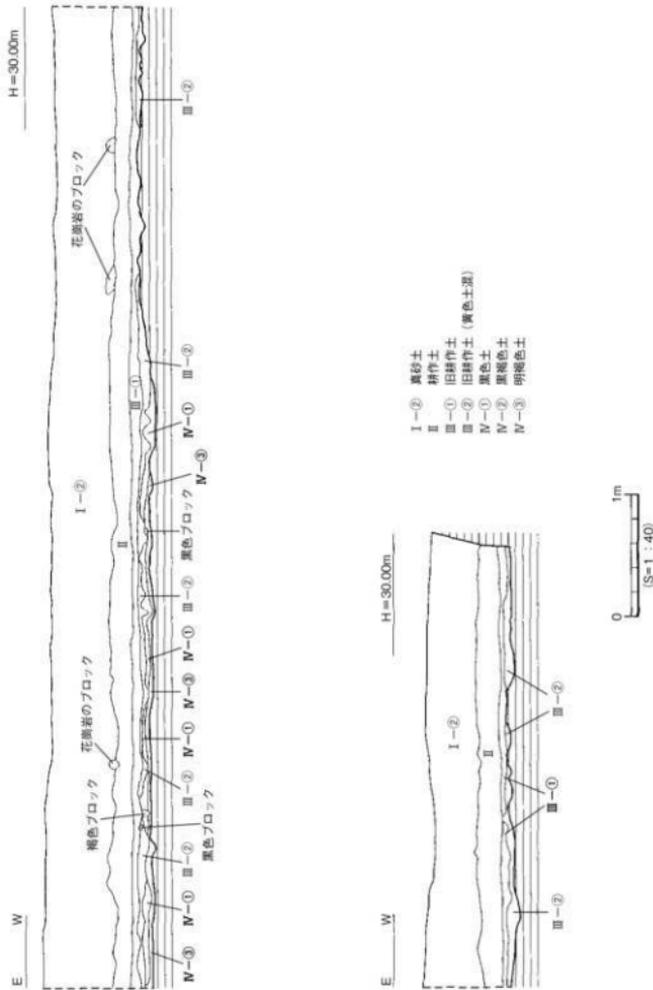
第4圖 北壁土層図(2)



- I-② 真砂土
- II 耕作土
- III-① 旧耕作土 (黄色土)
- III-② 旧耕作土 (黄色土)
- IV-① 真砂土
- IV-② 真砂土
- V 明礬色土
- VI-① 黄褐色土
- VI-② 黄褐色土
- VI-③ 黄褐色砂質土
- VI-④ 黄褐色砂質土



第5図 南壁土層図(1)



第6図 南嶽土層図(2)

- 第Ⅳ-①層 ー黒色土で、厚さ5cm前後を測る。調査区南壁沿いのみ堆積する。
- 第Ⅳ-②層 ー黒褐色土で、厚さ4～12cmを測る。調査区南壁沿いのみ堆積する。
- 第Ⅳ-③層 ー明褐色土で、厚さ5～25cmを測る。調査区南壁沿いのみ堆積する。
- 第Ⅴ層 ー褐色粘質土で、厚さ20～40cmを測る。調査区全域に堆積するが、北東部では、下層に黄色土がブロック状に貫入している。
- 第Ⅵ-①層 ー黄褐色土で、厚さ10cm前後を測る。調査区全域に堆積する。
- 第Ⅵ-②層 ー黄色微砂質土で、厚さ20cm前後を測る。調査区全域に堆積する。
- 第Ⅵ-③層 ー黄灰色微砂質土で、厚さ5～10cm前後を測る。調査区全域に堆積する。
- 第Ⅶ層 ー灰色微砂質土で、厚さ10cm以上堆積している。調査区はほぼ全域に堆積している。上層は橙色土を含んでいる。

第Ⅴ層以下は、いわゆる地山と呼ばれる層である。周辺調査の結果より、第Ⅳ層はアカホヤ火山灰(約6,300年前に南九州より降下・堆積)の堆積層で、第Ⅵ層はA T火山灰(約22,000～25,000年前に南九州より降下・堆積)の堆積層と考えられる。

遺構は、第Ⅲ-②層上面・第Ⅳ層上面・第Ⅴ層上面で検出した。

### 第3節 遺構と遺物

本調査で検出した主な遺構は、掘立柱建物3棟、畑3枚、土坑8基、溝39条、柱穴136基である。また主な出土遺物は土師器、須臾器、陶磁器、土製品、石製品、将棋の駒などがある。以下、主な遺構と遺物を記述する。

#### 1. 中世

中世の遺構は、掘立柱建物3棟及び土坑7基を検出した。

##### (1) 掘立柱建物

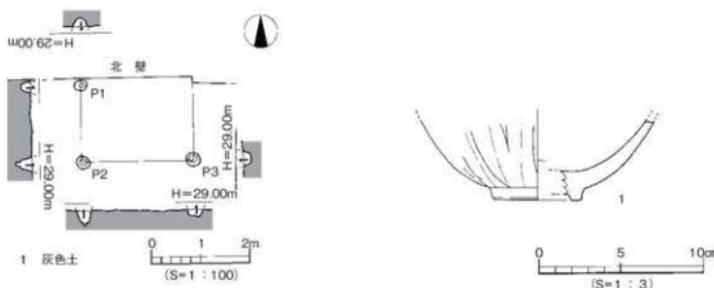
###### 掘立1 (第7・8図)

調査区北東部に位置し、南端部のみを検出で北側は調査区外に延びる。第Ⅴ層上面での検出である。規模は東西1間×南北1間以上で、現在長2.30×1.50m以上を測る南北に長い建物と考えられる。柱穴は円形または楕円形を呈する。柱穴検出規模は直径0.24～0.30m、深さ0.15～0.28mを測る。柱穴の埋土は灰色土の単一層である。柱痕跡は確認していない。なお、北東隅の柱穴は調査区外に位置するものと考え北壁を拡張して確認を行ったが検出されなかったため、北東トレンチ掘削時に失われたものと考えられる。出土遺物には陶磁器と土師器があり、P2内部からは青磁碗が1点出土している。

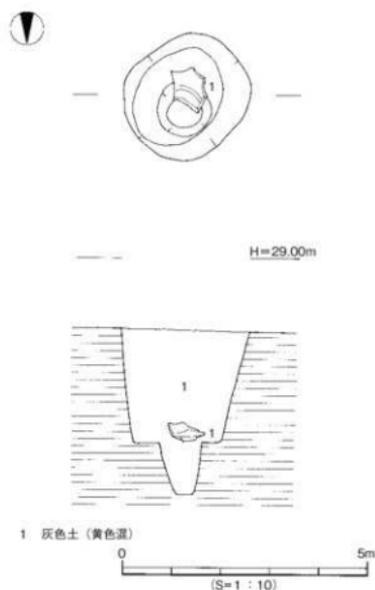
###### 出土遺物 (第7図、図版6)

1は龍泉窯系青磁碗の底部～体部である。外面には立体的に縞連弁が表現されている。内面には使用時の擦痕が残る。出土状況は柱穴底部中央で底部を下位にして出土し、柱抜き取り後または建物廃絶後、柱穴内に埋められたものと考えられる。

時期：出土した青磁碗の特徴から、13世紀に埋没した遺構と推定される。



第7図 掘立1測量図・出土遺物実測図



第8図 掘立1-P2測量図

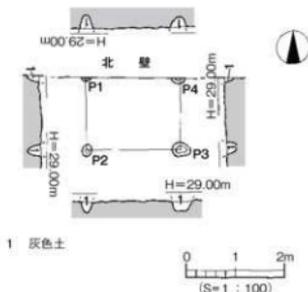
## 掘立2 (第9図)

調査区北東部に位置し、南端部のみを検出で北側は調査区外に延びる。第V層上面での検出である。規模は東西1間×南北1間以上で、現在長190×150m以上を測る南北に長い建物と考えられる。掘立1の西側に隣接して検出しており、規模は掘立1よりやや東西方向に短い建物である。整理作業中に建物の可能性があることが判明したため、北側2基の柱穴は全掘していない。柱穴は楕円形を呈する。柱穴検出規模は直径0.18~0.38m、深さ0.23~0.28mを測る。柱穴の埋土は灰色土の単一層である。柱痕跡は確認していない。出土遺物には土師器があるが、小片のため図化していない。

時期：時期決定しうる遺物が少ないが、掘立1とほぼ同規模の建物で柱穴埋土も同一であることから推定して、掘立1と同様に13世紀に埋没した遺構と推定される。

## 掘立3 (第10・12図)

調査区中央部～西部に位置し、西側は調査区外に延びる。SK 4を切り、畑2やSD 2に切られている。第IV層及び第V層上面での検出である。規模は6間以上×2間で、桁行長12.90m以上、梁行長4.2mを測る東西棟の建物と推定している。柱間は桁行で2.00～2.50m、梁行で1.90～2.30mを測る。建物を構成する柱穴は円形または楕円形を呈する。柱穴検出規模は直径0.24～0.42m、深さ0.38～0.78mを測る。柱穴の埋土は灰色土の単一層である。柱痕跡は確認していない。柱穴からの出土遺物には土師器坏や土師質土釜などがある。



第9図 掘立2測量図

## 出土遺物 (第11図、図版6)

2～8は土師器である。2は坏である。底部から大きく開き、口縁部付近で外反する。内外面に回転ナデ調整が施され、底部には回転糸切り痕が残存する。底部～外面に煤が付着する。3は坏または皿の底部～体部である。全面が摩耗している。底部には回転糸切り痕が残存する。4は皿である。口縁部は内湾気味に短く立ち上がり、端部は丸くおさめる。内外面に回転ナデ調整が施され、底部に板目状圧痕が残存する。5は甕である。口縁部は内湾気味に立ち上がる。全体に薄いつくりである。6～8は土師質土釜である。6は口縁部～体部で、内外面ともにナデ調整を施す。体部中位から口縁部にかけて内傾する。口縁部外面に形骸化した鏝がつく。16世紀後半。7は体部と脚部の接合部、8は脚部の先端部片である。

時期：出土した土師質土釜などの特徴から16世紀に埋没した遺構と推定される。

## (2) 土坑

土坑はSK 1～8の8基を検出した。

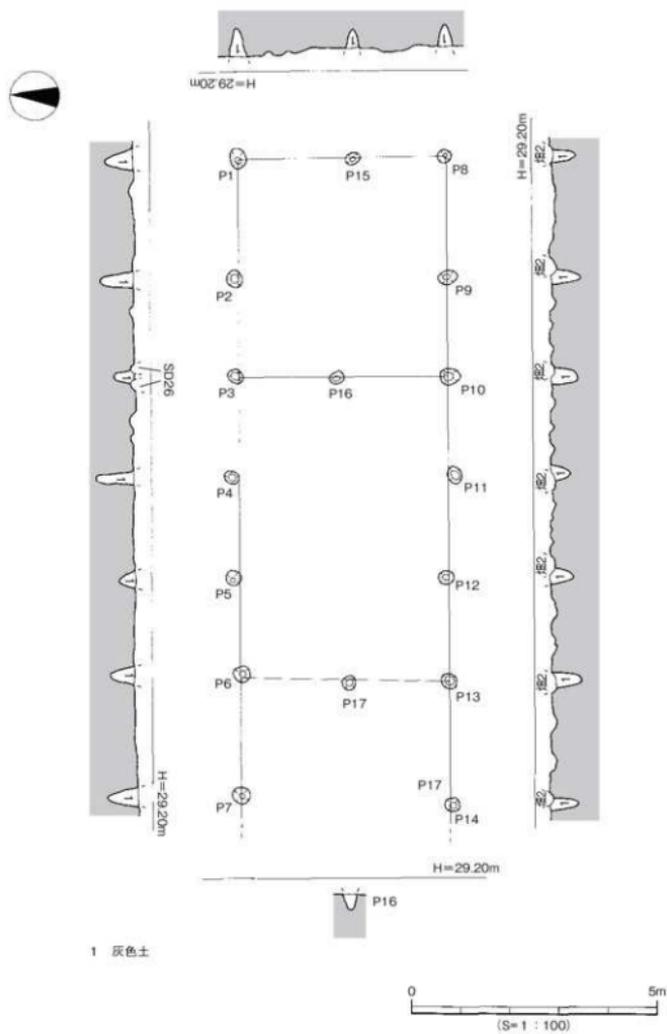
## SK 1 (第13図)

調査区東端部に位置する。当初の調査区では遺構東半部が未検出であったため調査範囲の拡張を行い、全体プランの確認を行った。第V層上面での検出である。平面形態は隅丸方形を呈し、断面形態は舟底状を呈する。規模は長軸1.00m、短軸0.80m、深さ0.22cmを測る。埋土は2層に分かれ、第1層黄灰色微砂質土、第2層灰色粘質土である。土坑内より土師器が出土している。

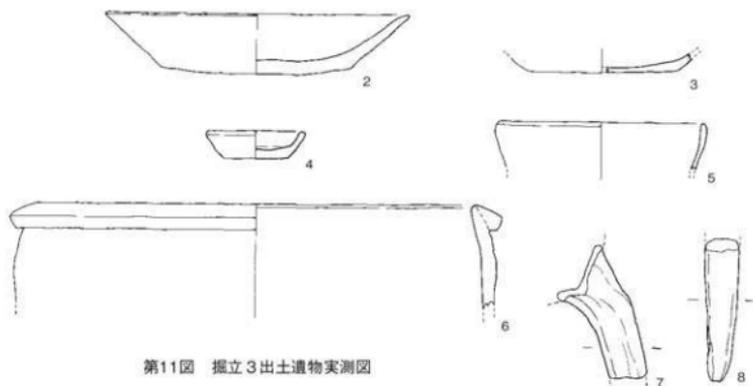
## 出土遺物 (第13図)

9は坏である。底部から直立気味に立ち上がり、口縁部は尖り気味におさめる。底部に板目状圧痕が残存する。全体的に摩滅が著しい。10は内外面黒色の皿である。底部から内湾気味に短く外傾し、口縁部は尖り気味におさめる。全体に摩滅している。

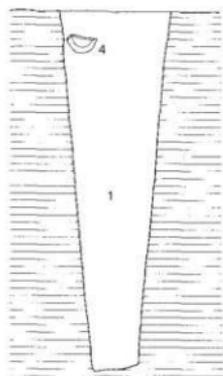
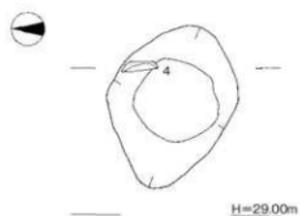
時期：出土遺物から13世紀後半に埋没した遺構と考えられる。



第10図 掘立3測量図



第11図 掘立3出土遺物実測図



1 灰色土 (黄色混)

第12図 掘立3-P17測量図

## SK2 (第14図)

調査区東部に位置する。SD6を切り、SP3に切られている。平面形態は不整形を呈し、断面形態は皿状を呈し、東側が一部盛り上がった馬蹄形状の二段掘りとなっている。規模は長軸1.10m、短軸1.04m、深さ0.10mを測る。埋土は黄色土が混じる灰色土の単一層である。土坑内より須恵器が出土している。

## 出土遺物 (第14図)

11は坏蓋の口縁部片である。口縁端部は丸くおさまり、内外面は回転ナデ調整を施す。時期:出土遺物の特徴からは6世紀後半と考えられる。ただし、SD6を切っていることや埋土から、出土遺物は後世に混入した可能性が高いため、遺構の年代はひとまず中世と考えておく。

## SK3 (第15図)

調査区中央部に位置する。SP27に切られている。平面形態は不整形を呈し、断面形態は皿状を呈し、西側に細長く浅い段をもつ二段掘りとなっている。規模は長軸1.16m、短軸0.70m、深さ0.10mを測る。埋土はSK2と同様に黄色土が混じる灰色土の単一層である。土坑内より磁器片が出土している。

## 出土遺物 (第15図)

12は肥前系磁器の碗である。口縁部外面に2条の圏線を引き、その下位に草花文を描いているものと思われる。

時期:出土遺物が1点のため即断はできないが、埋土も含めて考えると遺構の年代は中世と考えておく。

## SK5 (第16図)

調査区西部に位置する。畑1に切られている。平面形態は不整形を呈し、断面形態は深い舟底状を呈する。規模は長軸1.10m、短軸0.96m、深さ0.35mを測る。埋土は3層に分かれ、第1層黄灰色土、第2層黄色土混じりの褐色土、第3層灰褐色土である。土坑内より土銅片が出土している。

## 出土遺物 (第16図)

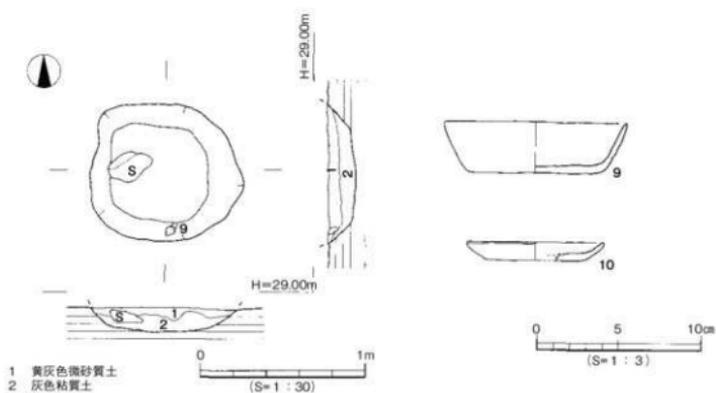
13は土師質土銅の脚部片である。

時期:出土遺物だけでは年代が判断できないが、埋土がSK2・3に類似しているため遺構の年代は中世と考えられる。

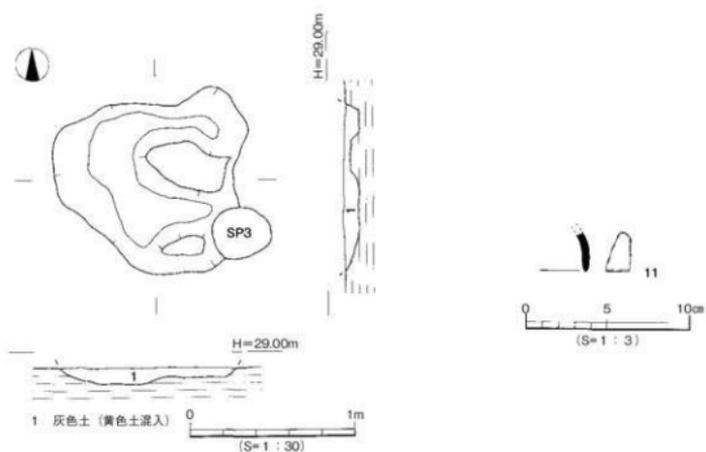
## SK4 (第17図)

調査区中央部に位置する。掘立3及び畑1に切られている。第V層上面での検出である。平面形態は隅丸方形を呈し、断面形態は皿状で、北半部がやや深くなる二段掘りを呈する。規模は長軸1.34m、短軸0.86m、深さ0.16mを測る。埋土は黄色土や褐色土のブロックが混じる暗灰色土の単一層である。土坑内より遺物は出土していない。

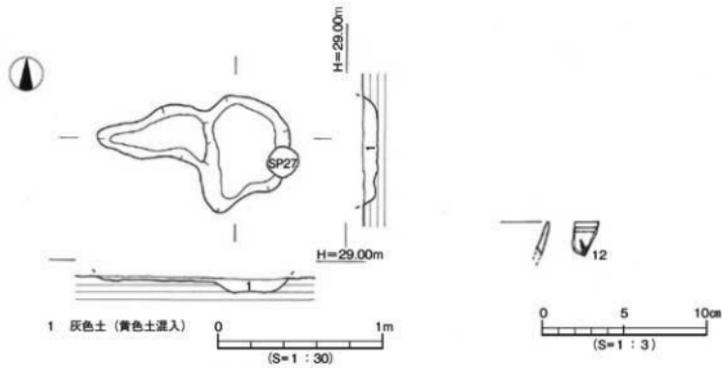
時期:出土遺物がなく時期特定が困難であるが、遺構埋土がSK2・3に類似することから中世と考えられる。また後述する畑1に切られていることから江戸期には埋没していたものと考えられる。



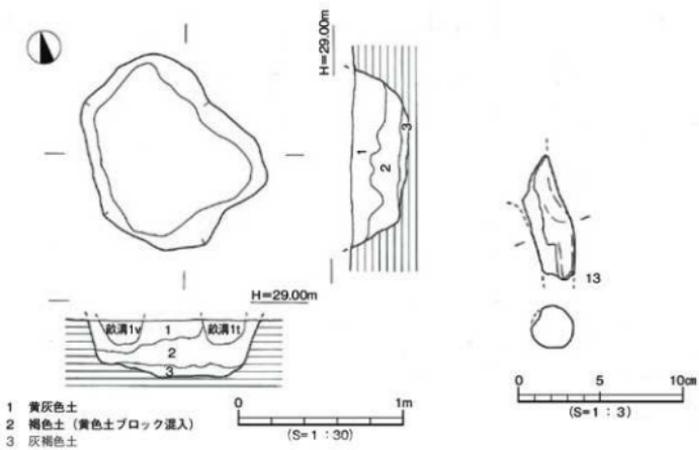
第13図 SK1測量図・出土遺物実測図



第14図 SK2測量図・出土遺物実測図



第15図 SK 3測量図・出土遺物実測図



第16図 SK 5測量図・出土遺物実測図

## SK6 (第17図)

調査区西南隅に位置し、西部は調査区外に延びる。平面形態は長楕円形を呈し、断面形態は緩やかなレンズ状を呈する。規模は残存部分で長軸1.16m、短軸0.62m、深さ0.16mを測る。埋土は灰色土の単一層である。土坑内より遺物は出土していない。

時期：出土遺物がなく時期特定が困難であるが、遺構埋土がSK2・3に類似することから中世に埋没したものと考えられる。

## SK7 (第2図)

調査区西南隅に位置する。平面形態は長楕円形を呈し、断面形態は浅い皿状を呈する。規模は長軸0.36m、短軸0.12m、深さ0.30mを測る。埋土は灰色土の単一層である。土坑内より遺物は出土していない。

時期：出土遺物がなく時期特定が困難であるが、遺構埋土がSK2・3・6と同一であることから中世に埋没したものと考えられる。

## 2. 近世以降

近世以降の遺構は、土坑1基、畑3枚、溝39条を検出した。

## (1) 土坑

土坑はSK8を検出した。

## SK8 (第18図)

調査区西端部に位置し、西半部は調査区外になる。畑1に切られている。第Ⅲ-②層上面での検出である。全面検出ではないため検出部分だけの平面形態は長方形を呈し、断面形態は舟底状を呈する。規模は長軸2.22m、残存短軸0.42m、深さ0.42mを測る。埋土は4層に分かれ、第1層褐色土、第2層灰色土、第3層灰褐色土、第4層暗灰褐色土である。他の遺構に比べ比較的深い遺構であったが、遺物は出土していない。

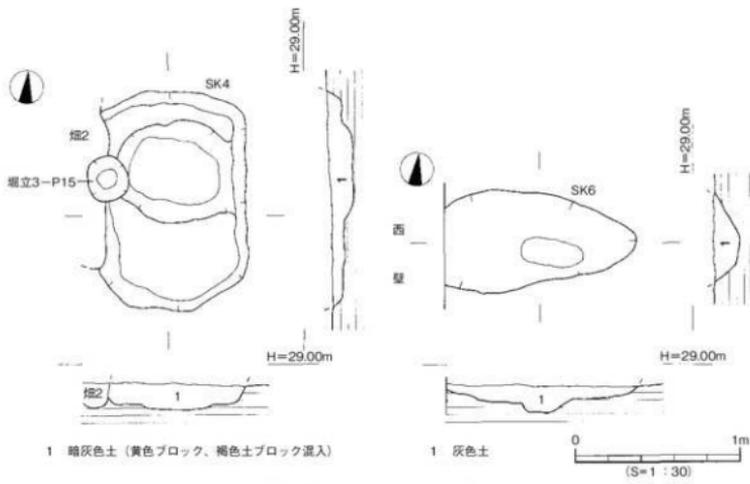
時期：出土遺物がなく時期特定が困難であるが、遺構が第Ⅲ-②層を掘り込み造られているから、近世以降に埋没したものと考えられる。

## (2) 畑

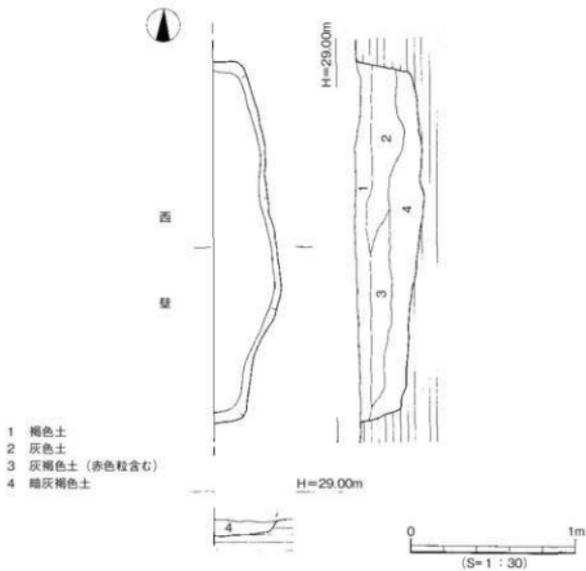
畑は畑1～3の3枚を検出した。畑1と畑2は第Ⅲ層を重機によって掘削途中で同時に検出した。屋外調査では、北側検出のものを畑1、南側検出のものを畑2と呼称して調査工程上、別遺構として作業を進めていったため、遺構については個別に報告を行う。しかし、本来は一枚の畑の可能性が考えられるため、遺物については畝溝1g出土の将棋駒36を除き、畑1・2両方の出土遺物を一緒に掲載する。

## 畑1 (第19図)

調査区中央部～西部に位置し、東西方向に伸びて西側調査区外へ続く。掘立3・SK4・5・8を切り、SD36に切られている。第Ⅲ-②層上面での検出である。東西方向の検出長約17.9m分を確認し、総面積は約30㎡である。畝幅はほぼ均等で約0.30m内外を測る。畝は上位を後世に削平されていたため足跡や人工的な痕跡は確認できず、畝溝のみを検出した。畝溝は32条確認した。調査工程上、畝溝



第17図 SK4・SK6測量図



第18図 SK8測量図

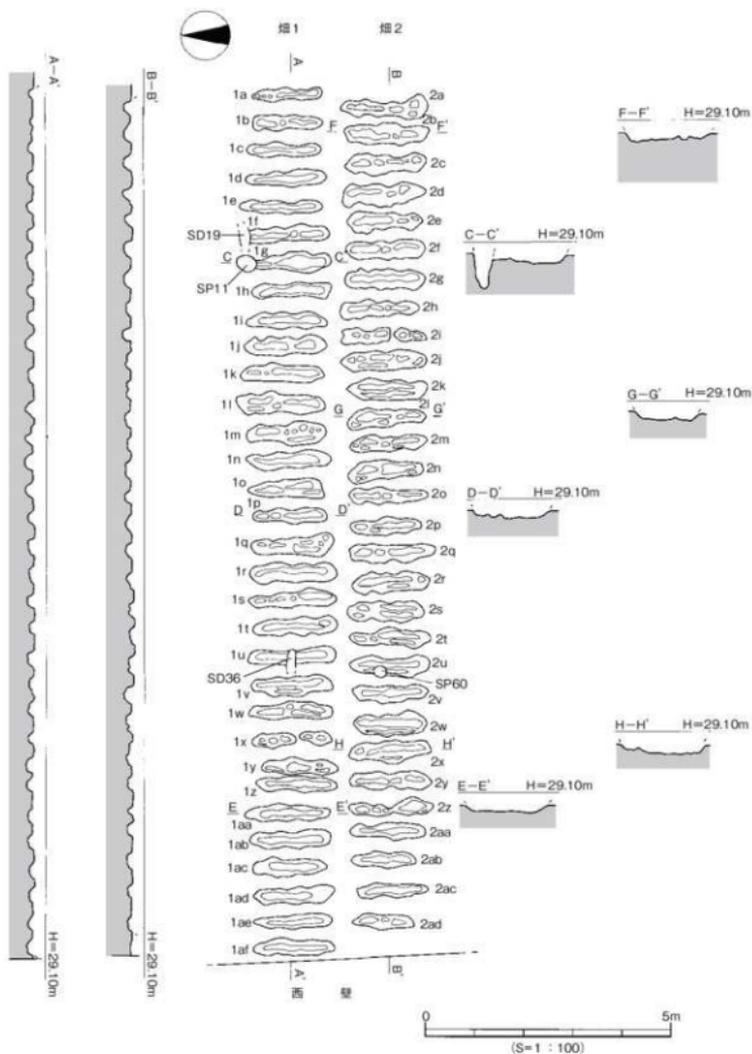
は東から西へ1a・1b・1c…1z・1aa・1ab…1afとし、順次調査を行った。畝溝の平面形状は隅丸長方形を呈し、長軸平均1.70m、短軸0.20～0.40mを測る。断面形状は起伏が激しい部分もあるが、おおよそレンズ状又は皿状を呈している。畝溝の埋土は褐色土混じりの暗灰色土である。出土遺物は畝溝内から陶磁器や土師器、土師質土釜が出土したほか、特筆すべきものとして畝溝1gから滑石製将棋駒が1点出土している。

## 畑2（第19図）

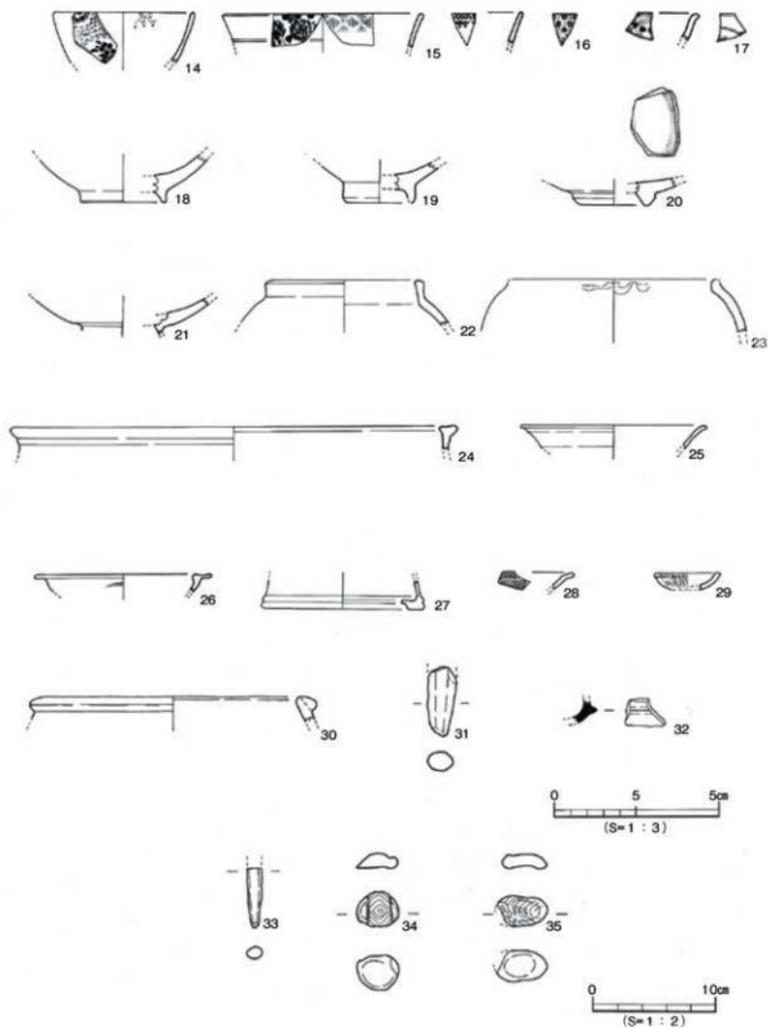
調査区中央部～西部で、畑1に並行して南部に位置する。畑1とは約0.30m間隔を隔てて東西方向に伸びて西側調査区外へ続く。おおよそ畑1の畝の南側に畑2の畝溝が存在していることから、畑2の畝と畑1の畝は並行ではなく、畑1と畑2の畝は交互の位置関係となっている。掘立3・SD31を切っている。第三～②層上面での検出である。畑2全体の検出長約17.5m分を確認し、総面積は約28㎡である。畝は上位を後世に削平されていたため溝畝のみの検出であったが畝の幅はほぼ均等で0.20～0.30cmを測る。畝溝は30条確認した。調査工程上、畝溝は東から西へ2a・2b・2c…2z・2aa・2ab…2adとし、順次調査を行った。畝溝の平面形状は隅丸長方形を呈し、長軸平均1.60m、短軸0.20～0.40mを測る。断面形状は畑1と同様に起伏が激しい部分もあるが、おおよそレンズ状又は皿状を呈している。畝溝の埋土は畑1と同様に褐色土混じりの暗灰色土である。出土遺物は畝溝内から陶磁器や土師器がある。

## 出土遺物（第20図、図版6）

14～29は陶磁器である。14～17は肥前系磁器の碗である。14は外面の窓に椿文が描かれ、区画間にはみじん唐草文で埋め、口唇部には放射状の文様がみられる。内面口唇部には環珞文が描かれる。15～17は端反碗または蕎麦猪口と思われる。15は外面に菊花文や亀などの文様がみられ、内面口唇部には菱繋ぎ文が巡っている。16は外面に市松文と4点を十字に配置した文様を描き、内面口唇部には環珞文が描かれる。17は外面に何らかの文様が看取できるが、図柄は不明である。内面の文様はやや大きめの点で花を表していると思われる。14～16は鮮やかな藍色を呈しており、江戸末期～明治期と思われる。17は江戸期の所作と思われる。18～21は碗の底部である。18・19は肥前系磁器で、内外面ともに白色釉がかけられている。19の高台置付は軸割りが施されている。20は陶器碗で、外面腰部・底部・高台部は無釉で、それ以外は灰釉がかけられている。21は京都・信楽系の陶器碗で、20と同様に外面腰部・底部・高台部は無釉で、それ以外は灰釉がかけられている。19世紀前半。22は産地不詳の陶器壺で、短い口縁部が直線的に立ち上がる。23は京都・信楽系の灰釉壺である。口縁端部に緑釉が付着する。19世紀。24は陶器鉢で、口縁部は断面三角形形状となる。内外面ともに口縁部下は軸割りが施されている。25は白磁鉢である。白地の胎土に透明釉をかけている。19世紀中頃。26は陶器皿で、口縁部を外方に水平に折り返した形態である。内面に緑色釉が付着する。27は全体形状不明である。底部中央に径6.6cmの円孔がみられる。堅く焼きしまった褐色の胎土の陶器である。茶道具の一種の可能性もある。28は陶器皿と思われるものである。明褐色をした胎土の薄いつくりの製品で、内面に型押しにより龍を表現したと思われる文様がみられる。29は肥前系白磁の菊花紅皿である。口縁端部は水平な面をなす。底部を欠損する。30・31は土師質土釜である。30は口縁部片で、内傾する口縁部外面に形骸化した鏝がつく。全体に摩耗が著しい。16世紀。31は脚部先端部片である。全体に摩耗している。32は須恵器である。坏身の受部片で、立ち上がりは欠損する。や



第19図 遺1・遺2測量図



第20図 畑1・畑2出土遺物実測図

や焼成不良で灰白色を呈する。6世紀。

33は骨角製品で、箸の先端部と思われる。象牙裂か。34・35は土製品である。34の上面はほぼ円形で底面は平坦である。中央の長方形枠内に菱形文様を約1mm幅で同心円状に刻む。人物に貼りつけた部品の一部の可能性が考えられる。35の上面は楕円形で底面はやや凹む。鳥や亀などの背中部分を表現したものの可能性が考えられる。

時期:出土遺物のうち最も新しい年代に比定される陶磁器は江戸末期～明治時代のものであるため、その時期に埋没した遺構であると推定される。また掘立3やSK4・8を切っていることから江戸期以降に埋没したことが裏付けられる。

#### 畝溝1g (第19・21図)

調査区中央部に位置する。SK4を切り、SP11に切られている。平面形態は長楕円形を呈し、断面形態は皿状を呈する。溝底部は平坦で、北側が浅い二段掘りとなっている。残存部分の規模は長軸1.47m、短軸0.38m、深さ0.18mを測る。埋土は暗灰色土の単一層である。土坑内より将棋駒1点が出土している。将棋駒は遺構ほぼ中央部、埋土の中位より出土した。

#### 出土遺物 (第21図、図版6)

36は滑石製将棋駒である。ほぼ完形品で、肉眼観察では表面に墨書などは見られないため、種類は不明である。大きさは長さ3.2cm、上部幅1.7cm、下部幅2.6cm、厚さ5～8cmを測り、重さは11.65gである。

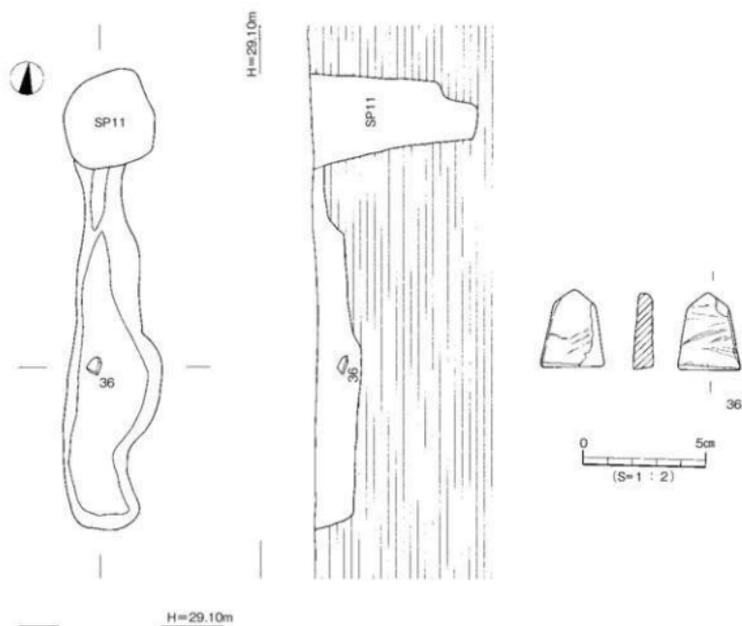
#### 畑3 (第22図)

調査区北西部で畑1の北部に位置する。畑1とは約30m間隔を隔てて平行に東西方向に伸びて西側調査区外へ続く。第Ⅲ-②層上面での検出である。畝は上位を後世に削平されていたため畝溝のみの検出であったが、検出長約3.10m分を確認し、総面積は約5㎡である。畝の幅は不均等で10cm内外を測る。畝溝は10条確認した。調査工程上、畝溝は東から西へ3a・3b・3c…3jとし、順次調査を行った。畝溝の平面形状は楕円形や隅丸長方形を呈し、畑1・2に比べて形状が不均等である。長軸平均1.60m、短軸0.20～0.30mを測る。断面形状は、おおよそレンズ状又は皿状を呈している。畝溝の埋土は畑1・2と同様に褐色土混じりの暗灰色土である。出土遺物は畝溝内から土師器があるが、小片のため図化していない。

時期:畑3は畑1・2と比較して畝や畝溝の規模や形状が若干異なっている。しかし、畑の配置関係や埋土などから畑1・2と同様に江戸期以降に埋没したものと推定される。

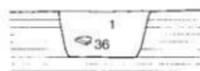
### (3) 溝

溝はSD1～39の39条を検出した。第Ⅲ-②層または第Ⅴ層上面での検出である。溝は東西方向に延びる溝と南北方向に延びる溝の2種に分類できる。東西方向に延びる溝は、SD1～5、14、18～20、31、34～39の16条があり、調査区全域で検出している。それに対して、南北方向に延びる溝はSD6～13、15～17、21～30、32、33の23条があり、調査区全域に存在するが、特に北半部に密集する。東西方向に延びる溝は、規則的な配置をしていることや掘り方がしっかりしていることから人工的に掘られた溝と考えられるが、南北方向に延びる溝は深さが浅く、掘り方がしっかりしておらず、意図

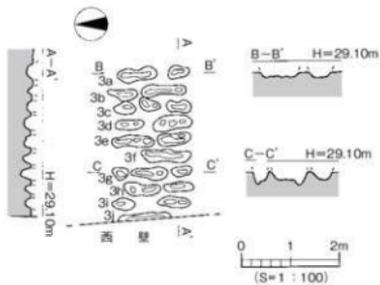


H=29.10m

1 暗灰色土 (部分的に褐色土混)



第21図 畑1畝溝1g測量図・出土物実測図



第22図 畑3測量図

的な配置でもないことから自然流路的な溝の可能性もある。

一方、遺構埋土で分類すると以下の2種類に分類できる。

A類：灰色土（SD1～21）

B類：暗灰色土（SD22～39）

A類の溝は21条あり、調査区北～東部に比較的多く分布している。B類の溝は18条あり、調査区全域に分布している。いずれも溝内からは陶磁器や土師器が出土しているが、図化しうるものはなかった。

このうち調査区全体を東西方向に縦断する形で検出したSD2と、遺構の切り合い関係から時期決定が可能な、南北方向に延びるSD26について詳述する。

#### SD2（第2図）

調査区全域に位置する。掘立3、SD6・9・11・25～27を切る。第三～②層上面での検出である。調査区東壁から西壁まで東西方向に長く検出し、規模は検出長14.80m、上場幅0.10～0.20m、深さ0.47mを測り、畑1と畑3の中間地点で東西方向に伸び東西とも調査区外へ続く。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は暗灰色土の単一層である。遺物は陶磁器と土師器が出土しているが、小破片のため図化していない。

時期：時期比定しうる遺物の出土はないが、遺構の切り合い関係から江戸期以降に埋没した遺構と考えられる。

#### SD26（第2図）

調査区中央部に位置する。掘立3を切り、SD2に切られる。第四層上面での検出である。調査区北壁から南方向に2条検出し、北壁から約2.5m付近の中間地点で同一遺構となり、また南へ向け2条に分かれている。規模は検出長5.14～6.66m、上場幅0.14～0.63m、深さ0.60mを測り、北側が調査区外へ続く。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は暗灰色土の単一層である。遺物は出土していない。

時期：遺構の切り合い関係より江戸期以降に埋没した遺構と考えられる。

### 3. その他の遺構と遺物

調査では、柱穴136基（掘立柱建物柱穴を含む）を検出した。すべて第三～②層または第四層・第五層上面での検出である。

#### (1) 柱穴

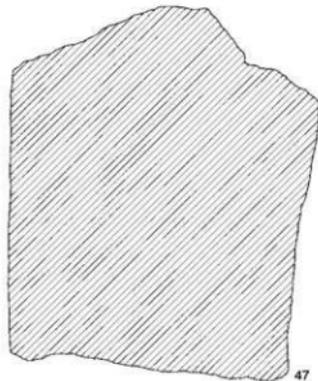
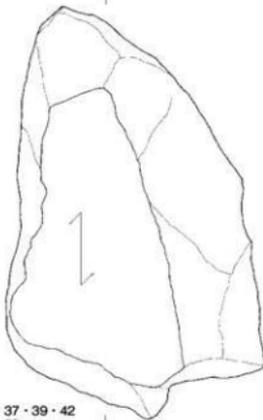
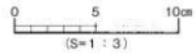
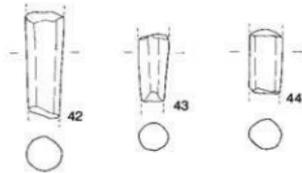
検出した柱穴は、埋土で分類すると以下の3種類である。

A類：灰色土（SP1～22・25～29・51～53・55～84・86～104・107・111～136）

B類：暗灰色土（SP23・24・30～48・50・54・85・105・106・108）

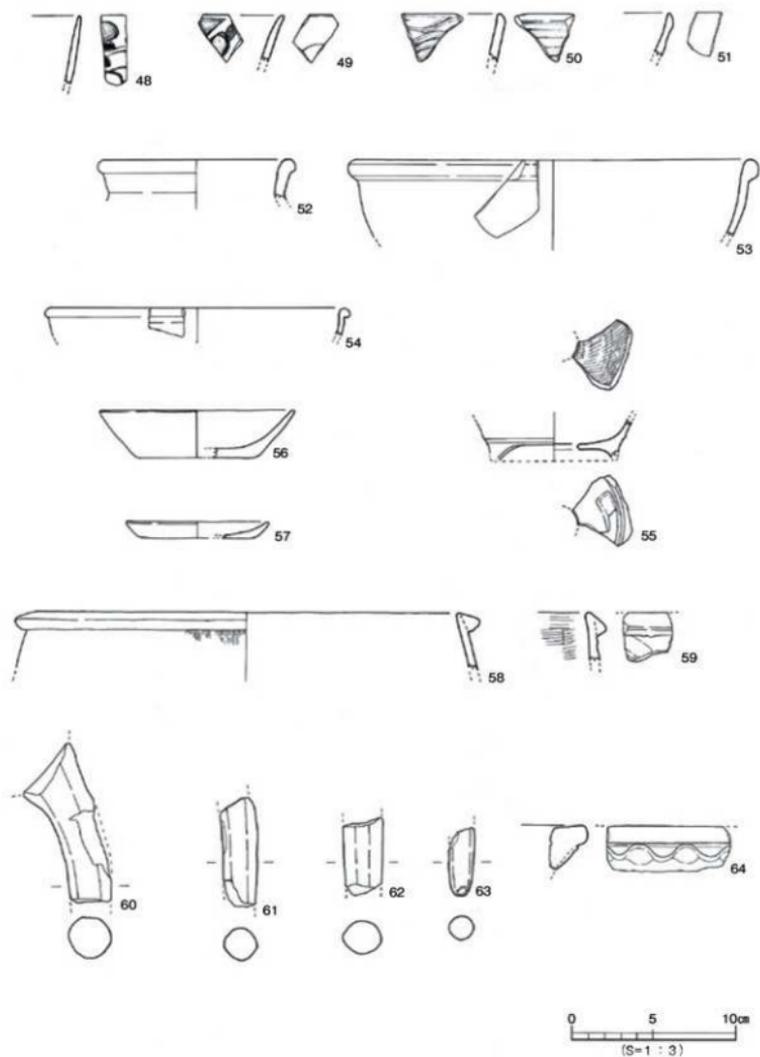
C類：黒色粘質土（SP49・109・110）

A類の柱穴は106基あり、調査区全域に広く分布している。柱穴内からは陶磁器・土師器・須恵器が出土している。B類の柱穴は27基あり、調査区全域に広く分布している。柱穴内からは陶磁器・土師器が出土している。C類の柱穴は3基あり、調査区西部に分布している。柱穴内からは遺物は出土していない。

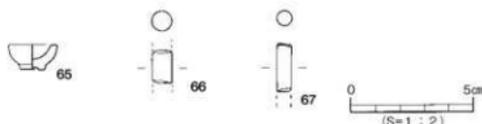


- SP91出土 : 37・39・42  
 SP102出土 : 38  
 SP39出土 : 40  
 SP118出土 : 41・43  
 SP 9出土 : 44  
 SP125出土 : 45  
 SP120出土 : 46  
 SP7出土 : 47

第23図 SP出土遺物実測図



第24図 包含層出土遺物実測図(1)



第25図 包含層出土遺物実測図(2)

これらの柱穴から出土した遺物のうち、図化するものを11点掲載した。

#### 出土遺物(第23図、図版6)

37・39・42はSP91(埋土A類)、38はSP102(埋土A類)、40はSP39(埋土B類)、41・43はSP118(埋土A類)、44はSP9(埋土A類)、45はSP125(埋土A類)、46はSP120(埋土A類)、47はSP7(埋土A類)出土品である。

37～39は土師器である。37は碗の口縁部で、内湾気味に立ち上がり、端部は尖り気味におさめる。38は坏の口縁部で、端部は丸くおさめる。39は坏の底部～体部である。やや厚手の底部からほぼ直線的に外傾する。内外面ともにナデ調整を施す。40～44は土師質土鍋である。40・41は口縁部～体部で、内外面ともにナデ調整を施す。口縁部外面に形散化した鈔がつく。40は体部中位から口縁部にかけてほぼ直立するが、41は口縁部が内傾する。内外面ともにナデ調整を施す。16世紀後半。42～44は脚部片である。45は土師器である。碗の口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は外反し尖り気味におさめる。器壁が薄く、精製された胎土で、器壁の色調は乳白色を呈する。11世紀代。46は須恵器である。坏蓋の口縁部片である。口縁部は短く屈曲し接地し、端部は尖り気味におさめる。8世紀前半。47は砥石である。2.753gを量る。欠損品で、砥面は1面のみである。砥面に火を受けたような痕跡が残る。

#### (2) 包含層出土遺物(第24・25図、図版6)

調査では、第Ⅲ層掘り下げ時に遺物が出土した。そのうち20点を掲載した。

48・49は磁器である。48は肥前系磁器の碗または蕎麦猪口と思われる。外面に描かれた文様の全体像は不明であるが、草花文と思われる。49は肥前系磁器の皿と思われ、小片のため内面に描かれた文様は不明確である。外面にはうっすらと呉須が残っている。50～55は陶器である。50は肥前系ハケ目碗である。褐色の胎土に白土でハケ目文様を施し、透明釉をかけている。外面は横島、内面は波状のハケ目文様を施す。51は灰釉陶器の碗である。内面及び外面口縁部に緑色の釉が付着する。52は備前焼の壺の口縁部である。肩部から外傾する口縁部は短く立ち上がり、端部は丸くおさめる。53は肥前系陶器の鉢である。口縁端部は玉縁状となる。54は鉢の口縁部である。口縁端部は玉縁状となる。内外面ともに茶褐色を呈する。55は植木鉢である。外面腰部には2条の段を有し、底部中央には円孔が穿たれる。

56・57は土師器である。56は坏である。底部から外傾しながら立ち上がり、口縁端部は尖り気味におさめる。内外面ともにナデ調整を施し、底部は摩滅しているため切り離し技法は不明である。57は内外面黒色の皿である。底部から短く外傾し、口縁部は丸くおさめる。内外面ともに摩滅が著しい。

58～63は土師質土鍋である。58・59は口縁部片である。口縁部外面に形骸化した三角形の鐙がつく。58は外面に縦ハケを施した後、ナデ調整を施す。59は内面にハケ目調整を施す。いずれも鐙下位に煤が付着する。16世紀。60は体部と脚部の接合部、61・62は脚部片、63は脚部先端部片である。64は器種不明の瓦質土器で、火鉢の可能性がある。口縁部下に指頭痕のある帯が貼り付けられる。65はミニチュア土製品の碗である。内外面に軸を施す。口縁部は平坦面をなす。66は磁器の把手の一部と思われる。67は石製のこうがいまたは箸と考えられる。67は端面を面取りしている。

## 第4節 小結

今回の調査では、古代や中世集落の構造解明を主目的として調査を実施した。その結果、主に中世や近世の遺構と遺物を確認することができた。

### 1. 層位

本調査地では、土層の確認ため深掘りトレンチを2ヶ所掘削した。その結果、アカホヤ火山灰とAT火山灰の堆積が確認できた。従来より桑原地区ではこれらの火山灰の1次堆積・2次堆積が確認されていることから、今回の成果は火山灰の堆積状況や分布域を知るうえで貴重な資料となるものである。

### 2. 遺構

中世の遺構は掘立柱建物と土坑を検出した。掘立1・2は、東西1間×南北1間以上の規模の建物であり、2棟が整然と建て並べられた建物配置の状況から、農村部での生活の様子をうかがうことができた。また掘立3は、6間以上×2間規模の桁行長12.90m以上、梁行長4.2mを測る東西棟の建物である。梁行方向の柱穴の検出状況から推測して、本来は調査区西側に2m程度延びた桁行15.5m前後の建物と推定される。これらのことから、中世においては居住域として土地利用されていたことが明らかとなった。

近世の遺構は土坑や畑・溝を検出した。調査区中央～西部では畑遺構を検出したため、近世以降においては生産域として土地利用されていたものと推定される。特に畝や畝溝の規模や配置などを知る手がかりを得ることができた点は評価されるものであろう。さらに重要な点として複数の畑を検出した点が挙げられる。しかし畑1・2・3の明確な前後関係は不明である。畑1・2は位置関係から同時期に存在していた可能性が考えられるが、畑3は規模や形状が異なることから時期差がある可能性も否定できない。

その他、畑1・2と畑3との間隙に東西に伸びるSD2は配置状況から水路的な役割を持っていたと推定される。しかし畑の全体規模や付属施設の検出には不明確な部分があり、更にはそれらの作業に携わった人々が暮らす集落の検出ができていないことから、これらの解明は今後の課題としたい。

### 3. 遺物

畑の畝溝内から陶磁器が多数出土した。このことは陶磁器が武家地や町人地以外の農村部でも日用雑器として使用されていたことを示す資料として注目される。そのほか、畝溝1g内から滑石製将棋駒が1点出土している。将棋の駒は11世紀以降に中国大陸から輸入された「娯楽」の品で、本調査地出土の駒は江戸期以降のものと推定され全国的に貴重なものである。堀進氏の研究によれば、平成22年10月現在、全国に105を超える遺跡で約500点が出土している。将棋の駒が農村部で出土しているこ

とは将棋が盤上遊技として一般庶民にまで浸透していたことを示すものである。

今回の調査では、主に中世や近世の遺構や遺物を検出し、集落域から生産域への土地利用の変遷をたどることができた。今後は周辺域における調査によって更に広範囲での中世～近世集落の構造とそ  
の変遷の解明を進めていきたい。

#### 【参考文献】

- 大橋 康二『古伊万里の文様』理工学社1994  
九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年』2000  
天童市将棋資料館『天童の将棋駒と全国遺跡出土駒』2003  
三好 裕之ほか『道後町遺跡Ⅱ』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター2005  
齊藤 進ほか『新宿六丁目遺跡』日本テレビ放送網株式会社・東京都埋蔵文化財センター2005  
栗田 茂敏『番町遺跡』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター2006  
丸毛 のぞみ『古代末から中世前半の伊予地域の在地土器について』『地域・文化の考古学』2008

## 第6章

# 小坂遺跡

- 2次調査 -



## 第6章 小坂遺跡2次調査

### 第1節 調査の経緯 (第1図)

#### 1. 調査に至る経緯

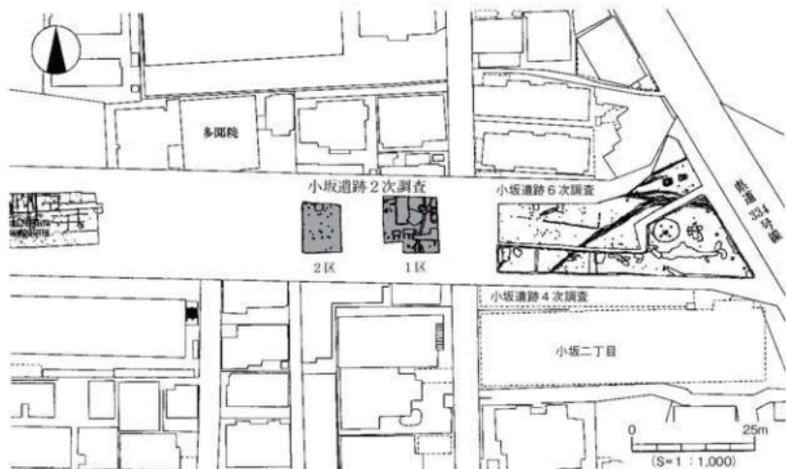
調査地は松山市埋蔵文化財包蔵地[№110 釜ノ口遺跡]内に所在する。調査地周辺は中村松田遺跡、小坂七ノ坪遺跡、素鷲小学校遺跡などの調査が行われ、弥生時代～古墳時代の集落関連遺構が確認されている。調査地の道路を隔てた東側には小坂遺跡4次・6次調査があり、西側約50mには小坂遺跡1次調査がある。試掘調査は、平成18年3月14日、15日に行なった。試掘調査の結果、調査地に遺構・遺物が検出され、弥生時代と中世の集落関連遺跡があることを確認した。この結果を受け、松山市都市整備部道路建設課と(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター(以下、埋蔵文化財センター)は協議を行い、工事に伴って消失する遺跡に対し記録保存のための発掘調査を実施する事となった。発掘調査は弥生時代～中世の集落構造の解明を主目的とし、埋蔵文化財センターが主体となって2006(平成18)年6月1日より本格調査を実施した。

#### 2. 調査の経過 (第2図)

調査地の現状は造成地である。調査にあたっては、掘削した土砂の置場を確保するため調査地の東側を1区、西側を2区として二区画に分けて調査を行った。

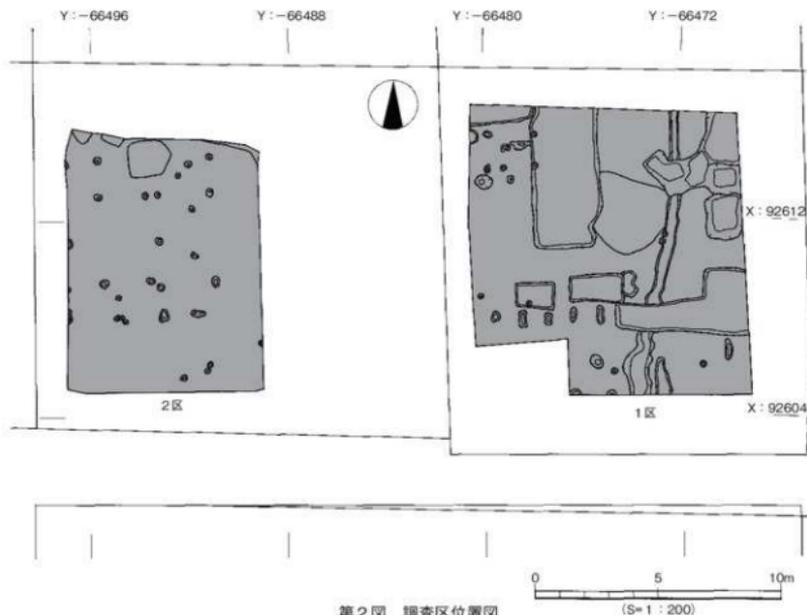
遺構名称については1区で検出した遺構には番号の先頭に1を、2区で検出した遺構には2を付し3桁で表示した。調査は、東側の2区より開始した。以下、調査行程を略記する。

平成18年6月1日 仮設調査事務所を設置する。発掘用具、機材の準備と搬入を行う。調査区に縄



第1図 調査地位位置図

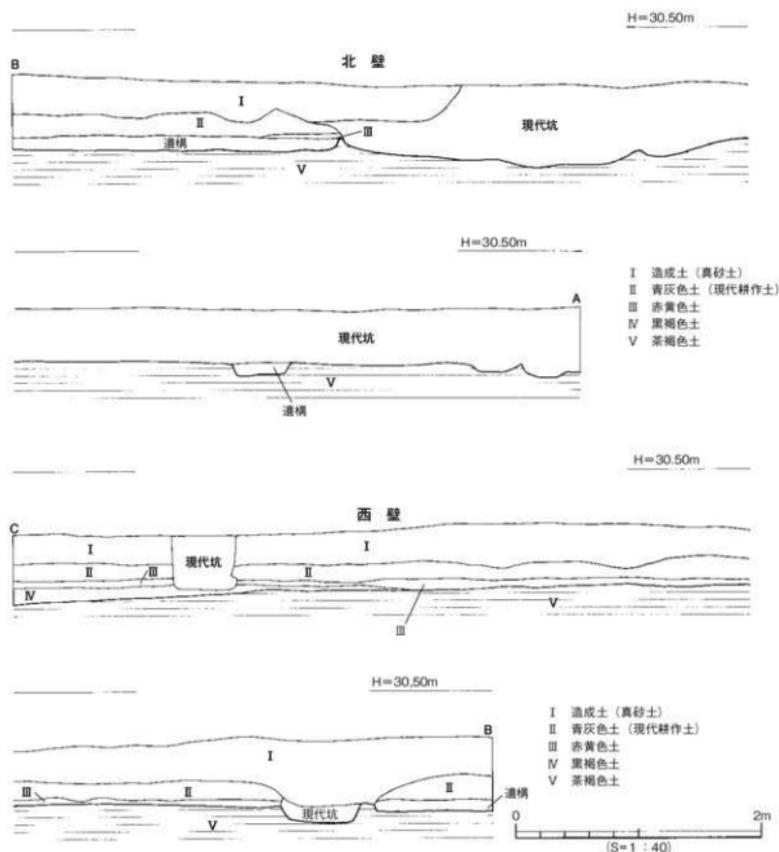
- 張り等の安全対策を行う。重機により2区の掘削を開始する。
- 6月2日 2区の掘削を終了し、人力によって遺構検出作業を行う。
- 6月6日 遺構検出作業を終了し、遺構検出状況の写真撮影を行う。
- 6月7日 遺構配置図を作成し、遺構の掘り下げと測量作業を開始する。
- 6月13日 各遺構の土層写真撮影を行う。
- 6月14日 柱穴SP219より視と青磁が出土する。
- 6月18日 遺構の完掘写真撮影を行い、2区の調査を終了する。
- 6月19日 重機により2区の埋め戻しを行う。
- 6月20日 重機により1区の掘削を開始する。
- 6月21日 1区の掘削作業を終了し、人力によって遺構検出作業を行う。
- 6月28日 遺構検出作業を終了し、遺構検出状況の写真撮影を行う。遺構配置図を作成し、遺構の掘り下げと測量作業を開始する。
- 7月5日 四級基準点（世界測地系）の設置。
- 7月26日 遺構の完掘写真撮影を行う。
- 7月27日 土層、遺構の測量作業を行い、2区の調査を終了する。
- 7月28日 重機により1区の埋め戻しを行う。
- 7月31日 1区の埋戻し作業を終了し、調査を完了する。



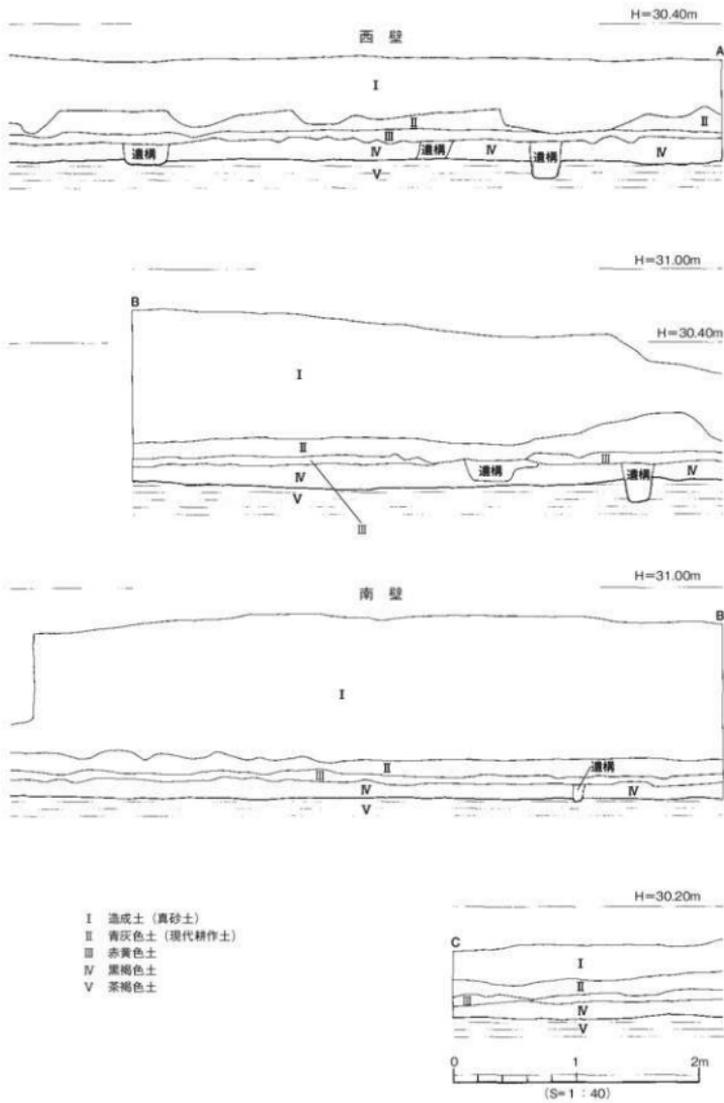
第2図 調査区位置図

## 第2節 層位 (第3・4図、図版2)

1区、2区とも基本層序は上から第I層造成土、第II層青灰色土、第III層赤黄色土、第IV層黒褐色土、第V層茶褐色土である。第I層は主に真砂土である。層厚20~52cmを測る。第II層は現代の耕作土である。層厚9~20cmを測る。第III層は第II層の床土である。第IV層は、1区の北側で現代の削平により失われているが南西部には遺存する。層厚は5~15cmを測る。第V層以下はいわゆる地山と呼んでいる層である。第V層は、南西方向に向かって緩やかな傾斜となっており下がる。遺構の検出は、この第V層上面で行った。検出した遺構は、第IV層以上から掘られたものと考えられる。



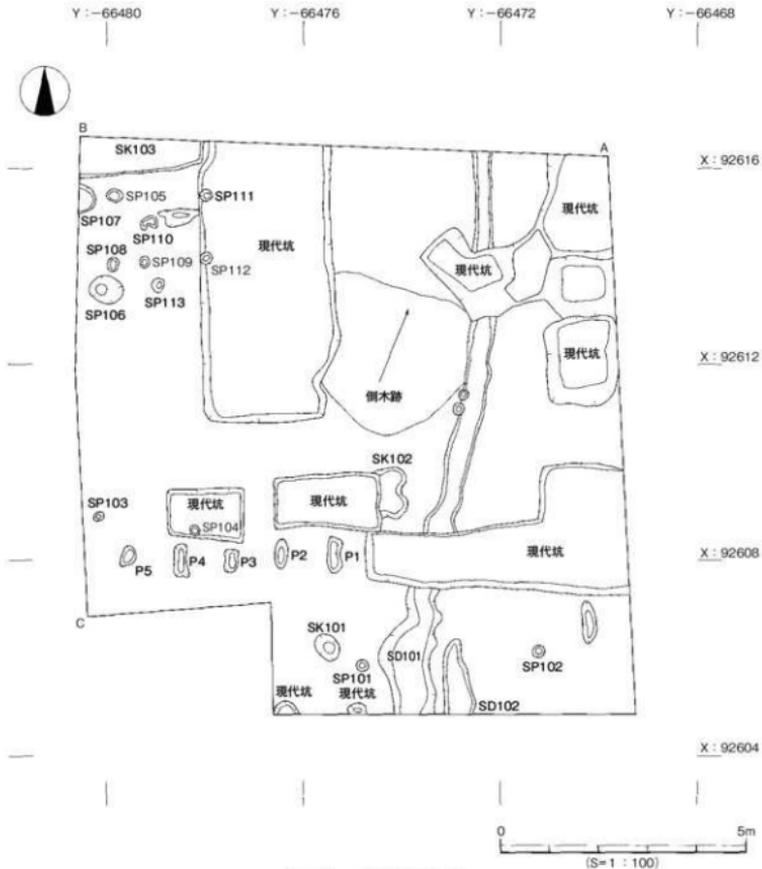
第3図 1区土層図



第4図 2区西壁・南壁土層図

## 第3節 遺構と遺物 (第5・6図)

1区で検出した主な遺構は土坑(SK)3基、柱穴(SP)13基、溝(SD)2条、畝溝5条、倒木跡(倒木)1基である。2区で検出した遺構は柱穴(SP)29基である。遺物は弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、硯などが出土している。遺構の時期は、弥生時代後期や中世以降と考えられる。そのほか、1区・2区では現代坑を検出している。特に1区では、試掘時に把握できなかった現代坑が広範に検出されたが、出土遺物より昭和後半以降のものと考えられた。このため規模・数については触れていない。以下、1区・2区を合わせ時代毎に主な遺構と遺物について記述する。



第5図 1区遺構配置図

## 1. 弥生時代

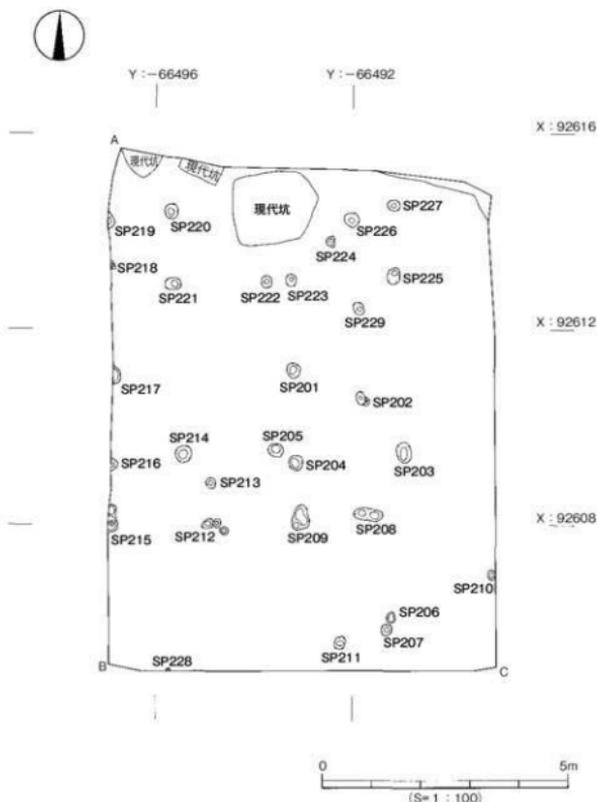
弥生時代と考えられる遺構には溝1条、土坑2基がある。検出した遺構は現代の削平により遺存状況が悪く、図示できる遺物は少ない。時期は、出土遺物や埋土色などから弥生時代後期後半～末と考えられる。

### (1) 溝

#### SD101 (第7図、図版1)

SD101は、1区の東側で検出した。南北方向の溝である。埋土は赤灰色細砂である。断面形は逆台形状となる。検出規模は長さ11.60m、幅0.40～1.00m、深さ0.06～0.11mを測る。出土遺物は少なく、わずかに弥生土器が出土している。

**出土遺物** (第7図、図版4) : 1は複合口縁壺の口縁部片である。外面に波状文が施されている。



第6図 2区遺構配置図

## (2) 土坑

## SK101 (第9図)

1区の中央部南よりで検出した。平面形は楕円形を呈する。検出規模は長軸0.55m、短軸0.41m、深さ0.53mを測る。埋土は暗褐色土である。遺物は弥生土器の胴部片が出土している。

## SK102 (第9図)

1区の中央部、SD101の西側で検出した土坑である。西側は現代坑に切られる。検出規模は長軸1.04m、短軸0.40m、深さ0.04~0.06mを測る。遺物は弥生土器の胴部片が出土している。

## 2. 中世以降

中世以降と考えられる遺構には畑状遺構、土坑1基、柱穴10基がある。遺物が出土していない遺構もあり、時期を埋土色などにより中世以降とした。

## (1) 畑状遺構 (第8図)

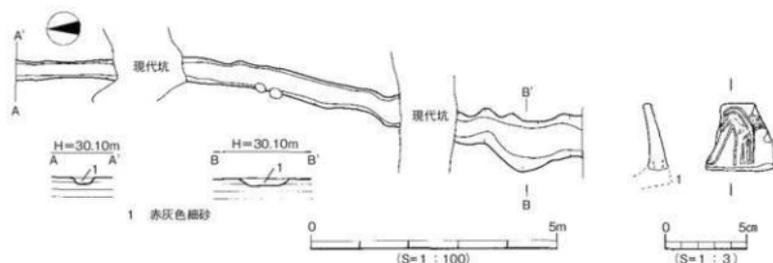
畑はP1~P5の畝溝跡を5条検出した。平面形は隅丸長方形や楕円形を呈する。断面形は逆台形状またはレンズ状を呈している。検出規模は長軸42~76cm、短軸25~30cm、深さ4~7cmを測る。

## (2) 土坑

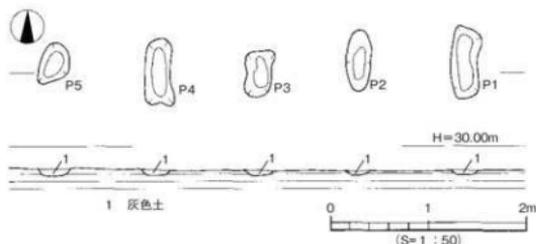
## SK103 (第9図)

SK103は、1区の北西隅で検出した。北側と西側が調査区外となり、全容は不明。埋土は灰黄色土である。検出規模は長軸2.55m、短軸0.80m、深さ0.11mを測る。遺物は土師器が出土している。

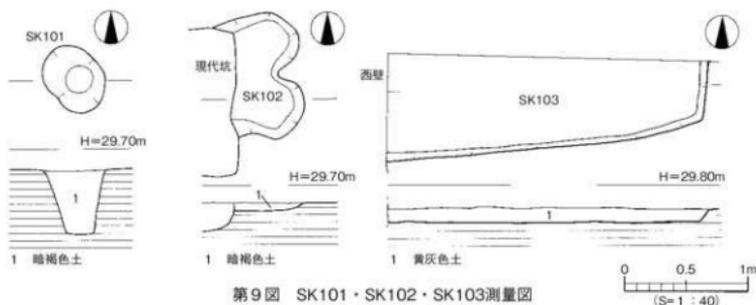
出土遺物 (第10図) : 2は鍋の口縁部。口縁部は下方にのびる。端部は丸くおさめる。



第7図 SD101測量図・出土遺物実測図



第8図 畑状遺構測量図



(3) 柱穴 (第11・12図、図版3・4)

S P202

2区での検出である。平面形は円形を呈する。規模は直径20cm、深さ18.2cmを測る。遺物は底部回転糸切りの土師器坏3が出土している。

S P204

平面形は円形を呈する。規模は直径30.3cm、深さ48cmを測る。坑底には根石が据えられる。遺物は土師器坏4が出土している。

S P205

平面形は円形を呈する。規模は直径28cm、深さ35cmを測る。遺物は土師器坏5が出土している。

S P207

平面形は円形を呈する。規模は直径20cm、深さ11cmを測る。遺物は土師器坏6が出土している。

S P209

平面形は不整形を呈する。規模は長軸50cm、短軸30cm、深さ12~22cmを測る。断面形態は東側が浅い二段掘りとなる。遺物は底部回転糸切りの土師器皿7が出土している。

S P214

平面形は円形を呈する。規模は直径31cm、深さ30cmを測る。遺物は土師器8・9が出土している。

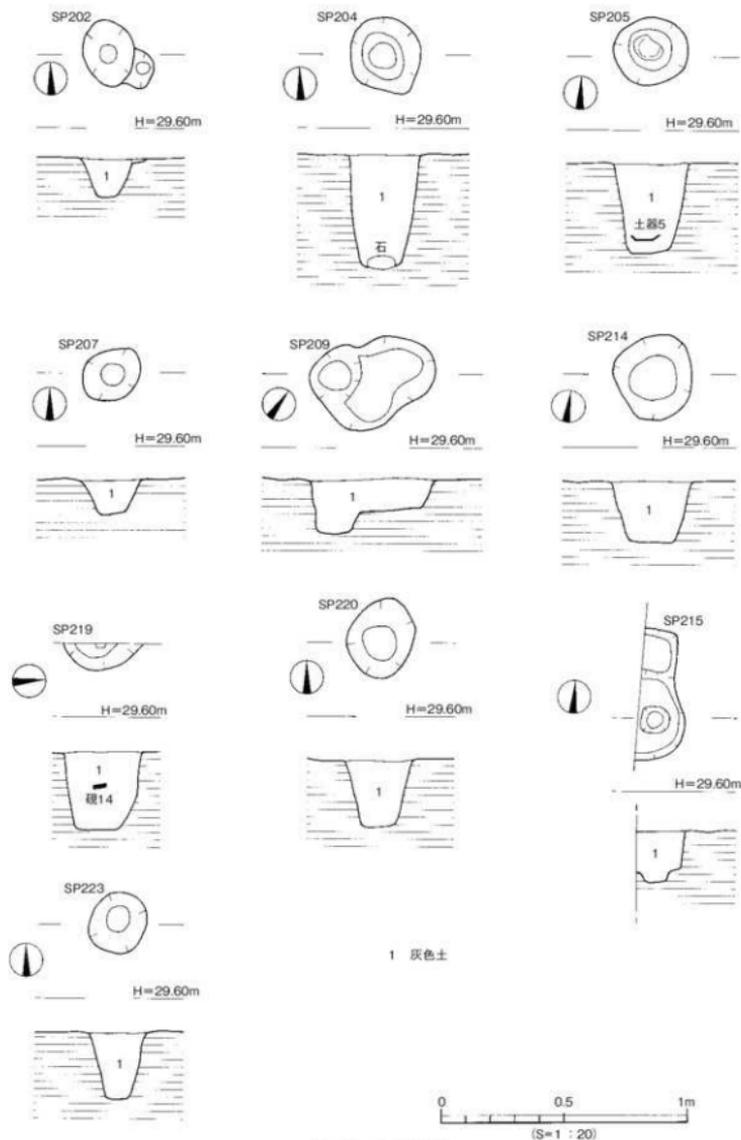
S P215

西側は調査区外のため全容は不明である。規模は長軸55cm、短軸15cm、深さ12~22cmを測る。遺物は土師器坏10・11、亀山窯と考えられる甕の胴部片12が出土している。

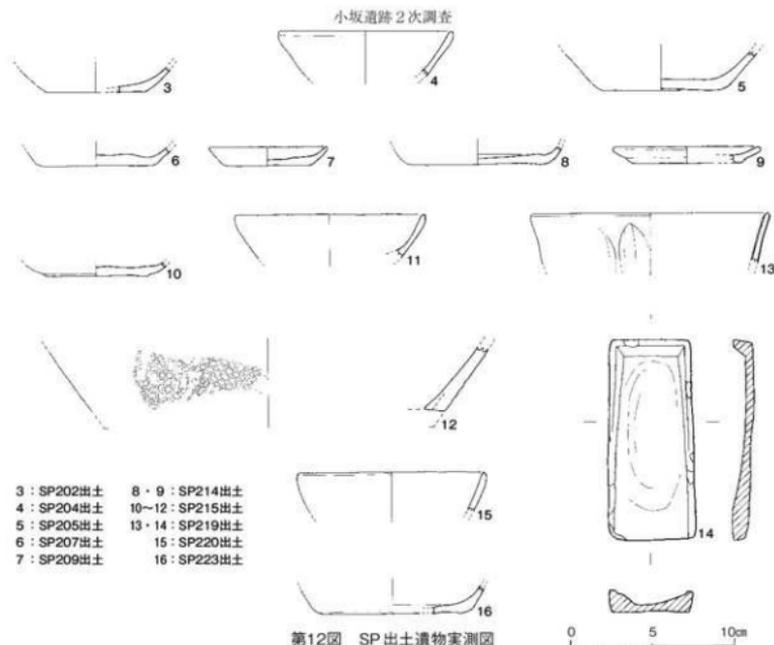
S P219

西側は調査区外のため全容は不明である。規模は長軸30cm、短軸12cm、深さ30cmを測る。遺物は青

遺構と遺物



第11図 SP測量図



磁碗13と凝灰岩製の硯14が1面出土している。

#### S P 220

平面形は円形を呈する。規模は直径30cm、深さ26cmを測る。遺物は土師器杯15が出土している。

#### S P 223

平面形は円形を呈する。規模は直径23cm、深さ28cmを測る。遺物は土師器杯16が出土している。

### 第3節 小結

今回の調査では、弥生時代と中世の遺構・遺物を確認した。弥生時代では、1区において溝と土坑を確認したが現代の削平により上部は失われ遺存状態は悪かった。検出した遺構は、出土遺物より弥生時代後期後半頃と考えられる。当調査地を挟んだ東側には東本周辺に広がる集落域があり、西側には中村松田遺跡を中心とする集落域が確認されている。弥生期の遺構密度が少ない事は、それら二つの集落の境に調査地が立地しているものと考えられる。

中世では、S P 219から硯と青磁片が出土している。青磁は、14世紀後半に比定される龍泉窯系青磁碗である。硯も同時期に比定され、時期の判る硯として貴重な資料となるものである。また、調査地の西側の隣地には多聞院があり、寺内には地藏尊が祀られている。地藏尊には文中3（1374）年の銘があり、在銘の石地藏尊では松山市でいちばん古く、松山市指定の有形文化財となっている。その地藏尊の祀られた御堂の東約2.5mにこのS P 219が位置している。时期的に地藏尊の制作年代と一致している事から、調査地は14世紀後半の集落域内に立地するものと考えられる。

第7章

小 坂 遺 跡

- 3次調査 -



## 第7章 小坂遺跡3次調査

### 第1節 調査の経緯（第1図）

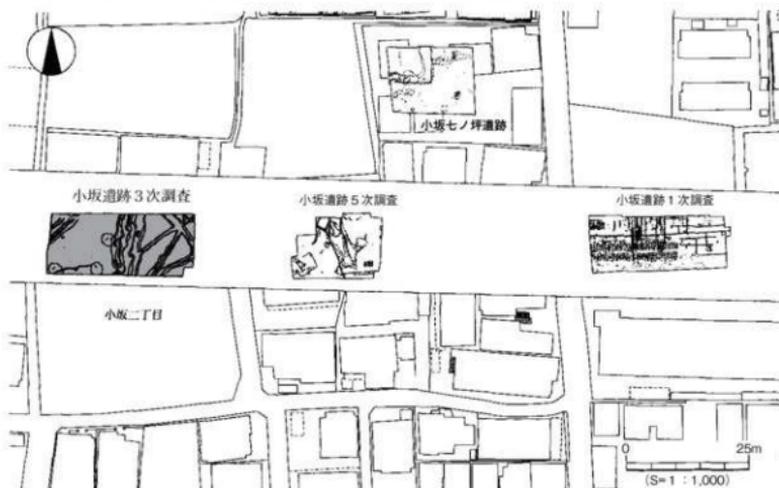
#### 1. 調査に至る経緯

申請地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地〔No.110 釜ノ口遺跡〕内にある。申請地周辺は中村松田遺跡、七ノ坪遺跡、素鷲小学校遺跡などこれまでに数多くの調査が行われ、弥生時代～古墳時代にかけての集落関連遺構が確認されている。文化財課の指導のもと（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）は確認願いが提出された地番について、平成18年8月8日から同月9日まで二日間の試掘調査を行なった。調査の結果、遺構・遺物が確認され弥生時代と古代の遺跡が確認された。この結果を受け文化財課、埋文センターと申請者は、発掘調査についての協議を行い、開発に伴って消失する遺跡に対して、記録保存のため本格調査を実施することとなった。調査は埋文センターが主体となり2006（平成18）年10月2日より本格調査を実施した。

#### 2. 調査の経過

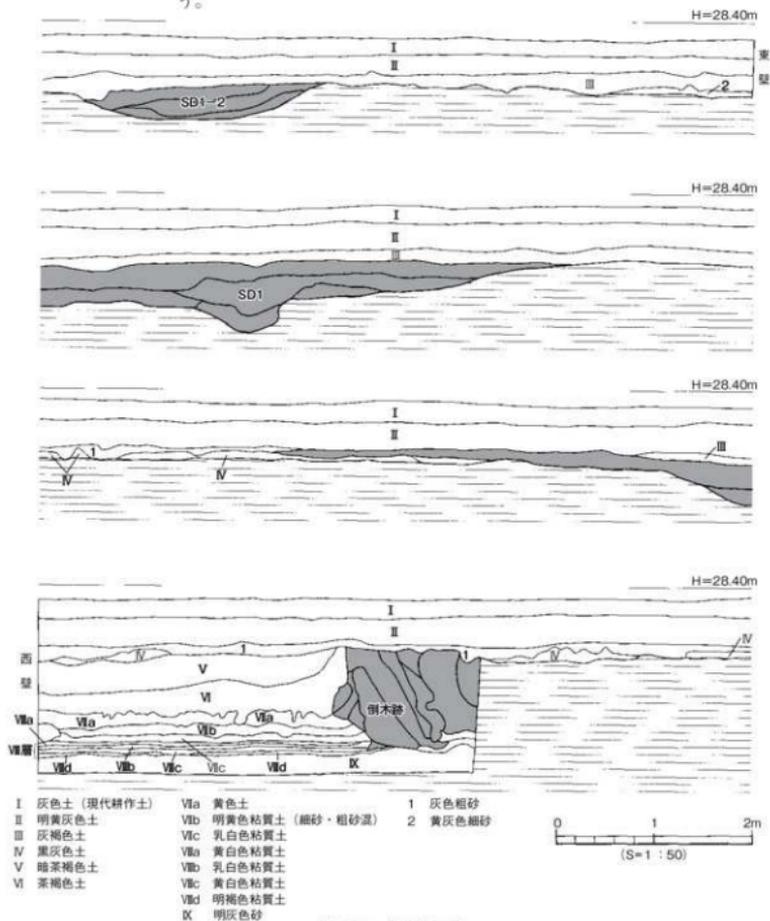
調査地の現況は、耕作地である。調査は、掘削した土砂置き場を確保するため3回に分けて行った。調査は北側より開始し、順に西側、南側と行った。以下、調査工程を略記する。

- 平成18年10月2日 仮設調査事務所を設置する。発掘用具、機材の準備を行う。
- 10月3日 重機により北側の掘削を開始する。人力によって遺構検出作業を行う。
- 10月11日 4級基準点の設置作業（世界測地系）を行う。
- 10月24日 高所作業車を使用し遺構検出状況の写真撮影を行う。



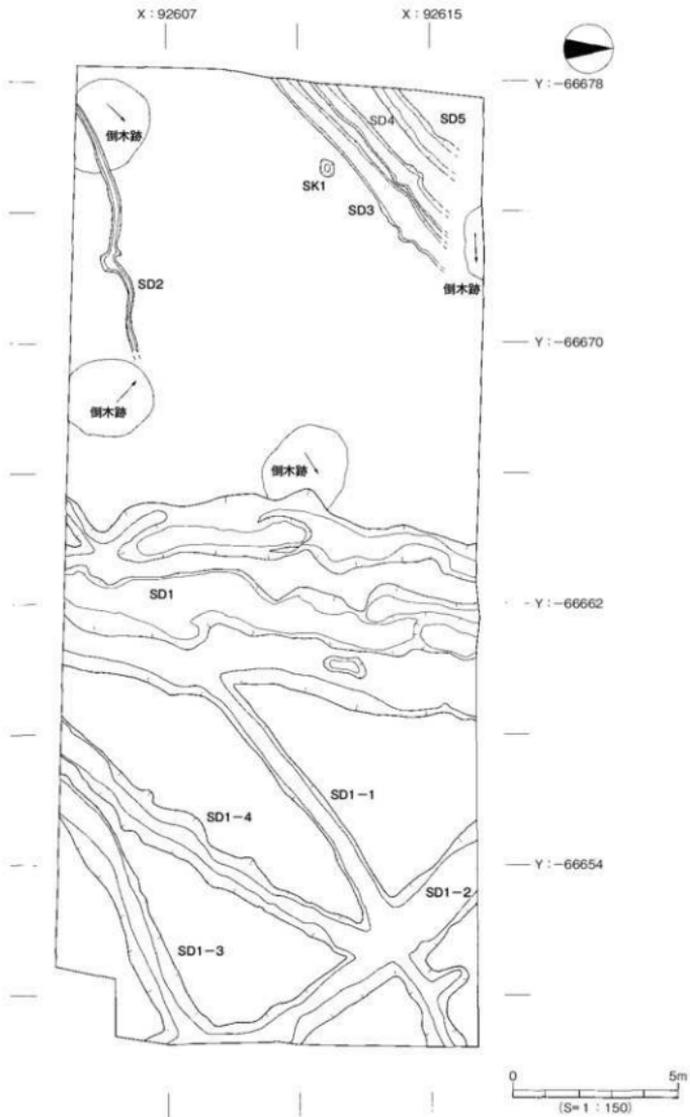
第1図 調査地位置図

- 10月25日 遺構の掘り下げを開始する。遺構配置図の作成作業。  
 11月8日 S R 1土層図作成。土層観察用ベルト撤去。北側遺構の掘削を完了する。  
 11月9日 高所作業車を使用し遺構完掘状況の写真撮影を行う。  
 11月13日 北側の調査を終了し、重機により北側調査地の埋め戻しを行う。  
 11月14日 重機により西側の掘削を開始する。  
 11月15日 西側の掘削を終了する。遺構検出作業を開始する。  
 11月16日 遺構の検出を終了する。遺構配置図を作成し、遺構の掘り下げと測量作業を行う。

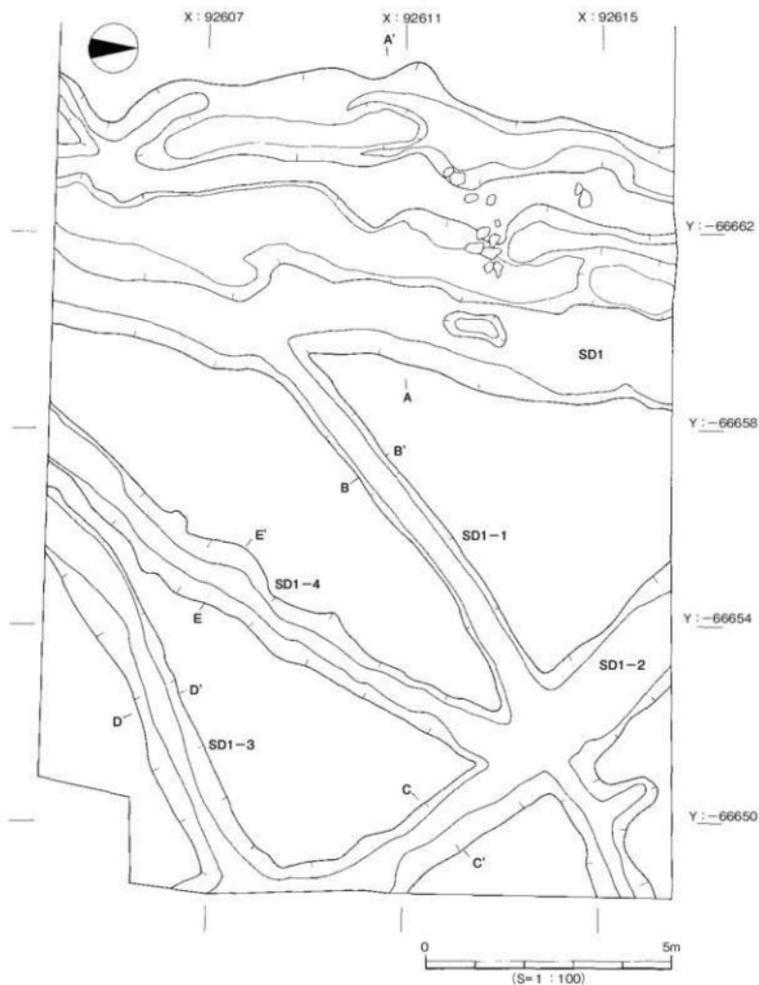


第2図 北壁土層図

調査の経緯



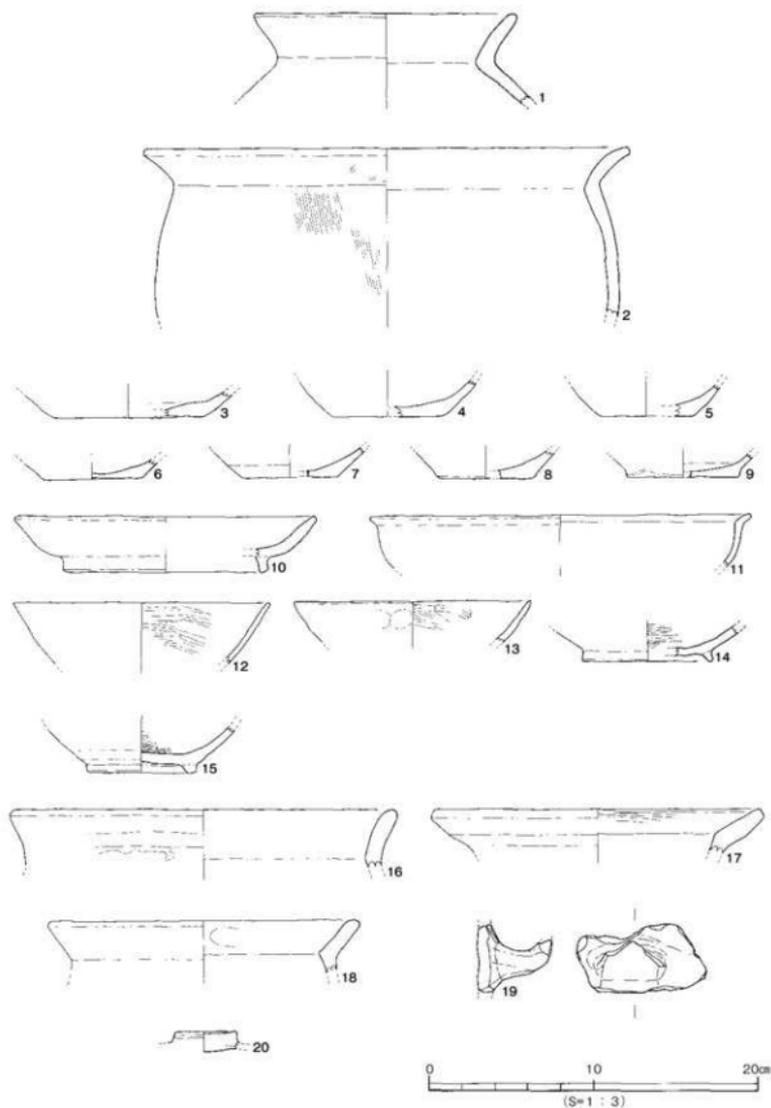
第3図 遺構配置図



第4図 SD1・SD1-1・SD1-2・SD1-3・SD1-4測量図

- 11月27日 遺構の掘り下げを終了し、完掘状況の写真撮影を行う。
- 11月28日 重機により西側の埋め戻しと南側の掘削を開始する。
- 11月29日 南側の掘削を終了し、遺構検出作業を開始する。
- 12月1日 遺構検出を終了し、遺構検出状況の写真撮影を行う。遺構の掘削を開始する。
- 12月11日 2回目の4級基準点の設置作業を行う。



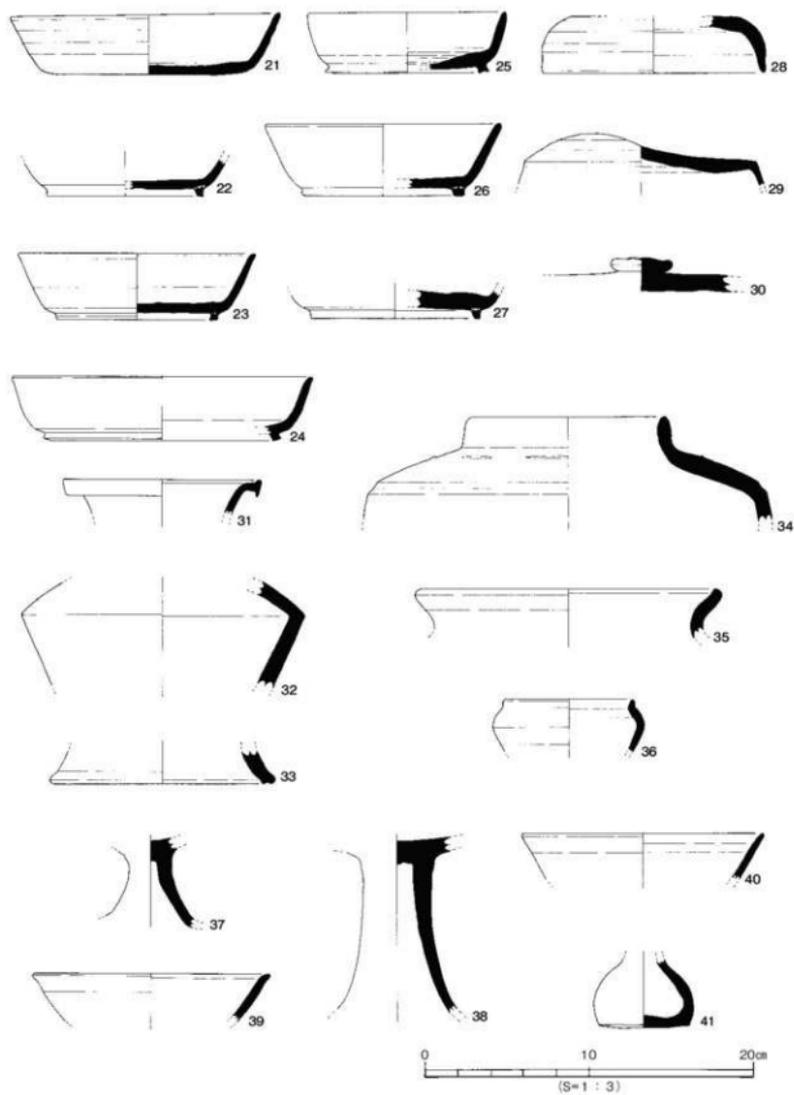


第6図 SD1出土遺物実測図(1)

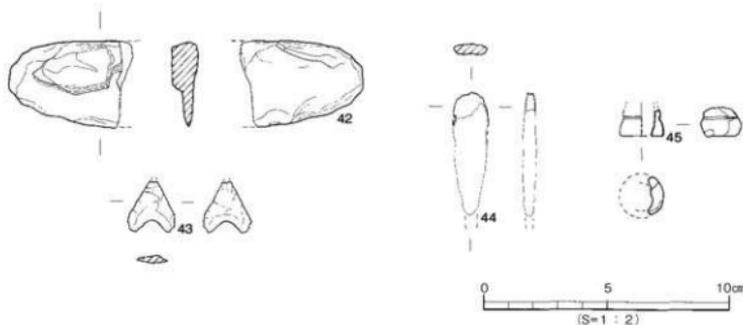
ない。検出規模は最長13.10m、幅0.88～1.95m、深さ0.14～0.41mを測る。出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器、石器、鉄器、不明銅製品がある。

#### 出土遺物（第6～9図、図版6）

1～45はS D 1から出土した遺物である。1・2は弥生土器。1は甕形土器、2は鉢形土器である。いずれも弥生後期後半のものである。3～9は土師器。底部の切り離しは磨滅のため不明瞭であるが7～9はヘラ切りと考えられる。10は高台付皿。推定口径18cm、器高3.4cmを測る。12・13は土師器の口縁部。14・15は高台付の坏。坏内面にはヘラミガキが施されている。16～18は甕の口縁部片。いずれも器壁が厚い。16は口径22.8cm、17は口径20.2cm、18は口径18.5cmを測る。19は甕の把手である。20は赤焼けの坏蓋のつまみである。21～41は須恵器。21～27は坏。21は口径16.3cm、器高3.8cmを測る。22の高台は面をもって平坦面で設置する。23は口径14.3cm、器高4cmを測る。24は口径18cm、器高3.9cmを測る。25は口径11.8cm、器高3.6cmを測る。高台端面はナデによりくぼむ。26は口径14.1cm、器高4.4cmを測る。口縁端部は丸く仕上げる。高台は面をもって平坦面で設置する。色調は灰白色を呈する。27は器壁の厚い底部片である。28～30は坏蓋。28の口縁端部は丸く、器壁は厚い。天井部は平坦。29は天井部が焼け歪んでいる。30はつまみ。色調は灰白色を呈する。31～34は壺。31は長頸壺の口縁部片。口縁部は短く水平に屈曲し、口縁端部は上下に肥厚する。口径は12cmを測る。32は長頸壺の胴部片。胴部上半は稜をもって内側に屈曲する。33は長頸壺の脚部。31～33は同一個体とも考えられる。34は有蓋短頸壺。肩上部に重ね焼きによる粘土の付着が見られる。口縁部は短く直立する。肩部に1条の沈線が巡る。口径11.8cmを測る。35は甕。内湾気味に立ち上がる口縁端部。口径は18cmを測る。36は鉢。口縁部はやや外傾して短く立ち上がる。口径は7.7cmを測る。37・38は高坏の脚部である。坏部と脚端部は欠失する。39・40は坏の口縁部片。41は甕。平底の底部から内湾して立ち上がる胴部。頸部以上は欠失している。底形5.5cm、残高は4.2cmを測る。色調は灰白色を呈する。42は石包丁の未製品。残長4.7cm、幅3.5cm、厚さ1.1cm、重さ22.06gを測る。材質は緑色片岩である。43は無茎石鏃。先端部は欠失する。残長2.05cm、厚さ0.3cm、重さ0.92gを測る。材質はサスカイト製である。44は鉄鏃。残長5.1cm、幅1.4cm、厚さ0.5cm、重さ4.06gを測る。45は不明銅製品。残長1.1cm、幅1.8cm、厚さ0.5cm～0.15cm、重さ2.8gを測る。46～50はS D 1-1から出土した須恵器である。46は高台付の坏。高台接地部は内側で接地する。口径17.6cm、器高4.1cmを測る。47は高台付坏の底部片。高台は低く、内側で接地する。48・49は甕。48は推定口径40cmを測る大型品である。頸部に波状文が施される。49は口径42.4cmを測る大型品である。口縁部は大きく外反する。文様帯には波状文が2条施される。50は甕の把手。51～58はS D 1-2から出土した遺物である。51・52は蓋坏の身。51のたちあがりは内傾して立ち上がる。たちあがり端部は内傾する面をもつ。受部は水平に短くのびる。52のたちあがりは短く上方に立ち上がる。たちあがり端部は丸く仕上げる。受部はやや外上方にのびる。53は高台付の坏底部。色調は外面黄灰色、内面は黒色を呈する。54は高台付の坏底部。高台の接地部は平坦面で接地する。55は蓋坏の蓋。口縁部を分ける稜は僅かに突出する。口縁端部は面をもつ。口径は14.0cmを測る。56は天井部と口縁部の境は沈線によって分けられる。57は天井部と口縁部の境が不明瞭となる。口縁端部は丸く仕上げられる。口径は17.2cmを測る。58は高坏の脚部である。59～61はS D 1-4から出土した須恵器である。59は蓋坏の蓋。天井部と口縁部の境が不明瞭である。口縁端部は丸く仕上げる。口径は13cmを測る。60は短頸壺の口縁部片。短く外反する口縁部、口縁端部は外に肥厚する。口径は11.8cmを測る。61は短頸壺の蓋。天井部と口縁端部は欠失する。



第7図 SD1出土遺物実測図(2)



第8図 SD1出土遺物実測図(3)

時期：出土遺物から9世紀後半には埋没したものとする。

#### SD3 (第10図)

SD3は調査区の西側、第IV層上面での検出である。北東方向から南西方向に流れる溝である。埋土は、灰色砂である。検出規模は長さ7.30m、幅0.49～0.70m、深さ0.05～0.07mを測る。遺物は、須恵器片が出土している。

時期：古墳時代中期以降か。

#### SD4 (第10図)

SD4は、SD3の西側に隣接し平行して流れる。黒灰色土上面での検出である。埋土は、灰色砂である。検出規模は長さ5.60m、幅0.32～0.50m、深さ0.05～0.15mを測る。遺物は、出土していない。

時期：遺物は出土していないがSD3と埋土が同じである事から古墳時代中期以降とする。

#### SD5 (第10図)

SD5は、SD3・SD4の西側に隣接し平行して流れる。黒灰色土上面での検出である。埋土は、灰色砂である。検出規模は長さ3.00m、幅0.70m、深さ0.04～0.19mを測る。遺物は出土していない。

時期：遺物は出土していないがSD3・4と埋土が同じである事から古墳時代中期以降とする。

#### SD2 (第11図、図版3)

SD2は調査区の南西部で検出した。検出長7.85m、幅0.18～0.58m、深さ0.04～0.10cmを測る。埋土は黒褐色土である。遺物は出土していない。

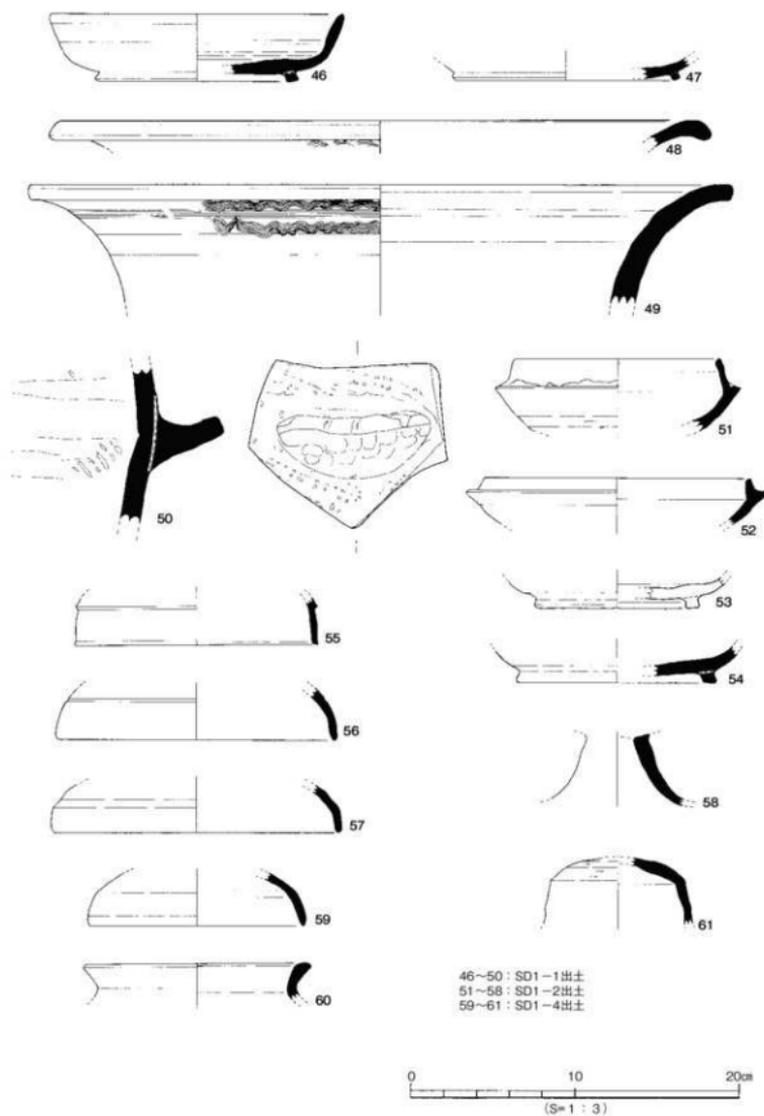
## 2. 土坑

#### SK1

SK1は、調査地の西側で検出した土坑である。平面形は、楕円形を呈する。遺構埋土は黒灰色土である。検出規模は長軸0.60m、深さ0.25mを測る。遺物は出土していない。

## 3. 倒木跡

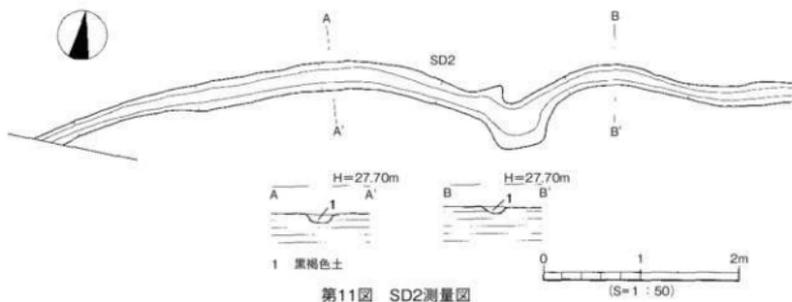
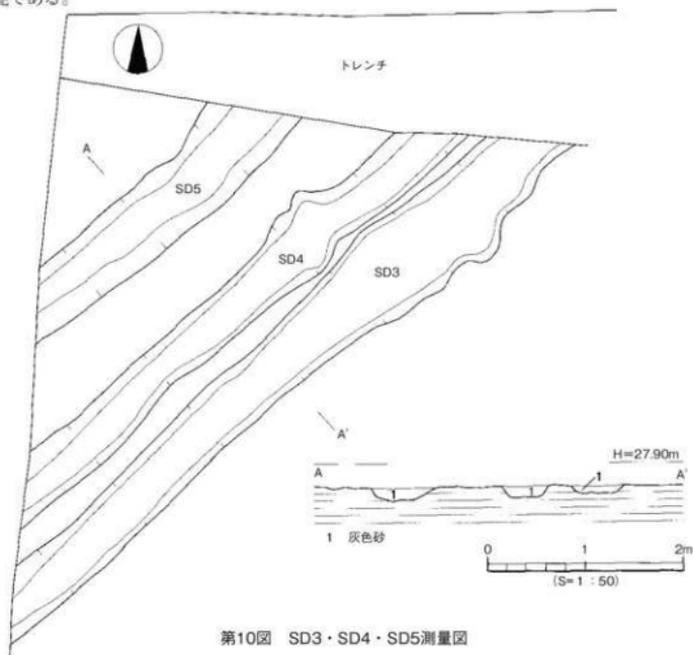
今回の調査では倒木跡を4基確認した。遺構配置図には倒れたと思われる方向を矢印で表した。遺物は出土していない。

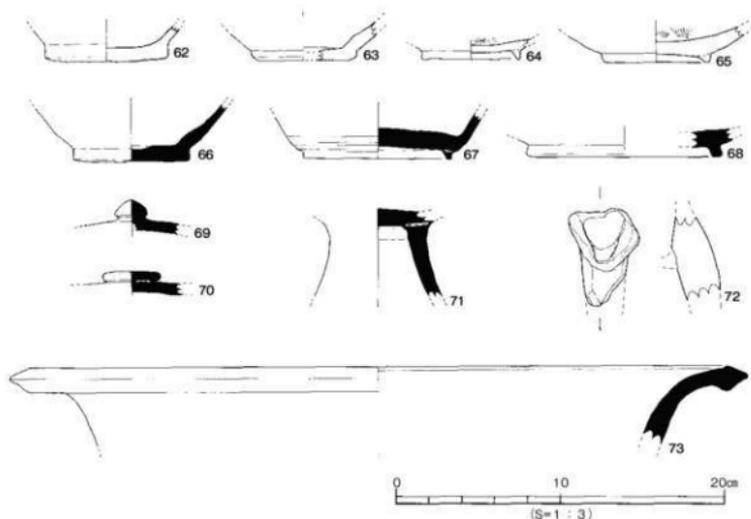


第9図 SD1-1・SD1-2・SD1-4出土遺物実測図

## 4. その他出土遺物 (第12図62-73、図版6)

遺構検出時に出土した遺物である。62・63は平高台の土師器杯。64・65は内黒の黒色土器碗。66は平高台の椀形態のものである。67・68は高台付の杯。69・70はつまみ。71は高杯。72は鍋の脚。73は甕である。





第12図 その他出土遺物実測図

### 第3節 小結

今回の調査では、主に古代の溝を検出した。SD1は調査地の中央部を南北に流れる溝である。砂層の堆積が厚くみられ、水量は多かったものと推測される。溝中からは弥生時代から平安時代（10世紀前半頃）までの遺物が出土している。このSD1の東側には接続する数条の溝（SD1-1～SD1-4）が検出された。全容は不明ながら網目状に配されているように考えられる。溝中からは7世紀から9世紀頃の遺物が出土している。溝底には砂層の堆積がみられ、水が流れていたことを示している。この溝の一部がSD1と合流している。平面精査からは、溝の切り合いを確認することができず同時期に埋没したものと思われる。埋没年代は、出土遺物より10世紀後半には埋没していたものと考えられる。今回検出した溝は、どのような役割を果たしたかは明確ではない。畦畔などは検出していないが、溝の性格を考えれば調査区に水田が営まれていた可能性が高いと考えられる。

弥生時代については、土器が少量出土しているが明確な遺構は検出していない。調査地の北西には中村松田遺跡を中心とする集落があるが、遺構がないことから集落域には含まれていないと言える。

第8章

小坂遺跡

- 4次調査 -



## 第8章 小坂遺跡4次調査

### 第1節 調査の経緯 (第1図)

小坂遺跡4次調査は、県道334号線(旧国道11号線)の西直近にあって、東側で2002(平成14)年度に実施された枝松遺跡7次調査とは県道を挟んで隣接する部分にあたる。対象地約780㎡のうち400㎡について調査を実施した。調査は排土置き場の確保のため、東西の2調査区に分け、西側を1区、東側を2区として行った。調査工程は以下のとおりである。

2006(平成18)年12月1日、調査区を西側の1区、東側の2区に二分、2区を排土置き場とし、1区を重機により掘削し始める。

12月5日、遺構面の掘り下げ、現代坑の掘削を開始する。

12月11日、1区の遺構検出を終わり、写真撮影を行った後、SB1の掘り下げを開始。4級基準点の設置を行う。

12月12日、遺構配置状況の測量を開始。調査区壁面の土層図作成を完了する。

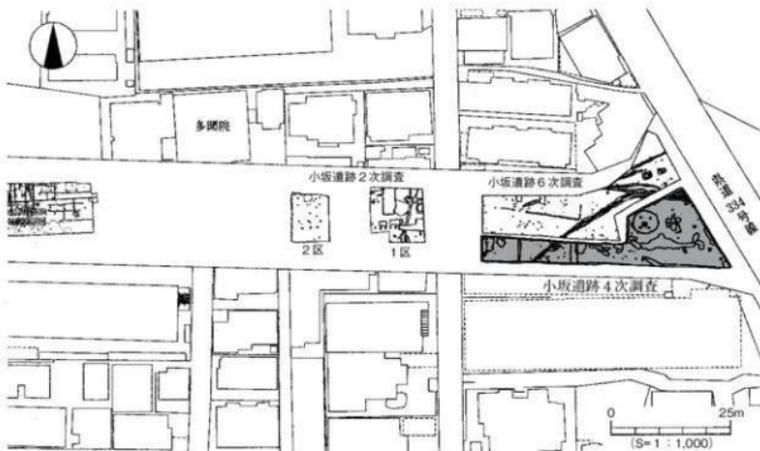
12月14日、各遺構の掘り下げを開始する。

12月15日、SB1、SD2の遺物を取り上げる。

12月20日、1区完掘状況の写真撮影を行う。

12月21日、重機による1区の埋め戻し、および2区の掘削を開始する。

2007(平成19)年1月5日、2区の遺構検出、現代坑掘削を開始する。



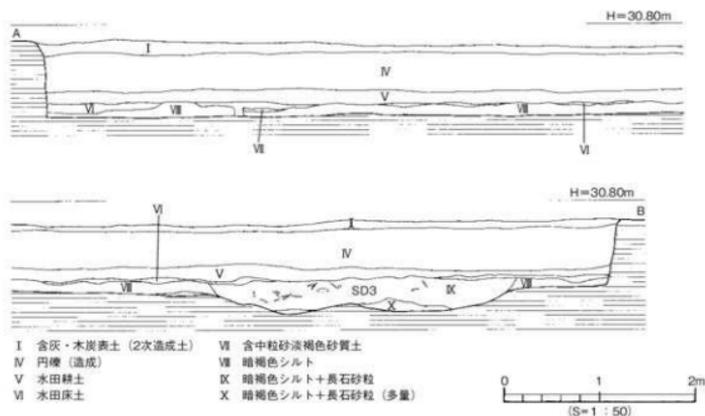
第1図 調査地位置図

- 1月9日、北東隅のSD3から遺物がまとまって出土し始める。  
 1月12日、2区の遺構検出を終わり、写真撮影を実施。  
 1月15日、SB1をはじめ、各遺構を掘り始める。  
 1月22日、遺構の測量を始める。  
 1月24日、最終写真撮影を行う。  
 1月25日、SB1を完掘。最終の測量を実施。  
 1月29日、重機による埋め戻しを開始。翌30日に終了した。  
 1月31日、現場事務所の撤去、発掘用具等の洗浄整理後、撤収して現場作業を終了した。

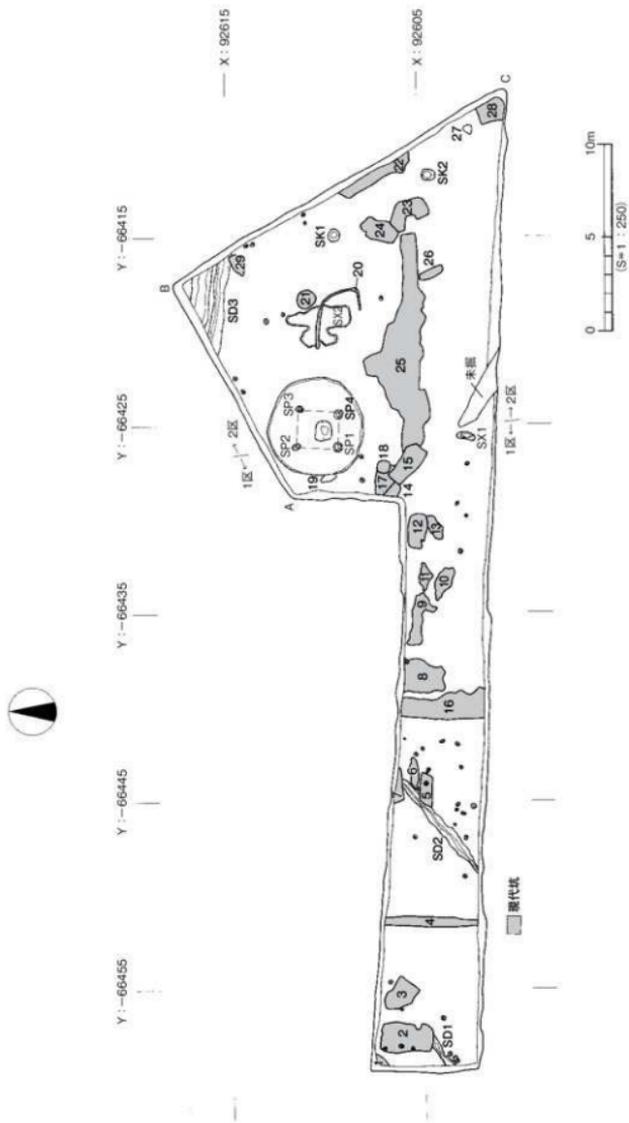
## 第2節 層位 (第2・4図)

調査地は全面にわたって客土造成がなされ、なおかつ、削平や現代坑が著しい。遺構面は、殆どフラットに近いが、周辺の地表面の現地形をみると、北から南、東から西へ僅かに低くなる傾斜をなしている。ここでは、中でも比較的残りのよい2区の北壁、東壁の図を用いて土層説明を行う。

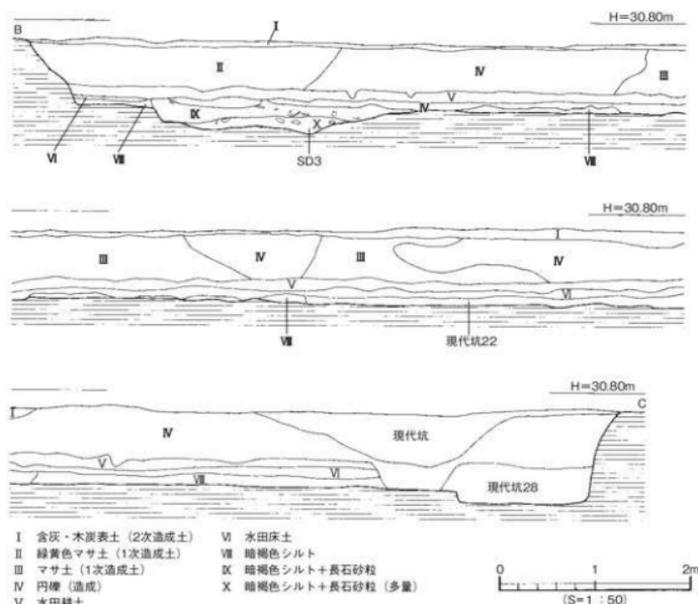
現地表面から約1mは造成土で、I～IV層がそれぞれにあたる。V・VIが水田耕土とその下層の床土で、その下にⅦ層の中粒砂を含んだ淡褐色砂質土が調査地北側に数cm程度、部分的に存在し、この層に中世の土師器細片が含まれている。その下にⅧ層とした暗褐色シルト層があり、この層が残っている部分ではこの層を切って弥生時代の後期の遺構が存在している。また、このⅧ層は調査地北東側に最大10cm程度の厚さで残っているのみで、南や西になると殆ど残っていない。弥生時代の遺構埋土は、Ⅷ層と同様の土質のものに長石粒を含んだ土となっているが、Ⅷ層との切り合いのあるSD3などは断面でこれが確認できたのみで、Ⅷ層上面での遺構平面プランは確認不能であった。したがって、遺構がプランとして確認できたのは、Ⅷ層下面の淡橙褐色シルト上面でのことである。



第2図 2区北壁土層図



第3図 遺構配置図



第4図 2区東壁土層図

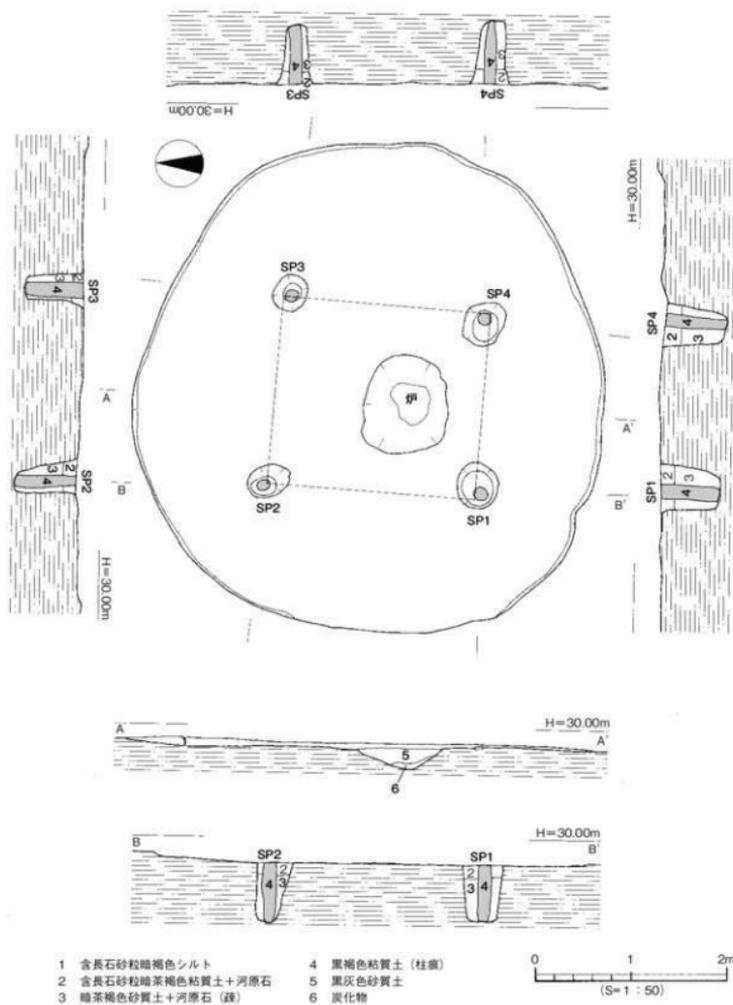
### 第3節 遺構と遺物

#### 1. 弥生時代

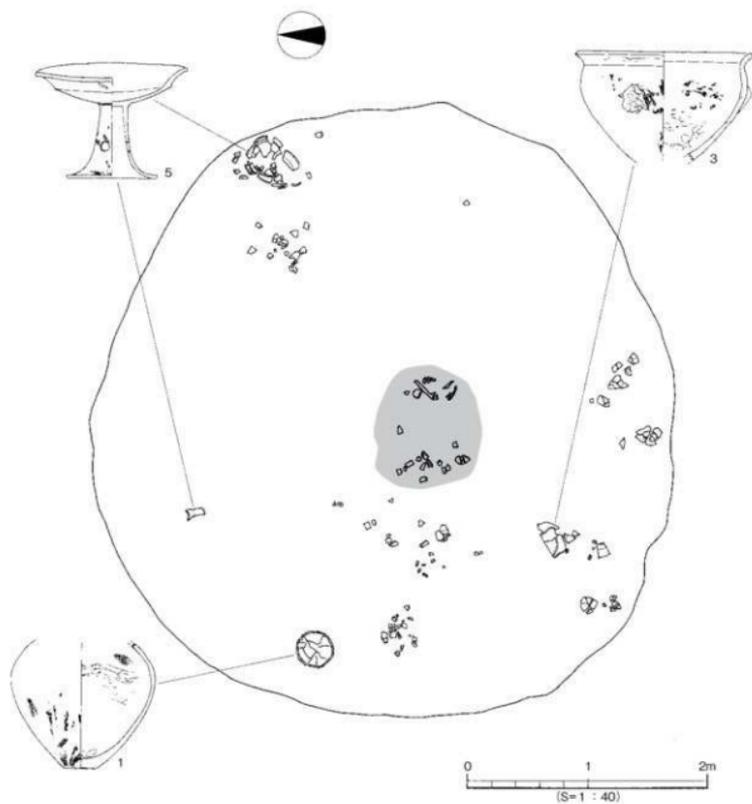
##### (1) 竪穴住居

##### SB1 (第5・6図、図版2・4～6)

1区の調査の東北隅でその一部が検出された。遺構の半分以上は2区にかかっているが、1区の調査時点で出土した遺物については、工程上、2区の調査による遺構の全容検出を待たずに一旦取り上げを行った。住居は、直径4.9～5.0mの円形プランで、中央やや南寄りに炬をもつ。壁体の立ち上がりは、遺存の良好な北東から東の部分でも3～4cmと、殆ど削平されてしまっている。周壁溝は検出されなかった。炬は、100×80cmの東西に長い不整の隅丸方形をなし、断面形は最深部で25cmの楕円状を呈する。主柱穴は4本で、直径35～50cm、深さ70～80cmの掘り方の中に、直径15～20cmの柱痕跡が確認されている。柱は、柱穴底から50～60cmの部分までは、礫を疎らに含んだ暗茶褐色砂質土、これ以上の部分は長石粒を含んだ粘質の暗茶褐色土で埋められている。この上層の土が、どの柱穴でもおよそレベルを同じくして入れられていることからすると、現状では住居床面に貼床の存在を明確に確認することはできなかったが、ある程度柱を埋めた段階で柱穴上層を埋めるとともに、同質の



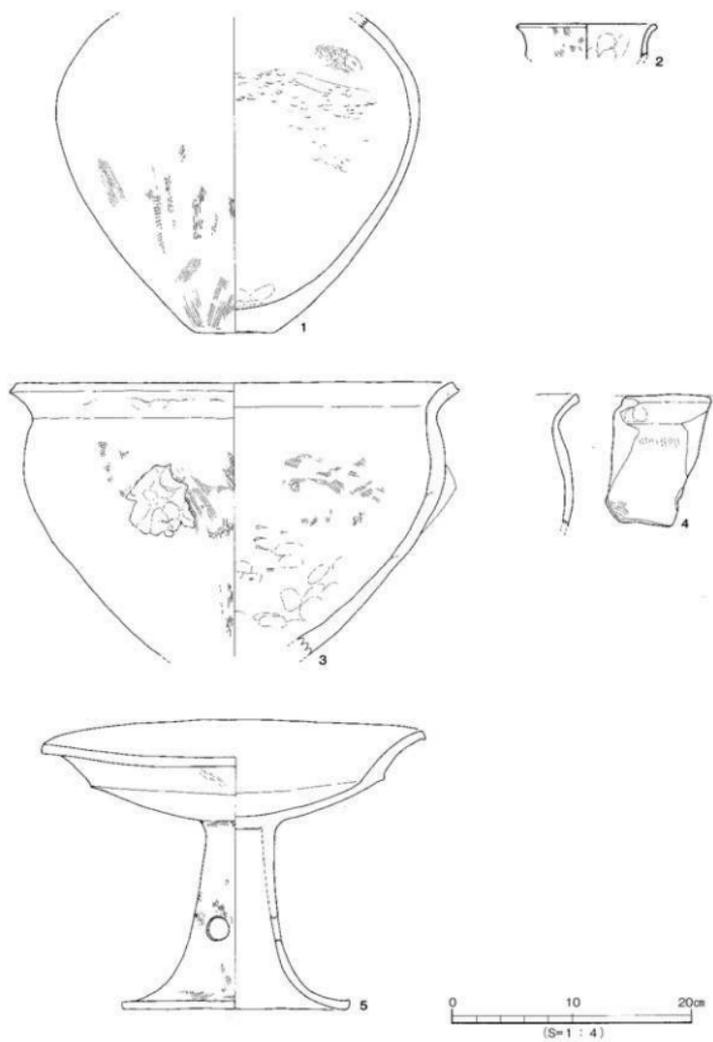
第5図 SB1測量図



第6図 SB1遺物出土状況図

粘質暗茶褐色土を用いて床を貼ったのかもしれない。もし貼ったにしても、遺物との関係からいうと、非常に薄く貼られたものと思われる。柱の芯々間は185～225cmとバラつきがあり、精美な方形は引けないが、図のように補正すると、東西194～200cm、南北216～218cm程度の、やや南北に長い方形に落ち着けることができる。なお、中央より東寄りに炭化物の分布がみられたが、住居の使用や構造にかかわる意味ある分布ではなく、削平の際に炉およびその周辺の炭化物が散ったものと考えられる。後述する遺物から、弥生時代後期後葉の遺構である。

出土遺物（第7図、図版11）



第7図 SB1出土遺物実測図

## 弥生土器

壺形土器（1・2） 1は壺の胴部で、張りを胴部中位より上に持つものである。僅かにくぼんだ直径6.4cmの底部から、鈍い稜をもって最大径30.3cmを測る胴部が立ち上がる。外面は縦から斜め方向の細かいハケ目で調整された後撫でられている。最大径付近の内面には、爪痕が顕著に認められる。2は外反しながら直上に短く立ち上がる複合口縁壺の屈曲部以上の片で、口径11.2cmになるものである。

鉢形土器（3） 復元口径36.2cmを測る甕形の鉢。胴部上位に張りをもち、鈍く折り曲げられた口縁端部には面をもつ。外面は、1の壺同様の細かいハケ目の後撫でられている。この外面調整の後、不定形の薄い粘土塊が貼り付けられているが、乾燥段階のひび割れ補修痕とも考えられる。

甕形土器（4） 4は3と同様の鉢になるかもしれないが、口縁部を緩く折り曲げる甕の上位片である。

高坏形土器（5） 器高21.4～24.6cmを測る高坏で、坏部口径31.5cm、脚裾径18.4cmとなるものである。坏部は稜をもって屈曲し、外上方に口縁部が開く。口端部は、やや下方に肥厚した面をなす。裾部は中空で、ラッパ状に開き、中位よりやや下に円孔が3方向に施されている。坏底部には粘土板充填の痕跡が確認できる。

## (2) 溝

## SD1（第8図）

調査区西端で長さ2m分が検出された。後述するSD2に平行な北東から南西方向への浅い溝で、深さ10cm程度、現代坑に切られたりして消滅している。砂混じりのシルトを埋土としているので、遺物の出土はないが、後述するSD2と同様の土で埋まっていることから、弥生時代後期末の遺構と考えられる。



第8図 SD1測量図

## SD2 (第9図、図版1)

調査区の西方で検出されたもので、北東から南西にかけての溝である。ところどころ現代坑に切られているが、検出長6.5m、最大幅65cm、深さ10cm程度の遺存で、砂や砂混じりのシルトで埋まっている。弥生時代後期末の遺構である。

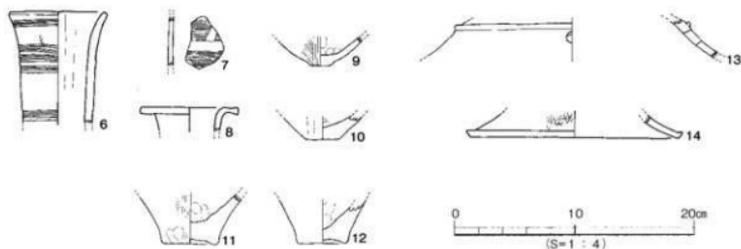
## 出土遺物 (第10図、図版11)

弥生土器

壺形土器 (6~10) 6・7は長頸壺の口頸部で、7は器壁の薄い精製品である。口径8.0cmの6に



第9図 SD2測量図



第10図 SD2出土遺物実測図

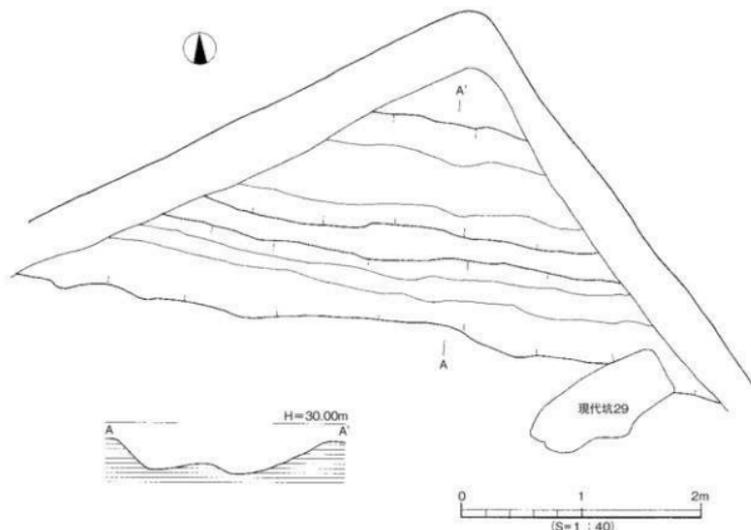
は3段にわたる櫛歯沈線文が施されている。うち中位の施文を観察すると、1単位4条で3単位の12本となっている。口端付近の沈線は1単位の4条、下位も1単位4条で11本まで確認できる。**7**の外面上位には17条、下位には13条まで櫛歯沈線文が確認できる。外面は磨かれ、内面は斜め方向にハケ目調整されている。**8**は筒状の頭部から水平に口縁部が折り曲げられるもので、復元口径8.2cmを測る。口端部には面をもっている。チョコレート色の色調で、胎土には金雲母、角閃石を含んでいる。讃岐からの搬入品であろう。**9**は小さなボタン状の粘土板を貼り付けられた底部、**10**はコイン大よりやや大きめの平底の底部である。

甕形土器 (11・12) 2点ともに僅かな窪み底の底部片である。

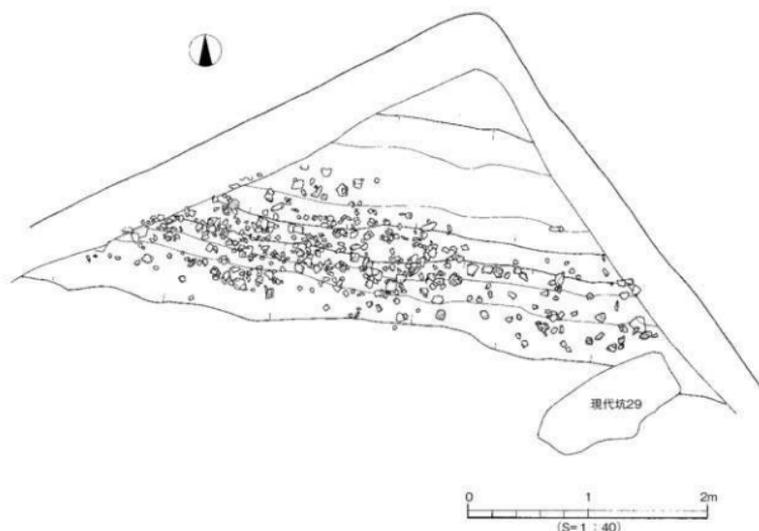
高坏形土器 (13・14) **13**はエンタシス状の柱部をもつ高坏の裾部の段の部分の片である。段の突帯の直下に部分的に円孔が確認できる。**14**は裾端部片で、外面はよく磨かれている。

### SD3 (第11・12図、図版9)

調査区北東隅の東西溝、最長55mの検出であった。遺物の出土が、溝上層に集中的にみられ、取り上げながら下げていった結果、最終的に幅0.7mの南側の溝と、幅1.0mの北側の2条平行の溝となることが判明したものである。きわめて局所的な検出であるので、ともにSD3として扱っている。深さはともに20~30cm程度で、長石粒を含んだ暗褐色系のシルトを埋土としている。溝埋土と上層包含層と判別ができなかったこともあり、出土遺物には後期初頭のものが僅かに混入しているが、大方は後期末のものである。



第11図 SD3測量図



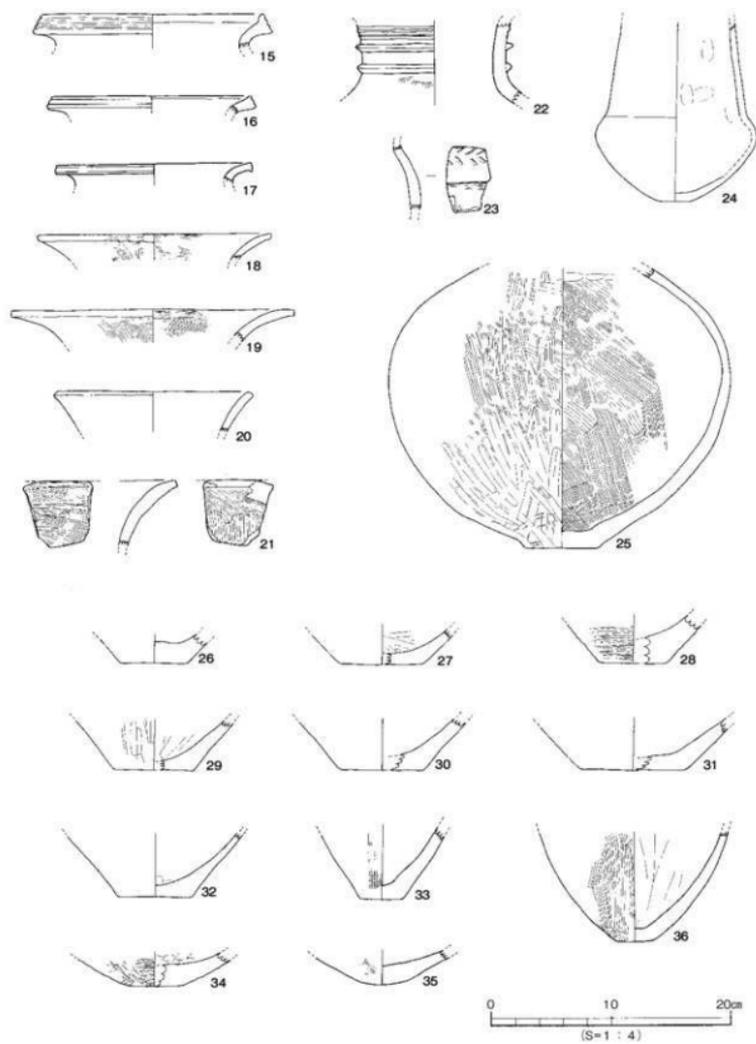
第12図 SD3遺物出土状況図

## 出土遺物（第13～16図、図版11～14）

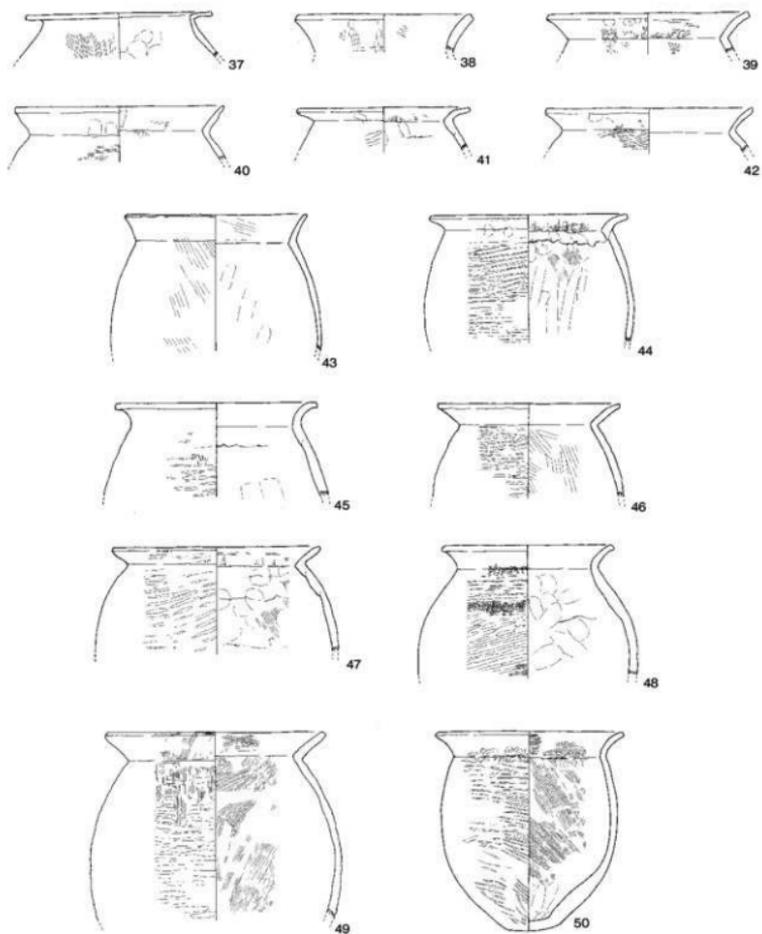
## 弥生土器

壺形土器（15～36）**15**は復元口径18.0cmの口縁部片、上方に拡張した端面に3条の凹線を施されるものである。**16**は端面に3条の擬凹線文をもつ口縁部小片。**17**は短く開く口縁で、端面の上下に横ナデによる浅いくぼみが巡るものである。**18・19**は大きく開く口縁部の小片。口縁部片**20・21**は斜め上方に開くものである。**22**は筒状の頸部、基部に2条の細い断面三角形突帯をもち、その上位にヘラ描沈線が3条まで確認できる。**23**の小片は壺の頸基部～肩部で、刺突による羽状文と1条の沈線が施されている。**24**は小さな平底に張りを上位にもつ扁平な胴部、内傾する長い頸部をもつ薄手の精製品で、内外面に橙褐色の化粧土を施し、よく磨いている。吉備からの搬入品と思われる。口頸部を欠く**25**はやや突出した平底に扁球形気味の胴部をもつもので、胴部最大径38.5cmを測る。外面は縦方向によく磨かれ、内面はハケ目による調整となっている。底部には、**26～32**のような径の大きい平底から、小さな平底**33・34・36**、また殆ど丸底に近い**35**のようなものがある。**33**や**36**は後期後半の長頸壺になるものと思われるが、甕の底部であるかもしれない。

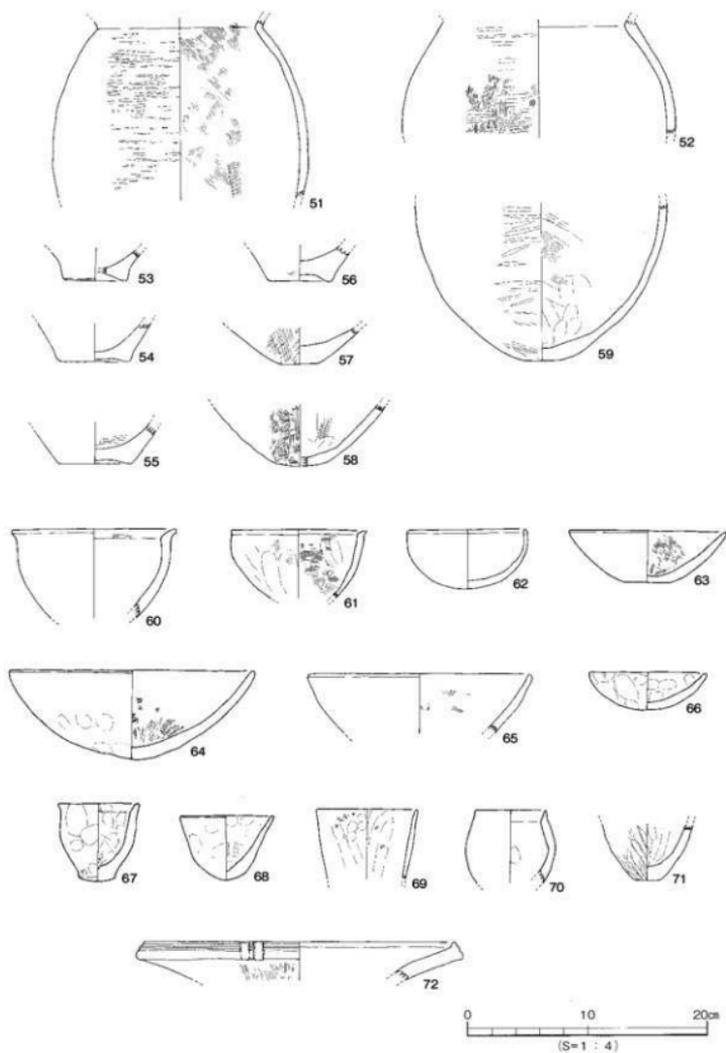
甕形土器（37～59）**37**は讃岐からの搬入品と思われるもので、明るいチョコレート色のしっかりした焼成で胎土に金雲母・角閃石を含んでいる。唯一の口頸部片を図化したのが、同一個体と思われる接合しない胴部片も相当数出土している。その他はおおむね胴部外面にタタキを施されるものであるが、**43**だけがハケ目調整の甕になる可能性がある。甕のうち唯一全形を知ることができるもの**50**は器高16.8cm、口径15.0cm、胴部最大径14.5cmと口径が胴部径を凌ぐ短胴気味の形態をなす。底部はや



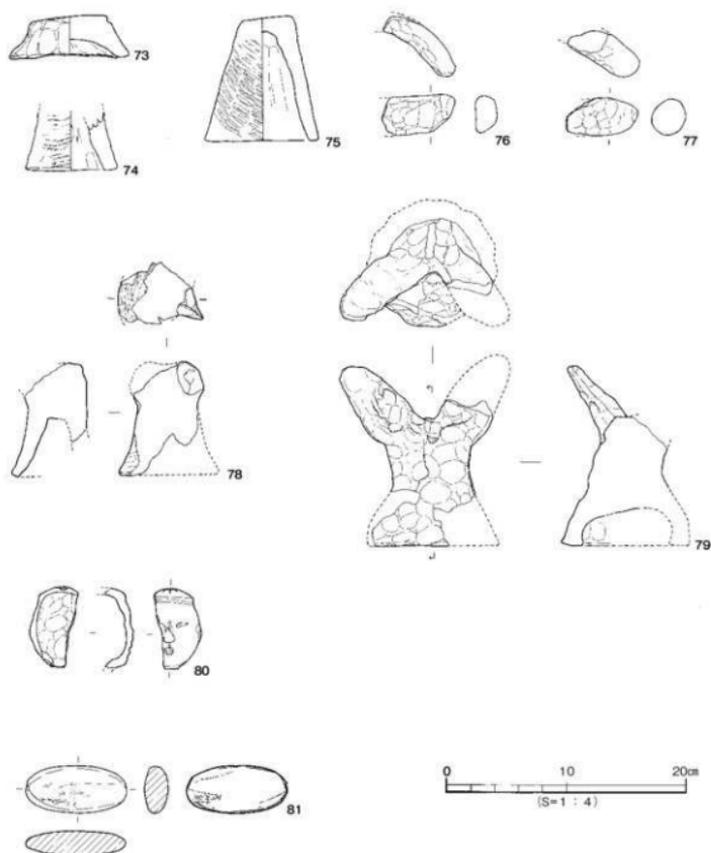
第13図 SD3出土遺物実測図(1)



第14図 SD3出土遺物実測図(2)



第15図 SD3出土遺物実測図(3)



第16図 SD3出土遺物実測図(4)

や丸みをおびた平底となっている。その他のものは、これと異なり胴部径が口径を凌ぐ器形となっているが、内外面の調整には大きく変わるところはない。底部には53~56のような若干のくぼみ底と、57~59のような小さな平底があり、後者が図示した大方の甕に伴うものである。

鉢形土器(60~71) やや深めの半球形のもの60~62と、浅めの碗形態の63~65、また、手捏によるさまざまな形態の66~71がある。半球形のものうち60・61は外に短く折り曲げられた口縁部をもつもの、62は単純なボウル形の器形になるものである。浅めの63~65は、甕の底部を切り取った

ような形態のもので、小さな平底の**63**で器高4.3cm、復元口径12.8cm、丸底の**64**で器高7.5cm、口径20.1cmを測る。手捏によるミニチュア鉢には、皿形の**66**や甕形の**67**、深椀形の**68**やコップ形の**69**、無頸壺形の**70**などがある。

器台形土器 (72) 受部口縁の小片で、復元口径25.6cmを測る。上方にやや拡張した口端外面に擬凹線2条と縦位の棒状浮文が2本まで確認できる。

支脚形土器 (73~79) **73・75**は指や摘みをもたず、頂面が緩やかな傾斜をなすもの。**73**は器高3.6cmと非常に低い。裾部径9.7cmで、側面は連続する指頭痕でフリル状に成形されており、俯瞰形は花卉状をなす。**75**は器高10.5cmを測る截頭円錐形に近い形態のもの、中空で外面に細かいタキが施されている。**76・77**は指の破片。**78**は摘み状の薄く短い手が左右に開くもので、片方の手を欠失している。**79**は器高15.3cm、板状の薄い指のうちの片方と、背後の摘みが欠損している。裾部近くのみが中空となっている。

土製品

人形 (80) 江戸時代の土人形、天神の頭部片、型づくりで制作されたものである。頭部の左前四半のみの出土である。

石製品

磨り石 (81) 8.3×4.0cmの楕円形、厚さ2.0cmの凝灰岩自然石の全面を磨ったものである。

(3) 土坑

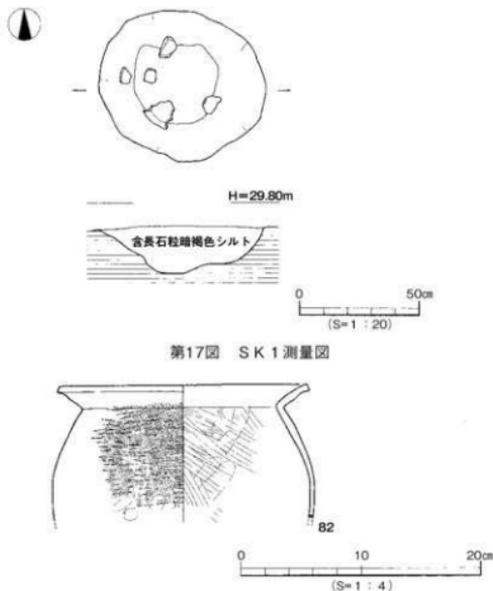
SK 1 (第17図、図版8)

65×70cmの円形に近いプランで、深さ20cmの掘鉢状を呈する穴である。先述のSD 3と同様の長石粒を含んだ暗褐色シルトを埋土としている。弥生時代後期末の遺構である。

出土遺物 (第18図、図版14)

弥生土器

甕 (82) 復元口径20.4cmを測る甕の上半部。頸部に稜をもって口縁部が屈曲し、端面はしっかりした平坦面をなす。外面はタキ目の後、目の細かいハケ目調整を施されるが、ハケ目は軽くタキ目を消すところまでいっていない。内面も斜め方向のハケ目調整を施されてい



第17図 SK 1 測量図

第18図 SK 1 出土遺物実測図

るが、外面のような細かいハケ目ではない。

#### SK2 (第19図、図版8)

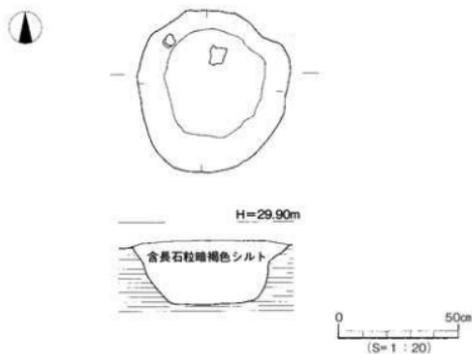
60×70cmの不整形円形プランで、深さ25cm、断面逆台形の穴である。これもSD3やSK1と同様の長石粒を含んだ暗褐色シルトで埋まっている。弥生時代後期後葉の遺構である。

#### 出土遺物 (第20図、図版14)

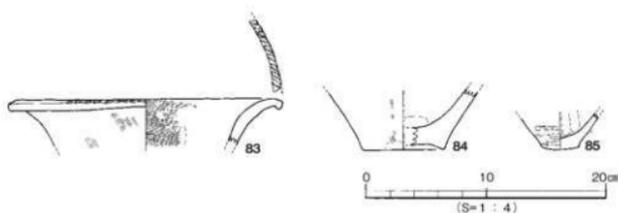
弥生土器

壺形土器 (83) ラッパ状に開く復元口径22.8cmの壺口縁部である。やや垂れ下がった口端上面に刺突列点文が施されている。内面は細かいハケ目で調整されている。

甕形土器 (84・85) 底部2点、84は若干のくぼみ底、85は外面にタタキ痕を残す小さな平底である。



第19図 SK2測量図

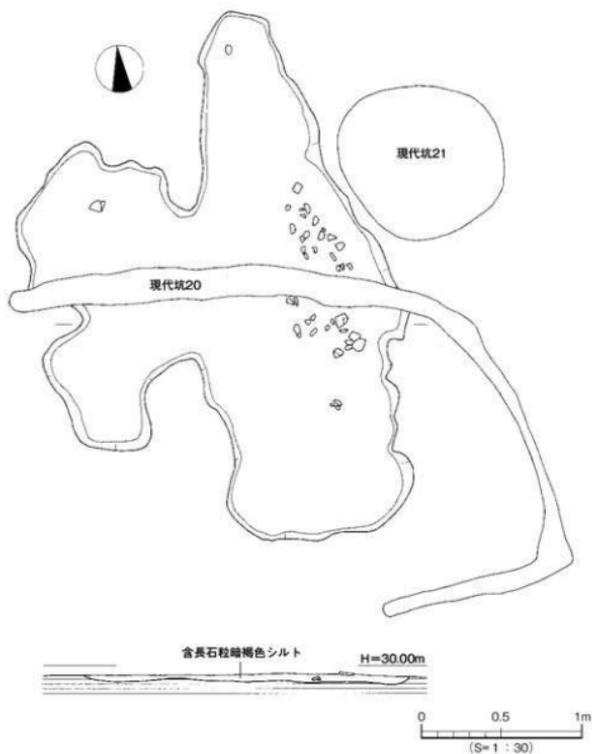


第20図 SK2出土遺物実測図

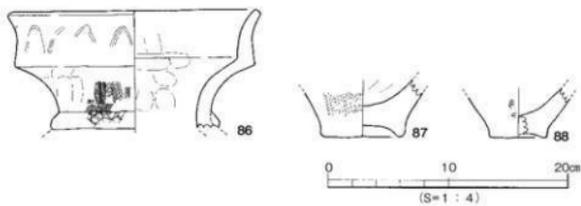
#### (4) 性格不明遺構

##### SK2 (第21図、図版6・7)

SB1の東直近で検出された、深さ3～5cmの不整形のくぼみで、弥生時代後期後葉の遺物を出土



第21図 S X 2 測量図



第22図 S X 2 出土遺物実測図

している。

#### 出土遺物 (第22図、図版14)

弥生土器

壺形土器 (86) 複合口縁壺の口頭部である。口縁は、屈曲部に面をもたず、外反しながらほぼ直上に立ち上がっている。外面には櫛描波状文が施されるが、摩滅のため明確ではない。頸部は比較的短く、基部に斜格子状の施文をもつ突帯が貼り付けられている。

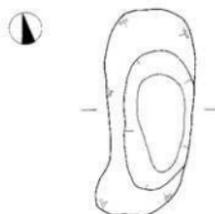
寛形土器 (87・88) くぼみ底の底部2点である。

## 2. 中・近世

性格不明遺構

### S X 1 (第23図)

1区の東端で検出された、88×37cmの楕円形に近いプラン、深さは15cm程度の穴である。遺物の出土はないが、中世の遺物を出土する柱穴と同様の淡褐色砂質土を埋土としているので、中世以降のものと考えられる。

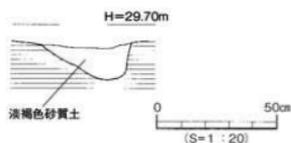


## 3. SP・現代坑出土および表採遺物

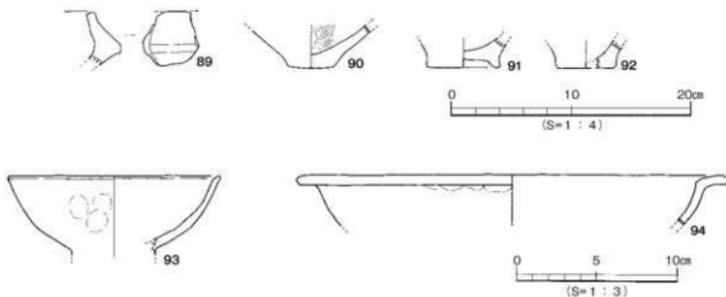
(第24図)

弥生土器

壺形土器 (89・90) 2点ともに採集遺物で、89は無文の複合口縁壺口縁部の破片である。外面に面をもって屈曲する。90は、長頸壺のものと思われる小さな平底の底部。



第23図 S X 1 測量図



第24図 SP・現代坑・表採出土遺物実測図

甕形土器 (91・92) くほみ底の91は現代坑22から、平底の92は現代坑10の出土である。

土師器

椀 (93) S P 4 出土。復元口径130cmで、輪高台の一部までの遺存である。外面に指頭痕がみられる。

焙烙 (94) 現代坑9 出土。瀬戸内系焙烙の口縁部片、復元口径26.8cmを測る。

#### 第4節 小 結

今回の調査では、著しい削平や現代坑による破壊にもかかわらず、弥生時代の各遺構が検出された。本文中でも述べたように、遺構の殆どが弥生時代後期のもので、後葉のものと末のものがある。竪穴住居1棟と、土坑の1基が後葉のもので、いまひとつの土坑1基と溝が末の遺構となっている。前者と後者の同時併存が認められる状況ではないが、後期後葉から末にかけての集落域の一角であったことは疑いが無い。

さて、調査地東の県道伊予・川内線をはさんで隣接する位置には、同じく市道中村・桑原線関連の既往の調査地「枝松遺跡7次調査」がある。この調査では、弥生時代後期に機能し、古墳時代前期に埋没した流路とみられる南北溝が調査されているが、概して弥生時代後期の集落関連遺構は希薄である。該期の集落関連遺構が調査地東方で確認されるのは、東400mの枝松遺跡8次調査以東のことである。また、第10章で報告される北側隣接地「小坂遺跡6次調査」では、本調査のSD3に続く2本の溝が検出され、SD3とした2本の溝のうち南側のものが本調査のSD2と同一遺構であることが判明したが、これらの溝以外には、調査地北側に展開する弥生時代後期の遺構は希薄であることもわかった。加えて、本調査地以西の近隣でも、西方300mの中村松田遺跡に至るまで該期の遺構は希薄である。これらのことから考えると、SD2で区画された南、枝松遺跡7次調査に至るまでの東といった限られたエリアに、SB1をはじめとする後期後葉から末にかけての居住域が展開していたものと考えられるが、状況からすると、さほど密集度の高いエリアではなかったであろう。調査地以南に展開する集落の北端部を調査した可能性が高い。

第9章

小坂遺跡

- 5次調査 -



## 第9章 小坂遺跡5次調査

### 第1節 調査の経緯 (第1図)

#### 1. 調査に至る経緯

申請地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地〔No110 釜ノ口遺跡〕内に所在する。申請地周辺は中村松田遺跡、七ノ坪遺跡、素鷲小学校遺跡などこれまでに数多くの調査が行われ、弥生時代～古墳時代にかけての集落関連遺構が確認されている。

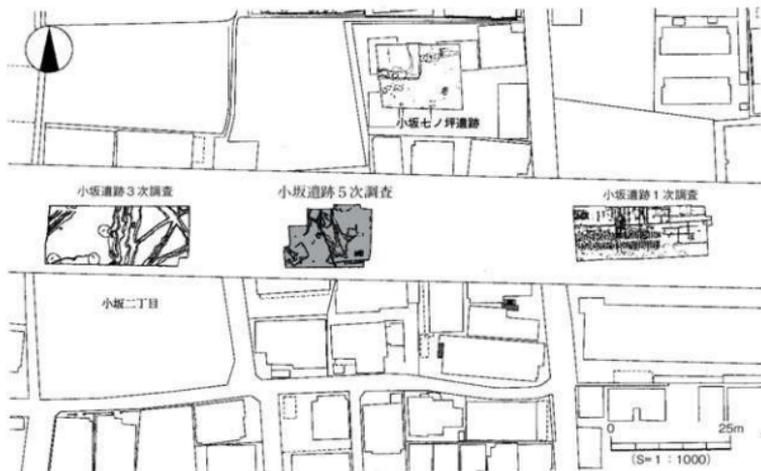
文化財課の指導のもと砺松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）は確認願いが提出された地番について遺跡の有無と、さらにはその範囲や性格を確認するために、平成19年1月24日～同月25日まで二日間の試掘調査を行なった。調査の結果、遺構・遺物が検出され遺跡が確認された。この結果を受け文化財課、埋文センターと申請者は、発掘調査についての協議を行い、開発に伴って消失する遺跡に対して、記録保存のため本格調査を実施する事となった。調査は、2007（平成19）年5月16日より本格調査を実施した。3工区の調査としては、5回目の調査地となる。

#### 2. 調査の経過

調査地の現況は、造成地である。以下、調査工程を略記する。

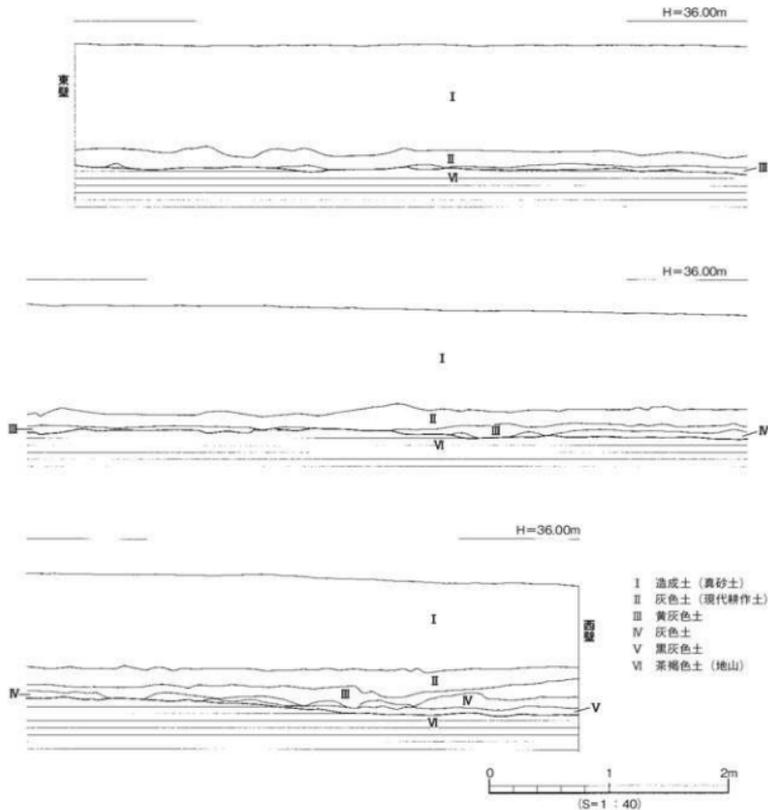
平成19年5月16日 重機にて掘削を開始する。発掘用具、機材の準備を行う。調査区に縄張り等の安全対策を行う。調査事務所は、東本遺跡9次の調査と共同で使用する。

5月24日 重機による掘削を終了する。人力によって遺構検出作業を行う。壁面の土層図の作成作業を開始する。

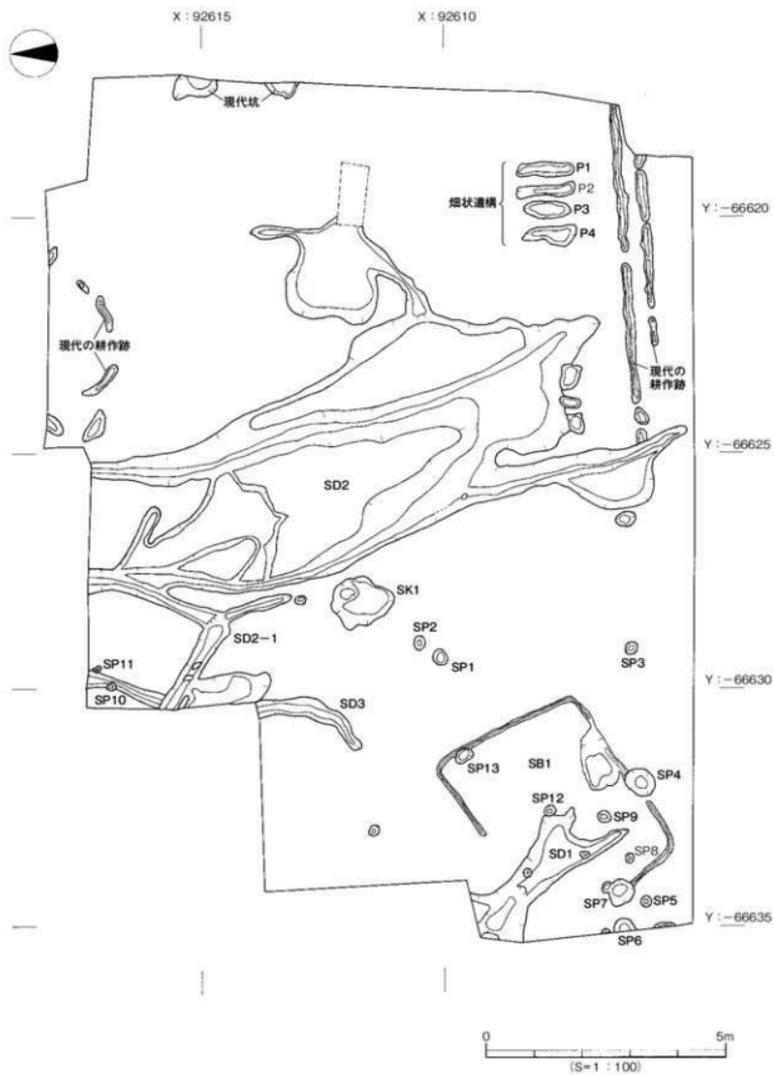


第1図 調査地位置図

- 6月5日 遺構検出作業を終了する。高所作業車にて遺構検出状況の写真撮影を行う。撮影終了後、遺構配置図の作成作業を行う。
- 6月6日 遺構配置図の作成を終了し、遺構の掘り下げを開始する。土層図及び平面図の作成を平行して行う。
- 7月3日 遺構の掘り下げを終了する。遺構の測量作業を継続して行う。
- 7月10日 遺構の測量作業を終了する。高所作業車にて遺構完掘状況の写真撮影を行う。
- 7月11日 重機にて埋め戻し作業を行う。
- 7月13日 埋め戻しを完了し、調査を終了する。



第2図 南壁土層図



第3図 遺構配置図

## 第2節 層位 (第2図)

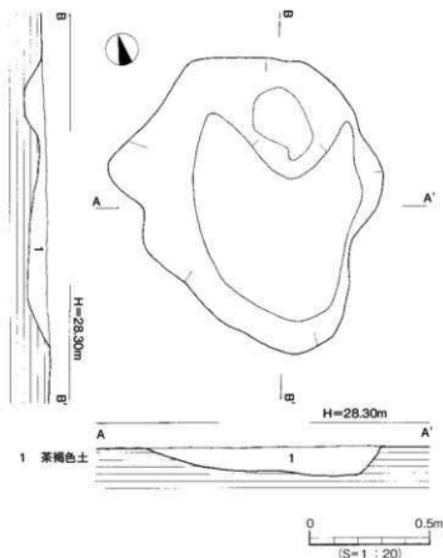
調査区の基本層序は上から第Ⅰ層造成土、第Ⅱ層灰色土、第Ⅲ層黄灰色土、第Ⅳ層灰色土、第Ⅴ層黒灰色土、第Ⅵ層茶褐色土である。第Ⅰ層は、現代の造成土で主に真砂土である。第Ⅱ層は現代の耕作土である。第Ⅲ層中には、土師器の小片が混入する。第Ⅳ層は、調査区の西部に層厚2～5cmが遺存する。土師器の小片が混入する。第Ⅴ層は、現代の耕作土に削平されているため調査区の西側にしか遺存していない。第Ⅵ層以下は地山と呼ばれる層である。東から西に傾斜をもつ。調査区内での東西の比高差は約30cmを測る。遺構の検出は、第Ⅵ層上面で行った。

## 第3節 遺構と遺物

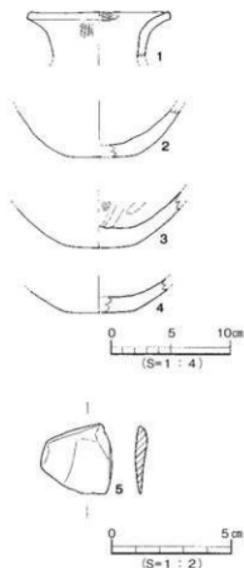
検出した主な遺構は竪穴式住居 (SB) 1棟、溝 (SD) 3条、土坑 (SK) 1基、柱穴 (SP) 13基である。出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器などが出土している。以下、主な遺構について時代毎に記述する。

### 1. 弥生時代

#### (1) 土坑



第4図 SK1測量図



第5図 SK1出土遺物実測図

SK1 (第4図)

SK1は、調査区西側の中央部で検出した。平面形は不整形を呈する。検出規模は長軸1.27m、短軸0.87m、深さ0.03~0.12mを測る。埋土は茶褐色土である。遺物は弥生土器が出土した。

出土遺物 (第5図)

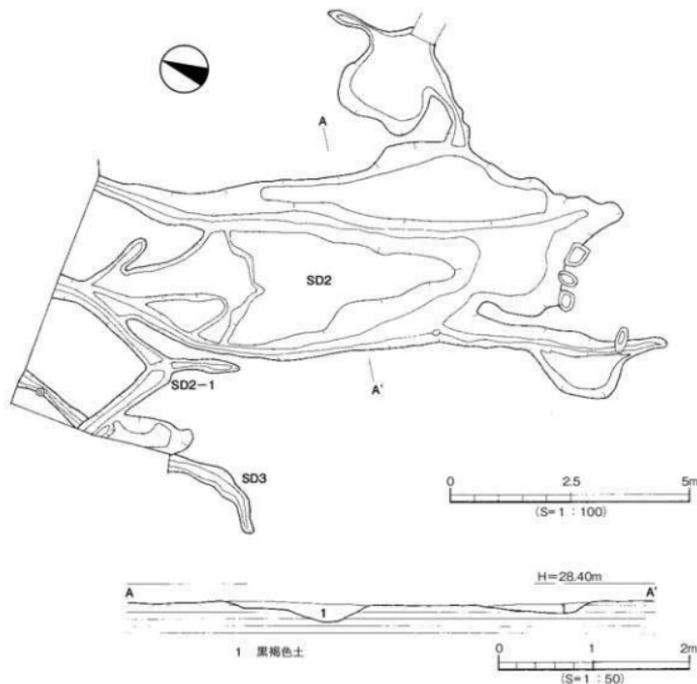
1は壺形土器。頸部は直立して立ち上がる。口縁部は大きく外反して短くのびる。内外面ともハケ目のちナデ調整である。2~4は壺の底部である。5はサヌカイトの剥片である。

時期：出土遺物より弥生時代後期後半。

(2) 溝

SD2・SD2-1・SD3 (第6図、図版2)

SD2・SD2-1・SD3は、調査区の中央部で検出した。平面形態が不整形な溝である。調査地南端の中央部から始まり、北西方向で数条に分岐する溝である。平面的に切り合い関係はなく同時期の溝と考えられる。名称については遺物が出土する箇所によって調査の都合上、遺構名称を分けた。



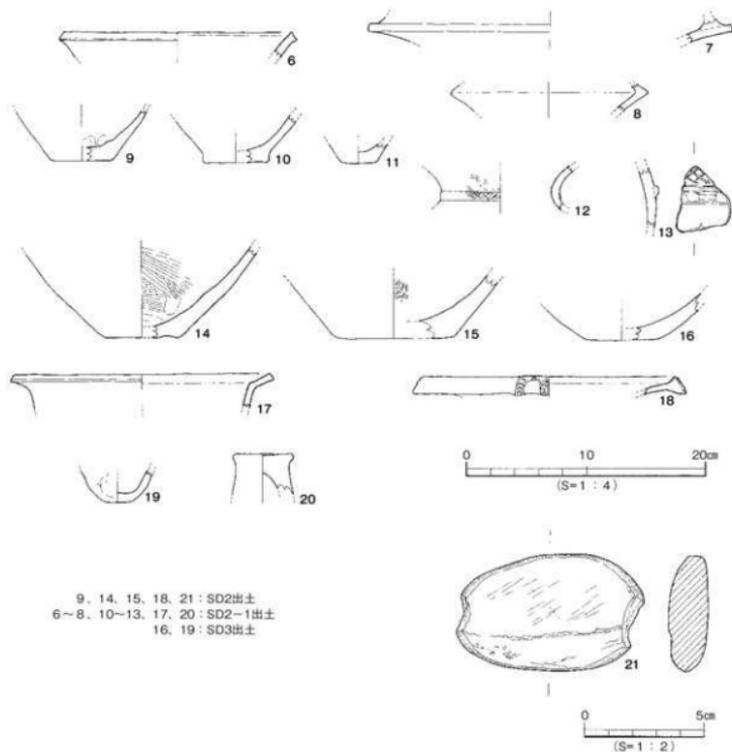
第6図 SD2・SD2-1・SD3測量図

検出規模は最長1280m、幅は最大で7.10m、深さ0.05～0.19mを測る。遺物は弥生土器、石器（石錘）が出土した。

出土遺物（第7図、図版4）

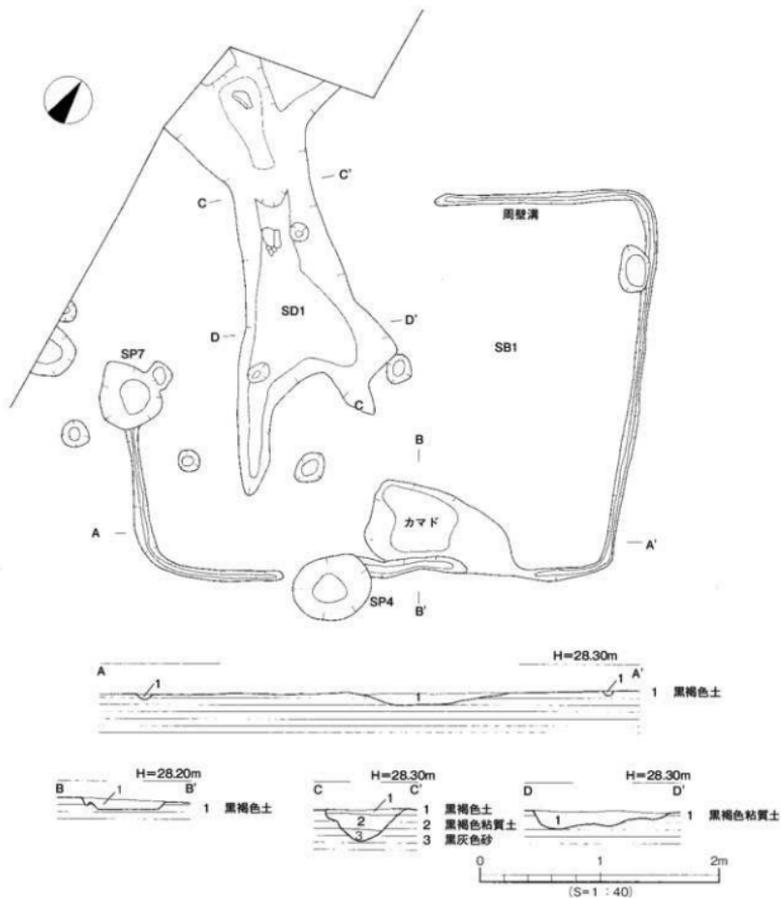
6は甕形土器。7・8は複合口縁壺である。口縁拡張部は欠失する。9～11は甕形土器の底部と思われる。12は壺型土器の頸部である。刻目突帯が施される。13は胴部に張り付け突帯と斜格子文が施される。14～16は壺形土器の底部と思われる。14の内面はハケ目調整が施される。17は鉢形土器。口縁部は屈曲して外上方に短くのびる。推定口径は21.8cmを測る。18は器台形土器。推定口径21.0cmを測る。口縁端面は上下に拡張する。端面には粘土紐を逆U字状に貼り付け、その上に半截竹管文が施される。19はミニチュア土器。残高2.8cmを測る。20は支脚形土器。受部はやや傾斜する。21は石錘。両端を打ち欠く。長さ7.7cm、幅4.9cm、厚さ1.6cm、重量104.7gを測る。材質は花崗岩である。

時期：出土遺物より弥生時代後期後半には埋没したものと考えられる。

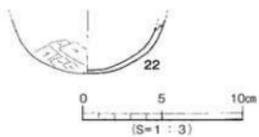


9, 14, 15, 18, 21: SD2出土  
6～8, 10～13, 17, 20: SD2-1出土  
16, 19: SD3出土

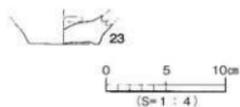
第7図 SD2・SD2-1・SD3出土遺物実測図



第8図 SB1・SD1測量図



第9図 SB1出土遺物実測図



第10図 SD1出土遺物実測図

**SD1** (第8図、図版3)

SD1は、調査区の西側で検出した。西側は、北西方向にのびて調査区外となる。埋土は、最下層に黒灰色砂が堆積する。検出規模は長さ3.80m、幅0.62~1.32m、深さ0.20~0.56mを測る。遺物は弥生土器が1点出土した。

**出土遺物** (第10図)

**23**は寛形土器の底部片である。底径は5.8cmを測る。

**時期**：出土遺物より弥生時代後期。

## 2. 古墳時代

### 竪穴住居

**SB1** (第8図、図版2・3)

SB1は、調査区の南西部で検出した。上部は現代の削平により、壁体は失われている。周壁溝とカマド跡のみの検出である。平面形は、周壁溝の遺存状況より隅丸長方形を呈するものと考えられる。周壁溝の検出規模は長軸4.22m、短軸3.23m、深さ0.01~0.07mを測る。北西部は途切れる。主柱穴は検出していない。遺物は、周壁溝の埋土からは出土しなかった。

[カマド]

カマドは、住居南側の周溝の内側で検出した。検出規模は長軸1.20m、短軸0.63m、深さ0.05~0.10mを測る。上部は削平され、火床部が遺存しているのみである。埋土中には炭がみられた。遺物は、土師器の壺と考えられる底部片が出土したのみである。

**出土遺物** (第9図)

**22**は壺の底部片。器壁は薄く、外面はヘラケズリが施される。

**時期**：出土遺物とカマドの存在から5世紀後半以降と考えられる。

## 3. その他の遺構

出土遺物が無く、時期不明の遺構である。

### (1) 柱穴 (第11図)

**SP1**

調査地の西側中央部で検出した柱穴である。平面形は円形を呈する。遺構埋土は黒褐色土である。検出規模は直径33cm、深さ15cmを測る。

**SP2**

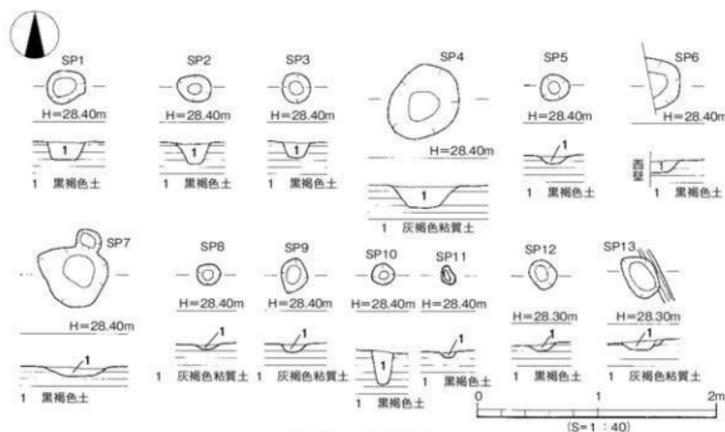
調査地の西側中央部で検出した柱穴である。平面形は円形を呈する。遺構埋土は黒褐色土である。検出規模は直径27cm、深さ16cmを測る。

**SP3**

調査地の西側南部で検出した柱穴である。平面形は円形を呈する。遺構埋土は黒褐色土である。検出規模は直径23cm、深さ12cmを測る。

**SP4**

調査地の西側南部で検出した柱穴である。SB1を切る。平面形は円形を呈する。遺構埋土は灰褐色粘質土である。検出規模は直径56cm、深さ24cmを測る。



第11図 SP測量図

## SP 5

調査地の南西部で検出した柱穴である。平面形は円形を呈する。埋土は黒褐色土である。検出規模は直径23cm、深さ8cmを測る。

## SP 6

調査地の南西部で検出した柱穴である。西側は調査区外となり全容は不明。埋土は黒褐色土である。検出規模は長軸48cm、深さ10cmを測る。

## SP 7

調査地の南西部で検出した柱穴である。SB 1を切る。平面形は不整形である。埋土は黒褐色土である。検出規模は長軸60cm、深さ8cmを測る。

## SP 8

調査地の西側南部で検出した柱穴である。平面形は円形を呈する。遺構埋土は灰褐色粘質土である。検出規模は直径20cm、深さ6cmを測る。

## SP 9

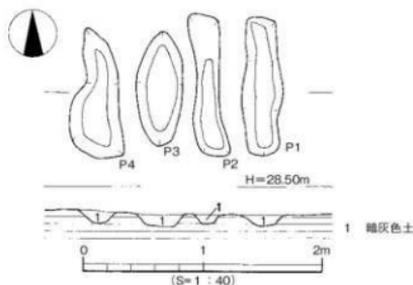
調査地の南西部で検出した柱穴である。平面形は楕円形を呈する。遺構埋土は灰褐色粘質土である。検出規模は長軸28cm、深さ8cmを測る。

## SP 10

調査地の北西部で検出した柱穴である。平面形は円形を呈する。遺構埋土は黒褐色土である。検出規模は直径17cm、深さ29cmを測る。

## SP 11

調査地の北西部で検出した柱穴である。平面形は円形を呈する。遺構埋土は黒褐色土である。



第12図 畑状遺構測量図

検出規模は直径17cm、深さ6cmを測る。

#### SP12

調査地の南西部で検出した柱穴である。平面形は円形を呈する。遺構埋土は黒褐色土である。検出規模は直径23cm、深さ6cmを測る。

#### SP13

調査地の南西部で検出した柱穴である。SB1を切る。平面形は楕円形を呈する。遺構埋土は灰褐色粘質土である。検出規模は長軸40cm、深さ8cmを測る。

### (2) 畑状遺構（第12図）

調査地の南東部で検出した畝溝と考えられる遺構である。P1～P4の4条を検出した。平面形は不整形である。南北方向に長く、10～20cm間隔で東西方向に並ぶ。検出長0.94～1.21m、幅0.20～0.40m、深さ0.06～0.11mを測る。埋土は暗灰色土である。

## 第4節 小結

今回の調査では、古墳時代の堅穴住居1棟のほか弥生時代の溝などを検出した。

#### (古墳時代)

今回の調査で検出した。堅穴住居SB1は、削平のため壁体は失われ周壁溝とカマド跡だけの検出であった。住居の規模は、遺存する周壁溝から復元すると小型の住居といえる。カマドは、燃料に使ったと考えられる炭化物が遺存するもの、カマド底面は火の影響を強くうけた状況は見られなかった。時期は、カマド埋土からの出土遺物より古墳時代中期後半以降と考えられる。調査地周辺では、この時期の堅穴式住居を調査地の北200mにある素鷺小学校遺跡より検出している。1棟だけの検出ではあるが古墳時代中期以降における集落の広がりを確認する事ができた。

#### (弥生時代)

弥生時代の遺構では、溝3条を検出した。調査区の中央部で検出したSD2・SD2-1・SD3の埋土色は、全て同色であることから、これらの溝は川幅の広い同一流路の河床部であった可能性も考えられる。これら溝中からは弥生土器が出土しているが、摩滅が著しく小片が多かった。このことから、溝はかなりの水流を伴っていたと考えられる。調査地の西側に隣接する小坂遺跡3次調査でも、南北方向にのびる古代の溝が数条見つかっている。両遺跡とも地形的には、東方向からのびる台地状の縁辺部にあたる事から、溝や流路が多いものと考えられる。

調査地の東側には、弥生時代後期の拠点的な集落である東本遺跡があり、北西には同じく弥生時代後期の集落である中村遺跡、南西には釜ノ口遺跡がある。今回の調査で集落関連の遺構を検出できなかった事は、小坂遺跡3次と同様にそれら集落の境に本調査地は立地しているといえる。今回の調査で得られた資料は、弥生時代から古代にかけての調査地と周辺の土地利用を解明する資料となるものである。

第10章

小 坂 遺 跡

- 6 次調査 -



## 第10章 小坂遺跡6次調査

### 第1節 調査の経緯

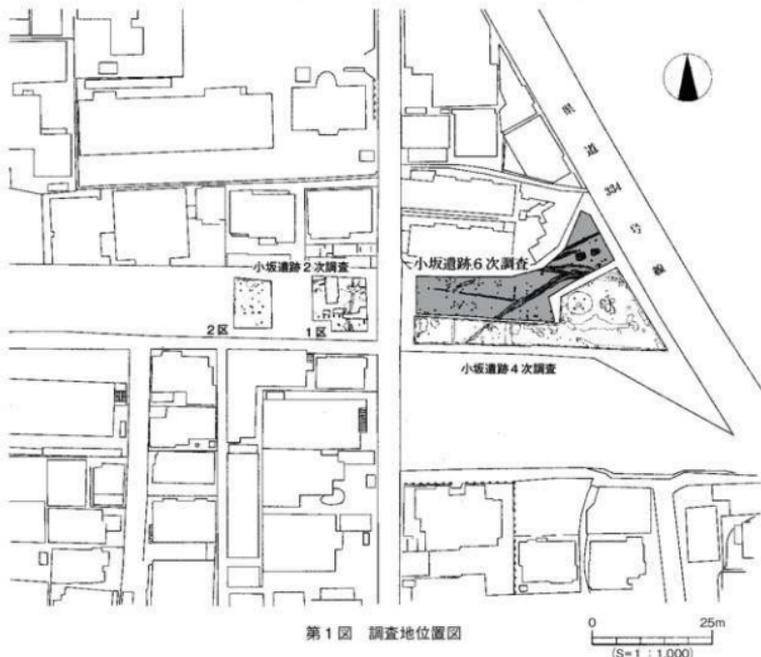
#### 1. 調査に至る経緯（第1図）

2005（平成17）年松山市都市整備部道路建設課（以下、道路建設課）より、松山市小坂二丁目95番1の一部における市道中村桑原線（3工区）道路改良工事にあたり、当該地の埋蔵文化財の確認願いが、松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。

申請地は松山平野東部に位置し、石手川左岸の標高30.40mに立地する。

周辺の遺跡としては、中村松田遺跡、七ノ坪遺跡、素鷲小学校構内遺跡、枝松遺跡7次調査、小坂遺跡2次・3次・5次調査などがあり弥生時代から奈良時代までの集落遺跡が存在し、市内有数の遺跡地帯となっている。調査地南側の隣接地は、小坂遺跡4次調査として平成18年12月に調査が行われている。

試掘調査は、平成19年3月に行い弥生時代の溝、土坑、柱穴、を検出し弥生時代後期の土器が多量に出土した。これらのことより、文化財課、(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）と道路建設課は遺跡の取り扱いについて協議を行い、開発工事によって消失する遺跡



に対して、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、文化財課の指導のもと、埋文センターが主体となり、2007（平成19）年10月16日より本格調査を実施した。3工区の調査としては、6回目の調査となる。

## 2. 調査の経過（第2図）

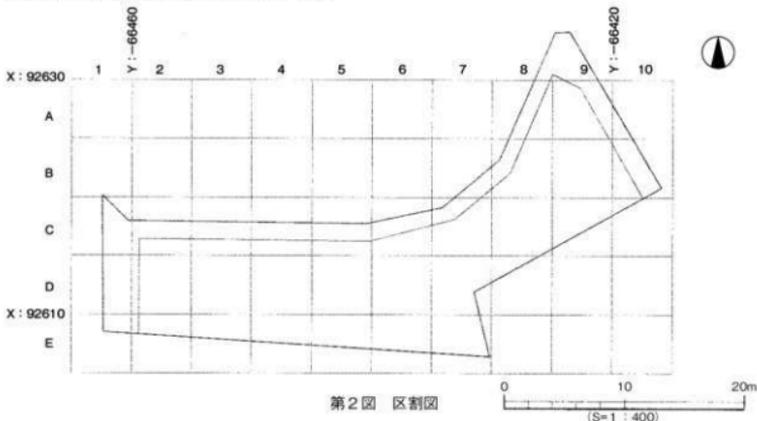
発掘調査（屋外調査）は、2007（平成19）年10月16日～同年12月27日の間実施した。

発掘調査初日には、仮設テントを設置し、発掘機材の搬入を行った。調査地の東西にフェンスを設置し西側には調査告知の看板を設置する。

調査は、調査区を設定し線引きを行い、重機を使用して掘削を開始した。調査区の掘削を始める前に建物基礎と境界コンクリート基礎の撤去と移動を行った。調査区の掘削は、はじめに北東側より行い、次に西から東に向かって掘削を行った。掘削深度は西側で50cm、北東側で80cmを測る。排土置き場は、南側と南東側に設定し不整地運搬車と重機を使用して排土を盛り上げた。排土山はブルーシートで被い、杭とロープを使用して安全対策を行った。

遺構検出作業は調査区の西側より行った。遺構は溝、柱穴、性格不明遺構を検出した。10月25日には、有限会社四国測量設計に委託し調査区内に基準点を設置し座標系に伴う調査区割りを設定した。調査区のグリッドは西から東方向に1・2・3…8・9・10、北から南方向にA・B・C・D・Eと番号を付した。

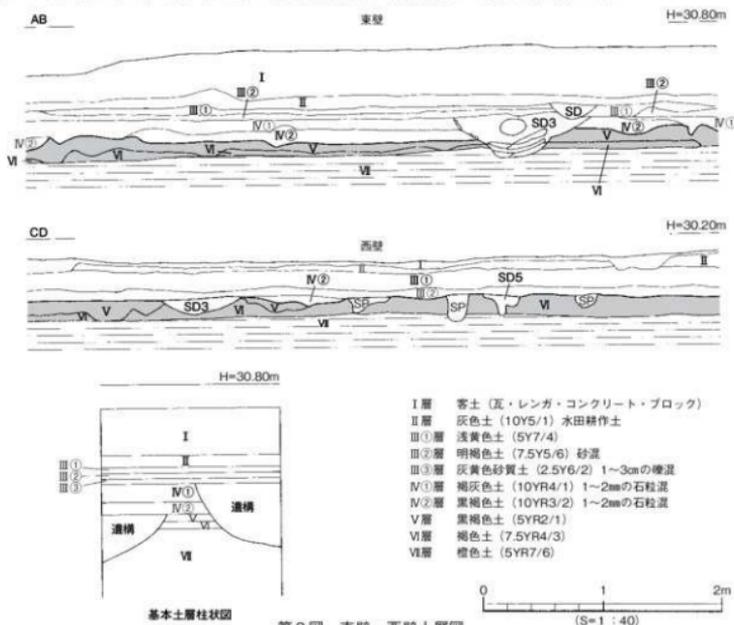
その後、平板を用いて縮尺100分の1による遺構配置図を作成した。11月8日に遺構検出状況の写真を高所作業車を使用して行った。遺構埋土と遺構番号を記録した後に、溝より遺構調査を開始した。12月5日には、SD1・2出土遺物の検出写真撮影を行い、測量後取り上げを層序ごとに行った。記録は、測量図、写真を用いた。順次、性格不明遺構、柱穴の精査を行い遺構全体が明確になった12月14日に高所作業車を使用し遺構完掘状況の写真撮影を行った。測量補足、発掘機材の撤去を行い12月20日～26日までの4日間重機を使用して調査区内の埋め戻し作業を行った。12月27日には発掘機材の搬出、調査事務所を解体し調査を終了する。



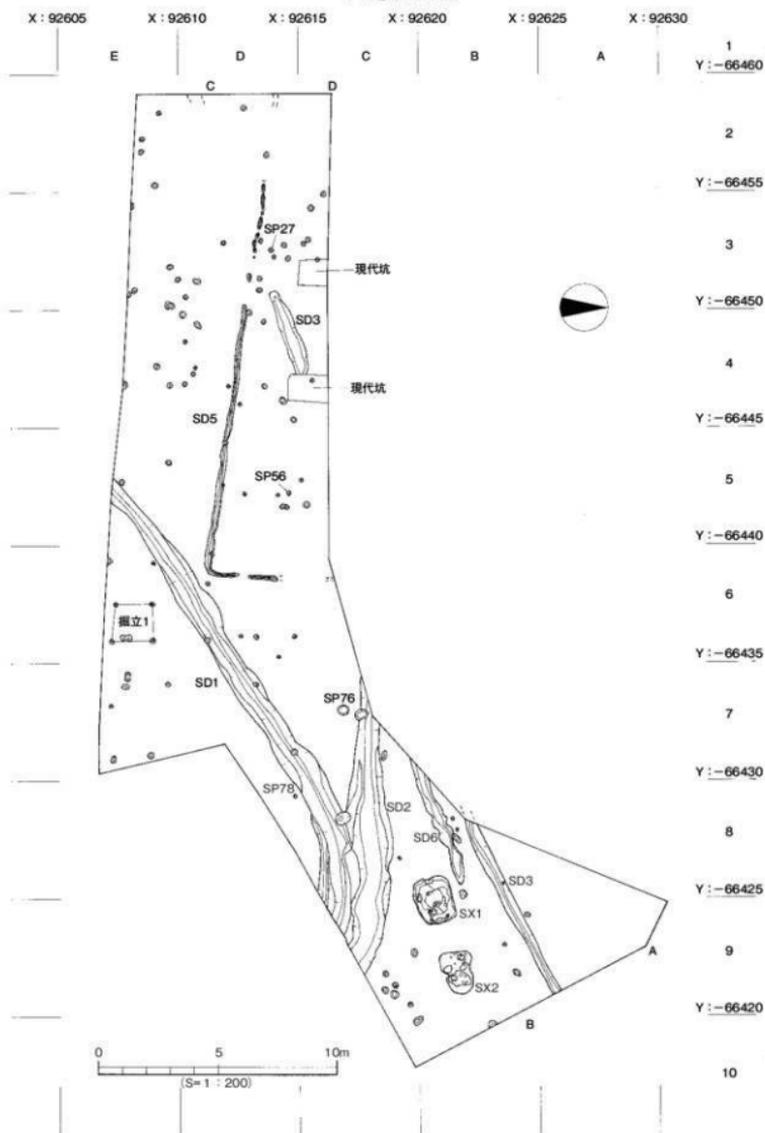
## 第2節 層位 (第3図)

調査地は、小野川中流右岸の小野扇状地と石手川扇状地との間に形成された洪積台地上に立地し、標高30.40mを測る。調査前は宅地であった。周辺の広範囲の遺跡からは、約22,000年～25,000年前に鹿児島県始良・丹沢カルデラから噴出降下したAT火山灰と、約6,300年前に鬼界カルデラから噴出降下したアカホヤ火山灰が確認されている地域である。

本調査では、6層の土層を確認した。第Ⅰ層客土、造成土(瓦、レンガ、コンクリート、ブロック)調査区全域で2～50cm検出した。第Ⅱ層灰色土(10Y5/1)水田耕作土、調査区全域で4～20cm検出した。第Ⅲ①層浅黄色土(5Y7/4)調査区の南壁以外で5～20cm検出した。第Ⅲ②層明褐色土砂混じり(7.5YR5/6)しまり有り・粘性無し。調査区の西側東側で5～10cm検出した。第Ⅲ③層灰黄色砂質土(2.5Y6/2)1～3cmの礫を含む。調査区の北壁中央部で2～6cm検出した。第Ⅳ①層褐灰色土(10YR4/1)1～2mmの石粒80%含む。しまり有り・粘性無し。調査区の北東部で4～10cm検出した。第Ⅳ②層黒褐色土(10YR3/2)1～2mmの石粒50%含む。しまり有り・粘性無し。調査区の東側と北西部で4～10cm検出した。第Ⅴ層黒褐色土(5YR2/1)しまり無し・粘性有り。調査区のはほぼ全域から2～20cm検出した。第Ⅵ層褐色土(7.5YR4/3)しまり無し・粘性無し。調査区全域で検出した。第Ⅶ層橙色土(5YR7/6)しまり有り・粘性無し。調査区全域で検出した。第Ⅷ層はアカホヤ火山灰と思われる。第Ⅴ層・第Ⅵ層・第Ⅶ層は地山無遺物層。遺構検出はⅦ層上面で行った。



小坂遺跡6次調査



第4図 遺構配置図

### 第3節 遺構と遺物

検出した主な遺構は、溝6条、性格不明遺構2基、掘立柱建物1棟、柱穴100基である。遺物は遺構内と包含層から出土している。その遺物には、弥生土器（甕形土器、壺形土器、鉢形土器、支脚形土器）、土師器（皿形土器、埴形土器）、須恵器（甕形土器）、砥石、敲石がある。その数量は、テンバコ（内寸390×550×291mm）10箱である。遺構の帰属時期は、出土遺物を基準として弥生時代後期末の遺構が多い。以下、遺構と遺物を取り上げて時代ごとに報告を行う。

#### 1. 弥生時代

溝2条を検出した。

##### (1) 溝(SD)

###### SD1（第5～9図、図版2・3）

SD1は、調査区の東部から南部のE5～C9区に位置する。東側ではSD2と明確な前後関係は確認できなかった。規模は検出長21.0m、幅0.55～1.20m、深さは東側で0.35m、南西側で0.15mを測る。溝底での高低差は0.10mを測り東から南東に傾斜している。断面形態はレンズ状である。東南部に幅0.30mの溝を確認しSD4として遺物を取り上げたが土層観察により同一の溝とした。

埋土は南壁で3層、A・Bベルトで2層、Cベルトで3層、分岐地点Dベルトで5層に分層できる。南壁は、①層黒褐色土（10YR3/2）、②層褐灰色砂質土（10YR4/1・砂90%）、③層黒褐色土（10YR3/1）、A・Bベルトは、①層黒褐色土（5YR2/1・砂5%）、②層黒褐色土（5YR3/2・砂50%）、C・Dベルトの合流地点は、①層黒褐色土（10YR3/2・砂10%）、②層黒褐色土（10YR3/1・細砂5%）、③層褐灰砂質土（10YR4/1）、③-1層褐灰砂質土（10YR4/1・1～3mmの石粒を30%）、⑤層黒褐色土（7.5YR3/2・粘性強い）、⑥-1層褐灰色土（7.5YR4/1・1～3mmの石粒を10%）、⑦層にぶい褐色土（7.5YR5/4・粘性強い）に分層できる。南東調査壁では基本土層の第IV②層が上面を覆う。SD1とSD2の平面プランは掘削後での状況である。

遺物は上層、中層、下層に分けて遺物の取り上げを行い上層からの出土量が多い。出土した遺物は弥生土器の甕形土器、壺形土器、鉢形土器、支脚形土器と石製品がある。分岐点周辺ではSD2出土遺物と接合できたものがある。

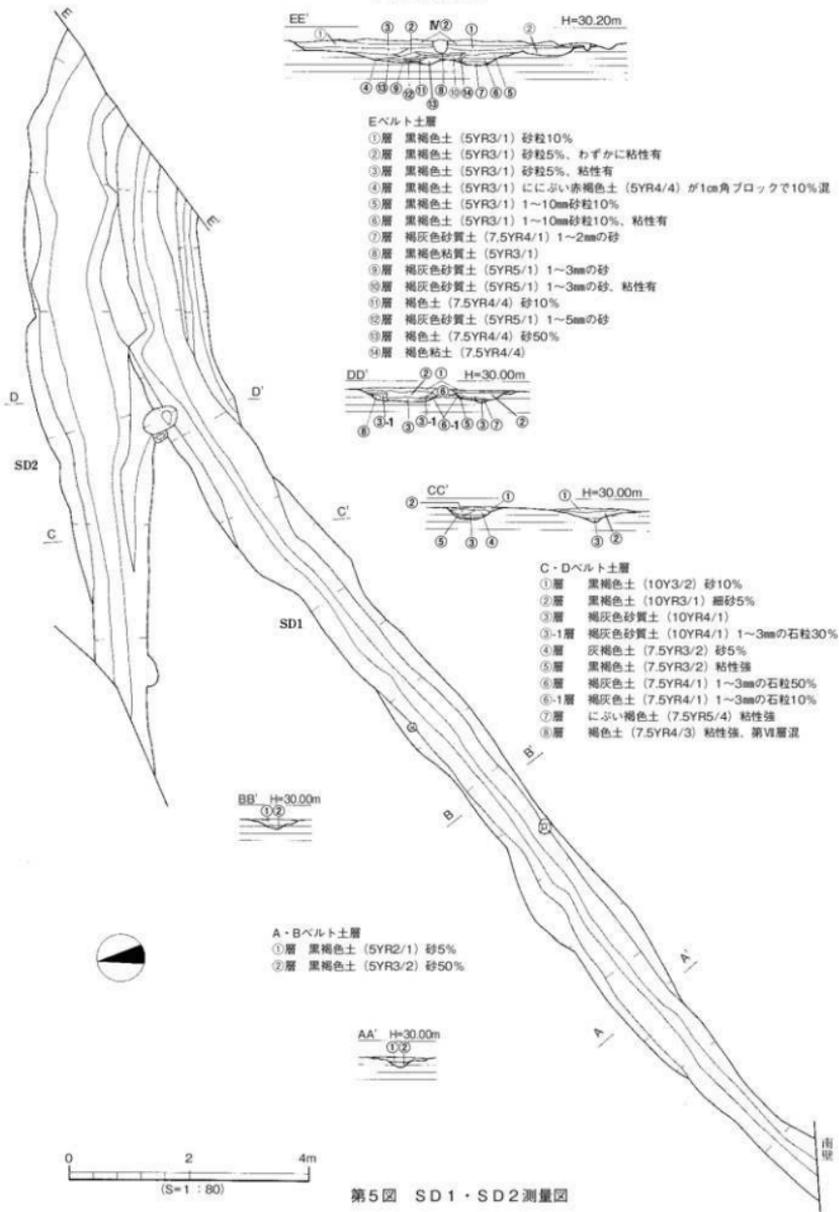
##### 出土遺物（1～32）（第6～13図、図版5・6）

###### 上層出土遺物（1～6）（第6・10図）

甕形土器（1～4）**1**は口縁部から胴下部が残る。口縁部は「く」の字状に折れ曲がり口端部は尖り気味に丸く仕上げている。胴中位の張りは弱い。**2**は平底の底部より内湾気味に立ち上がる胴部をもち胴部中位の張りは弱い。**3**は丸みをもつ平底の底部より内湾気味に立ち上がる胴部をもつ。4は丸みをもつ小さな平底より内湾気味に立ち上がる胴部をもつ。よく使用されており器壁が割れ脆くなっている。内面には煮汁のようなものが見られ黒ずんでいる。

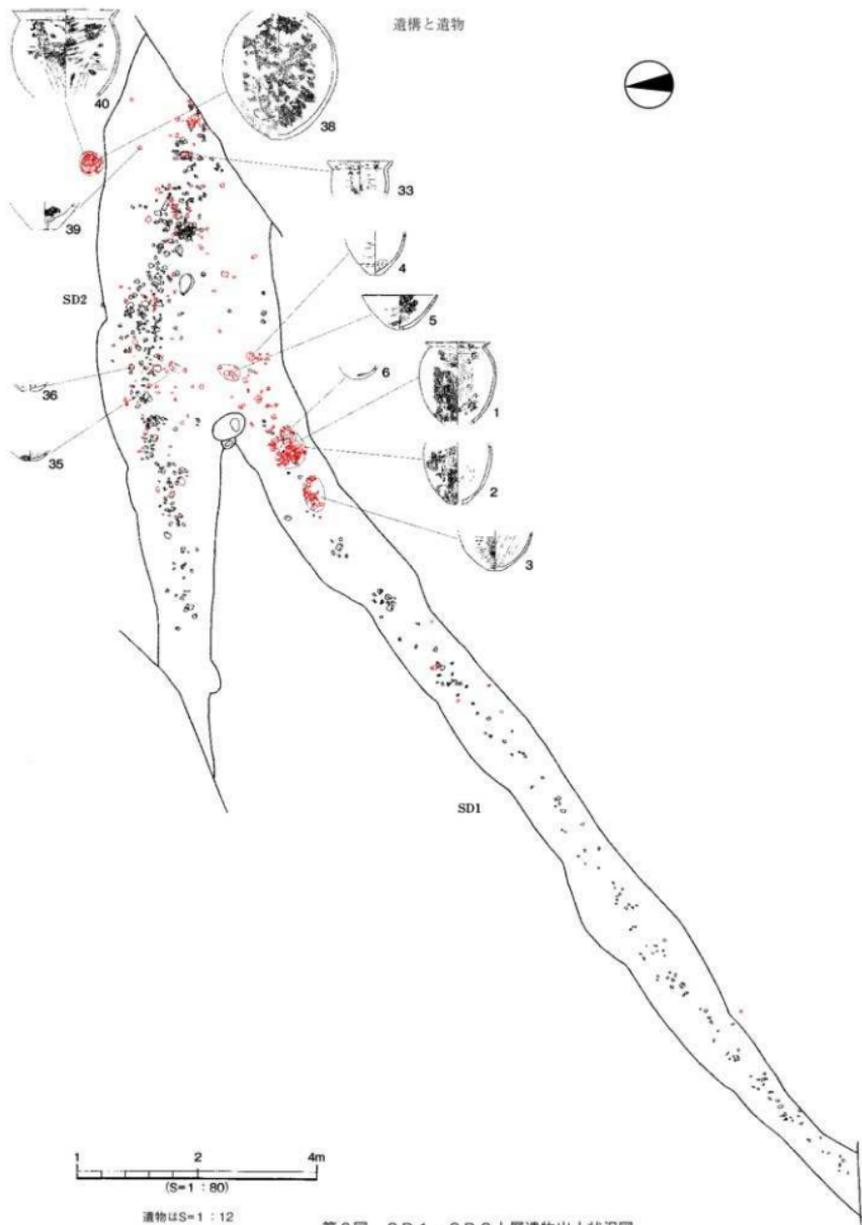
鉢形土器（5・6）**5**は外傾する直口口縁、口端部は尖り気味に丸い。底部は丸みをもつ。**6**は丸みをもつ平底の底部片。

小坂遺跡6次調査



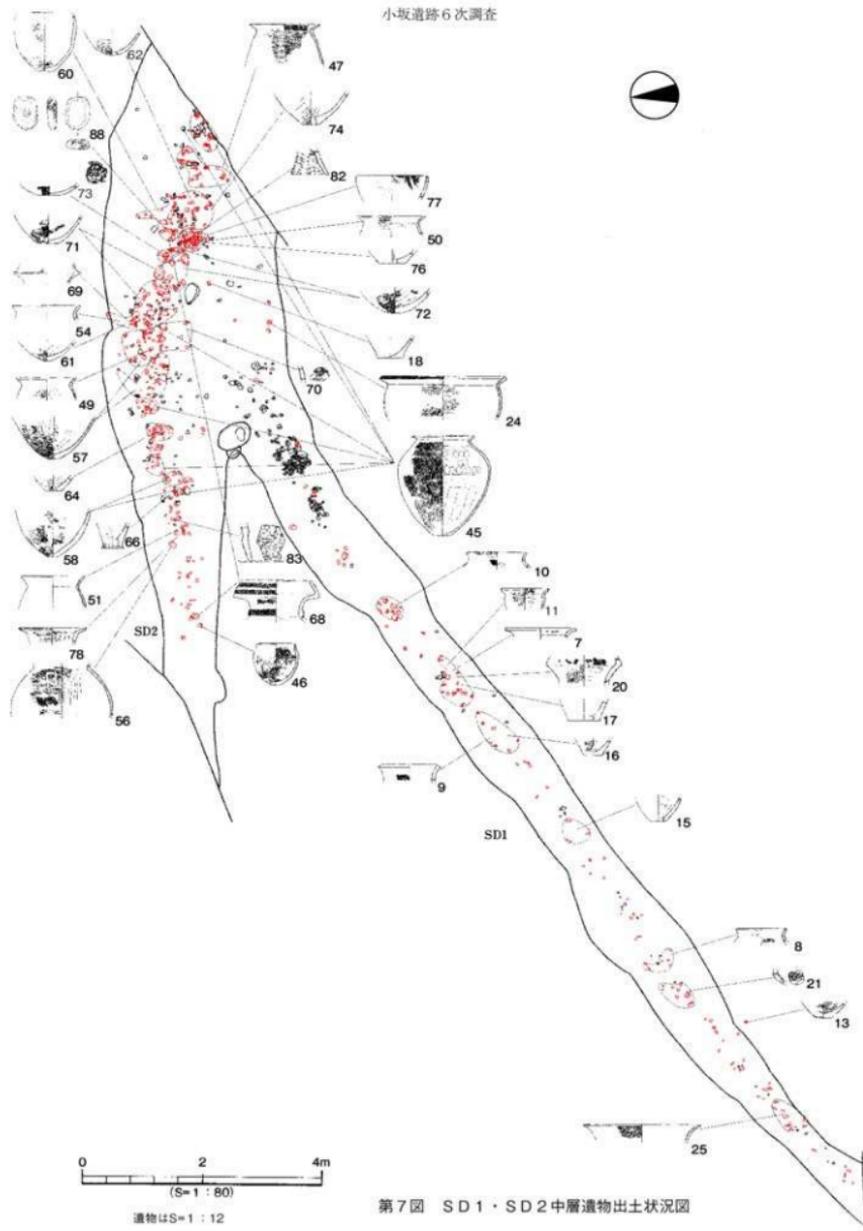
第5図 SD1・SD2測量図

遺構と遺物

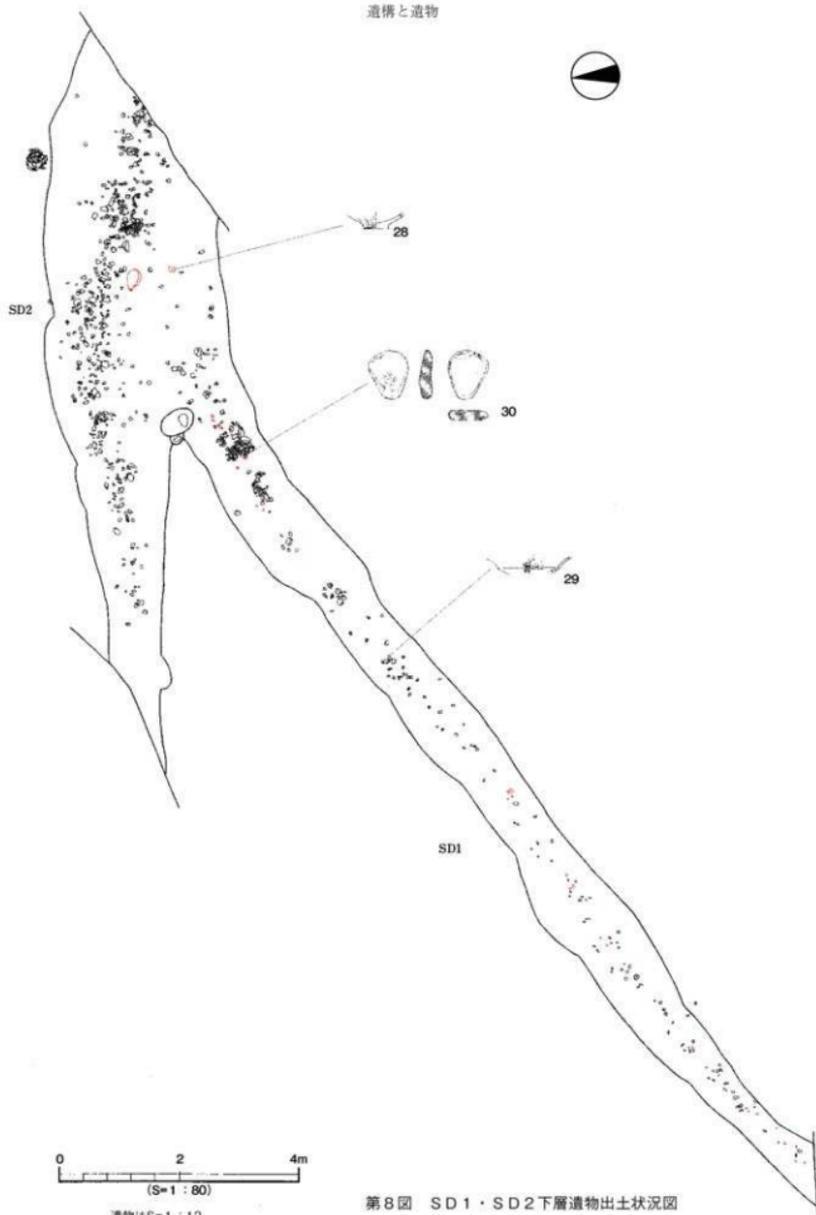


遺物はS=1:12

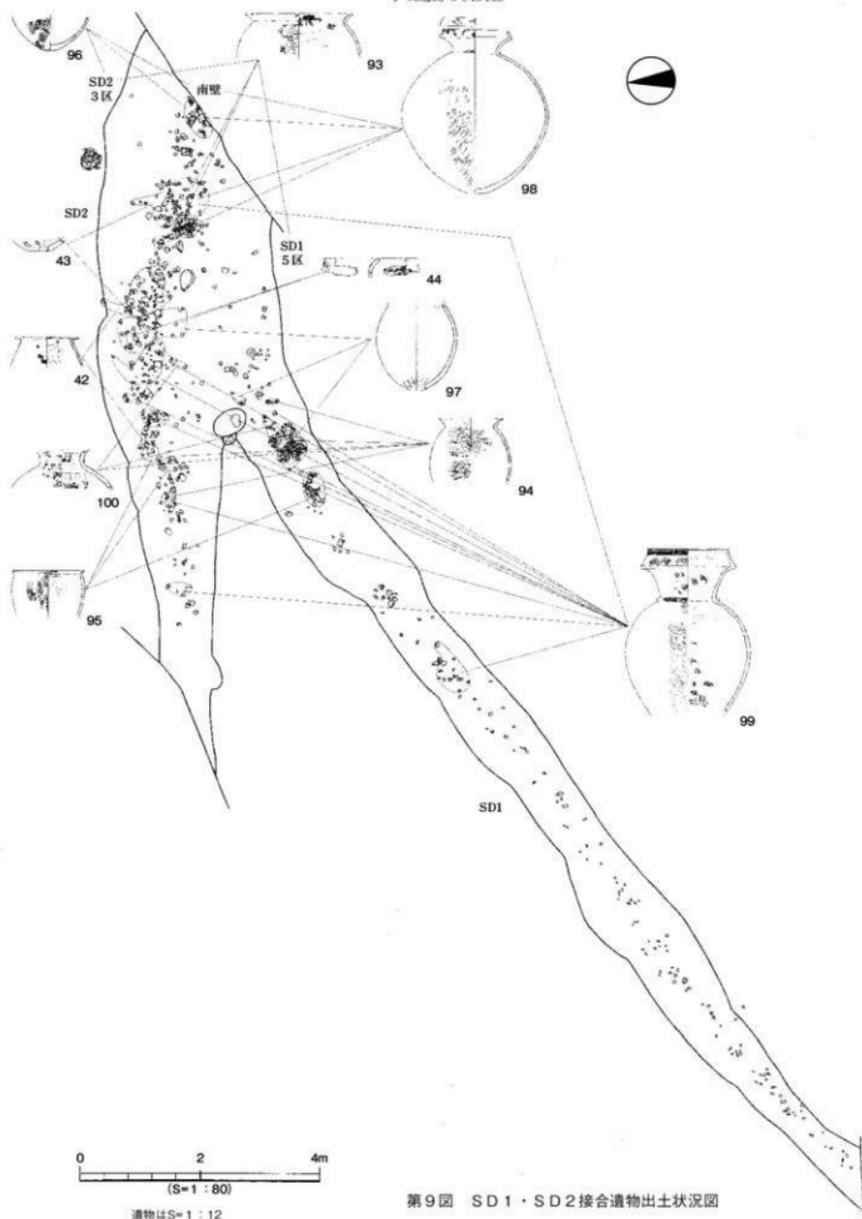
第6図 SD1・SD2上層遺物出土状況図



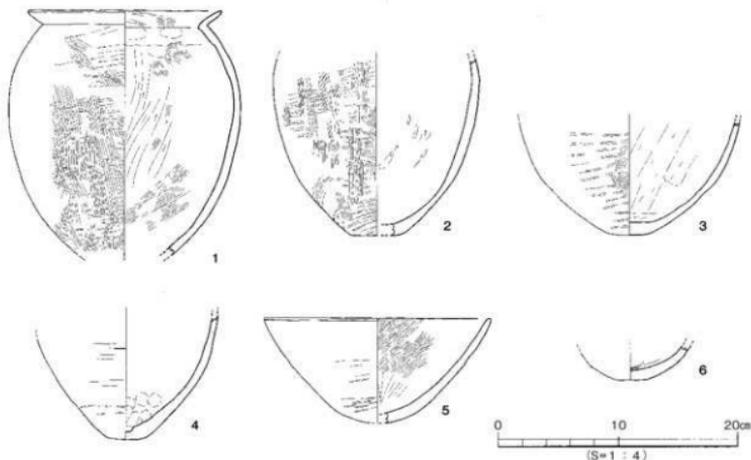
第7図 SD1・SD2中層遺物出土状況図



第8図 SD1・SD2下層遺物出土状況図



第9図 SD1・SD2接合遺物出土状況図



第10図 SD1上層出土遺物実測図

## 中層出土遺物 (7~25) (第7・11図)

甕形土器 (7~18) 7~10は外反する口縁部片。7・9の口端部は面をもつ。10の口端部は面をもち僅かにくぼむ。11は外傾する短い口縁部片。12~18は底部片。12・13は丸みをもつ平底の底部。12の外面にはタタキ調整が残る。14は平底の小さな底部。外面にタタキ調整が残る。15は平底の底部の内面にケズリ痕が残る。16は平底の底部。17は僅かに上げ底の底部。18は平底の底部である。

壺形土器 (19~23) 19は口縁部から胴部の残存。口縁部は外反し口端部はナデにより肥厚し面をもち、球形の胴部は中央部で最大径を測る。20は複合口縁壺の口縁部から頸部片。口端部は欠損する。拡張部外面に波状文が僅かに残る。21は頸部片。格子状の刻目突帯文が1条巡る。22・23は底部片。22は丸みをもつ平底。23は平底である。

鉢形土器 (24) 口縁部は折り曲げられ口端部に2条の凹線文を施す。頸部下部に幅広の工具による「ノ」の字状の施文を1段施す。

高坏形土器 (25) 外反する口縁部片の口端部は丸みをもつ。外面にミガキ調整を施す。

## 下層出土遺物 (26~30) (第8・12図)

甕形土器 (26) 短く強く屈曲する口縁部の端部は上方に拡張され端面はくぼむ。

壺形土器 (27・28) 27は平底の底部。28は突出する平底の底部外面にミガキ調整を施す。

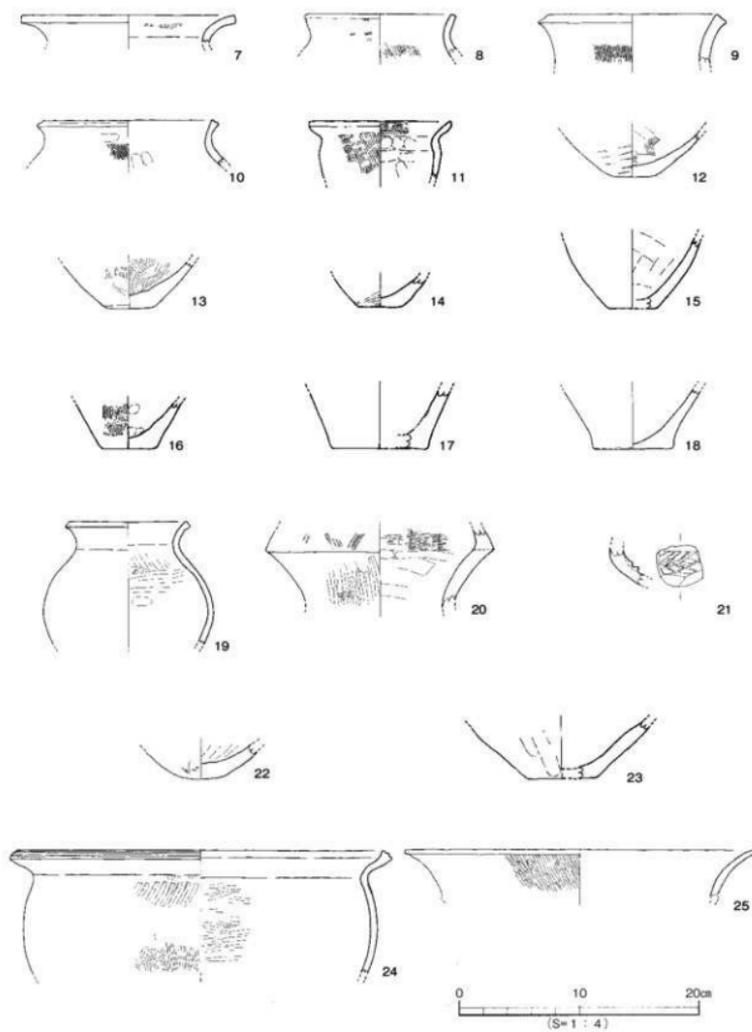
高坏形土器 (29) 稜をもち外反する口縁部。口端部は欠損している。内外面にミガキ調整を施す。

石製品 (30) A面と下端部に敲打痕があり、B面は部分的に砥石として使用した痕跡がある。

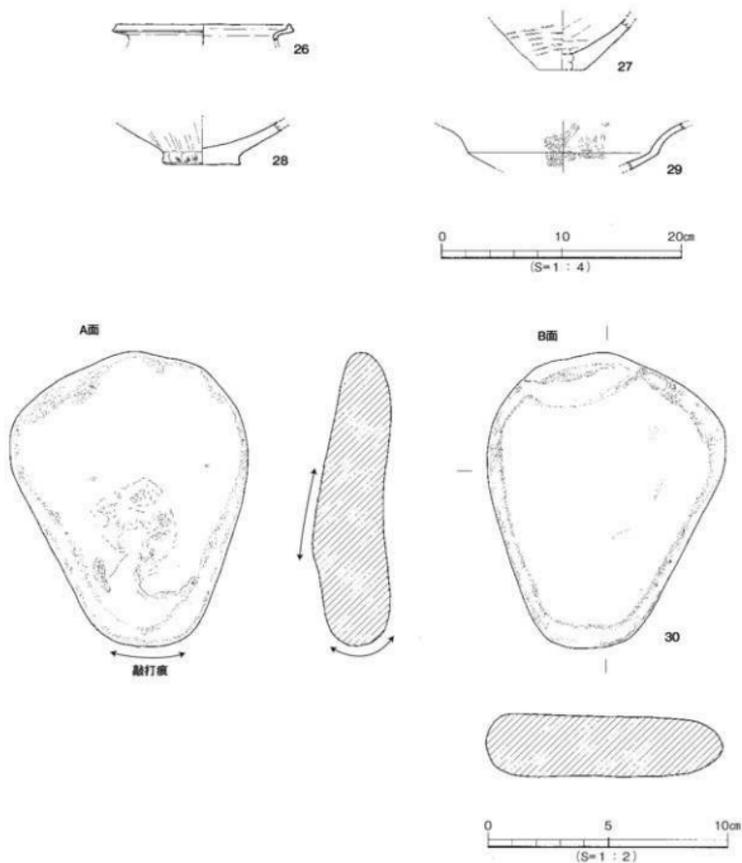
## 層位不明遺物 (31・32) (第13図)

31は直口口縁壺の口縁部片。外面に17条と3条の沈線文が残る。32は高坏形の土器の脚部片。円孔を1ヶ所看取できる。

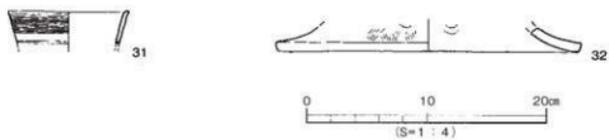
時期：出土した弥生土器の甕形土器の形態より弥生時代後期末とする。



第11図 SD1中層出土遺物実測図



第12図 SD 1下層出土土遺物実測図



第13図 SD 1層位不明出土土遺物実測図

## SD2 (第5～9図、図版2・3)

SD2は、調査区の東部のC7～9区に位置し東から西に流れる。東側はSD1と分岐する。規模は検出長12.0m、幅0.9～1.8m、深さ0.35mを測る。溝底での高低差は11cmを測り東から西に傾斜している。断面形態はレンズ状である。埋土はCベルトで5層、Dベルトで6層に分層できる。C・Dベルト①層黒褐色土(10YR3/2・砂10%)、②層黒褐色土(10YR3/1・細砂5%)、③層褐色土砂質土(10YR4/1)、④～1層褐色土砂質土(10YR4/1・1～3mmの石粒30%)、④層灰褐色土(7.5YR3/2・砂5%)、⑥～1層灰褐色土(7.5YR4/1・1～3mmの石粒10%)、⑧層褐色土(7.5YR4/3・粘性強い)である。

遺物は上層、中層、下層に分けて取り上げを行い中層からの出土量が多い。出土した遺物は弥生土器の甕形土器、壺形土器、鉢形土器、支脚形土器、手捏ね土器と石製品がある。上層と中層出土遺物が接合できた遺物と分岐点周辺ではSD1出土遺物と接合できたものがある。

## 出土遺物(33～92)(第6～9・14～19図、図版5・6)

## 上層出土遺物(33～41)(第6・14図)

甕形土器(33～37)33は短く外傾する口縁部から肩の張らない胴部に続く。口縁部は丸い。34は凹凸のある小さな底部片である。35は平底の底部片である。36・37は丸みのある平底の底部である。

壺形土器(38・39)38は平底の小さな底部より肩の張らない卵形の胴部である。残高32.2cmを測る。口縁部は欠損している。39は厚みのある僅かに上げ底の底部である。

鉢形土器(40・41)40は短く外反する口縁部から肩の張らない胴部に続き口縁部は丸みをもつ。残高は21.8cmを測る。41は丸底気味の不安定な底部である。

## 上層と中層出土接合遺物(42～44)(第9・15図)

42～44は上層と中層から出土した遺物が接合できたものである。

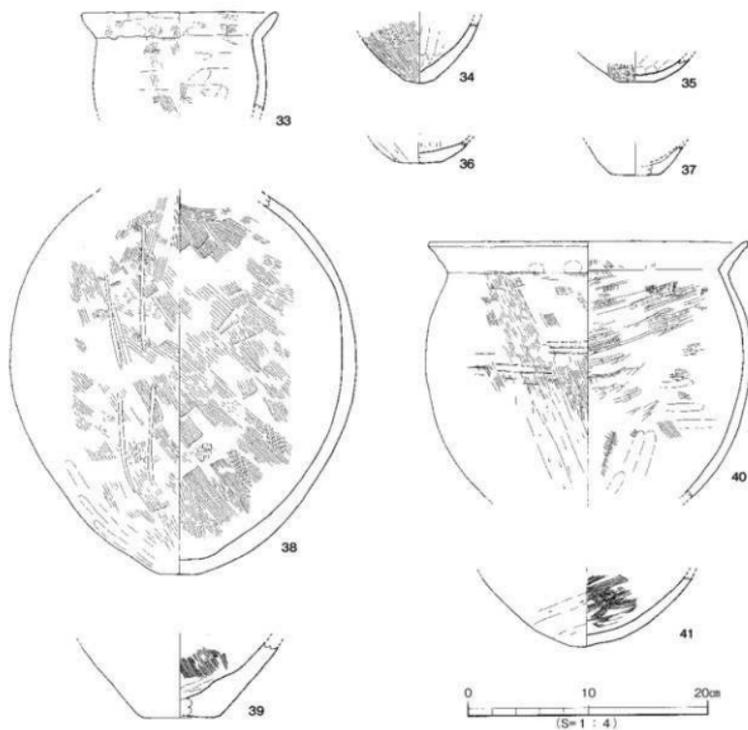
甕形土器(42)水平気味に折り曲げられる口縁部から肩の張らない胴部に続く。胴部内面はケズリ調整が行われ器壁は薄く仕上げられている。讃岐からの搬入品の下川津B類土器と思われる。

壺形土器(43)平底の底部片である。

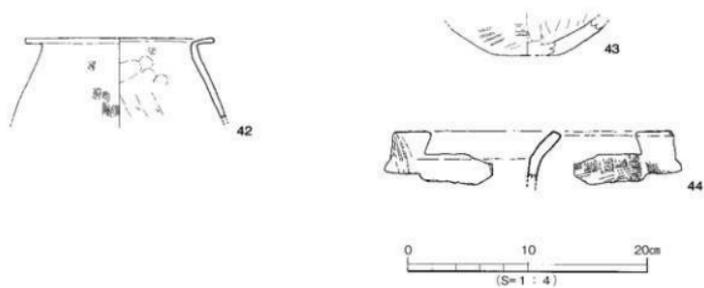
鉢形土器(44)外傾する短い口縁部片。端部は面をもつ。

## 中層出土遺物(45～88)(第7・16～18図)

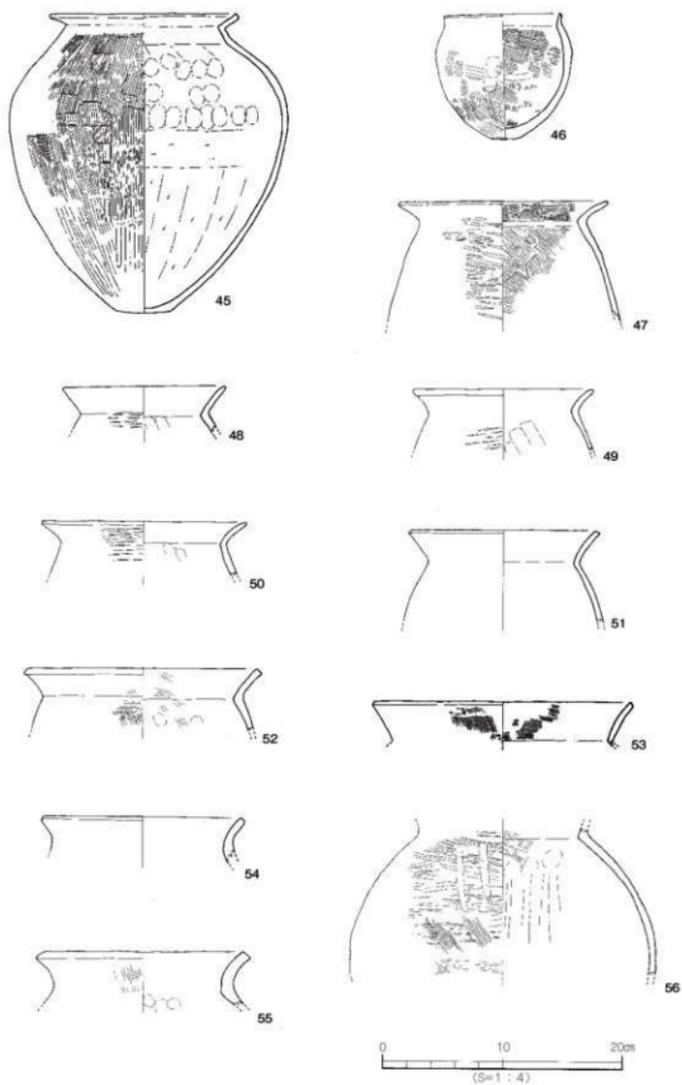
甕形土器(45～67)45は口縁部が「く」の字状に折り曲げられ端部は上方に摘み上げられる。胴部最大径は胴上位にち底部は丸みをもつ平底である。器壁はケズリにより薄く仕上げられている。胎土には角四石が含まれ讃岐からの搬入品の下川津B類土器と思われる。46は僅かに外反する口縁部をもち、小さな底部は中央部が僅かにくぼむ。47は口縁部を「く」の字状に折れ曲げ端部は丸みをもち胴部は肩が張らない。48は「く」の字状に折り曲げる口縁部の端部は丸い。49は「く」の字状に折れ曲げる口縁部。胴部にタタキ痕が残る。50は「く」の字状に折れ曲げる口縁部。口縁部から胴部にかけてタタキ痕が残る。51は「く」に字状に折れ曲げる口縁部。口縁部は「コ」の字状に丸い。52は「く」の字状の口縁部の端部は面をもつ。53は外傾する口縁部の端部は面をもつ。54は短く外反する口縁部である。55は外反する口縁部の端部は面をもつ。56は頸部から胴部にかけての残存。肩の張らない丸みをもつ胴部。頸部内面には稜をもつ。57～67は底部片。57は不安定な小さな平底。タタキ調整が顕著に残る。58は小さな不安定な平底。胴部は内湾気味に立ち上がる。59は丸みをもつ小さな平底。中央部が僅かにくぼむ。胴部は内湾気味に立ち上がる。60は平底の底部より内湾気味に立ち上がる。外面にタタキ痕が残る。61は尖り気味に丸い底部より内湾気味に立ち上がる胴部



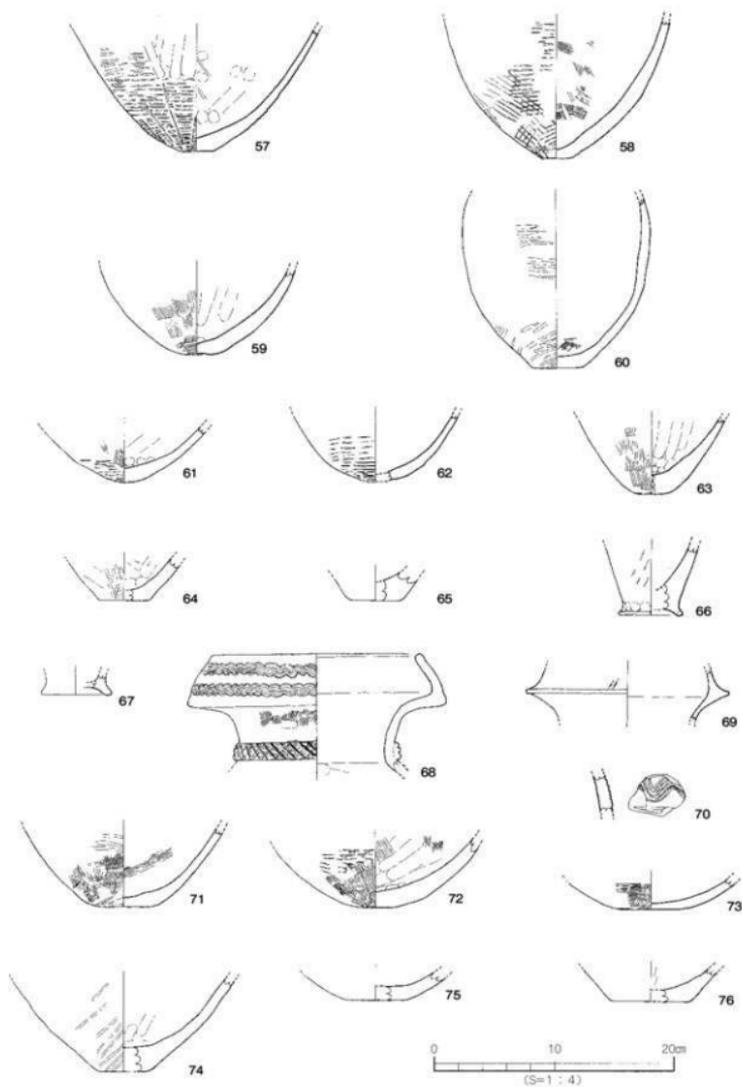
第14図 SD 2上層出土遺物実測図



第15図 SD 2上層・中層出土接合遺物実測図



第16図 SD2中層出土遺物実測図(1)



第17図 SD2中層出土遺物実測図(2)

である。**62**は丸底の底部。外面にタタキ痕が残る。**63**は小さな平底の底部より内湾気味に立ち上がる胴部である。**64・65**は平底の底部。**66・67**はくびれの上げ底の底部である。

壺形土器 (68~76) **68**は複合口縁壺である。拡張部は「く」の字状を呈する。外面に5条一組の櫛状波状文を2条と頸部に斜格子状の刻目突帯文を1条施す。**69**は複合口縁壺。拡張部は直立気味で外面に波状文を施す。**70**は拡張部の小片。外面に波状文と沈線文を施す。**71~76**は底部片。**71・72**は丸みをもつ平底より内湾気味に立ち上がる胴部である。**73**は丸みをもつ平底と胴部との境界は不明瞭である。**74**は平底の底部より内湾気味に立ち上がる胴部である。**75・76**は平底の底部。

鉢形土器 (77・78) **77**は直口口縁である。口端部は尖り気みに丸い。**78**は水平気味に折れ曲がる口縁部。口縁端面に1条の凹む線がある。

高坏形土器 (79) 大きく外反する口縁部片。

手捏ね土器 (80) 鉢形のミニチュア土器である。

支脚土器 (81~87) **81**は中空で角状の突起をもつ受部。背部に鱗状の突起部をもつ。**82**は中空の脚部片である。**83**は中空の脚部。鱗状突起の痕跡が確認できる。**84**は断面円形の角部である。**85**は角部。端部は尖り気みである。**86**は中空の台形状である。**87**は中実で台形状である。

石製品 (88) 敲石・砥石である。A面と下端部に敲打痕、B面に砥石として使用された痕跡がある。

下層出土遺物 (89・90) (第19図)

甕形土器 (89) 外反する短い口縁部の端部は面をもつ。

壺形土器 (90) 丸みをもつ小さな平底である。

層位不明遺物 (91・92) (第19図)

甕形土器 (91・92) **91**は平底の底部。**92**はくびれの上げ底の底部である。

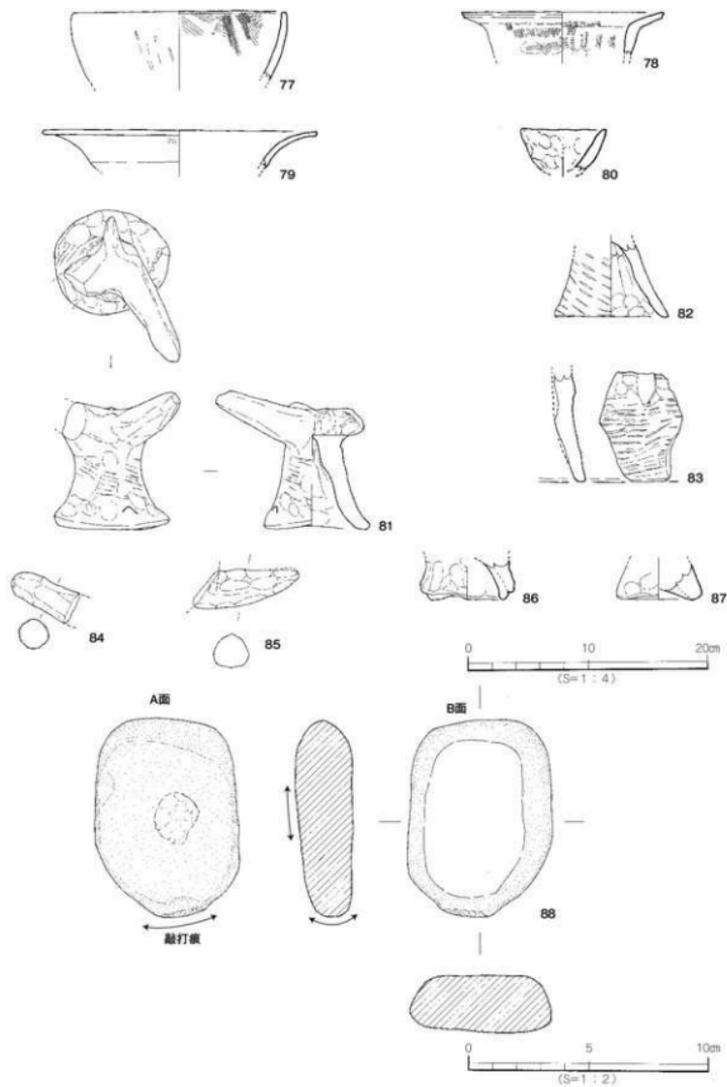
時期：出土した弥生土器の甕形土器の形態より弥生時代後期末とする。

#### SD1・SD2出土接合遺物 (93~100) (第9・20・21図、図版6)

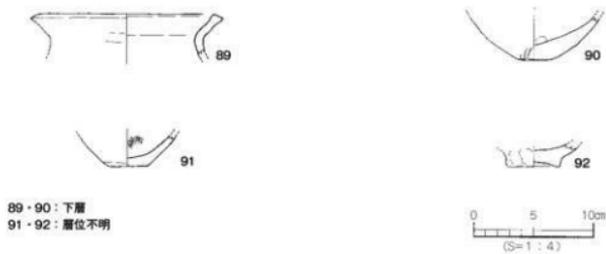
93~100はSD1とSD2が分岐しているところの上層、中層から出土し接合できた遺物である。

甕形土器 (93~97) **93**は大型品。緩やかに外反する口縁部の肩部の張りは弱い。**94**はわずかに外反する口縁部。胴部の肩は張らない。タタキ調整が顕著に残る。**95**は短く外反する口縁部の端部は丸くおさめる。**96**は丸みをもつ小さな底部に内湾気味に立ち上がる胴部である。**97**の胴部は肩の張らない卵形である。外面にタタキ痕が残る。

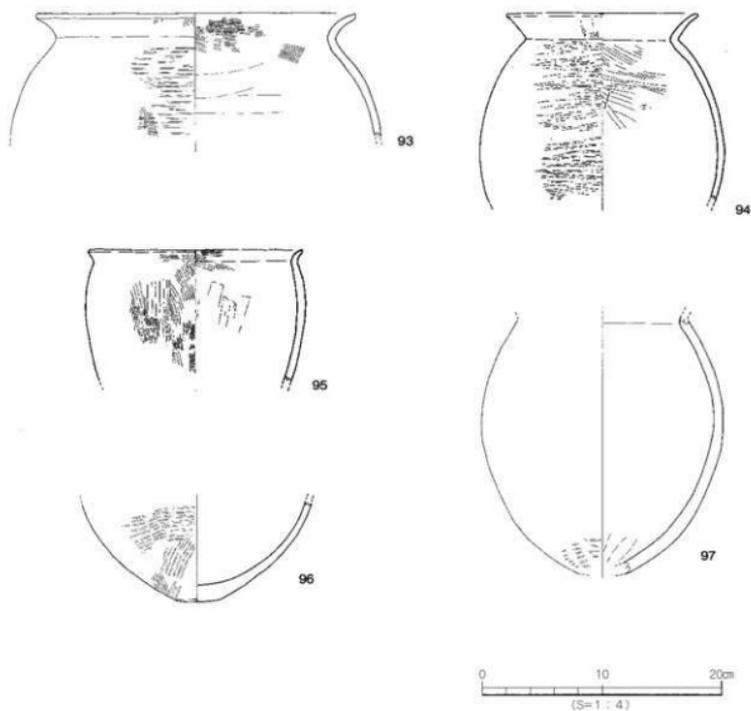
壺形土器 (98~100) **98**は複合口縁壺。口縁部は短く内傾し拡張部の外面に波状文と一部山型文を施す。頸部には斜格子状刻目のある貼り付け突帯文を1条巡らす。胴部は中央部で最大径を測る。底部は小さな平底である。**99**は複合口縁壺。内傾する拡張部の端部は外方向に肥厚し面をもつ。外面には6条の沈線文と波状文を施す。頸部に格子状の刻目のある突帯文を1条貼り付ける。胴部は上位に最大径を測る。底部は欠損している。**100**は短く直立気味の頸部に肩の張る胴部。口縁部は欠損している。内外面にハケ目調整が残る。



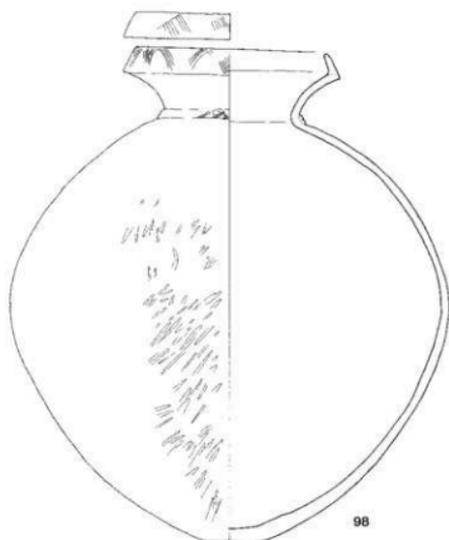
第18図 SD2中層出土遺物実測図(3)



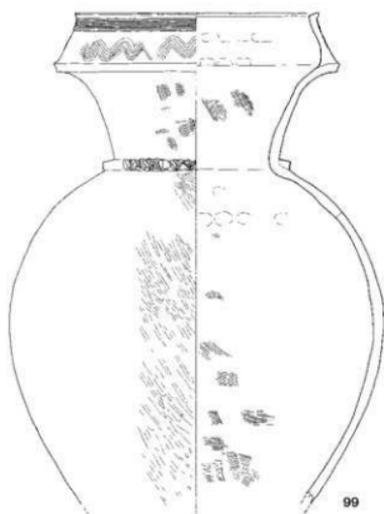
第19図 SD2下層・層位不明出土遺物実測図



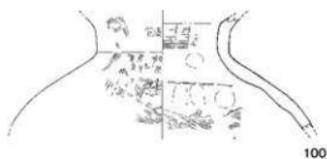
第20図 SD1・SD2出土接合遺物実測図(1)



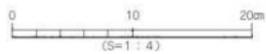
98



99



100



第21図 SD1・SD2出土接合遺物実測図(2)

## 2. 古墳時代

溝2条を検出した。

### (1) 溝 (SD)

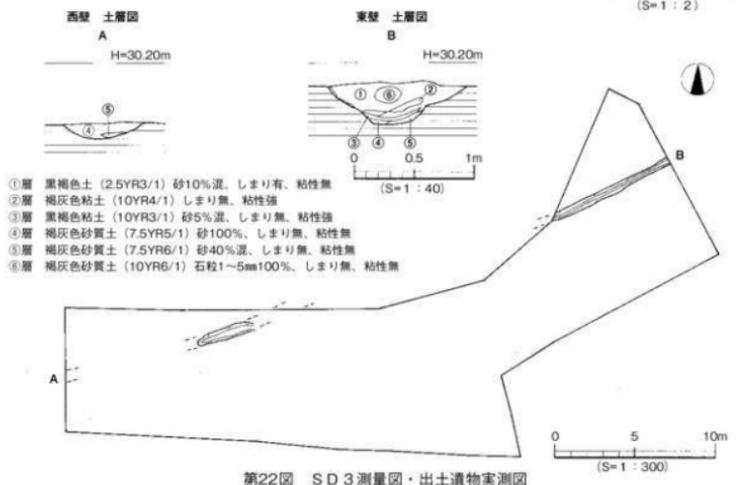
#### SD3 (第22図)

SD3は、調査区の北東から西部のA9～D4～D2区に位置する。方向は北東から南西方向である。規模は、Ⅶ層上面では、長さ8.3m、幅0.35～0.55m、深さ8cmを測る。遺構検出はⅦ層上面で行ったが、東壁での土層観察からは、Ⅳ②層上面からの遺構であることを確認している。東壁と西壁でのⅣ②層上面での規模を想定すると長さが41.5mとなり、幅1.2m、深さ34cmを測る。溝底での高低差は東壁と西壁での数値では西に10cm傾斜する。断面形態は船底状である。埋土は東壁で6層に分層できる。①層黒褐色土(2.5YR3/1・砂10%)しまり有り・粘性無し、②層褐灰色粘土(10YR4/1)しまり無し・粘性強い、③層黒褐色粘土(10YR3/1・砂5%)しまり無し・粘性強い、④層褐灰色砂質土(7.5YR5/1・砂100%)しまり無し・粘性無し、⑤層褐灰色砂質土(7.5YR6/1・砂40%)しまり無し・粘性無し、⑥層褐灰色砂質土(10YR6/1・石粒1～5mm 100%)しまり無し・粘性無しである。B8区の西壁では土層は乱れている。遺物は弥生土器、須恵器、土師器が出土した。実測可能な遺物は石器のみである。

#### 出土遺物 (101) (第22図)

石製品 (101) 砥石として使用されていたと思われる表面が滑らかである。

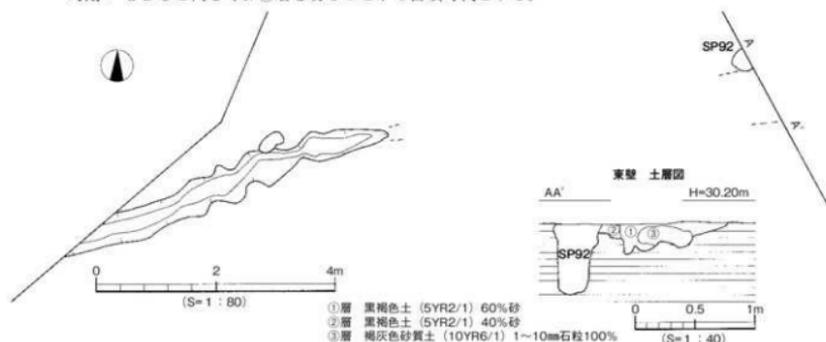
時期：基本土層のⅣ②層が弥生時代後期末の遺構SD1・2を覆い、SD3はⅣ②層を切ることから古墳時代とする。



## SD6 (第23図)

SD6は、調査区の北東部のB7～8区に位置する。方向は東西方向である。Ⅶ層上面での検出であるため、ほぼ溝底の検出である。規模は長さ5.9m、幅0.25m～0.7m、深さ5cmを測る。東壁での規模は幅約1.1m、深さ25cmを測る。溝底は凹凸が激しくわずかに東から西に傾斜する。断面形態はレンズ状である。埋土は東壁で3層に分層できる。①層黒褐色土(5YR2/1・砂60%)、②層黒褐色土(5YR2/1・砂40%)、③層褐灰色砂質土(10YR6/1・石粒1～10mm 100%)である。西壁では、土層は乱れている。遺構検出はⅦ層上面で行ったが、東壁でⅣ②層上面からの遺構であることを確認している。遺物は弥生土器が少量出土した。実測可能な遺物はない。

時期：SD3と同じくⅣ②層を切ることから古墳時代とする。



第23図 SD6測量図

## 3. その他の遺構と遺物

溝1条、性格不明遺構2基、掘立柱建物跡1棟である。

## (1) 溝 (SD)

## SD5 (第24図)

SD5は、調査区中央部のD2～6区に位置する。規模は検出長19.5m、幅0.1～0.3m、深さ5cmを測る。基本土層の第Ⅵ層上面での規模は検出長25m、幅30cm、深さ15cmを測る。埋土は黒褐色土(2.5Y3/2・砂30%)である。断面形態は西壁では船底状でⅦ層上面検出時は「U」字状である。出土遺物はない。

時期：埋土から古墳時代以降と思われるが明確ではない。

## (2) 性格不明遺構 (SX)

## SX1 (第25図)

SX1は、調査区の東部BC8～9区に位置する。平面形態は長方形である。規模は1.95×1.50m、深さ0.27mを測る。埋土は3層に分層できる。①層黄灰色砂質土(2.5Y4/1・砂90%)、②層黒褐色土(2.5Y3/1)に橙色土(7.5YR7/6)が30%混じる。③層灰黄褐色土(10YR4/2・砂20%)である。断面形態は不整形で床面は凸凹している。出土遺物はない。

時期：埋土から中世と思われるが明確ではない。

**SX2 (第25図)**

SX2は、調査区の東部B9区に位置する。平面形態は不整形である。規模は1.83×1.34m、深さ0.04mを測る。埋土は①層黄灰色砂質土(2.5Y4/1・砂90%)である。断面形態は不整形で床面は凸凹している。出土遺物はない。

時期：埋土から中世と思われるが明確ではない。

**(3) 掘立柱建物跡 (掘立)**

**掘立1 (第26図)**

掘立1は、調査区のE6区に位置する。規模は1間×1間で柱間は1.58mと1.54mを測る。柱穴の平面形態は円形で径20cm～30cm、深さ12cm～30cmを測る。埋土は灰褐色土(7.5YR5/2)砂10%含む。出土遺物はない。

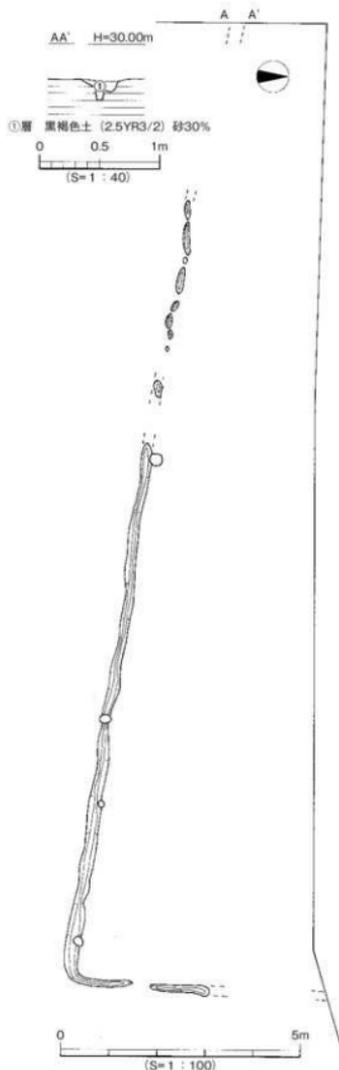
時期：埋土から中世以降と思われるが明確ではない。

**(4) SP出土遺物 (102～105) (第27図)**

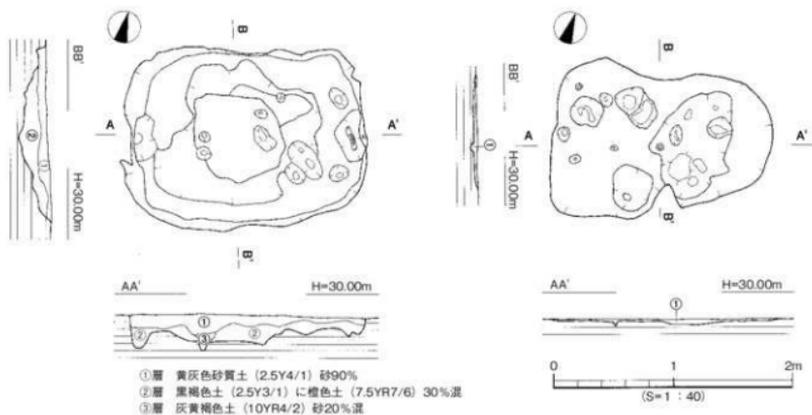
102はSP78出土の弥生の甕形土器の底部片。埋土は黄灰色土(2.5Y6/1)。103はSP76出土の弥生の高坏形土器の脚部片。埋土は黒褐色砂質土(2.5Y3/2)。104はSP56出土の瓦器皿である。埋土は黒褐色土(10YR3/1)。105はSP27出土の土師器塚である。埋土は黄灰色土(2.5Y6/1)。

**(5) 出土地点不明遺物 (106～110) (第28図)**

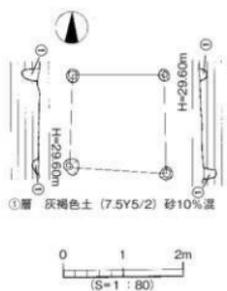
106～110はSD1、SD2検出時に出土した弥生土器である。106は甕形土器。わずかに外反する口縁部の端部に1条の凹む線がある。107は甕形土器の口縁部片。108は甕形土器の底部片。109は高坏形土器の柱部。110は器台形土器の口縁部片である。



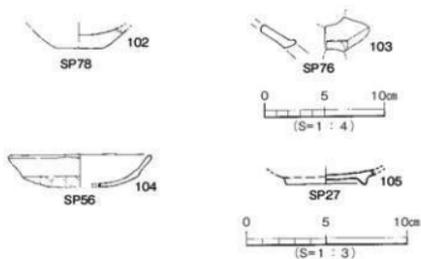
第24図 SD5測量図



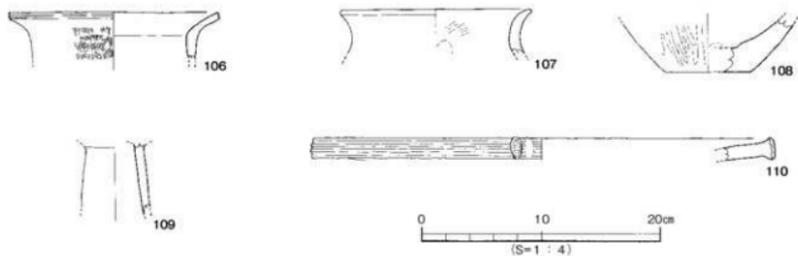
第25図 SX1・SX2測量図



第26図 堀1測量図



第27図 SP出土遺物実測図



第28図 出土地点不明遺物実測図

## 第4節 小結 (第29図)

今回の調査では、弥生時代と古墳時代の遺構を検出した。注目する遺構と遺物は、弥生時代のSD1とSD2である。

遺構：SD1とSD2は位置と規模などから、SD1は4次調査SD2とSD3の南半部、SD2は4次調査のSD3の北半部につながる。SD2は4次調査のSD3が分岐し西側に伸びる東西方向の溝になる。SD1は4次調査のSD3が分岐し南西方向に折れ曲がる溝であることが調査より判明した。

遺物：SD1とSD2出土遺物は、3層に分けて取り上げを行った。時期は殆どが弥生時代後期末である。その中には接合できたものがあり、SD1とSD2は同時に機能していたことになる。また、上層と中層から出土した遺物も接合できたものがあり、堆積状況からは時期的に堆積したのではなく時間的な経過を示すものである。4次調査SD2・3から出土した遺物の時期は6次調査出土遺物と同じく弥生時代後期末である。

今回の調査地から検出したSD1・2は、隣接する4次調査で検出した弥生時代後期末の堅穴住居の北側に位置することになり、西側と北側からは集落に関連する遺構を検出していないことから、SD1・2は4次調査SB1の北側を区画する溝と考えられる。出土遺物には、SD1とSD2の分岐点周辺と4次調査のSD3から破片の大きなものと復元可能なものが集中して出土している。この場所は4次調査の堅穴住居に近接することから、意図的にこの場所に置かれたか廃棄されたものと考えられる。また、4次調査・6次調査の出土遺物の中には讃岐と吉備からの搬入品と見られる遺物があり他地域との交流を考える上での貴重な資料である。

今後は、調査が行われていない調査区の南側に広がると思われる弥生時代後期末の集落関連遺構の調査、特に区画溝の検出と搬入遺物には注目していきたい。



## 第11章

# 中村松田遺跡

－ 5 次調査－



# 第11章 中村松田遺跡5次調査

## 第1節 調査の経緯

### 1. 調査に至る経緯（第1図）

2005（平成17）年5月、松山市都市整備部道路建設課（以下、道路建設課）より松山市道中村桑原線（3工区）道路改良工事にあたり、当該地の埋蔵文化財確認願が松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。

申請地内では道路改良工事に伴い、平成11年度から16年度までに数々の発掘調査が実施され、弥生時代から中近世までの集落関連遺構や遺物が確認されている。今回発掘調査を実施した松山市中村二丁目周辺では、中村松田遺跡（1～4次調査）をはじめ小坂七ノ坪遺跡や小坂釜ノ口遺跡などがあり、弥生時代後期を中心とした集落の存在が近年の調査・研究の結果、明らかになりつつある。

今回の調査においては、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）と道路建設課が委託契約を結び、2008（平成20）年5月に松山市中村二丁目43番2の一部外における試掘調査を実施した。試掘調査対象地は、松山市が指定する埋蔵文化財包蔵地の〔No.161中村二丁目遺物包含地〕内にあたる。試掘調査の結果、溝や柱穴、及び遺物包含層を検出したことから、本格的な発掘調査を実施することとなった。発掘調査は埋文センターと道路建設課が委託契約を結び、埋文センターが主体となり当該地内における弥生時代集落の範囲や様相解明を主目的とし、2008（平成20）年10月より実施した。

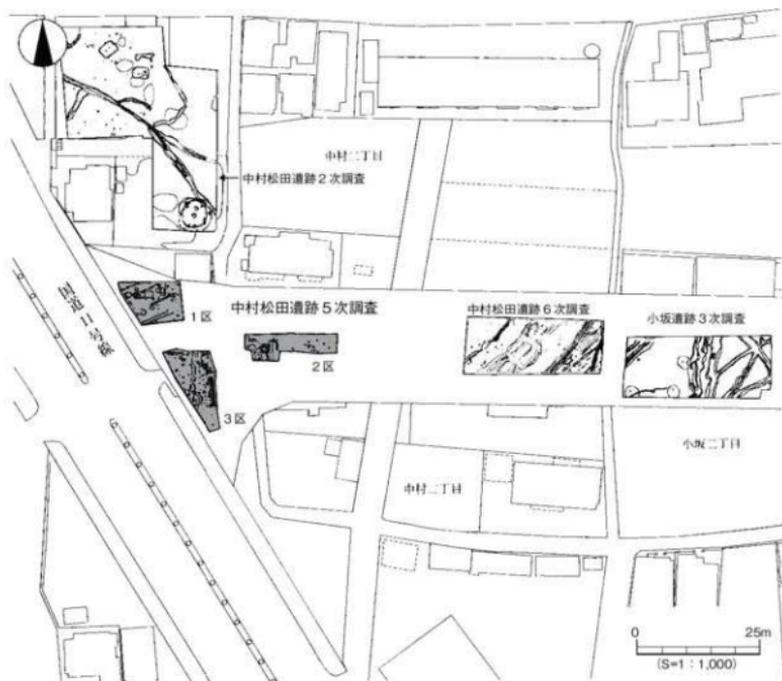
### 2. 調査の経過（第2図）

発掘調査は調査地内に生活道路が存在していたため、調査地内を3分割して実施した。調査地北西部を1区、東部を2区、南西部を3区とし、1区から順に調査を行った。

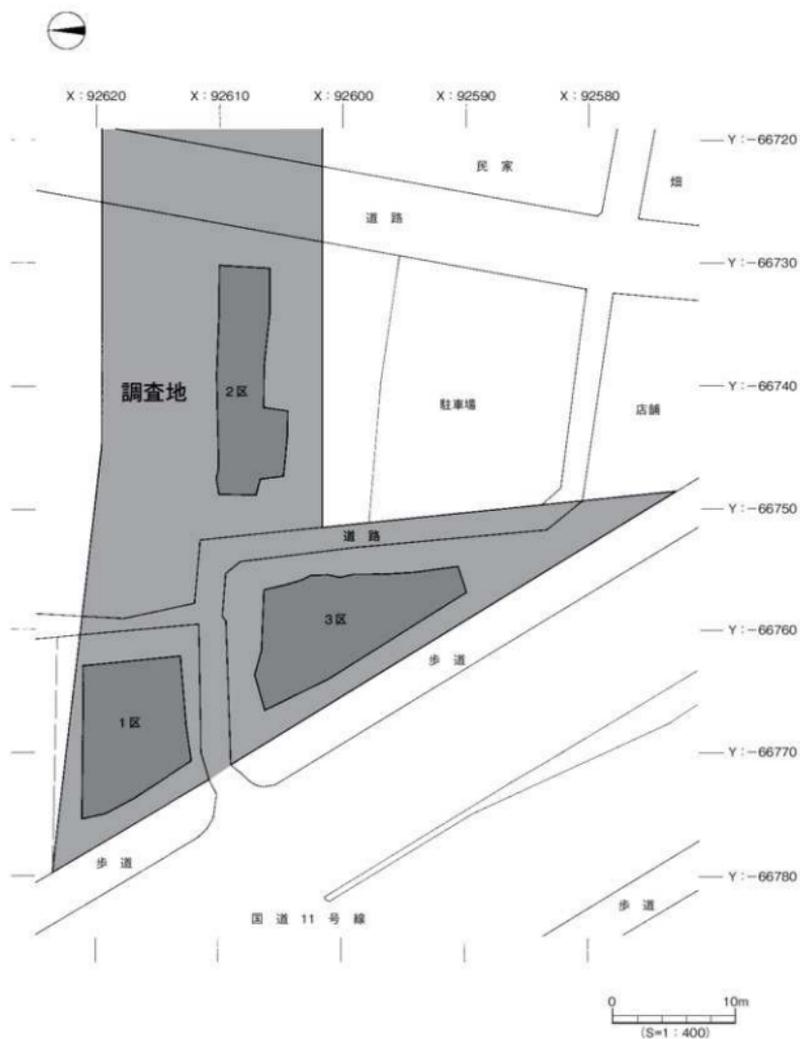
平成20年10月16日、発掘用具の搬入や安全対策用の杭を設置し、10月23日から重機（バックホー0.25m<sup>3</sup>）と4tダンプカーを使用し、1区の表土掘削と排土の移動を行った。1区は試掘調査の結果、遺構面が2面あり10月27日より第1面（第Ⅵ層上面）の調査を開始した。10月28日からは、1区の調査と併行して2区の調査を開始した。2区では1区と同様、重機とダンプカーにより表土掘削と排土の移動を行った。なお、2区も1区と同様に遺構面が2面あり第1面の調査から行った。10月30日、1区の遺構検出作業が終了し、溝や土坑、柱穴を検出した。同日、測量会社（エクセル調査設計）により1区と2区に3点ずつの4級基準点を設置した。11月6日、1区の調査を終了し2区の調査に移行した。2区では溝や土坑を検出した。11月12日、2区の調査と併行して1区の調査（第2面）を開始した。1区では手作業により第Ⅶ層以下の土層を掘り下げ、11月18日、第Ⅸ層上面にて溝1条と柱穴28基を検出した。その後、1区と2区で検出した遺構の掘り下げや測量作業を行った。11月27日、1区の調査をすべて終了し、12月2日、重機の使用により1区の埋戻し作業を行い、その後、3区の表土掘削や排土移動を行う。12月4日、2区の調査（第1面）が終了し、第2面（第Ⅸ層上面）の調査を開始する。手作業により第Ⅸ層までの掘り下げを行い、12月8日、遺構検出作業を終了し、柱穴14基を検出した。同日、3区に4級基準点を設置した。

12月11日、3区の遺構検出作業〔第1面：第Ⅶ層上面〕を行い、堅穴住居や溝、土坑、柱穴を検出した。12月25日、平成20年12月の調査を終了（年末休み）。平成21年1月6日より調査を再開する。

2区と併行して3区の溝を中心に掘り下げや測量を行う。1月13日、2区で検出した井戸の形状を確認するため、重機により一部の拡張を行った。その結果、井戸と直径3mほどの掘り込みを検出した。3区は第Ⅴ層を掘り下げ、第Ⅴ層上面にて柱穴35基を検出した。その後、2区と3区の調査を併行して行い、遺構の掘り下げや測量作業を実施した。1月22日、一般市民対象の現地説明会に先立ち、報道関係への発表を行った。1月25日、一般市民対象の現地説明会を開催し、約50名の参加者を得た。1月26日、2区と3区の測量作業を終了し、1月27日、高所作業車を使用し完掘状況写真を撮影する。1月28日より、重機とダンプカーの使用により埋戻し作業を行い、同時に発掘用具の撤去を行い、1月30日、発掘調査を終了する。



第1図 調査位置図



第2図 調査地測量図

## 第2節 層位 (第3～8図、図版1)

### 1. 基本層位

調査地は松山平野北東部、石手川扇状地の端部にあり、標高約28mに立地している。調査以前は既存宅地であった。調査で確認した土層は、以下の12層（I層～XII層）である。なお、X層以下は、深掘トレンチ等により確認した土層である。

I層-近現代の造成や水田耕作に伴う客土である。土色、土質の違いにより3層に分層される。

I①層：真砂土で、地表下40～130cmまで開発が行われている。

I②層：青灰色（10BG5/1）粘質土で、水田耕作に伴う耕土である。層厚10～40cmを測る。

I③層：灰オリーブ色（5Y6/2）粘質土で、水田耕作に伴う床土である。層厚10～20cmを測る。

II層-灰色（10Y6/1）を呈する砂質土で、すべての地区でみられ層厚5～10cmを測る。本層中からは中近世の土師器片や須恵器片、陶磁器片が少量出土した。

III層-浅黄色（2.5Y7/4）を呈するシルト層で、1区のみにみられ層厚10～15cmを測る。本層中からは遺物の出土はない。

IV層-灰色（7.5YR4/1）を呈するシルト層で、1区と2区にみられ層厚10～25cmを測る。本層中からは中世の土師器片、須恵器片、瓦片が出土した。

V層-明黄褐色（10YR6/6）を呈するシルト層で、1区全面と2区では部分的にみられ層厚10～15cmを測る。調査壁の土層観察により、2区検出の溝〔弥生時代後期〕は本層上面から掘りこまれていることを確認した。なお、本層中からの遺物の出土はない。

VI層-暗褐色（7.5YR3/3）を呈するシルト層で、全ての地区にみられ層厚5～15cmを測る。本層中からは弥生土器や石器が出土した。

VII層-黒色（7.5YR2/1）を呈する粘質土で、全ての地区にみられ層厚10～30cmを測る。3区では本層上面にて竪穴住居を検出したほか、1区では本層下面にて溝（弥生時代前期）を検出した。なお、本層中からは弥生土器片が少量出土した。

VIII層-褐色（7.5YR4/3）を呈する粘性の強い粘質土で、全ての地区にみられ層厚5～10cmを測る。3区では、本層上面にて柱穴を検出した。なお、本層中からは遺物の出土はない。

IX層-ぶい黄褐色（7.5YR2/3）を呈するシルト層で、全ての地区にみられる。本層上面が調査における最終遺構検出面となり、1区と2区では本層上面にて柱穴を検出した。本層中からは、遺物の出土はない。

X層-極暗褐色（7.5YR2/3）を呈する粘質土で、2区で検出され層厚15～25cmを測る。

XI層-ぶい黄褐色（10YR5/4）を呈する砂質シルトで、2区で検出され層厚40～50cmを測る。

XII層-黄色（10YR8/8）を呈する粘質土で、2区で検出した。2区検出の井戸は、本層を掘り込んで構築されている。

検出した遺構や出土遺物から、II層は中世、IV層は古墳時代後期から古代、V・VI・VII層は弥生時代までに堆積した土層と考えられる。なお、調査にあたり調査地内を5m四方のグリッドに分けた。グリッドは北から南へ向けてA・B・C・・・H、西から東へ向けて1・2・3・・・10とし、A1・A2・・・H10といったグリッド名を付した。

## 2. 検出遺構・遺物（第9～13図）

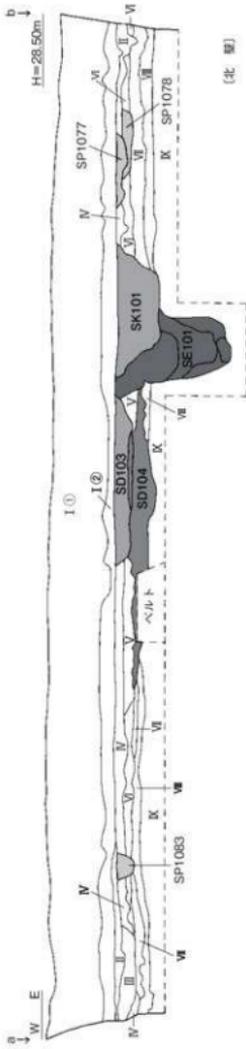
調査で検出した遺構は、竪穴住居1棟、溝11条、土坑7基、井戸3基、柱穴199基である。これらの遺構は第Ⅵ層から第Ⅸ上面での検出である。遺物は遺構及び包含層中からの出土であり、弥生土器（弥生時代前期・後期）、土師器（古墳時代～近世）、須恵器（古墳時代～中世）、瓦質土器（中世）、国産陶磁器（中世～近世）、輸入陶磁器（中世）、瓦（古代～近世）、石器（石錘、敲石）、鉄器（刀）、木器（杓子形・曲物・杭）、種子、ガラス玉である。なお、遺物の出土量は遺物収納用テンバコ（内寸390×550×142mm）約30箱分である。各地区で検出した遺構は、表1に記す。

表1 検出遺構一覧

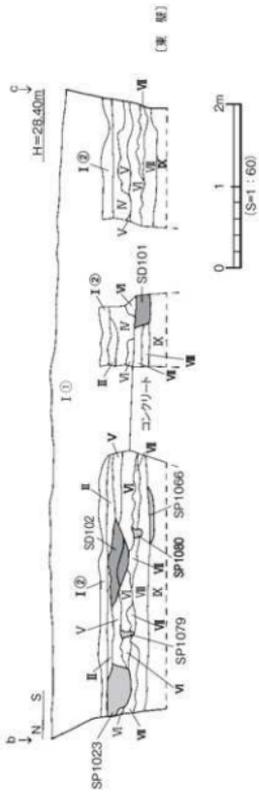
区 時代	1 区	2 区	3 区
弥生時代前期	溝：1条（SD104）		
弥生時代後期	溝：1条（SD101）	溝：1条（SD202）	竪穴：1棟（SB301） 溝：1条（SD305）
中 世	溝：2条（SD102・103） 土坑：1基（SK103） 井戸：1基（SE101）	溝：1条（SD201） 土坑：1基（SK201） 井戸：2基（SE201・202）	
近 世	土坑：5基（SK101・102・ 104～106）		溝：4条 （SD301～304）

## - 凡 例 -

1. 本稿では、調査で検出した遺構・遺物を「3. 遺構と遺物」に掲載している。なお、検出した遺構のうち柱穴や包含層・近現代坑出土遺物については、「4. その他の遺構と遺物」として一括して掲載している。
2. 本稿では、検出した遺構を以下のように掲載している。柱穴以外の遺構は、遺構番号を3ケタとし、百の位には地区名（1～3区）を付けて表記している。なお、柱穴番号は4ケタとし、千の位には地区名を表記している。  
例）SD201・・・2区検出の1番土坑、SP1135・・・1区検出の135番柱穴
3. 柱穴一覧表に記載される柱穴埋土は、「3. 遺構と遺物」【4. その他の遺構と遺物】に掲載する分類番号（A～H類）を掲載している。
4. 遺構一覧表の出土遺物欄には、出土品を以下のように表記している。  
（弥生土器→弥、土師器→土、須恵器→須、瓦質土器→瓦質、陶磁器→陶、石器→石、鉄器→鉄、種子→種、ガラス玉→玉）
5. 本稿掲載の実測図のうち、陶磁器の断面図にはアミ掛け（スミアミ10%）を施している。
6. 本稿掲載の木製品の実測図は、欠損部分をアミ掛け（スミアミ20%）で表記している。



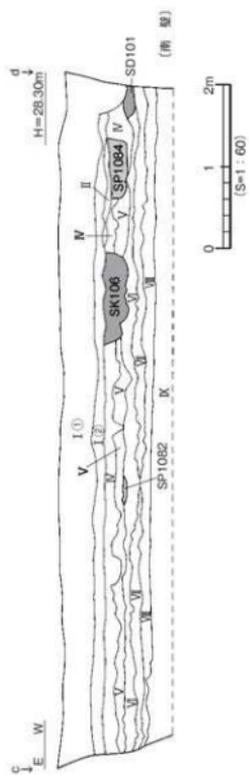
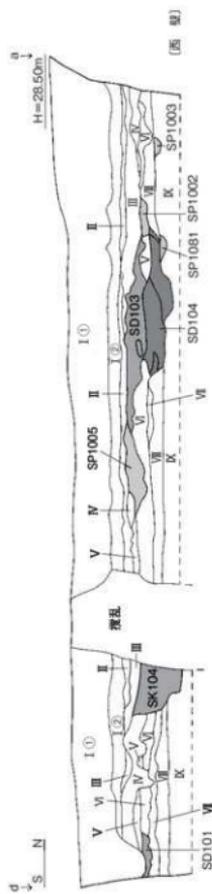
[北 壁]



[東 壁]

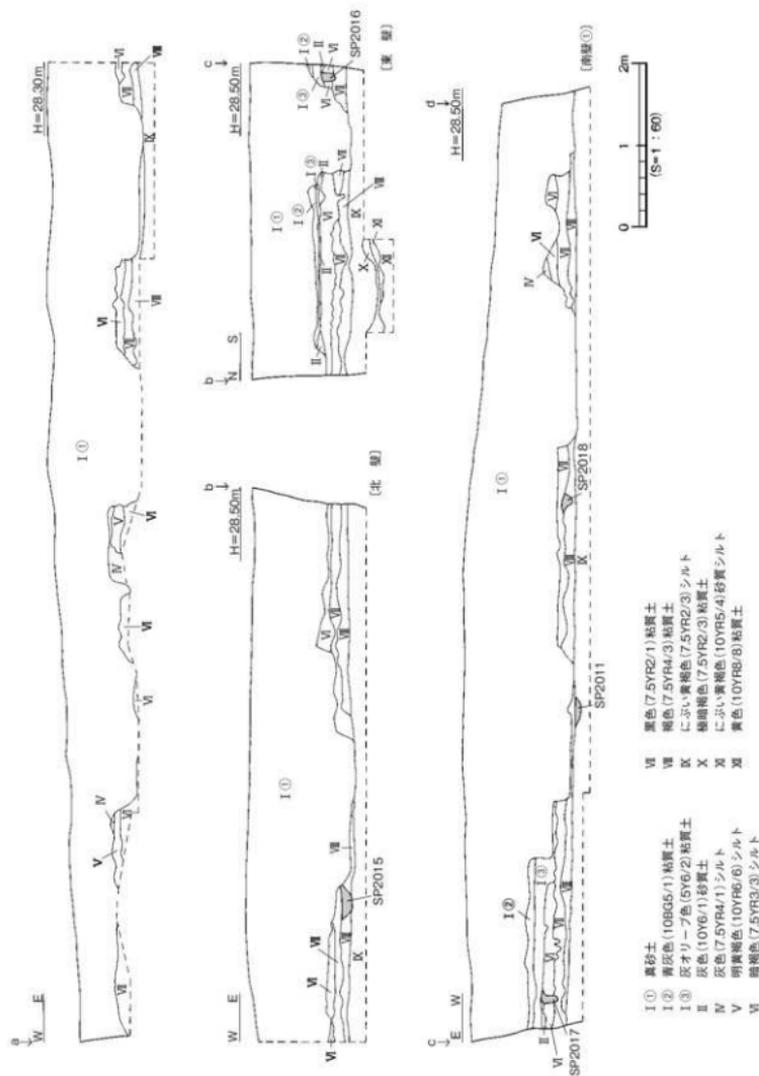
- I ① 黄砂土
- I ② 黄砂土(10BGS/1)粘質土
- II 灰色(10Y6/1)砂質土
- III 浅黄褐色(2.5Y7/4)シルト
- IV 灰色(7.5YR4/1)シルト
- V 明黄褐色(10YR6/6)シルト
- VI 暗褐色(7.5YR3/3)シルト
- VII 褐色(7.5YR2/1)粘質土
- IX 黒色(7.5YR4/3)粘質土
- IX におい黄褐色(7.5YR2/3)シルト

第3図 1区北壁・東壁土層図

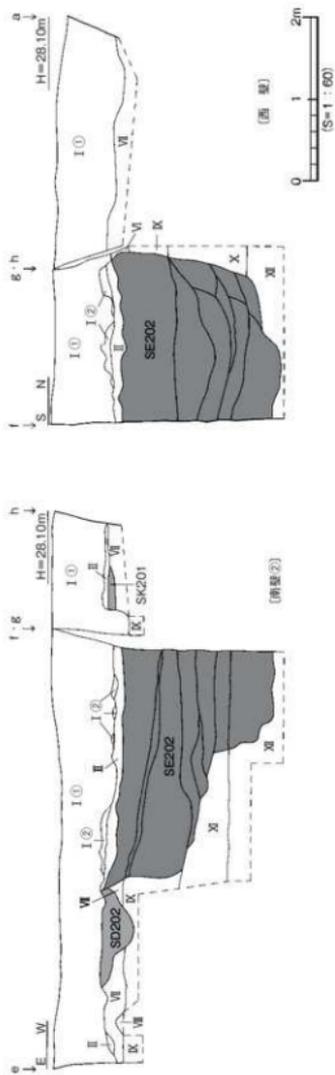


- I ① 黄粘土  
I ② 黄灰色(10B65/1)粘質土  
II 灰色(10Y6/1)粘質土  
III 淡黄色(2.5Y7/4)シルト  
IV 灰色(7.5YR4/1)シルト  
V 明黄褐色(10YR6/6)シルト  
VI 暗褐色(7.5YR3/3)シルト  
VII 黒色(7.5YR2/1)粘質土  
VIII 褐色(7.5YR4/3)粘質土  
IX におい黄褐色(7.5YR2/3)シルト

第4図 1区西壁・南壁土層図

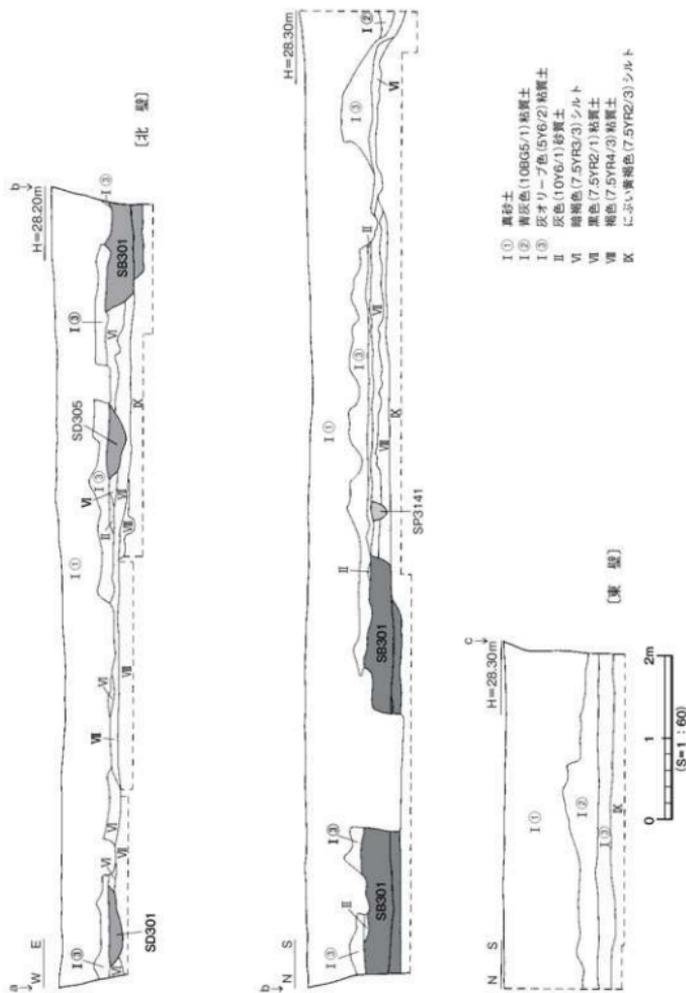


第5図 2区北壁・東壁・南壁①土層図

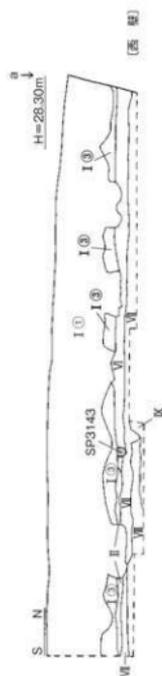
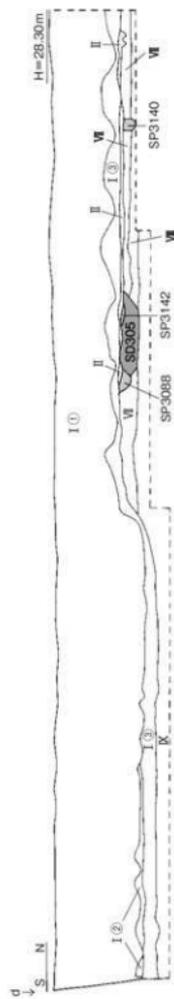


- I ① 黒砂土
- I ② 黒灰色(10B65/1)粘質土
- II 灰色(10Y6/1)砂質土
- III 黒褐色(7.5YR5/3)シルト
- IV 黒色(7.5YR2/1)粘質土
- V 褐色(7.5YR4/3)粘質土
- VI 緑色(7.5YR2/3)シルト
- VII 緑褐色(7.5YR2/3)粘質土
- VIII 黄褐色(10YR5/4)粘質シルト
- IX 黄色(10YR8/8)粘質土

第6図 2区断壁②・西峰土層図



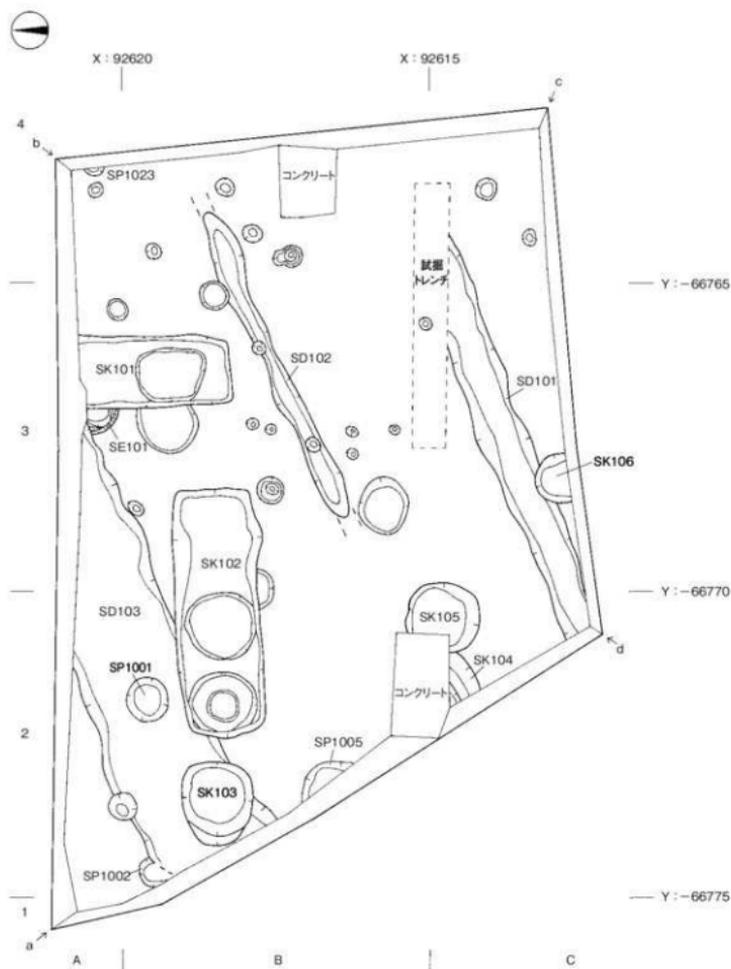
第7図 3区北壁・東壁土層図



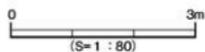
- I ① 真砂土
- I ② 青灰色(10B65/1)粘質土
- I ③ 灰オリーブ色(5Y6/2)粘質土
- I ④ 灰色(10Y6/1)砂質土
- II 暗緑色(7.5YR3/3)シルト
- III 黒色(7.5YR2/1)粘質土
- IV 褐色(7.5YR4/3)粘質土
- V におい黄褐色(7.5YR2/3)シルト

層 位

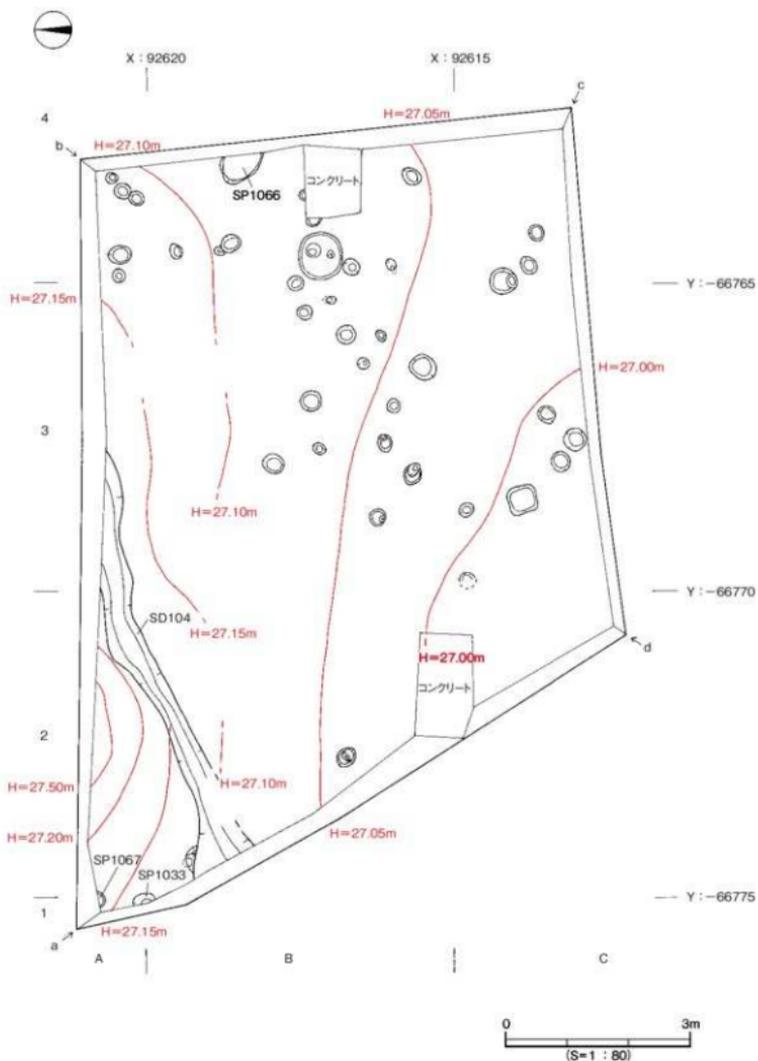
第8図 3区西壁・南壁土層図



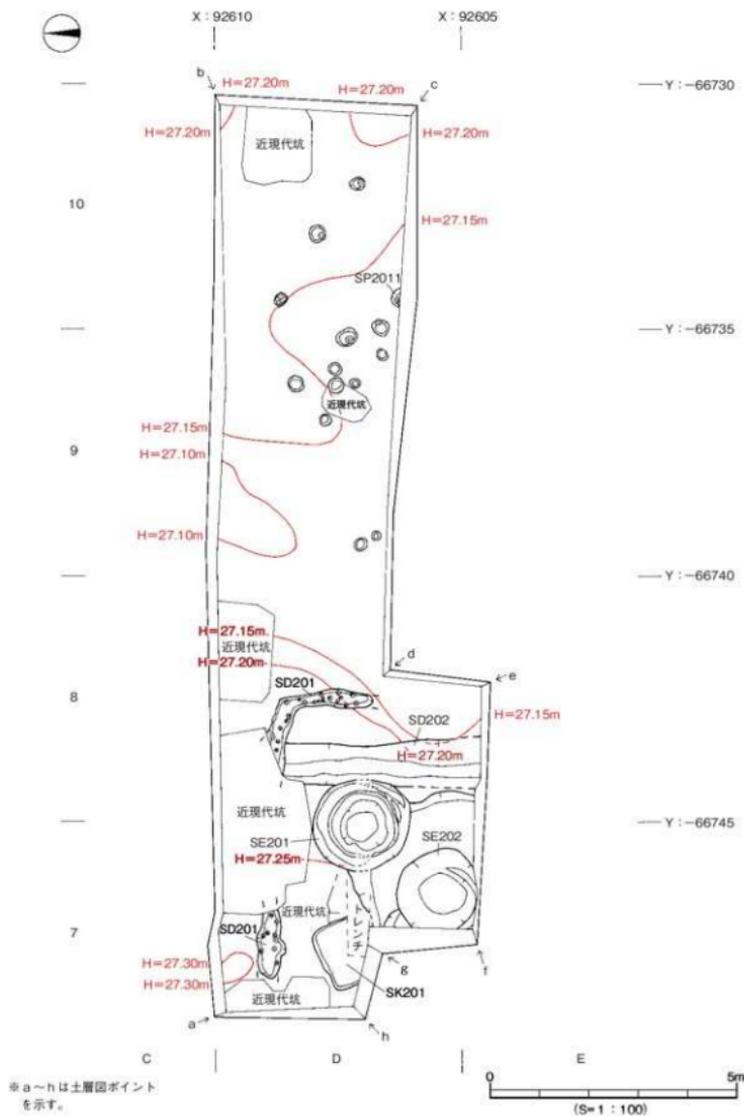
\* a~dは土層面ポイントを示す。



第9図 1区遺構配置図 [第Ⅶ層上面]

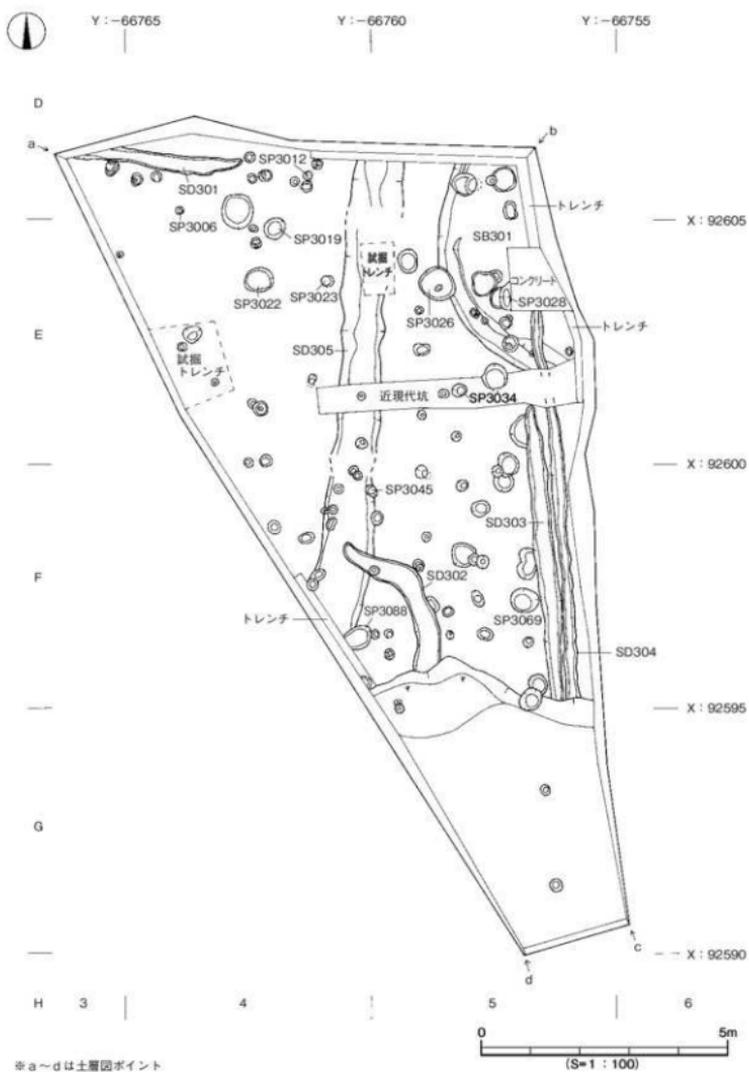


第10図 1区遺構配置図〔第4層上面〕

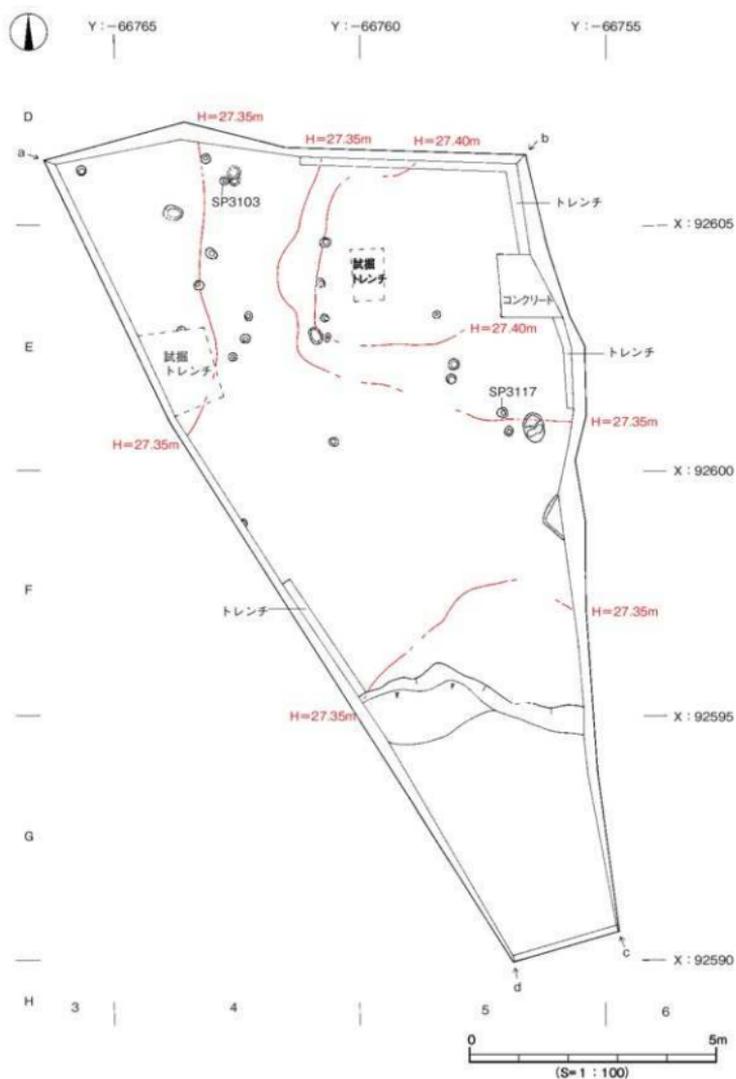


第11図 2区遺構配置図

層 位



第12図 3区遺構配置図 [第VII層上面]



第13図 3区遺構配置図【第Ⅶ層上面】

### 第3節 遺構と遺物

#### 1. 1区の調査（図版2）

1区では、第Ⅵ層、第Ⅶ層及び第Ⅸ層上面にて遺構を検出した。検出した遺構は溝4条、土坑6基、井戸1基、柱穴70基である。

##### (1) 溝

###### SD101（第14図）

調査区南側C2～4区で検出した北東-南西方向の溝で、溝東側は試掘調査用トレンチ、溝中央部は土坑SK106（江戸時代）に切られ、溝西端は調査区外に続く。第Ⅵ層上面での検出であり、第Ⅴ層が溝上面を覆う。規模は幅0.54～0.76m、検出長5.80m、深さは検出面下0.14mを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は暗褐色土単層である。溝基底面はほぼ平坦であり、第Ⅶ層に及ぶ。溝内からは少量の弥生土器片が出土したが、実測しうる遺物はない。

時期：検出層位より、概ね弥生時代後期とする。

###### SD102（第14図）

調査区中央部東寄りB3・4区で検出した北東-南西方向の溝で、3基の柱穴（SP1019・1020・1031）に切られ、溝両端は消失する。第Ⅵ層上面での検出である。規模は幅0.20～0.50m、検出長5.50m、深さは検出面下0.11mを測る。断面形態は浅い皿状を呈し、埋土は灰色砂である。溝基底面は、東側から西側に向けてわずかに傾斜をなす（比高差3cm）。溝内からは少量の土器器片が出土したが、実測しうる遺物はない。

時期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、概ね中世の溝とする。

###### SD103（第15図）

調査区北西部A3～B2区で検出した北東-南西方向の溝で、溝東側は井戸SE101（13世紀）を切り、溝西側は2基の土坑SK102・103や3基の柱穴SP1001・1002・1004に切られ、溝両端は調査区外に続く。第Ⅵ層上面での検出であるが、調査壁の土層観察により第Ⅳ層上面から掘削された溝であることを確認した。規模は幅1.78～1.91m、検出長5.58m、深さは検出面下0.24mを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は灰色砂に径1～2cm大の小礫が混入するものである。溝基底面は起伏があり、東側から西側へ向けて傾斜をなす（比高差5cm）。溝内からは土器器片や須恵器片が少量出土したが、実測しうる遺物はない。

時期：出土遺物の特徴とSE101との前後関係より中世、概ね13世紀以降の溝とする。

###### SD104（第15図）

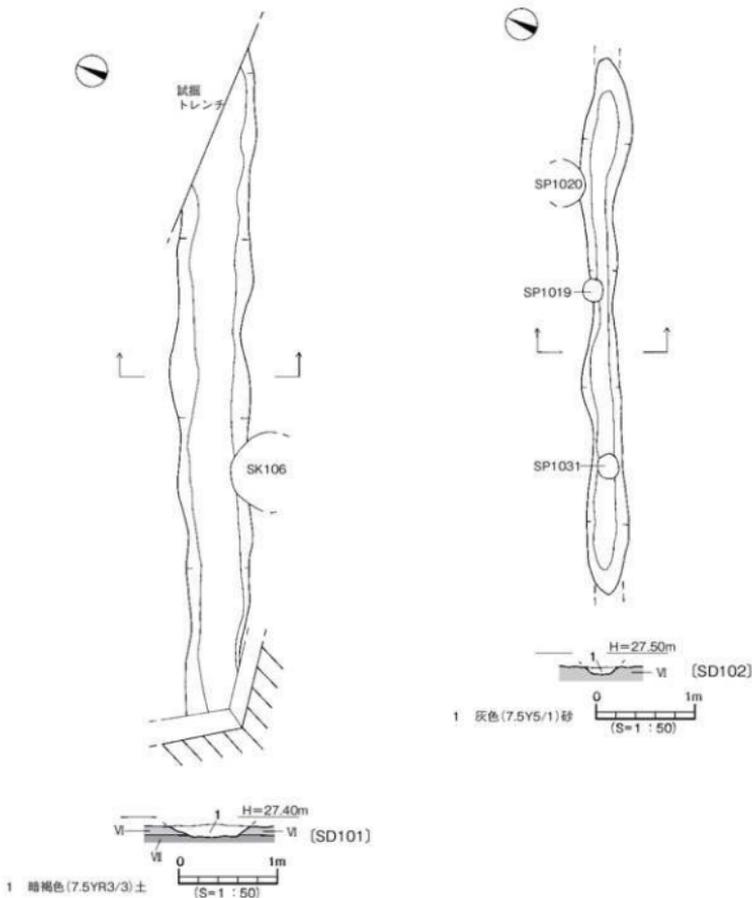
調査区北西部A3～B2区で検出した北東-南西方向の溝で、溝上面は溝SD103が覆い、溝両端は調査区外に続く。第Ⅶ層上面での検出であるが、調査壁の土層観察により第Ⅶ層が溝上面を覆う。規模は幅0.30～0.56m、検出長5.74m、深さは検出面下0.16mを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は灰白色砂に径1～3cm大の円礫を大量に含むものである。溝基底面は起伏があり、東側から西側へ向けて傾斜をなす（比高差10cm）。遺物は埋土中より、弥生土器片が数点出土した。実測しうる遺物

を2点掲載した。

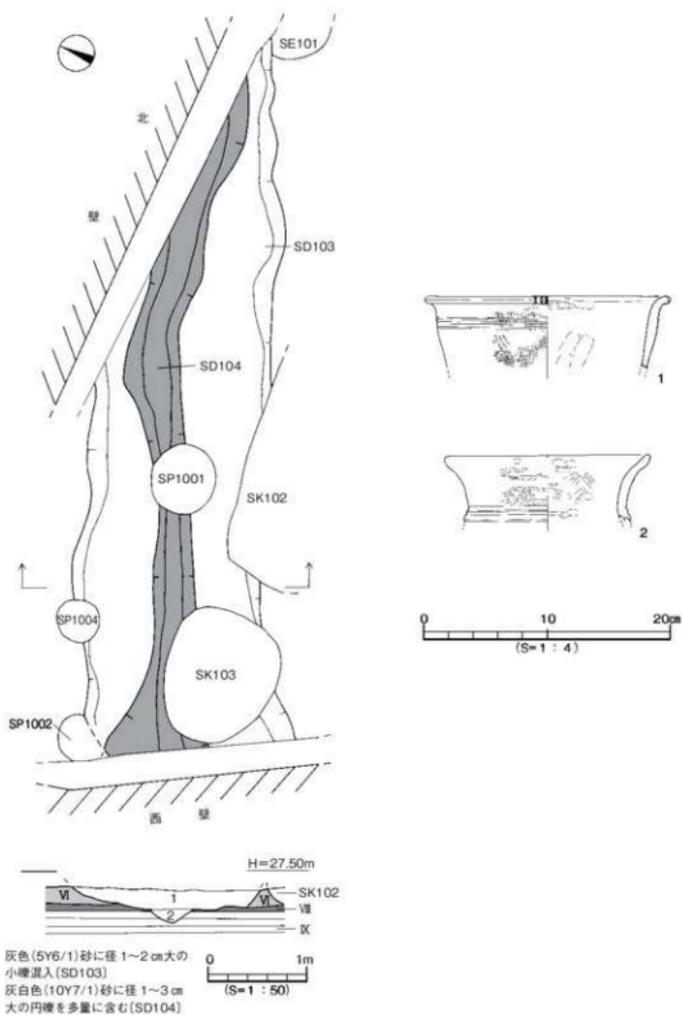
出土遺物（第15図、図版9）

1は推定口径19.6cmを測る甕形土器の口縁部片。折曲口縁で、胴部にヘラ描き沈線文3条、口縁端部に刻目を施す。胴部外面には、タテないしヨコ方向のヘラミガキ調整を施す。2は推定口径16.2cmを測る壺形土器の口頭部片。口縁部は短く外反し、頸部にヘラ描き沈線文3条を施す。内外面共にハケ目調整後、ヘラミガキを施す。

時期：出土した弥生土器の特徴より、弥生時代前期末の溝とする。



第14図 SD101・SD102測量図



第15図 SD103・SD104測量図、SD104出土遺物実測図

## (2) 土坑

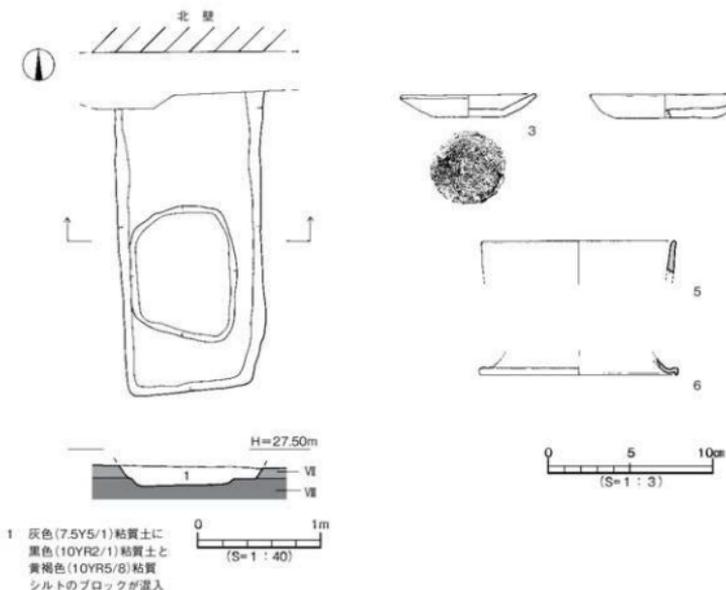
## SK101 (第16図)

調査区北東部A3区・B3区で検出した長方形土坑で、土坑西側は井戸SE101を切っており、北側は調査区外に続く。第Ⅶ層上面での検出であり、規模は南北検出長2.43m、幅1.18m、深さは検出面下0.16mを測る。断面形態は浅い逆台形状を呈し、埋土は灰色粘質土に黒色粘質土や黄褐色粘質シルトがブロック状に混入するものである。土坑基底面はほぼ平坦であるが、中央部付近に楕円形状の凹み(0.90×1.10×0.06m)がみられる。なお、土坑基底面は第Ⅶ層に及ぶ。遺物は埋土中にて土師器片や陶磁器片が数点出土したほか、少量の焼土を検出した。

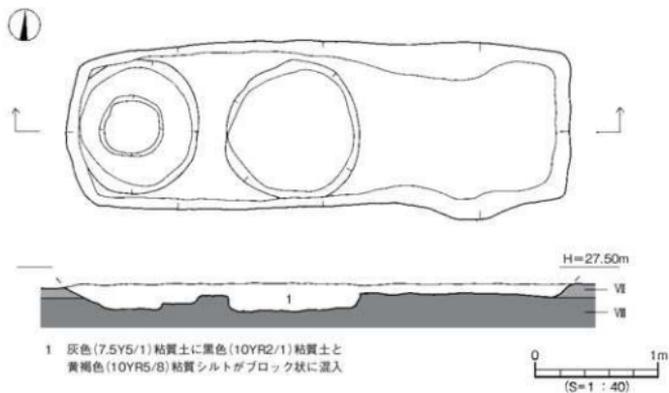
## 出土遺物(第16図、図版9)

3は口径8.0cm、底径4.6cm、器高1.4cmを測る土師器皿で、口縁部の1/3を欠損する。口縁部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸い。底部の切り離しは、回転糸切り技法による。口唇部には部分的に煤が付着しており、灯明皿として使用されたものである。4は推定口径9.0cmを測る土師器皿の小片で、内外面共に摩滅が著しい。5は肥前系陶器碗の口縁部片で、淡黄灰色の釉が掛けられており、口縁上端部には文様が描かれている。6は陶器皿蓋で、透明釉が掛けられている。17世紀後半から18世紀初頭の製品である。

時期：出土した陶磁器の特徴より江戸時代後期、18世紀代の遺構とする。



第16図 SK101測量図・出土遺物実測図



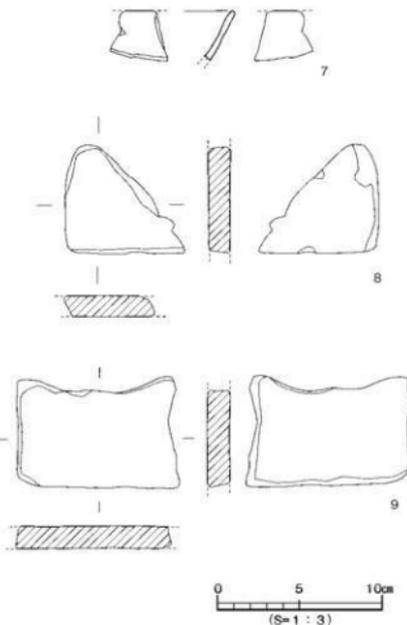
## SK102 (第17図)

調査区中央部南西寄りB2・3区で検出した長方形土坑で、土坑西側は溝SD103を切っている。第Ⅶ層上面での検出であり、規模は長さ4.08m、幅1.44m、深さは検出面下0.22mを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は灰色粘質土に黒色粘質土と黄褐色粘質シルトがブロック状に混入するものである。土坑基底面はほぼ平坦であるが、土坑中央部と西部にて径1.00～1.10m、深さ0.12～0.14mを測る凹みが見られる。遺物は、埋土中にて土師器片や陶磁器片のほか、瓦片が数点出土した。

## 出土遺物 (第17図)

7は土師器環の口縁部小片、8・9は平瓦であり、8・9の色調は灰白色を呈する。

時期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、SK101と埋土が酷似することや出土遺物の特徴より、概ね江戸時代後期の遺構とする。



第17図 SK102測量図・出土遺物実測図

## SK103 (第18図)

調査区西部B2区で検出した楕円形土坑で、溝SD103を切っている。第Ⅵ層上面での検出であるが、土坑壁体上位は第Ⅶ層、土坑基底面は第Ⅸ層となる。規模は長径1.34m、短径1.12m、深さは検出面下0.44mを測り、断面形態は逆台形状を呈する。土坑埋土は緑灰色粘質土を基調とし、黄褐色粘質シルトがブロック状に混入するものである。土坑基底面は、ほぼ平坦である。遺物は埋土中より弥生土器片や土師器片、須恵器片が少量出土した。

## 出土遺物 (第18図)

10は弥生土器の甕形土器。1/2の残存で平底となり、色調は赤橙色を呈する。

時期：出土遺物の特徴とSD103との前後関係より中世、13世紀以降とする。

## SK104 (第18図)

調査区南西部C2区で検出した円形土坑で、土坑東側は土坑SK105に切られ西側は調査区外に続く。第Ⅵ層上面での検出であるが土坑壁体上位は第Ⅶ層や第Ⅷ層、壁体中位から基底面は第Ⅸ層となる。規模は東西検出長0.84m、南北検出長0.51m、深さは検出面下0.48mを測る。断面形態は舟底状を呈し、埋土は灰色土に黒色土がブロック状に混入するものである。遺物は埋土中より、陶磁器片や瓦片が数点出土した。

## 出土遺物 (第18図)

11は腰折形の陶器碗で、全面に灰白釉が掛けられている。

時期：出土遺物の特徴より、江戸時代後期の遺構とする。

## SK105 (第18図)

調査区南西部B2・C2区で検出した円形土坑で、土坑西側は近現代坑に切られ、土坑SK104を切っている。第Ⅵ層上面での検出であり、規模は南北長1.21m、東西長1.12m、深さは検出面下51cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、土坑西側壁体は筒状となる。埋土は緑灰色粘質土を基調とし、黒色粘質土や黄褐色粘質土などがブロック状に混入するものである。土坑壁体上位は第Ⅶ層、壁体下位から基底面は第Ⅸ層となる。なお、土坑基底面にはやや凹凸がみられる。遺物は埋土中より、土師器片や陶磁器片が数点出土した。図化しうる遺物を1点掲載した。

## 出土遺物 (第18図、図版9)

12は肥前系陶器の刷毛目皿である。赤褐色の胎土に鉄釉が掛けられ、内面には白土で波状の刷毛目文様が描かれており、一部、砂が付着している。

時期：出土遺物の特徴より、江戸時代後期とする。

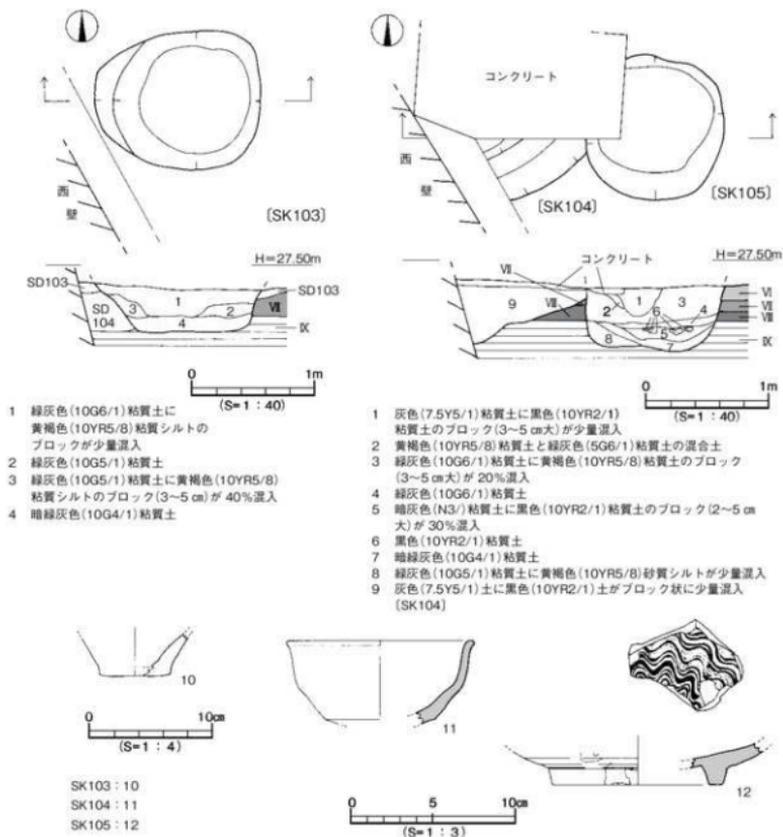
## SK106 (第19図)

調査区南壁中央部やや西寄りC3区で検出した円形土坑で、土坑北側は溝SD101を切り、南側は調査区外に続く。第Ⅵ層上面での検出であるが、調査壁の土層観察により第Ⅳ層上面から掘割された土坑であることが判明した。規模は東西長0.80m、南北検出長0.54m、深さは検出面下0.12mを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰黄色土単層である。土坑基底面には、やや凹凸がみられる。遺物は埋土中にて、土師器片や陶磁器片が数点出土した。図化しうる遺物を2点掲載した。

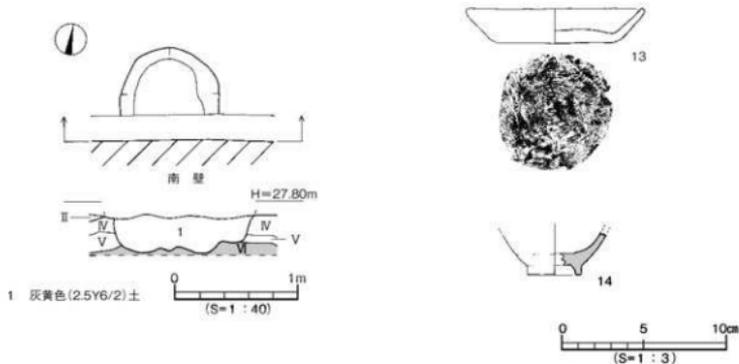
## 出土遺物 (第19図)

13は推定口径10.6 cm、底径7.0 cm、器高2.1 cmを測る土師器皿で、口縁部の1/2を欠損している。底部は比較的厚く、底部の切り離しは回転糸切り技法による。胎土中に砂粒を多く含む。14は磁器小碗で腰部には1条の圈線が巡り、全面に透明釉が掛けられているが高台畳付は軸割りが施されており、砂が付着している。

時期：検出層位や出土遺物の特徴から、江戸時代後期の遺構とする。



第18図 S K 103~S K 105測量図・出土遺物実測図



第19図 SK106測量図・出土遺物実測図

### (3) 井戸

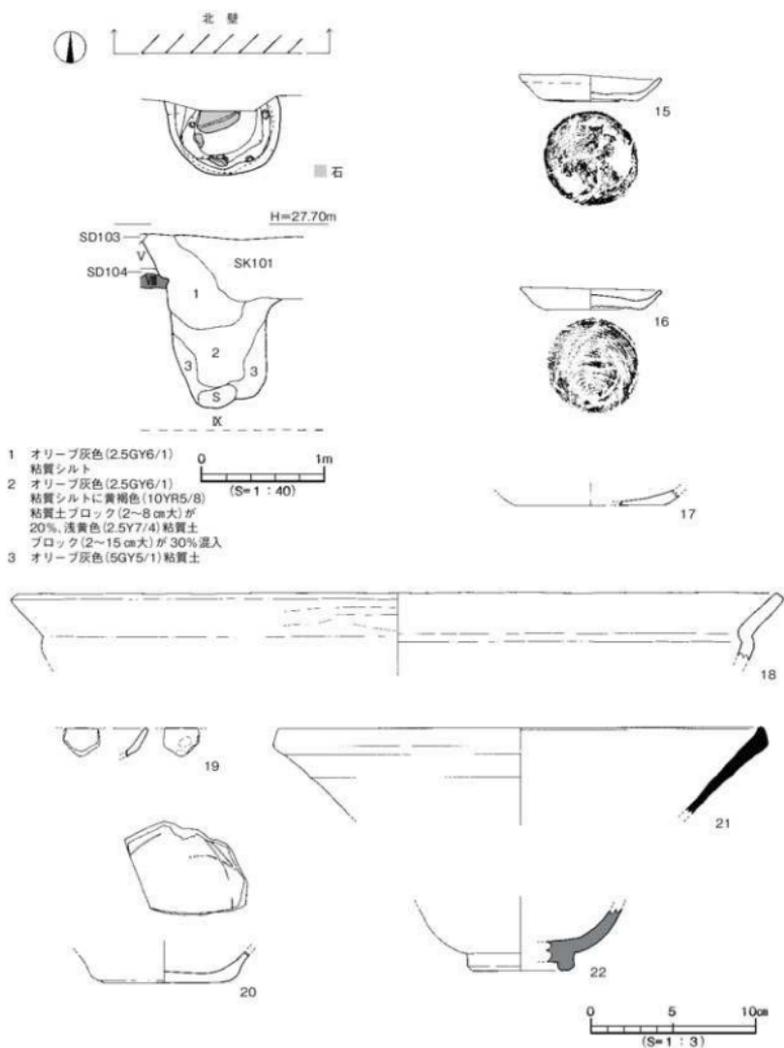
#### SE101 (第20図、図版3)

調査区北壁中央部A3区で検出した井戸で、井戸東側は土坑SK101、西側は溝SD103に切れ、北側は調査区外に続く。第VII層上面での検出であり、井戸基底面は第IX層に及ぶ。平面形態は円形を呈するものと考えられ、規模は東西長0.94m、南北検出長0.54m、深さは検出面下1.44mを測る。断面形態は井戸上位が逆台形状を呈し、井戸中位から下位では筒状となる。埋土はオリーブ灰色粘質シルトを基調とし、黄褐色粘質土や浅黄色粘質土がブロック状に混入するものである。なお、井戸中位付近の壁体沿いには径10~15cm、厚さ5cmの河原石が数点、埋め込まれた状態で出土したほか、井戸基底面付近からは径30cm、厚さ15cm大の河原石が1点出土した。このことから、SE101は石で壁体を囲った石組井戸と推測される。井戸内からは、埋土上位にて土師器片や東播系須恵器片のほか陶磁器片(青磁)や瓦片が出土した。

#### 出土遺物 (第20図、図版9)

15・16は土師器皿。15は口径8.7cm、底径5.6cm、器高1.7cmを測り、口縁部の1/3を欠損する。色調は乳白色を呈し、底部の切り難しは回転糸切り技法による。底部外面には指頭痕が残り、全体的に歪んでいる。16は口径8.4cm、底径5.9cm、器高1.4cmを測り、口縁部の1/3を欠損する。色調は乳黄灰色を呈し、底部外面には回転糸切り痕を残す。17は土師器杯の底部片で、底部外面には回転糸切り痕を残す。18は推定口径45.6cmを測る土師器鍋で、口縁部外面に煤が付着している。19・20は瓦質土器。19は口縁部片で、外面に指頭痕を残す。20は杯の底部片で、底部外面には回転糸切り痕を残し、内面には弧状の暗文を施す。21は東播系須恵器播鉢の小片で、推定口径29.2cmを測る。22は龍泉窯系青磁碗の底部で、1/3の残存である。緑黄色釉が掛けられており、底部外面は無釉である。

時期：出土遺物の特徴より鎌倉時代、13世紀代の遺構とする。



第20図 SE 101測量図・出土遺物実測図

## 2. 2区の調査 (図版4)

2区では、第Ⅶ層上面と第Ⅷ層上面で遺構を検出した。検出した遺構は溝2条、土坑1基、井戸2基、柱穴14基である。

### (1) 溝

#### SD201 (第21図)

調査区西側D7・8区で検出した「L」字状に折れ曲がる溝で、溝中央部は近現代坑に削平され、溝東側は溝SD202を切り、溝両端は調査区外に続く。第Ⅶ層上面での検出である。規模は幅0.34～0.54m、東西検出長6.0m、深さは検出面下0.08mを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は灰色土単層である。溝基底面には径5～8cm、深さ3～5cm大の小穴を多数検出した。遺物は埋土中より、土師器片や陶磁器片が少量出土した。

#### 出土遺物 (第21図)

23は亀山焼の壺で、口縁部は短く外反する。

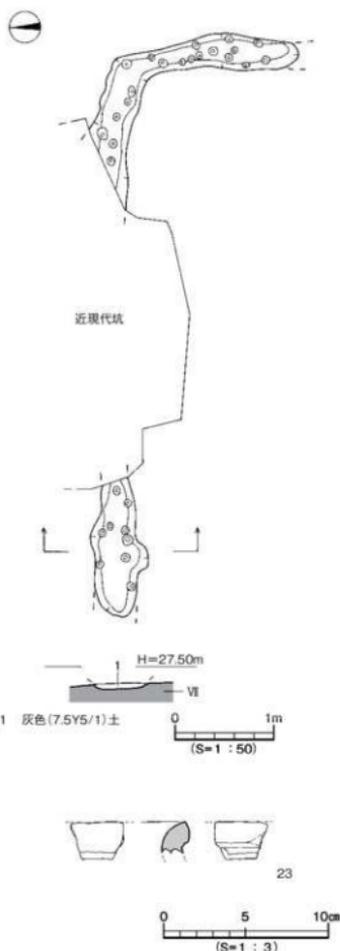
時期：出土遺物の特徴より、13世紀代の遺構とする。

#### SD202 (第22図)

調査区西側D8区で検出した南北方向の溝で、溝北側は溝SD201、溝中央部は井戸SE201に切られ、溝南側は調査区外に続く。第Ⅶ層上面での検出である。規模は幅0.70～0.98m、検出長5.26m、深さは検出面下0.36mを測る。断面形態は「U」字状を呈し、埋土は暗褐色シルト(白色砂粒含む)である。溝基底面は、北側から南側に向けて緩やかな傾斜をなす(比高差4cm)。遺物は埋土中位付近にて弥生土器の甕形土器や壺形土器、鉢形土器などの大型破片のほか、敲石やガラス小玉1点が出土した。

#### 出土遺物 (第23図、図版9)

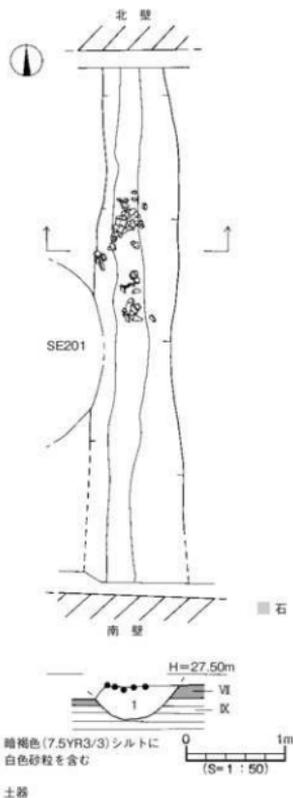
24～26は甕形土器。24・25は「く」の字状口縁を呈し、口縁端部は「コ」字状に仕上げる。26は胴部片で、胴部中位にタタキ痕



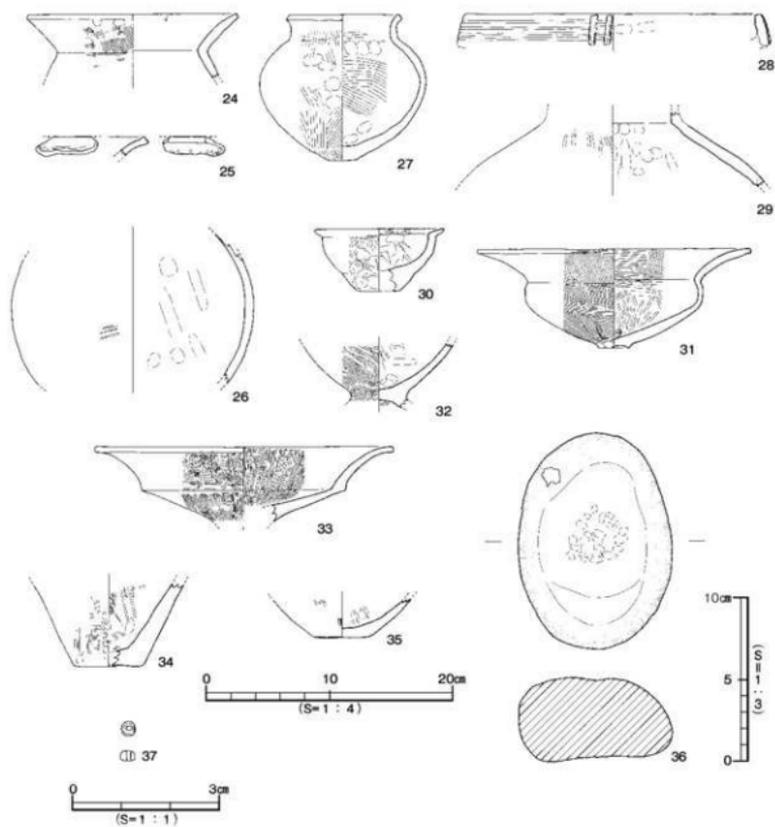
第21図 SD201測量図・出土遺物実測図

を残す。27～29は壺形土器。27は短頸壺で、口縁部の3/4を欠損する。推定口径8.8cm、底径2.3cm、器高11.9cmを測り、口縁部は短く外反し、底部は平底となる。内外面共に、粗いハケ目調整（4本/cm）を施す。色調は乳褐色を呈し、胎土は精良である。28は推定口径24.0cmを測る複合口縁壺の口縁部片で、ヘラ描き沈線文4条と棒状浮文2ヶを施す。29は肩部片で、1/4の残存である。外面には、タテ方向のヘラミガキ痕を残す。30～32は鉢形土器。30は1/3の残存で、推定口径10.2cm、底径3.6cm、器高5.1cmを測る。口縁部は短く外反し、底部は突出する厚みのある平底である。外面には粗いハケ目調整（4本/cm）、内面は工具によるナデ（ミガキ）を施す。色調は黒色を呈し、胎土中に白色砂粒を含む。31は1/2の残存で口縁部は大きく外反し、底部は小さな上げ底を呈する。口縁部内外面は粗いハケ目調整（5本/cm）、体部上半部はヨコ方向、体部下半部はタテ方向の細かなハケ目調整（11～12本/cm）を施す。また、体部内面には、ヨコないしタテ方向のヘラミガキを施す。32は脚付鉢で、脚部は欠損している。体部外面はハケ目調整後、ナナメ方向のヘラミガキを施す。33は高坏形土器。1/6の残存で口縁部は外反し、坏部中に明瞭な稜をもつ。内外面共に、細かなヘラミガキ調整を施す。色調は橙褐色を呈し、胎土は精良である。34は甕形土器、35は壺形土器の底部片で平底となる。36は砂岩製の敲石で、中央部に使用痕が顕著に残る。長さ13.2cm、幅9.3cm、厚さ5.0cm、重量966.67gを測る。完存品。37はガラス製の小玉で、直径0.3cm、厚さ0.2cm、重量0.019gを測る。色調は青色を呈する。完存品。

時期：出土遺物の特徴より、弥生時代後期後半の遺構とする。



第22図 S D202測量図



第23図 S D202出土遺物実測図

## (2) 土坑

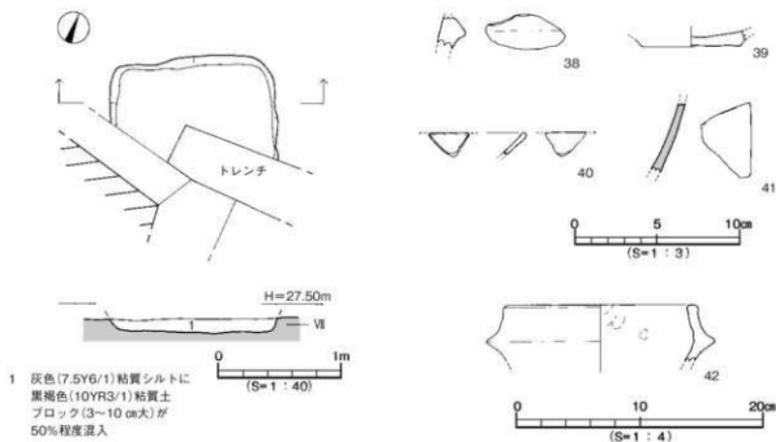
## SK201 (第24図)

調査区西端D7区で検出した方形形状の土坑で、土坑南側は調査区外に続く。第Ⅶ層上面での検出であり、第Ⅱ層が覆う。規模は東西長1.34m、南北検出長0.82m、深さは検出面下12cmを測る。断面形態は浅い逆台形状を呈し、埋土は灰色粘質シルトに黒褐色粘質土がブロック状に混入するものである。なお、埋土中にて少量の炭化物を検出した。土坑基底面はほぼ平坦である。遺物は埋土中より弥生土器片や土師器片、須恵器片、瓦質土器片、陶磁器片が出土した。

## 出土遺物 (第24図)

38は土師器土釜の口縁部小片、39は土師器杯の小片である。39の底部外面には回転糸切り痕とスノコ痕を残す。40は瓦質土器の坏または碗の口縁部片、41は龍泉窯系青磁碗の体部片である。41は全面に緑黄色釉が掛けられている。42は弥生土器の複合口縁壺。小片で、内外面共に摩滅が著しい。

時期：出土遺物の特徴より鎌倉時代、13世紀代の遺構とする。



第24図 SK201測量図・出土遺物実測図

## (3) 井戸

## SE201 (第25図、図版5・6)

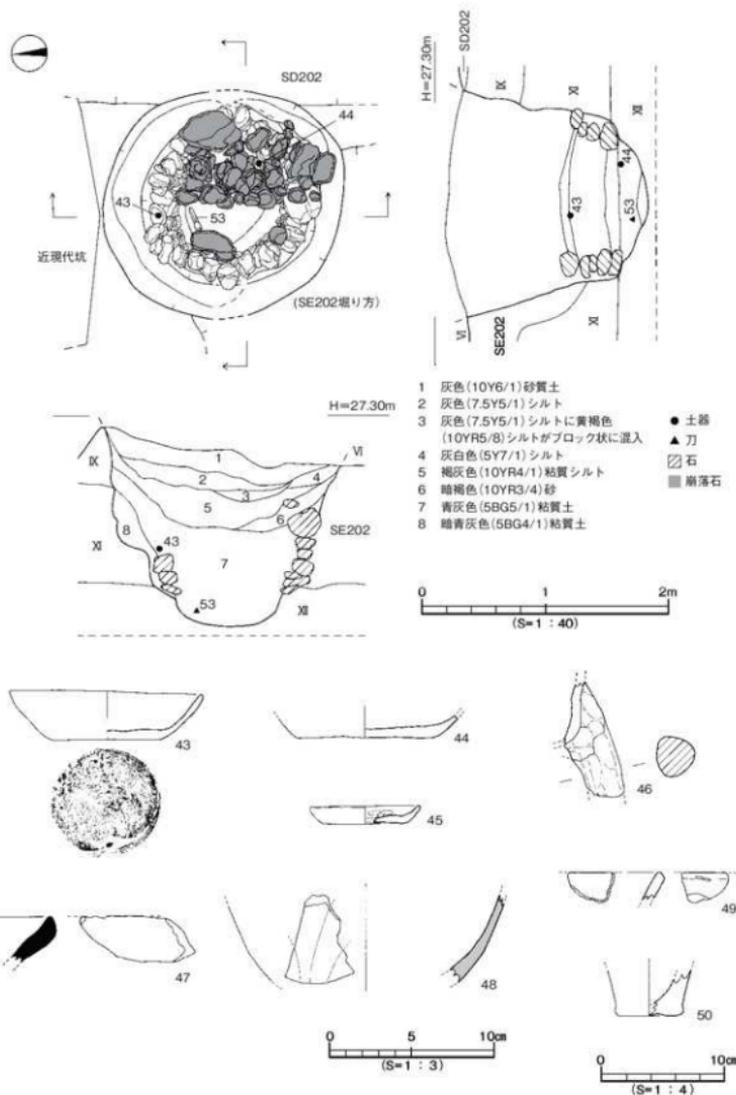
調査区西側D7・8区で検出した井戸で、井戸東側は溝SD202を切り、井戸上部は近現代の造成等により削平されている。なお、平面精査や断面観察よりSE201がSE202に後出することが判明している。井戸の掘り方は円形を呈し、掘り方規模は径1.88~1.97m、深さは1.59mを測る。断面形態は井戸中位付近にて段掘り構造となり、井戸上部から中位にかけて灰色砂質土や灰白色シルト、褐灰色粘質シルトなどが放物線状に堆積する。なお、井戸下部から基底面までは青灰色粘質土(7層)が1.2m程度堆積している。SE201は丸みのある河原石を積み重ねた石組井戸で、井戸基底面から上方20cmの地点に径10~20cm、厚さ5~10cmの石が弧状に配置され、上方に向けて5段から7段ほどが遺存している。配置された石と井戸掘り方との間には、粘性の強い暗青灰色粘質土(8層)が充填されており、石と石の間にも本層が混入している。井戸枠には井戸上方に行くにつれて大型の石が使用されており、井戸内に径10~20cm、厚さ10cm大の石や径30~40cm、厚さ15cm大の大型石などが多数崩落している。なお、井戸基底面は第Ⅻ層に及んでいるが、発掘調査時には井戸基底面からの湧水は認められなかった。

井戸内からは埋土上位(1~5層)より弥生土器片や土師器片、須恵器片のほか陶磁器片や瓦片などが散在して出土したほか、井戸中位で検出した井戸枠の石の上からは土師器杯(43)が出土し、基底面付近からは鉄製の小刀(53)がほぼ完全な状態で出土した。

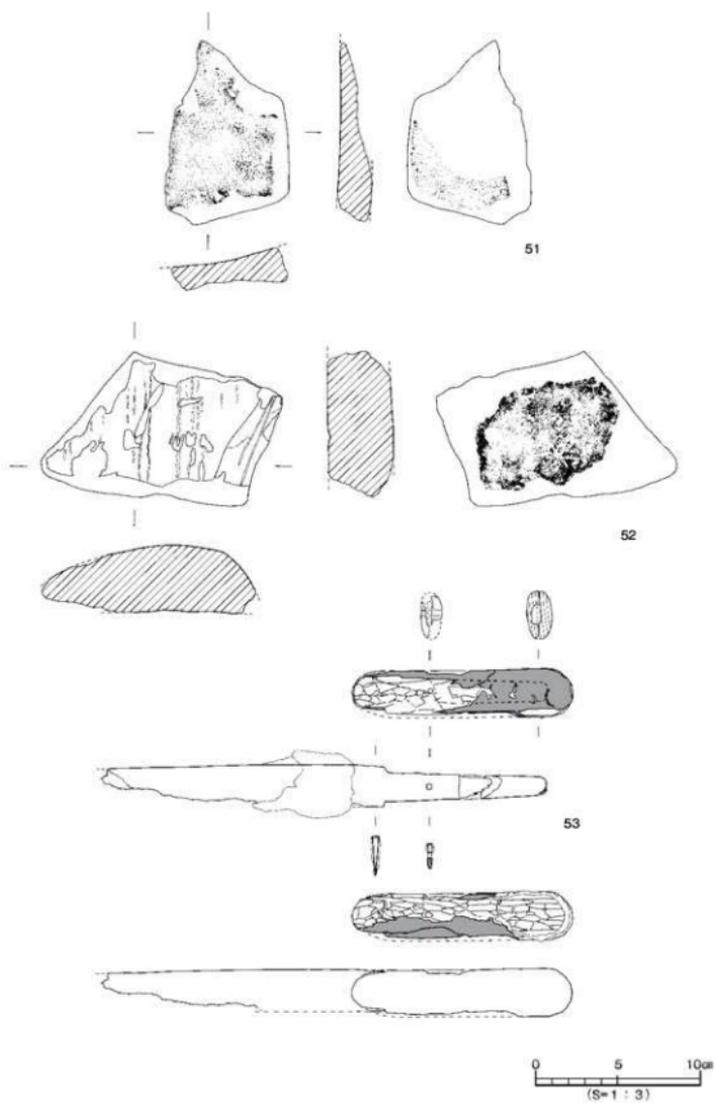
## 出土遺物(第25・26図、図版9)

43は口縁部の1/5を欠損する土師器杯で、口径11.5cm、底径6.6cm、器高3.1cmを測る。体部は内湾気味に立ち上がり、底部の切り離しは回転系切り技法による。44は土師器杯の底部片で、外面には回転系切り痕とスノコ痕を残す。43・44の色調は、乳白色を呈する。45は土師器皿の小片で、推定口径6.4cm、底径4.4cm、器高1.1cmを測る。色調は乳灰色を呈し、底部外面には回転系切り痕を残す。46は土師器土釜の脚部片で断面形態は円形を呈し、色調は赤褐色を呈する。47は東播系須恵器播鉢の口縁部片、48は龍泉窯系青磁碗の体部片である。48は濃緑灰色の軸が掛けられ、外面には蓮弁文が描かれている。13世紀の製品。49・50は弥生土器の甕形土器。49は口縁部の小片で、口縁端部は「コ」字状に仕上げる。50は底部片で、わずかに上げ底となる。弥生後期。51・52は平瓦で、51の凹面には布目痕が残る。52は凸面に細繩叩き、凹面には布目痕を残す。51・52の色調は、暗灰色を呈する。53は鉄製の小刀で、全長26.7cm、刃部長16.8cm、茎部長9.9cm、刃部幅2.5cm、茎部幅1.1~1.8cmを測る。中央部には鉄錆が塊状に付着しており、刃部先端部は欠損し、茎部は中央部付近で破断されている。茎部中央の刃部寄りには、径0.35cmの目釘穴が開けられている。また、茎部には鞘の木質が一部残っている。木製の把は、長さ13.4cm、幅2.9cm、厚さ1.5cmを測る。部分的に、鞘の木質が付着している。

時期：出土遺物の特徴より鎌倉時代、13世紀代の遺構とする。



第25図 SE201測量図・出土遺物実測図(1)



第26図 SE201出土遺物実測図(2)

## SE202 (第27図、図版5・7)

調査区西側D7・E7区で検出した井戸で、井戸上部は破壊されており井戸基底部付近のみの検出である。ここでは、調査の進行に沿って説明をおこなう。調査当初、SE202周辺には東西長2.68m、南北長1.97mを測る円形状の掘り方が検出されたため掘り下げを進める。掘り方埋土(1~6層)は灰色砂質土を主体とし、黒色土や黄褐色シルトがブロック状に多数混入するものである。おそらく、これらの土は井戸埋戻しの際に使用されたものと考えられる。約2m掘り下げた時点で第Ⅷ層である黄色の粘質土層を検出し、粘質土上面にて径1.6mを測る円形状の掘り方を検出した。掘り方埋土は灰色シルト(8層)である。掘り下げを進めていくと、8層中からは完形の土師器皿や瓦質土器の坏、東播系須恵器片や瓦片、砥石などのほか大量の木片や木杭、種子と共に径10~20cm、厚さ10cm大の石が数点出土した。おそらくは井戸の廃棄に伴い、これらの遺物が掘り方内に残されたものと考えられる。なお、石が出土したことからSE202もSE201と同様の石組井戸であったものと推測される。

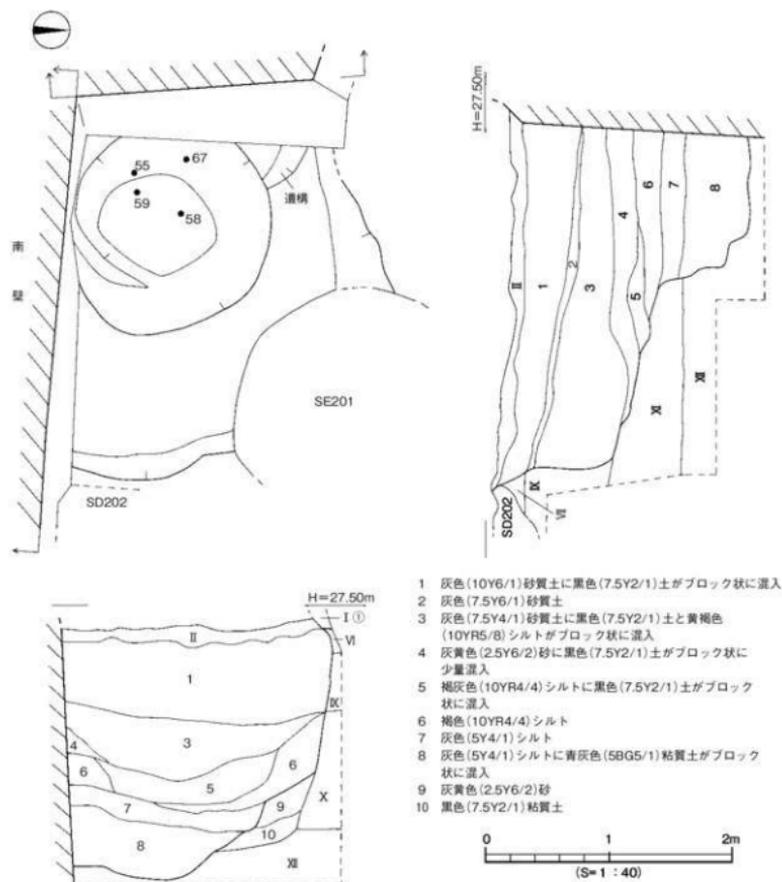
なお、土層観察の結果、検出した9層と10層はSE202埋土ではなくSE202と切り合う別の遺構の埋土と考えられる。SE201との関係を見ると、切り合いよりSE202がSE201より古い時期に造られており、SE202を埋め戻した後にSE201が造られたことになる。なお、両井戸からの出土品には大きな時期差は認められない。

## 出土遺物(第28~30図、図版10・11)

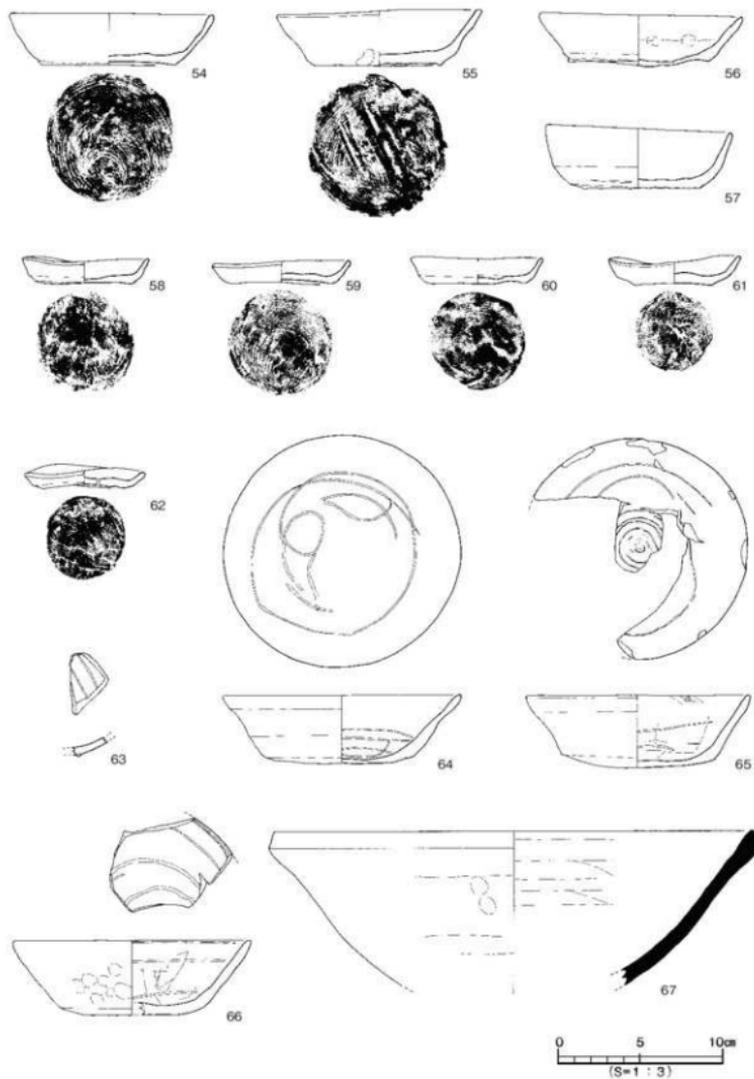
54~57は土師器坏。54は口径12.1cm、底径8.1cm、器高3.1cmを測る完存品で、体部は内湾気味に立ち上がる。口縁端部を丸く仕上げ、底部の切り離しは回転系切り技法による。色調は乳灰色を呈し、胎土中に砂粒を多く含む。55は口径12.3cm、底径7.8cm、器高3.4cmを測り、口縁部の1/4を欠損する。体部は屈曲部をもち、口縁部は「コ」字状に丸く仕上げる。底部はやや上げ底気味となり、外面に回転系切り痕とスノコ痕を残す。色調は淡い乳褐色を呈し、体部内外面には煤が付着している。56は1/2、57は3/4の残存で底部付近には焼け歪みがみられ、外面には回転系切り痕とスノコ痕を残す。58~62は土師器皿。58はほぼ完形品で、口径7.5cm、底径6.0cm、器高1.7cmを測り、口縁部はわずかに外反する。色調は乳褐色を呈する。59・60は完存品で、59は口径8.1cm、底径6.2cm、器高1.4cmを測る。底部付近には焼け歪みがみられ、色調は乳白色を呈する。59・60共に、内外面には回転系切り痕とスノコ痕を残す。60は口径7.9cm、底径5.9cm、器高1.6cmを測る。焼成は良好で、色調は乳白色を呈する。底部外面には凹凸があり、回転系切り痕を残す。61は口縁部の1/3を欠損し、底部外面には長さ3cm、幅1mm程度のひび割れがみられる。口径7.9cm、底径4.7cm、器高1.7cmを測り、色調は乳黄色を呈する。62は完存品で、口径6.9cm、底径5.0cm、器高1.5cmを測る。底部には焼成による長さ4cm、幅1mm程度のひび割れがみられ、内面まで達している。焼成は良好で、色調は乳白色を呈する。

63~66は瓦質土器。63は椀の底部片で、断面三角形の高台が付く。内面には暗文が施され、色調は外面が黒色、内面は暗灰色を呈する。64~66は坏である。64は口径14.3cm、底径8.8cm、器高4.2cmを測る復元完形品である。腰部から折曲がるように体部が立ち上がり、口縁部は直線的に開く。底部は平底風で、口縁端部は丸く仕上げる。底部外面周縁には回転系切り痕を残すが、中央部はナデ消されている。底部から腰部の内面には、輪状に繋がる暗文を施す。炭素の吸着は良好であり、色調は内外面共に暗灰色を呈し、やや銀化している。65は1/2の残存で、口径13.4cm、底径8.9cm、器高4.4cmを測る。腰部から折曲がるように体部が立ち上がり、口縁端部は尖り気味に仕上げる。底部はわずかに丸みをもつ。64と同様、底部外面周縁には回転系切り痕を残すが、中央部はナデ消されている。

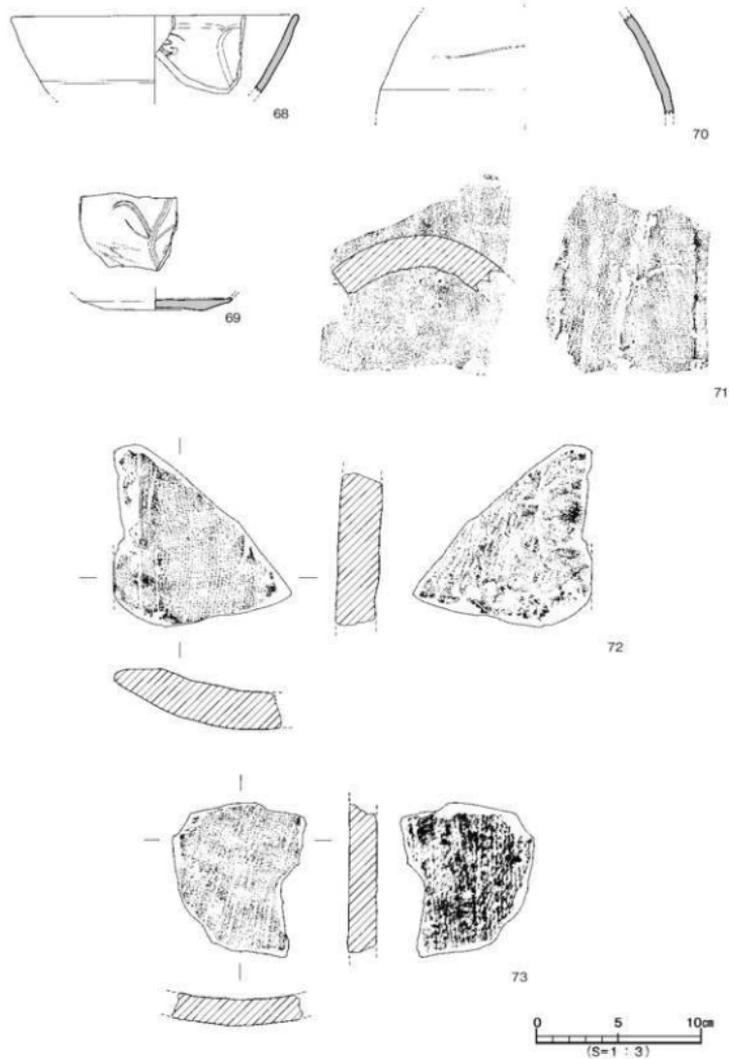
底部から体部中位付近の内面には輪状に繋がる暗文を施す。外面は炭素の吸着が良好であるが、内面にはやや不十分な箇所がある。66は破片で、推定口径14.2cm、底径8.6cm、器高4.5cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に丸く仕上げる。底部から体部中位内面には、輪状の暗文を施す。底部外面周縁は回転糸切り痕を残すが、中央部はナデ消されている。また、体底部外面には指頭痕を残す。炭素の吸着は良好であり、内外面共に暗灰色を呈する。



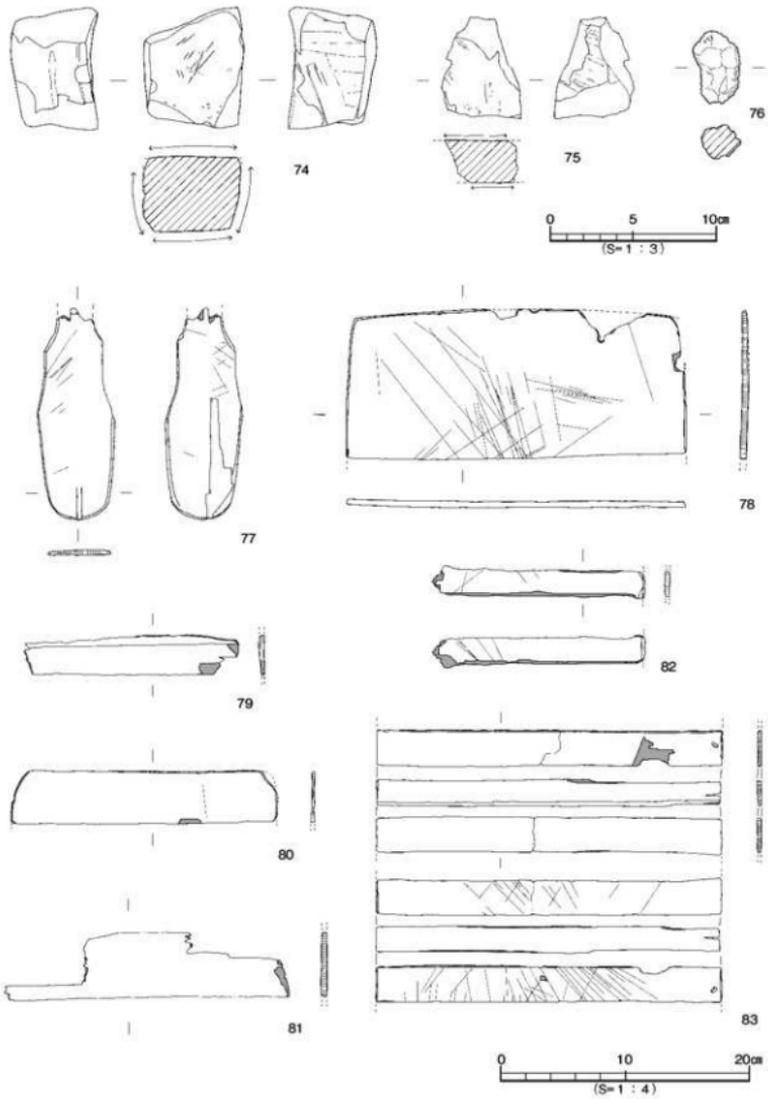
第27図 SE202測量図



第28図 SE202出土遺物実測図(1)



第29図 SE202出土遺物実測図 (2)



第30図 SE 202出土遺物実測図 (3)

67は東播系須恵器の擂鉢で1/4の残存であり、推定口径29.0cmを測る。68-69は龍泉窯系の青磁碗。68は口縁部片で、内面に蓮弁文を施す。69は底部片で、内面には瓣文と草花文が描かれている。薄緑黄色の軸が掛けられているが、底部外面は無軸である。70は施軸陶器の壺で、内外面に緑褐色の軸が掛けられている。71は丸瓦、72・73は平瓦片である。72・73の凸面には細縄叩きが施され、凹面には布目痕を残す。74・75は砂岩製の砥石で、74は3面、75は2面の使用面をもつ。重量は74が291g、75は65gを測る。76は鉄滓で、重量30.37gを測る。

77-83は木製品である。77は杓子形木製品で、柄部は欠損している。側面は面取りされ、先端部には使用痕が残る。現存長17.1cm、幅6.1cm、厚さ0.45cmを測る。78は長方形の曲物で、容器の蓋板もしくは底板と考えられる。長さ27.2cm、幅12.1cm、厚さ0.5cmを測る。表面には摺痕が無数みられる。79-83は楕円形状の曲物で、79・80はケビキ線と思われる痕跡がみられる。82は板状容器、83は柵目材でケビキ線と止め痕が残る。

時期：出土遺物の特徴より鎌倉時代、13世紀代の遺構とする。

### 3. 3区の調査 (図版7)

3区では、第Ⅶ層及び第Ⅷ層上面にて遺構を検出した。検出した遺構は竪穴住居1棟、溝5条、柱穴115基である。

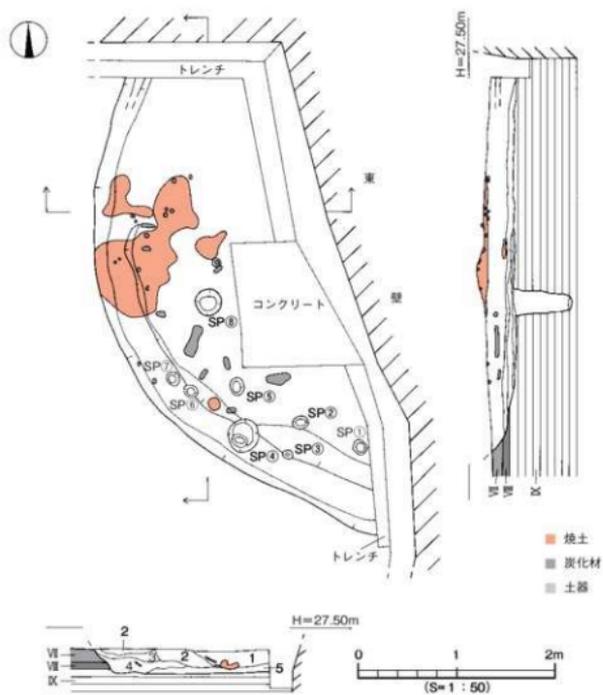
#### (1) 竪穴住居

##### SB301 (第31図、図版8)

調査区北東部D5・E5区で検出した住居で、住居上面は溝SD304や柱穴(埋土：灰色土)に切られており、住居北側及び東側は調査区外に続く。平面形態は円形を呈するものと考えられ、規模は南北検出長4.71m、東西検出長2.71m、壁高は0.21～0.31mを測る。第Ⅶ層上面での検出であるが、調査壁の土層観察により、第Ⅶ層上面から掘削された遺構であることが判明した。住居埋土は暗褐色シルトを基調とし、焼土や炭化物が混入するものである。住居北側と南東部の床面付近には第Ⅸ層である黄褐色シルトが斑点状に混入する土層がみられるが、これらは住居床面修復のために施された貼床土と考えられる。また住居中央部上位には、黄色土に炭化物や焼土が混入する土層が0.6m×1.0mの範囲に検出された。埋土中位付近からも炭化した柱材や炭化物が多数検出されており、SB301は焼失住居と考えられる。内部施設では、住居床面にて大小8基の柱穴を検出した。このうち、住居中央部付近で検出した柱穴SP⑧は主柱穴と思われ、規模は径30cm、深さ58cmを測る。柱穴掘り方埋土は黒褐色土単層であるが、柱痕跡は確認できなかった。遺物は住居埋土中より、弥生土器や石器片が散らして出土したが、完形品の出土は見られなかった。

##### 出土遺物 (第32図)

84-86は甕形土器。84・85は口縁部が「く」の字状を呈し、口縁端部は「コ」字状に仕上げる。86は貼付口縁で、口縁端部に刻目を施す。弥生前期。87-90は壺形土器。87は広口壺で、口縁端部を丸く仕上げる。88は複合口縁壺で、口縁端部は面をもつ。89・90は肩部片で、89の外面にはヘラミガキを施す。91-96は鉢形土器。91は口縁部がわずかに外反し、口縁端部は「コ」字状に仕上げる。体部外面にはハケ目調整後にタタキ調整を施し、内面はハケ目調整後、タテ方向の細かなヘラミガキを加える。92はほぼ完形品で、口径8.5cm、底径2.4cm、器高4.3cmを測る。口唇部はやや波状を呈し、底部は平底となる。内外面には、指頭痕を顕著に残す。93-95は直口口縁を呈する鉢形土器の口縁



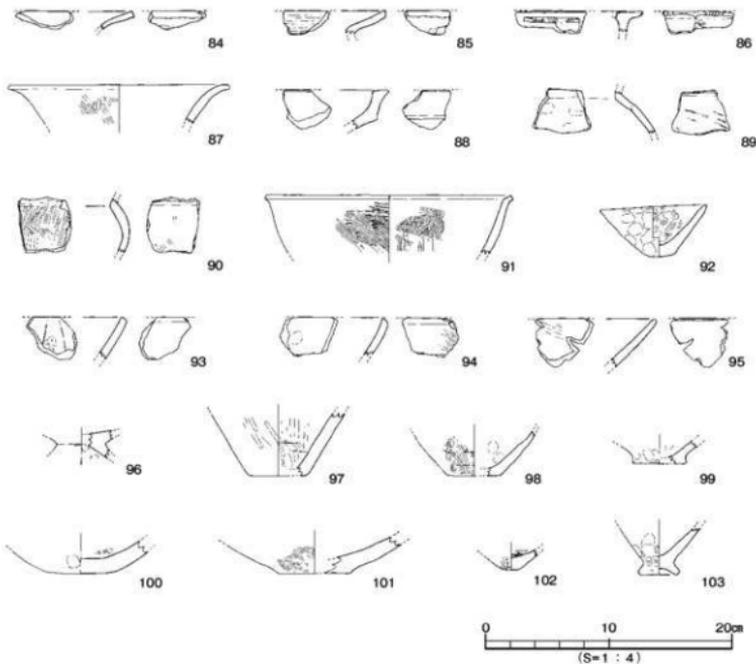
- 1 暗褐色(7.5YR3/3)シルト(焼土・炭化物含む)
- 2 暗褐色(7.5YR3/3)シルト [X層がブロック状に多量混入]
- 3 暗褐色(7.5YR3/3)シルト [炭化物少量混入]
- 4 暗褐色(7.5YR3/3)シルト
- 5 暗褐色(7.5YR3/3)シルト [X層が斑点状に多量混入]…貼床土

SP①～⑧ 黒褐色(10YR2/3)土

第31図 S B 301測量図

部片で、93・94の口縁端部は「コ」字状をなし、95は丸く仕上げる。96は脚付鉢で、坏脚部接合部の破片である。97～99は甕形土器、100・101は壺形土器、102は鉢形土器の底部である。97～101は平底で、97・98・101の外面にはハケ目調整を施す。103はミニチュア土器で、外面には細かな指頭痕が顕著に残る。

時期：出土遺物の特徴より、SB301の廃棄・埋没時期は弥生時代後期後半から末とする。



第32図 S B 301出土遺物実測図

## (2) 溝

## SD301 (第33図)

調査区北西部D3・4区で検出した東西方向の溝で、溝東端は消失し、溝西端は調査区外に続く。第Ⅶ層上面での検出であり、規模は幅0.16～0.36m、検出長3.00m、深さは検出面下6cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰色砂質土単層である。溝基底面は、西側から東側に向けて緩やかな傾斜をなす(比高差3cm)。遺物は埋土中より、土師器や陶磁器の小片が少量出土した。

## 出土遺物(第34図)

104は肥前系磁器の小坏で、口縁部はやや外反している。内外面には透明釉が掛けられており、胎土は白色を呈する。

時期：出土した遺物が僅少で時期特定は難しいが、概ね江戸時代後期の遺構とする。

## SD302 (第33図)

調査区南側F4・5区で検出した「L」字状に折れ曲がる溝で、溝北側は溝SD305を切り、柱穴SP3059に切られ、溝南側は消失している。第Ⅶ層上面での検出である。規模は幅0.31～0.52m、検出長3.51m、深さ0.12mを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰色土単層である。溝基底面は、北側から南側に向けて緩傾斜をなす(比高差4cm)。遺物は、埋土中より弥生土器の小片や土師器小片が数点出土した。実測しうる遺物を1点掲載した。

## 出土遺物(第34図)

105は弥生土器の甕形土器。口縁部の小片で、口縁端部は「コ」字状をなす。外面には、細かなハケ目調整(9本/cm)を施す。

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが遺構埋土から、概ね近世の遺構とする。

## SD303 (第33図)

調査区東側E5・F5区で検出した南北方向の溝で、溝北側は消失し、溝南端は造成により削平されている。第Ⅶ層上面での検出である。規模は幅0.22～0.41m、検出長6.08m、深さは検出面下8cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰黄色土単層である。溝基底面にはやや起伏がみられ、北側から南側に向けて緩やかな傾斜をなす(比高差3cm)。遺物は埋土中にて弥生土器片や土師器片、須恵器片、瓦質土器片、陶磁器片が出土した。

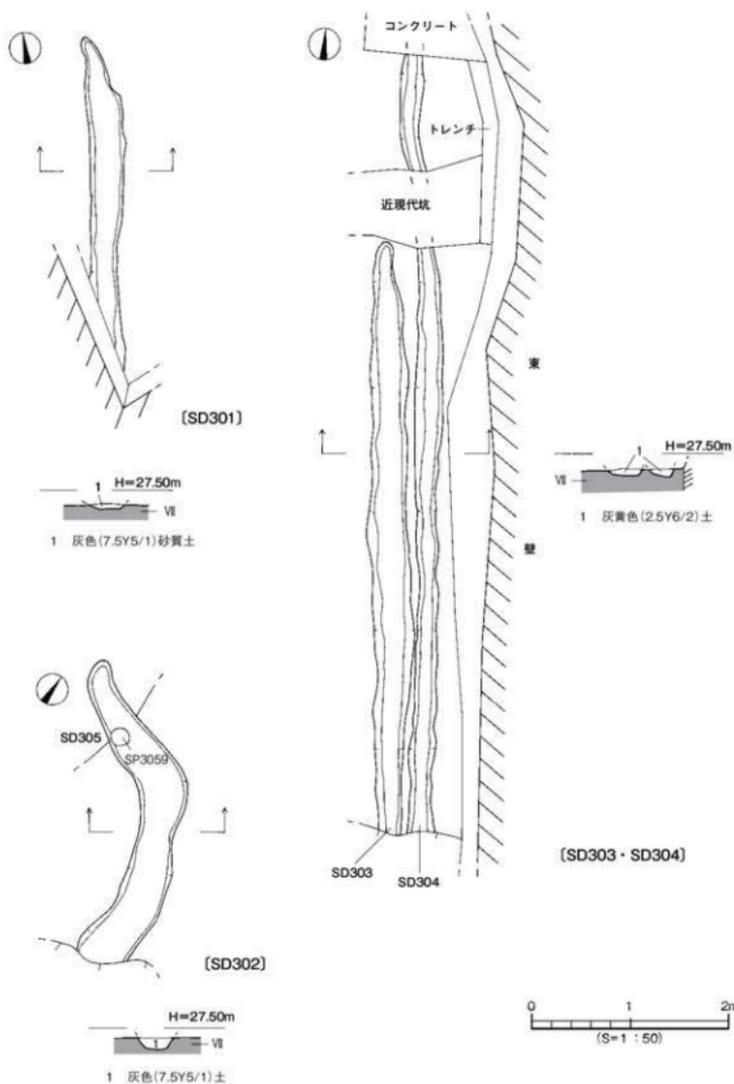
## 出土遺物(第34図)

106は瓦質の焙烙で口縁端部は丸く、全体に煤が付着している。107は土師器土釜の脚部片で、断面形態は円形を呈する。106・107の色調は、褐色を呈する。108は肥前系磁器の碗で、外面には草花文が描かれている。胎土は灰白色を呈し、透明釉が掛けられている。109・110は弥生土器の甕形土器。109は口縁部の小片で、口縁端部は「コ」字状を呈する。110は底部片で1/2の残存であり、外面には一部タタキ痕を残す。

時期：出土遺物の特徴から近世、江戸時代後期の遺構とする。

## SD304 (第33図)

調査区東側E・F5区で検出した南北方向の溝で、溝西側にはSD303が併走しており、溝両端は消



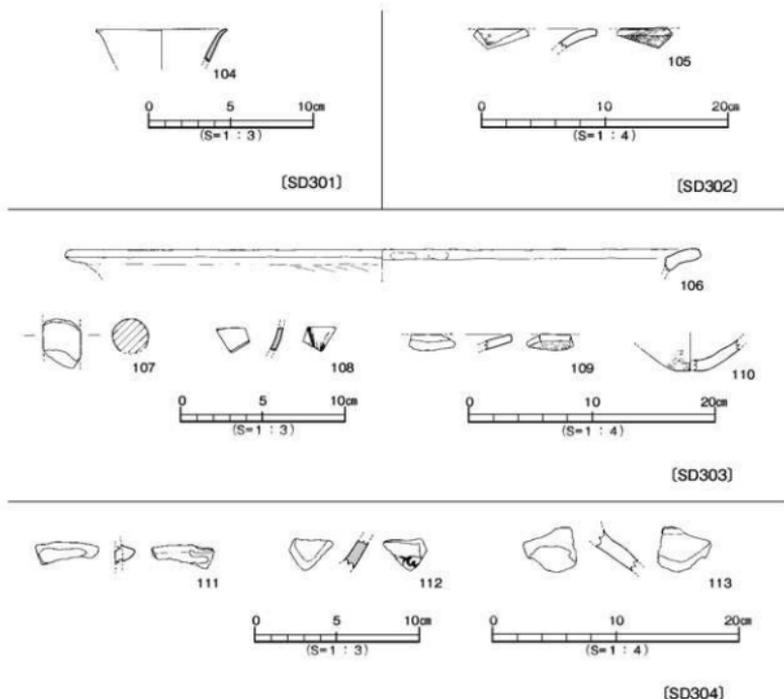
第33図 SD301～SD304測量図

失している。規模は幅0.16～0.28m、検出長8.01m、深さは検出面下0.11mを測る。第Ⅶ層上面での検出である。断面形態は皿状を呈し、埋土は灰黄色土単層である。溝基底面は北側から南側に向けて緩やかな傾斜をなす（比高差4cm）。遺物は埋土中より、弥生土器片や土師器片、陶磁器片が数点出土した。

#### 出土遺物（第34図）

111は土師器土釜の口縁部小片で、断面三角形の突帯を貼り付ける。112は磁器碗の体部片で、外面には唐花纹が描かれており、全面に透明釉が掛けられている。胎土は灰白色を呈する。113は弥生時代後期に時期比定される壺形土器の肩部小片である。

時期：出土した陶磁器の特徴と溝埋土がSD303と酷似することから、江戸時代後期の遺構とする。



第34図 S D 301～S D 304出土遺物実測図

## SD305 (第35図、図版8)

調査区中央部D5～F4区で検出した南北方向の溝で、溝北側は試掘調査用トレンチや近現代坑に、溝南側は溝SD302に切られ、溝両端は調査区外に続く。第Ⅶ層上面での検出であるが、調査壁の土層観察により第Ⅶ層上面より掘削された遺構であることが判明した。規模は幅0.92～1.10m、検出長9.61m、深さは検出面下0.21mを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は暗褐色シルトに白色砂粒が混入するものである。溝基底面は、北側から南側に向けて緩やかな傾斜をなす(比高差8cm)。遺物は埋土中より弥生土器の甕形土器や壺形土器、鉢形土器、器台形土器などが列をなすような状態で出土し、様々な地点で1個体の土器が押しつぶされた状態のものも見られた。なお、出土品には鹿(?)と思われる線刻が施された土器片や、完形の石錘1点が含まれている。

## 出土遺物(第36～40図、図版11・12)

## 甕形土器(114～136)

114～119は「く」の字状口縁をなし、114～117は口縁端部が「コ」字状を呈する。頸部内面には稜をもち、内外面共にハケ目調整を施す。114・115の胴部中位外面には煤が付着している。120～122は口縁部がやや外反し、121・122は口縁端部を丸く仕上げる。123は口縁部が直立気味に立ち上がり、口縁部や胴部内面には工具痕を残す。124は弥生時代中期後半の甕形土器で、口縁端部を上下方に拡張し凹線文3条を施す。125は頸部片、126は胴部小片である。125の外面には、タキ調整後にタテ方向のハケ目調整を施す。126は弥生時代前期の甕形土器で、胴部にヘラ描き沈線文2条を施す。127は胴部片で、外面にはハケ目調整を施す。128～136は底部。128は突出部をもつ平底で、外面にはタテ方向のハケ目調整(9～10本/cm)、内面にはヨコ方向の粗いハケ目調整(4～5本/cm)を施す。129は大品型で底径4.4cm、残高29.7cmを測る。内外面には丁寧なハケ目調整を施し、胴部中位内面には指ナデを施す。130は内外面共に板状工具によるナデがみられ、底部は丸みのある平底をなす。131・132はわずかに上げ底を呈する底部片で、内外面にはハケ目調整を施し底部内面には指頭痕を顕著に残す。133は平底を呈し、内外面共に粗いハケ目調整(5本/cm)を施す。134は厚みのある平底を呈し、底部外面には径0.4cm大の孔(未貫通)を穿つ。135は平底、136はわずかに上げ底を呈する底部片である。

## 壺形土器(137～169)

137～142は広口壺。137は頸部に凸帯を貼り付け、凸帯上に斜格子目文を一部残す。137・138は口縁端部を丸く仕上げる。139・140は器壁がやや厚く、140の口縁端面には沈線文1条を施す。141は推定口径17.0cmを測る大きく外反する口縁部をもち、口縁端部は下方に拡張し口縁端面はナデにより凹む。内外面にはハケ目調整後、タテ方向のヘラミガキを施す。142は2/3の残存であり、口縁部を欠損する。外面はハケ目調整(5～6本/cm)、内面はハケ目調整を施した後に一部がナデ消されている。143～148は直口壺。143～147の内外面にはハケ目調整を施し、145の頸部外面には幅2mm程度の沈線文が3本描かれている(記号?)。148は口縁部が直立し、口縁上部部に細沈線文2条を施す。外面には、細かなタテ方向のヘラミガキを施す。149～154は複合口縁壺。149～152は口縁端部が内傾し、150は口縁部にヘラ描き沈線文6条を施す。151は3/4の残存で口縁上部部に節描き波状文2条、中央部に有軸羽状文、口縁接合部にはハケ状工具による斜格子目文を施す。外面にはハケ目調整後、ヘラミガキを加える。胎土は精良で、色調は赤褐色を呈する。153は口縁部が直立気味に立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。154は小片で、口縁端部は面をなす。155は長頸壺の頸部

片で断面三角形の凸帯を貼り付け、凸帯上に半截竹管文を施す。外面にはハケ目調整後、タテ方向の丁寧なヘラミガキを施す。156～158は頸肩部片。156は1/2の残存で、凸帯上に2段の斜格子目文を施す。159～163は肩部片。159・160は小片で、159は削り出しによる凸帯を施し、凸帯上に刻目を施した後に沈線文1条を施す。160は刻目、162は貝殻施文による羽状文を施す。163は縦6cm、横4.5cm、厚さ6mmを測る肩部片で、動物（鹿？）と思われる絵画が描かれている。164は胴部片で、外側から内側に向けて焼成後に径2cm大の孔が穿たれている。165～169は底部。165・166は平底、167はわずかに上げ底、168・169は突出部をもつ平底となる。

#### 鉢形土器（170～184）

170～173は口縁部が「く」の字状を呈し、174は直立気味となる。171の体部内面にはヘラミガキを施し、174の内面にはヨコ方向のヘラケズリを施す。175は推定口径19.6cm、底径9.0cm、器高11.6cmを測る脚付鉢で、口縁部外面には一部タタキ痕を残す。体部内面には、くもの巣状の細かなハケ目調整（16本/cm）を施す。176は推定口径10.6cm、底径4.3cm、器高11.3cmを測る直口口縁の鉢で、底部は上げ底をなす。177は体部が直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げる。外面には、タテ方向のヘラミガキを施す。178は推定口径19.4cmを測る大型品で、体部外面にはタタキ調整を施す。179～183は底部。180は小さな突出部をもち、内外面にはハケ目調整後にヘラミガキを加える。181・182は突出部をもつ平底、183は尖底となる。184は脚付鉢もしくは高坏で色調は橙色を呈し、体部内外面にはハケ目調整を施す。

#### 高坏形土器（185～196）

185～191は坏部片。185～187は口縁部が外反し、口縁端部は「コ」字状に丸く仕上げる。185・186・188～190は、内外面にヘラミガキ調整を施す。185・186は胎土が精良で、色調は橙色を呈する。188は口縁端部を上下方に拡張し、口縁端面及び口縁上端に竹管文を施す。192～196は脚部。192・193は柱部片で、径1.7cm大の円孔を穿つ。192～195の外面には、タテ方向の細かなヘラミガキを施す。196は裾部中位に屈曲部をもち、屈曲部上位には竹管文2列と円孔3ヶ、下位には半截竹管文2列と円孔4ヶを施す。

#### 支脚形土器（197）

197は支脚形土器の脚部片で裾端部は「コ」字状に仕上げ、柱部内面にはシボリ痕を残す。

#### 器台形土器（198）

198は器台形土器の脚部で、1/3の残存である。柱部には径1.8cm大の円孔を4ヶ看取し、内外面には粗いハケ目調整（5～6本/cm）を施す。

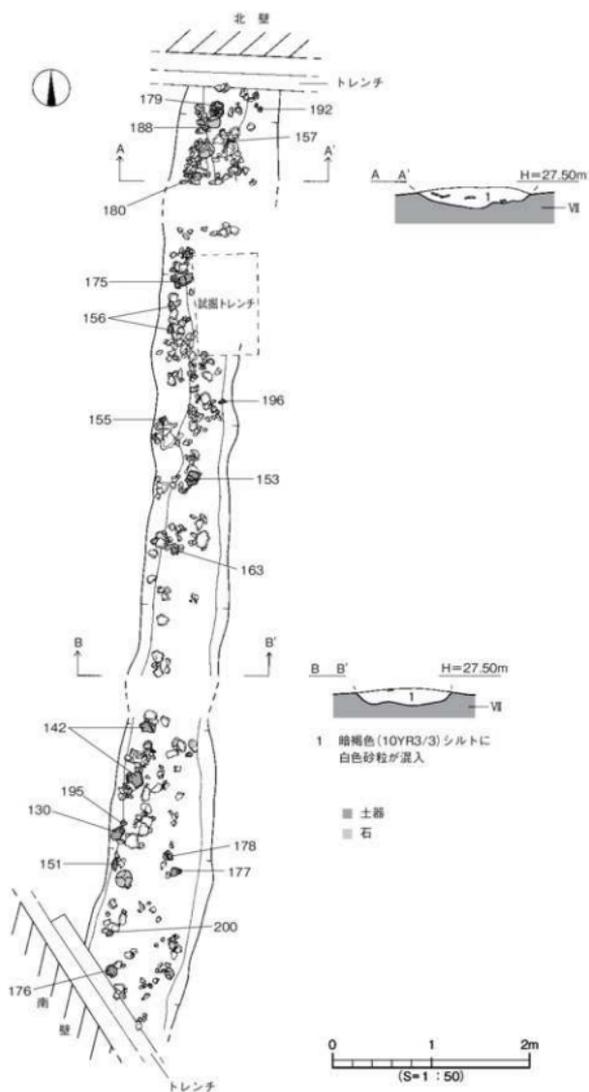
#### 器種不明品（199）

199は推定底径10.0cmを測る器種不明品で、小さな突出部をもつわずかに上げ底である。内面には、工具によるナデもしくはミガキが施される。

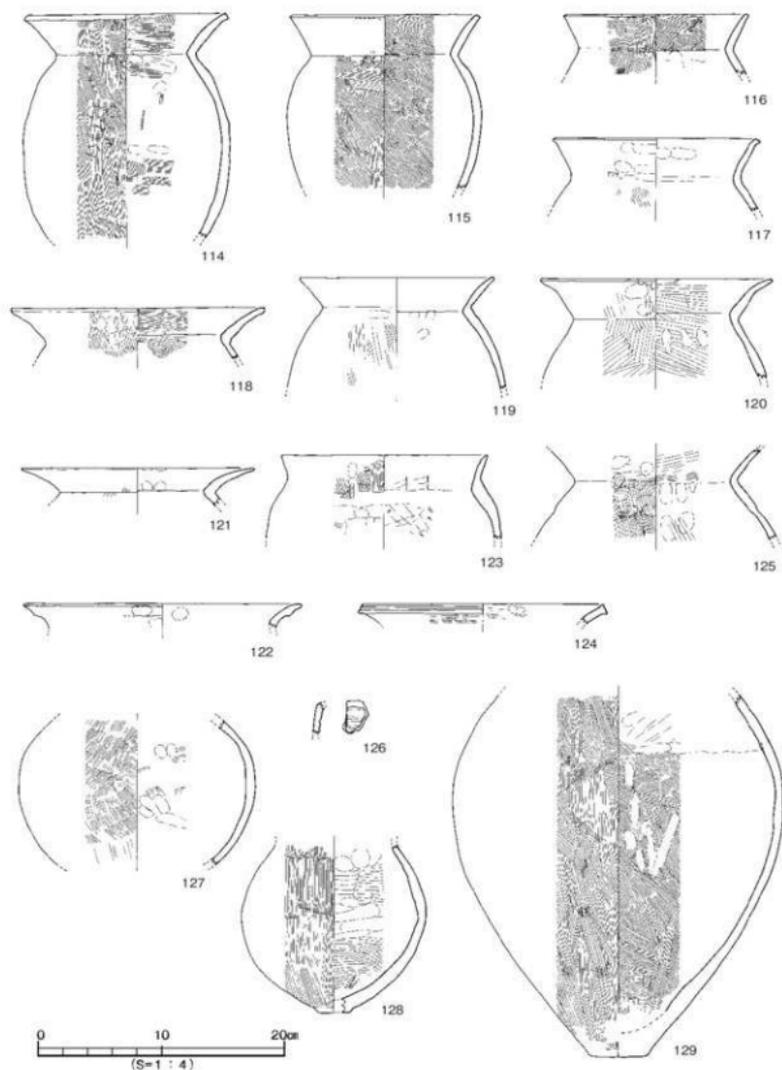
#### 石錘（200）

200は砂岩製の有溝石錘で、長さ4.6cm、幅2.8cm、厚さ2.4cm、重量43.9gを測る。完存品。

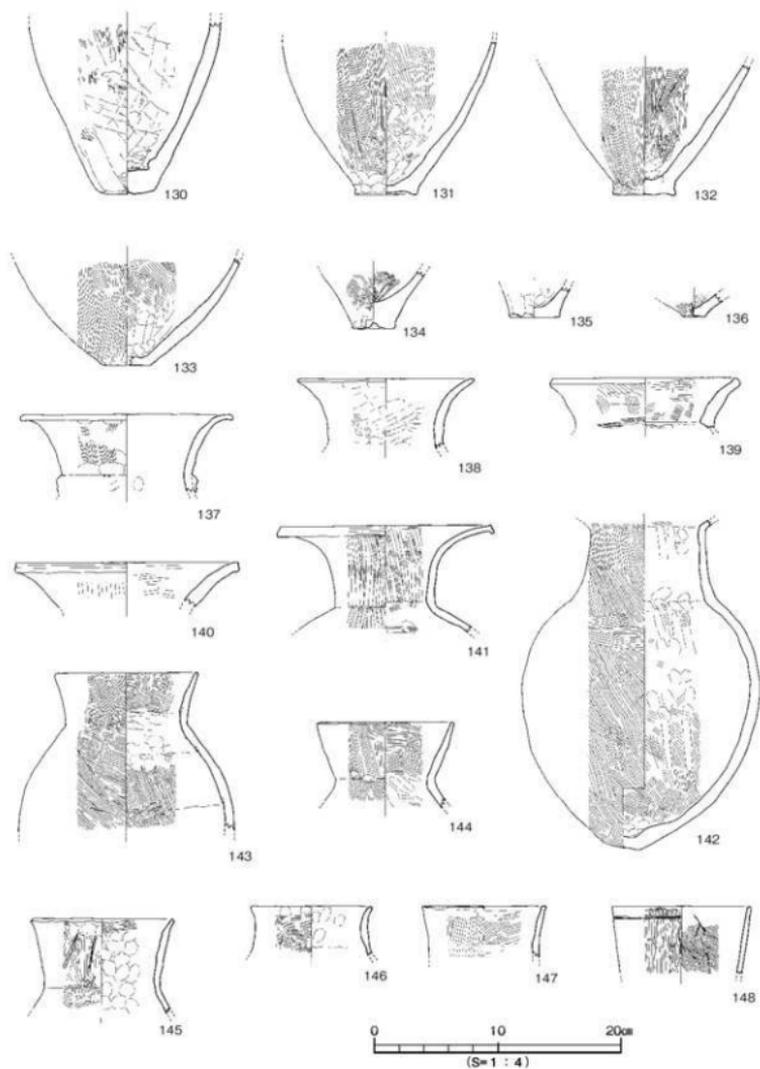
時期：出土遺物の特徴より、SD305は弥生時代後期後半から末の遺構とする。



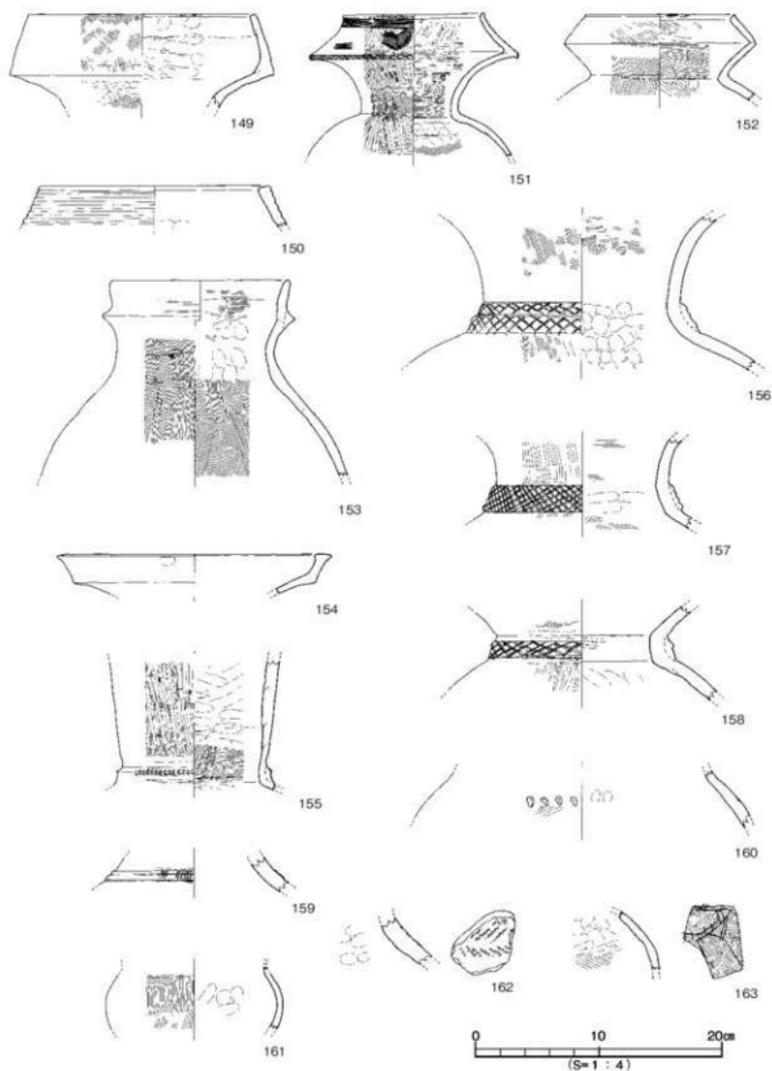
第35図 S D 305測量図



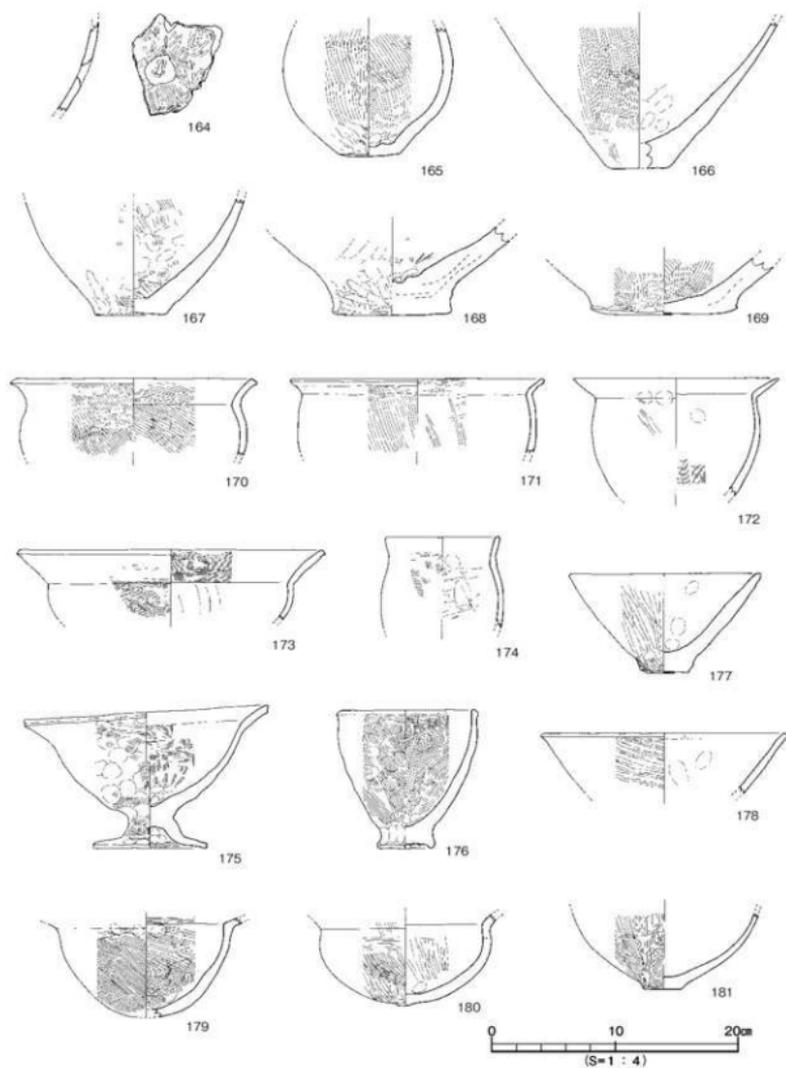
第36図 SD305出土遺物実測図(1)



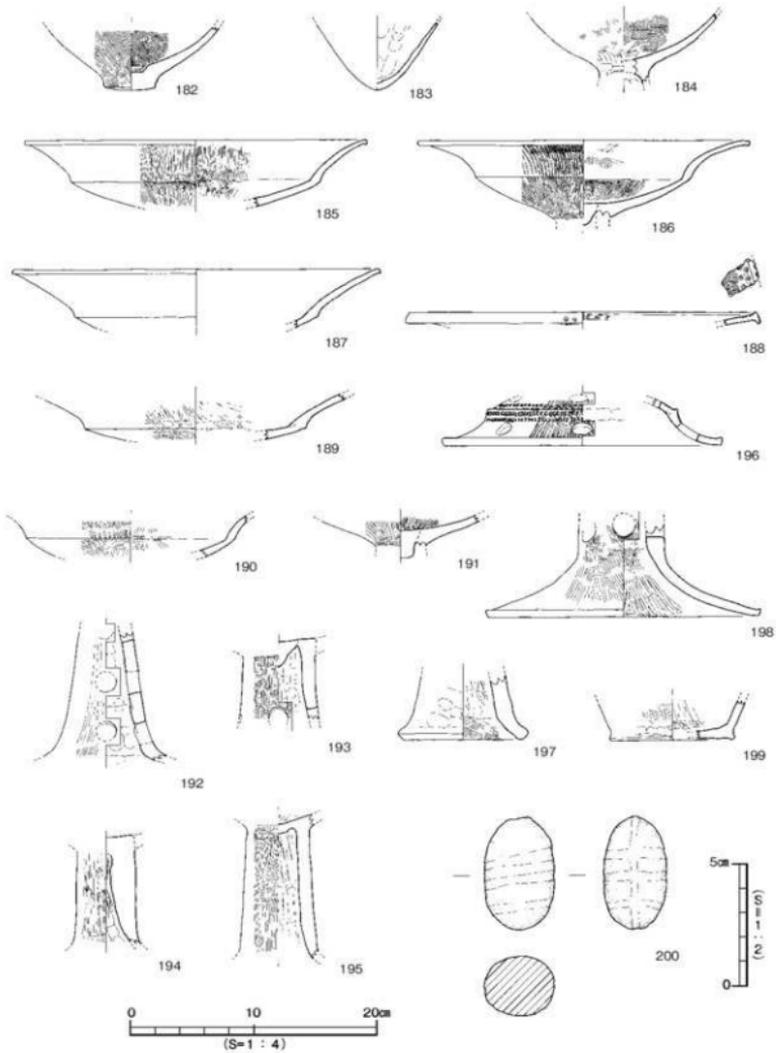
第37図 S D 305出土遺物実測図 (2)



第38図 S D 305出土遺物実測図 (3)



第39図 S D 305出土遺物実測図 (4)



第40図 SD305出土遺物実測図(5)

## 4. その他の遺構と遺物

## (1) 柱穴

調査では、199基の柱穴を検出した。内訳は、1区で70基、2区で14基、3区では115基である。柱穴掘り方埋土で分類すると、以下の7種類（A～H類）となる。なお、各類には埋土中に黒色土や黄色土がブロック状に混入する柱穴が含まれている。柱穴出土品では、A類やC類の柱穴からは中世から近世までの土師器や陶磁器が出土しており、F類の柱穴からは弥生時代の土器や石器が出土している。なお、各柱穴の規模や出土遺物等は、章末の表7～9に掲載している。

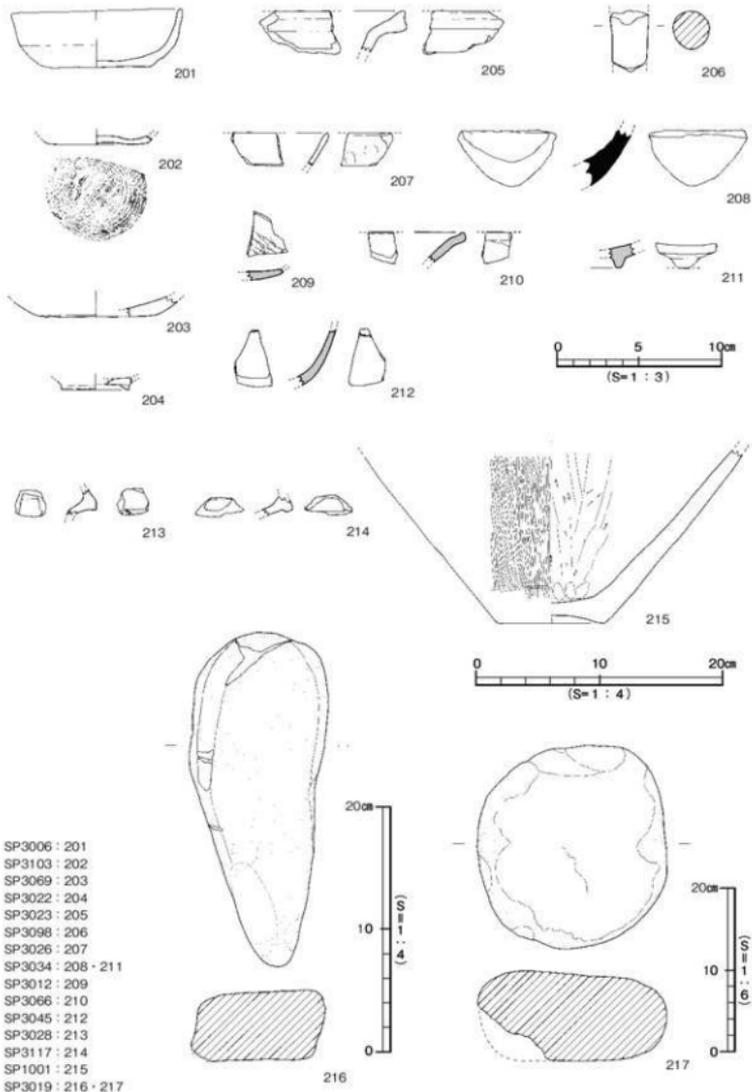
表2 柱穴一覧

柱穴埋土	区	1区	2区	3区	計
A類：灰色土		3	2	82	87
B類：灰褐色土		2	0	0	2
C類：灰黄色土		21	0	7	28
D類：褐色土		24	0	1	25
E類：暗褐色土		6	0	0	6
F類：黒褐色土		12	3	10	25
G類：にぶい黄褐色土		0	9	15	24
H類：灰白色砂		2	0	0	2
計		70	14	115	199

## 柱穴出土遺物（第41図）

201～217は、以下の柱穴出土品である（201：SP3006、202：SP3103、203：SP3069、204：SP3022、205：SP3023、206：SP3098、207：SP3026、208・211：SP3034、209：SP3012、210：SP3066、212：SP3045、213：SP3028、214：SP3117、215：SP1001、216・217：SP3019）。

201～203は土師器坏。201は推定口径10.2cm、底径6.6cm、器高3.5cmを測る。202・203は底部片で、底部の切り離しは回転系切り技法による。204は土師器碗の底部小片で、丸みのある断面三角形の高台を貼り付ける。205は土師器鍋の口縁部片で、口縁端面はナデ凹む。206は土師器土釜の脚部片で、断面円形を呈する。207は瓦質土器の碗で、口縁部外面に指頭痕を残す。208は須恵器壺の底部片、209は龍泉窯系青磁碗の底部片である。209の内面にはジグザグ文が施されている。210は陶器製の段皿で、緑灰軸が掛けられている。211は磁器製の碗で透明軸が掛けられているが、高台畳付部分は無軸である。212は肥前系磁器の碗で、灰白軸が全面に掛けられており、外面に文様が描かれている。213～215は弥生土器。213・214は複合口縁壺の小片、215は壺形土器の底部であり、215の外面にはタテ方向のヘラミガキ調整、内面にはヘラケズリ調整を施す。216は砂岩製の台石で、長さ27.3cm、幅11.0cm、厚さ5.5cm、重量2808.2gを測る。217は砂岩製の礎石で、長さ24.7cm、幅22.6cm、厚さ10.8cm、重量8.95kgを測る。



- SP3006 : 201  
 SP3103 : 202  
 SP3069 : 203  
 SP3022 : 204  
 SP3023 : 205  
 SP3098 : 206  
 SP3026 : 207  
 SP3034 : 208・211  
 SP3012 : 209  
 SP3066 : 210  
 SP3045 : 212  
 SP3028 : 213  
 SP3117 : 214  
 SP1001 : 215  
 SP3019 : 216・217

第41図 柱穴出土遺物実測図

## (2) 包含層・トレンチ・近現代坑出土遺物 (第42図)

調査では、第Ⅱ層から第Ⅶ層の掘り下げ時や、調査壁沿いに設定したトレンチや近現代坑の掘削時に遺物が出土した。ここでは、実測しうる遺物を掲載した。

218・219は第Ⅱ層、220・221は第Ⅳ層、222は第Ⅴ層、223・224は第Ⅵ層、225～229はトレンチ、230は近現代坑出土品。

218は肥前系陶器の片口鉢で、褐色の胎土に暗緑色釉が掛けられている。219は土師器皿。3/4の残存で、口径7.5cm、底径4.3cm、器高1.3cmを測る。口縁部は内湾気味に立ち上がり、口唇部には煤が付着しており、灯明皿として使用されたものと思われる。220・221は備前焼の播鉢で、220の口縁部には凹線2条が巡り、221は6条1組の条線が残る。222～229は弥生土器。222は広口壺で、口縁端部を下方に拡張し、口縁上端面にはヘラミガキを施す。223は複合口縁壺で、口縁端部を欠損する。224は頸部片で、断面三角形の凸帯を貼り付け、凸帯上に刻目を施す。225は甕形土器の口縁部片で、内外面には細かなハケ目調整を施す。226～228は鉢形土器。226・227は口縁部が外反し、口頸部内面に稜をもつ。内外面共に、ハケ目調整を施す。228はミニチュア品で、1/2の残存である。外面にはタタキ調整後にハケ目調整、内面には指頭痕が顕著に残る。229は器台形土器の脚部片で、径1.6cm大の円孔を1ヶ看取する。230は完形品の土師器皿で、口径7.2cm、底径6.0cm、器高1.4cmを測る。口縁部は直線的に立ち上がり、底部外面には回転系切り痕とスノコ痕を残す。

## 第4節 小結

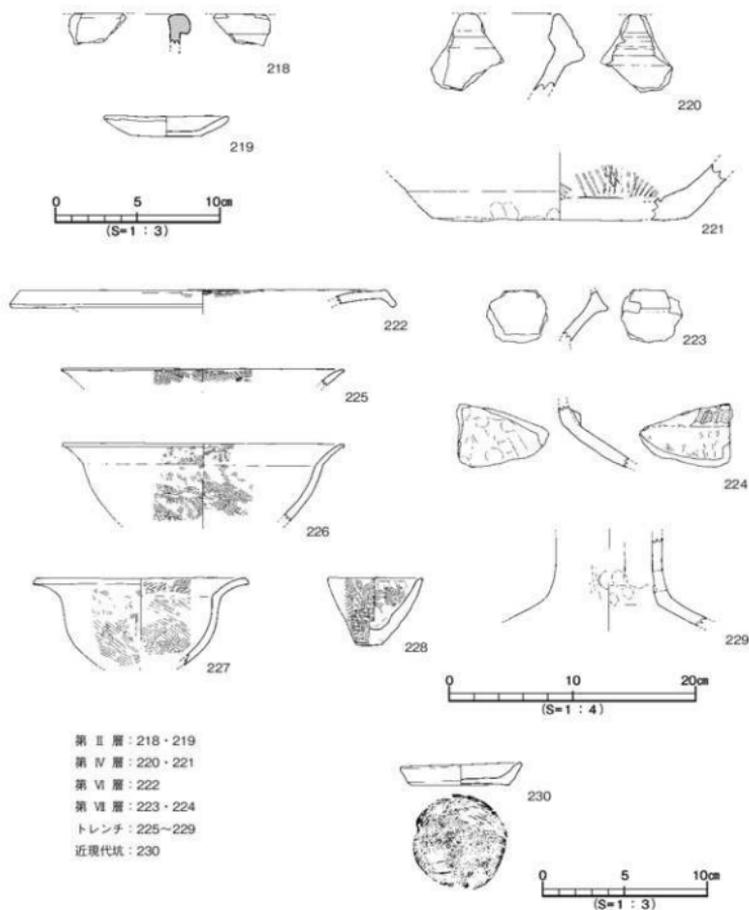
今回の調査では、弥生時代から中近世までの集落関連遺構や遺物を確認した。ここでは、時代別に検出した遺構・遺物についてまとめをおこなう。

## 1. 弥生時代

弥生時代では、前期の溝と後期の堅穴住居と溝を検出した。前期では、1区で検出した溝SD104が挙げられる。調査区内を北東-南西方向に流れる溝で、溝内からは弥生時代前期末に時期比定される土器片が数点出土した。これまで、調査地を含む中村二丁目一帯では当該期の遺構は検出されておらず、SD104の検出は当地一帯における集落出現期を知るうえで貴重な資料となる。

一方、後期では3区にて堅穴住居SB301と溝SD305、2区では溝SD202を検出した。SB301は推定直径6mを測る円形住居と考えられ、住居内からは炭化した柱材や焼土が多数検出されたことから焼失住居と考えられる。出土品より、SB301は弥生時代後期後半から末葉に廃棄・埋没したものと考えられる。このほか、3区検出のSD305は南北方向に延びる溝で、溝内からは完形品を含む多数の土器片が出土した。なお、土器片は折り重なるような状況であったことから、溝内に土器を廃棄した様子が伺われる。また、溝出土品には鹿と思われる線刻を施した土器片や、完形の石錘などが含まれている。溝の形状や配置から、SD305は平成9年度に実施した中村松田遺跡2次調査検出の溝SD2に繋がる溝と推測される。また、溝SD202は南北方向に延びる溝で、溝内からは土器片が多数出土している。2本の溝は出土遺物より、弥生時代後期後半から末葉に埋没したものと考えられる。

今回の調査で検出した2本の溝と堅穴住居は、出土した遺物に大きな時期差は認められず、両者は同時期に併存していたものと推測される。このように、溝と堅穴住居が併存する状況は中村松田遺跡1～3次調査にも見られることから、少なくとも弥生時代後期後半から末葉には中村地区一帯に広く



第42図 包含層・トレンチ・近現代坑出土遺物実測図

集落が展開していたことがわかる。また、溝は本調査地から南西側へ続いており、集落範囲はさらに南西方向へ拡大しているものと推測される。

## 2. 古墳時代～古代

古墳時代から古代の遺構は未検出であるが、包含層や柱穴出土品には該期の遺物が含まれている。

## 3. 中世

中世では、主に13世紀代、鎌倉時代の溝や土坑、井戸を検出した。溝は1区と2区で検出され、このうち2区検出の溝SD201は「L」字状に折れ曲がる形状を呈しており、集落を区画するための溝、または農耕等に伴う水路的な溝と考えられる。

井戸は1区にてSE101、2区では2基の井戸SE201・202を検出した。SE101は掘り方径約0.8m、深さ1.44mを測る井戸で、井戸内からは数個の石が出土したことから、本来は石組井戸と推測される。

特筆すべきは、2区検出の井戸である。井戸SE201は掘り方径約2m、深さ約1.6mを測る石組井戸で、井戸中位付近まで径10～20cm、厚さ10cm大の河原石が弧状に配置され、石は5段ないし7段積まれていた。井戸の上部構造は近現代の造成等により削平されており不明であるが、土層観察より、本来は3m以上の深さがあったものと推測される。井戸内からは土師器片や東播系須恵器片、瓦質土器片、陶磁器片が出土し、井戸下部からは、ほぼ完全な状態で鉄製の小刀が出土した。井戸内にはこれらの遺物のほかに大型の石が崩落しており、井戸の廃棄に伴い土器や刀などを使用した何らかの祭祀行為があったものと推測される。一方、SE202はSE201が構築される以前に存在した井戸で、調査では井戸上部は破壊され埋め戻された状態であった。井戸上部は直径約2.7mの穴が深さ2m以上掘られており、井戸基底部付近のみが遺存していた。基底部からは数点の河原石のほか、完形の土師器のほか、瓦質土器や輸入陶磁器片、瓦片等が多数出土したほか、木製の曲物や木片、木杭、種子が出土した。これらの遺物もSE201と同様、井戸の廃棄に伴い埋葬されたものと考えられる。

検出した3基の井戸は、出土品より概ね鎌倉時代に存在したものと考えられるが、輸入陶磁器や鉄刀などが含まれており、井戸の所有者または管理者は上級武士または地区の権力者ではないかと推測される。井戸自体が一般大衆用のものか、個人所有のものかは現時点では判断しえないが、周辺地域の調査・研究により明らかになるものと期待している。なお、井戸出土品のうち、瓦質土器が3基の井戸で確認された。この中には高台を持たない坏が含まれているが、松山平野における瓦質土器には椀や皿以外の器種が出土した事例は極めて少なく、生産地や製作技法等に関して今後の研究課題となる。

## 4. 近世

近世では1区にて土坑5基、3区では溝4条を検出した。検出した土坑内からは、主に江戸時代後期、18世紀から19世紀代の土師器皿や国産陶磁器片、瓦片などが出土した。なお、土坑埋土をみると黒色土や黄色土がブロック状に混入するものがあり、これらの土坑は人為的に埋め戻されたものと考えられる。なお、土坑の性格や機能は不明である。

溝は3区にて4条を検出したが、このうちSD301は東西、SD303、SD304は南北方向に直線的に延びる溝であり、集落を区画するための溝または水田耕作等に伴う水路の可能性もある。これらの遺構は、近世段階には調査地や周辺地域において、一般集落もしくは農村的集落が存在していた可能性を示す資料といえよう。

今回の調査により、弥生時代では中村地区一帯に所在する弥生時代後期集落が、さらに南西方へ広

がりを見せることが判明し、中村地区における弥生後期集落の範囲や様相を知るうえで貴重な成果を得ることができた。中世では建物跡は検出されなかったものの、溝や土坑のほか井戸の検出は、中村地区において中世集落が確実に存在したことを示す重要な資料といえる。なお、中世から近世にかけても、一般集落または農村的集落が存在したことを示す遺構や遺物が多数確認されており、今後、中村地区における集落変遷や様相解明に多大の影響を与える調査成果といえよう。

表3 竪穴住居一覧

竪穴(SB)	区	地区	平面形	規模 長径×短径×深さ(m)	埋土	主柱穴(本)	出土遺物	時期
301	3	D・E5	円形	(4.71)×(2.71)×0.31	暗褐色シルト	(1)	弥・石	弥生後期後半～末

表4 溝一覧

溝(SD)	区	地区	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	時期
101	1	C2-4	皿状	5.80×0.76×0.14	暗褐色土	弥	弥生後期
102	1	B3-4	皿状	5.50×0.50×0.11	灰色砂	土	中世
103	1	A3～B2	レンズ状	5.58×1.91×0.24	灰色砂(礫混)	土・須	13世紀以降
104	1	A3～B2	レンズ状	5.74×0.56×0.16	灰白色砂(礫混)	弥	弥生前期末
201	2	D7-8	レンズ状	6.00×0.54×0.08	灰色土	土・陶	13世紀
202	2	D8	「U」字状	5.26×0.98×0.36	暗褐色シルト	弥・石・玉	弥生後期後半
301	3	D3-4	皿状	3.00×0.36×0.06	灰色砂質土	土・陶	江戸後期
302	3	F4-5	皿状	3.51×0.52×0.12	灰色土	弥・土	江戸後期
303	3	E・F5	皿状	6.08×0.41×0.08	灰黄色土	弥・土・須・瓦質・陶	江戸後期
304	3	E・F5	皿状	8.01×0.28×0.11	灰黄色土	弥・土・陶	江戸後期
305	3	D5～F4	皿状	9.61×1.10×0.21	暗褐色土	弥・石	弥生後期後半～末

表5 土坑一覧

土坑(SK)	区	地区	平面形	断面形	規模 長径×短径×深さ(m)	埋土	出土遺物	時期
101	1	A・B3	長方形	逆台形状	(2.43)×1.18×0.16	灰色粘質土	土・陶	江戸後期
102	1	B2-3	長方形	逆台形状	4.08×1.44×0.22	灰色粘質土	土・陶・瓦	江戸後期
103	1	B2	楕円形	逆台形状	1.34×1.12×0.44	緑灰色土	弥・土・須	13世紀以降
104	1	C2	円形	舟底状	(0.84)×(0.51)×0.48	灰色土	陶・瓦	江戸後期
105	1	B・C2	円形	逆台形状	1.21×1.12×0.51	緑灰色土	土・陶	江戸後期
106	1	C3	円形	皿状	0.80×(0.54)×0.12	灰黄色土	土・陶	江戸後期
201	2	D7	方形	逆台形状	1.34×(0.82)×0.12	灰色粘質シルト	弥・土・須・瓦質・陶	13世紀

表6 井戸一覧

井戸(SE)	区	地区	平面形	断面形	規模 長径×短径×深さ(m)	埋土	出土遺物	時期
101	1	A3	円形	筒状	0.94×(0.54)×1.44	オリーブ灰色土 他	土・須・陶・瓦質・瓦・石	13世紀
201	2	D7-8	円形	逆台形状(筒状)	1.97×1.88×1.59	灰色土 他	弥・土・須・瓦質・陶・瓦・鉄刀・石	13世紀
202	2	D・E7	円形	(筒状)	(1.60)×(1.60)×1.80	暗灰色土 他	土・須・瓦質・陶・瓦・木・種・石	13世紀

表7 1区検出の柱穴一覧

(1)

柱穴 (SP)	地 区	平面形	規 模 長径×短径×深さ (m)	検出面	埋 土	出土遺物
1001	B2	円形	0.72×0.64×0.21	Ⅴ層	H	弥
1002	B2	楕円形	0.54×0.40×0.06	Ⅴ層	H	
1003	欠 番					
1004	A・B2	円形	0.46×0.38×0.66	Ⅴ層	C	
1005	B2	楕円形	1.10×(0.38)×0.12	Ⅴ層	B	
1006	B2-3	円形	0.66×0.30×0.08	Ⅴ層	C	
1007	欠 番					
1008	B3	円形	0.41×0.41×0.09	Ⅴ層	C	
1009	B3	楕円形	0.94×0.84×0.08	Ⅴ層	B	
1010	B3	円形	0.18×0.18×0.12	Ⅴ層	C	
1011	B3	円形	0.18×0.14×0.07	Ⅴ層	C	
1012	B3	円形	0.16×0.14×0.08	Ⅴ層	C	
1013	欠 番					
1014	B3	円形	0.16×0.14×0.05	Ⅴ層	C	
1015	B3	円形	0.20×0.14×0.05	Ⅴ層	C	
1016	B3	円形	0.94×(0.78)×0.11	Ⅴ層	A	
1017	B3	楕円形	0.28×0.22×0.13	Ⅴ層	C	
1018	欠 番					
1019	B3	円形	0.22×0.20×0.18	Ⅴ層	A	
1020	B3	円形	0.50×0.46×0.09	Ⅴ層	C	
1021	A3	円形	0.36×0.34×0.06	Ⅴ層	C	
1022	A4	円形	0.28×0.24×0.27	Ⅴ層	C	
1023	A4	円形	0.32×(0.10)×0.03	Ⅴ層	C	
1024	B4	円形	0.26×0.26×0.46	Ⅴ層	C	
1025	B4	円形	0.30×0.28×0.24	Ⅴ層	C	
1026	B4	円形	0.26×(0.18)×0.07	Ⅴ層	A	
1027	B4	円形	0.34×0.30×0.28	Ⅴ層	C	
1028	B3	円形	0.18×0.18×0.17	Ⅴ層	C	
1029	C4	円形	0.24×0.22×0.29	Ⅴ層	C	
1030	C4	円形	0.34×0.30×0.18	Ⅴ層	C	
1031	B3	円形	0.24×0.22×0.25	Ⅴ層	C	
1032	B4	円形	0.24×0.20×0.40	Ⅴ層	C	
1033	A・B2	円形	0.40×(0.16)×0.07	Ⅵ層	F	
1034	B2	楕円形	0.34×0.26×0.06	Ⅵ層	F	
1035	C3	円形	0.26×(0.14)×0.05	Ⅵ層	D	
1036	C3	円形	0.22×0.22×0.04	Ⅵ層	D	
1037	C3	方形	0.52×0.44×0.03	Ⅵ層	D	
1038	C3	円形	0.34×0.30×0.05	Ⅵ層	D	
1039	C3	円形	0.36×0.36×0.06	Ⅵ層	E	
1040	C3	円形	0.28×0.28×0.07	Ⅵ層	D	
1041	B3	円形	0.18×0.18×0.11	Ⅵ層	D	
1042	B3	円形	0.36×0.28×0.24	Ⅵ層	E	
1043	B3	円形	0.28×0.28×0.10	Ⅵ層	E	
1044	B3	楕円形	0.27×0.21×0.07	Ⅵ層	F	
1045	B3	円形	0.18×0.16×0.05	Ⅵ層	D	
1046	B3	円形	0.34×0.32×0.05	Ⅵ層	D	
1047	B3	円形	0.22×0.21×0.06	Ⅵ層	F	

1区検出の柱穴一覧

(2)

柱穴 (SP)	地 区	平面形	規 模 長径×短径×深さ(m)	検出面	埋 土	出土遺物
1048	B3	円形	0.42×0.40×0.05	Ⅹ層	F	
1049	B3	円形	0.36×0.34×0.06	Ⅹ層	F	
1050	C3-4	円形	0.42×0.42×0.52	Ⅹ層	D	
1051	C4	円形	0.28×0.22×0.07	Ⅹ層	E	
1052	C4	円形	0.28×0.24×0.05	Ⅹ層	E	
1053	欠 番					
1054	B4	楕円形	0.25×0.22×0.22	Ⅹ層	F	
1055	B3	円形	0.32×0.32×0.04	Ⅹ層	D	
1056	B3	楕円形	0.20×0.16×0.05	Ⅹ層	D	
1057	B4	楕円形	0.24×0.18×0.15	Ⅹ層	D	
1058	B4	円形	0.28×0.28×0.08	Ⅹ層	D	
1059	B4	円形	0.76×0.74×0.20	Ⅹ層	D	
1060	B3-4	円形	0.23×0.23×0.06	Ⅹ層	D	
1061	B3	円形	0.24×0.22×0.07	Ⅹ層	E	
1062	A4	円形	0.18×0.18×0.07	Ⅹ層	F	
1063	A4	楕円形	0.38×0.32×0.07	Ⅹ層	D	
1064	B 4	円形	0.24×(0.12)×0.05	Ⅹ層	D	
1065	欠 番					
1066	B 4	楕円形	0.66×(0.48)×0.08	Ⅹ層	F	
1067	A1-2	円形	0.26×(0.10)×0.03	Ⅹ層	F	
1068	B 4	楕円形	0.32×0.26×0.24	Ⅹ層	D	
1069	B 4	円形	0.15×(0.10)×0.18	Ⅹ層	D	
1070	A4	円形	0.26×0.24×0.03	Ⅹ層	D	
1071	A4	円形	0.26×0.22×0.05	Ⅹ層	D	
1072	A4	円形	0.20×0.18×0.03	Ⅹ層	F	
1073	B 4	円形	(0.16)×0.10×0.11	Ⅹ層	D	
1074	B3	楕円形	0.14×0.10×0.12	Ⅹ層	D	
1075	B2	円形	0.48×(0.48)×0.28	Ⅹ層	F	
1076	B4	楕円形	0.21×0.11×0.10	Ⅹ層	D	

表8 2区検出の柱穴一覧

柱穴 (SP)	地 区	平面形	規 模 長径×短径×深さ(m)	検出面	埋 土	出土遺物
2001	D10	円形	0.30×0.26×0.17	Ⅹ層	G	弥
2002	D10	円形	0.34×0.32×0.08	Ⅹ層	G	
2003	D9	円形	0.34×0.28×0.13	Ⅹ層	G	
2004	D10	円形	0.26×0.22×0.18	Ⅹ層	F	
2005	D9	円形	0.22×0.20×0.09	Ⅹ層	A	土
2006	D9	円形	0.26×0.22×0.03	Ⅹ層	F	
2007	D9	円形	0.30×0.30×0.23	Ⅹ層	G	弥
2008	D9	円形	0.32×0.32×0.03	Ⅹ層	G	
2009	D9	円形	0.18×0.16×0.06	Ⅹ層	A	
2010	D9	円形	0.28×0.22×0.06	Ⅹ層	G	
2011	D10	円形	0.44×(0.18)×0.11	Ⅹ層	G	弥
2012	D9	楕円形	0.42×0.36×0.14	Ⅹ層	G	弥
2013	D9	円形	0.18×0.16×0.05	Ⅹ層	F	
2014	D9	円形	0.24×0.24×0.04	Ⅹ層	G	

表9 3区検出の柱穴一覧

(1)

柱穴 (SP)	地 区	平面形	規 模 長径×短径×深さ (m)	検出面	埋 土	出土遺物
3001	D3	楕円形	0.32×0.26×0.23	Ⅱ層	A	
3002	D4	円形	0.22×0.22×0.41	Ⅱ層	A	
3003	D4	円形	0.22×0.20×0.20	Ⅱ層	A	
3004	E3	円形	0.12×0.12×0.21	Ⅱ層	A	土
3005			欠	番		
3006	D4	円形	0.14×0.14×0.21	Ⅱ層	A	
3007	D4	円形	0.20×0.20×0.06	Ⅱ層	A	
3008	D4	円形	0.16×0.16×0.02	Ⅱ層	A	
3009	D4	円形	0.26×0.26×0.17	Ⅱ層	A	
3010	D4	円形	0.16×0.16×0.09	Ⅱ層	A	
3011	D4	円形	0.20×0.20×0.24	Ⅱ層	A	
3012	D4	円形	0.18×0.16×0.34	Ⅱ層	A	土・陶
3013	D4	円形	0.22×0.20×0.32	Ⅱ層	A	
3014	D5	円形	0.46×0.42×0.50	Ⅱ層	A	
3015	D5	円形	0.48×0.41×0.39	Ⅱ層	C	
3016	D5	円形	0.20×0.20×0.13	Ⅱ層	C	
3017			欠	番		
3018	D5	楕円形	0.38×0.24×0.18	Ⅱ層	A	
3019	E4	円形	0.22×0.22×0.20	Ⅱ層	C	石
3020	E4	円形	0.18×0.16×0.05	Ⅱ層	A	
3021	E4	円形	0.24×0.24×0.05	Ⅱ層	A	
3022	E4	円形	0.56×0.48×0.08	Ⅱ層	A	土
3023	E4	円形	0.24×0.24×0.21	Ⅱ層	A	土
3024	E4	楕円形	0.22×0.16×0.24	Ⅱ層	A	
3025	E5	楕円形	0.50×0.38×0.25	Ⅱ層	A	土・須
3026	E5	楕円形	0.76×0.70×0.32	Ⅱ層	A	土・瓦質
3027	E5	楕円形	0.50×0.50×0.46	Ⅱ層	C	土・須
3028	E5	楕円形	0.60×(0.46)×0.23	Ⅱ層	A	弥
3029	E5	円形	0.16×0.14×0.06	Ⅱ層	A	
3030	E5	円形	0.26×0.26×0.34	Ⅱ層	A	弥・土・陶
3031	E5	円形	0.16×0.16×0.23	Ⅱ層	A	
3032	E5	楕円形	0.34×0.20×0.35	Ⅱ層	A	土・須
3033	E5	円形	0.22×0.21×0.11	Ⅱ層	A	
3034	E5	円形	0.28×0.26×0.42	Ⅱ層	A	須・陶
3035	E5	円形	0.50×0.48×0.52	Ⅱ層	C	弥・土・須
3036	E4	円形	(0.16)×0.15×0.11	Ⅱ層	A	
3037	E4	円形	0.28×0.28×0.42	Ⅱ層	A	土
3038	E4	円形	0.16×0.16×0.03	Ⅱ層	A	
3039	E4	楕円形	0.38×0.30×0.17	Ⅱ層	D	
3040	E4	円形	0.14×0.14×0.05	Ⅱ層	A	
3041	E・F4	円形	0.20×0.16×0.08	Ⅱ層	A	
3042	E・F4	円形	0.27×0.24×0.25	Ⅱ層	A	土
3043	F4	円形	0.28×0.26×0.32	Ⅱ層	A	弥・須
3044	F4	楕円形	0.30×0.18×0.18	Ⅱ層	A	
3045	F4・5	楕円形	0.24×0.18×0.23	Ⅱ層	A	土・陶
3046	E5	円形	0.20×0.16×0.12	Ⅱ層	A	
3047	E5	円形	0.22×0.20×0.49	Ⅱ層	A	土・須・石
3048	E5	円形	0.72×(0.30)×0.09	Ⅱ層	A	

## 3区検出の柱穴一覽

(2)

柱穴 (SP)	地 区	平面形	規 模 長径×短径×深さ(m)	検出面	埋 土	出土遺物
3049	E-F5	楕円形	0.48×0.38×0.47	Ⅷ層	A	土・陶
3050	F5	円形	0.22×0.20×0.41	Ⅷ層	A	弥・土・須
3051	F5	円形	0.40×(0.32)×0.49	Ⅷ層	A	土・須
3052	F5	楕円形	0.36×0.34×0.40	Ⅷ層	A	土
3053	F5	円形	0.26×0.20×0.20	Ⅷ層	A	
3054	F5	円形	0.26×0.24×0.34	Ⅷ層	A	弥・土・石
3055	F5	円形	0.22×0.22×0.18	Ⅷ層	A	
3056	F5	円形	0.18×0.18×0.12	Ⅷ層	A	
3057	F5	円形	0.22×0.21×0.11	Ⅷ層	A	
3058	F5	楕円形	0.32×(0.20)×0.15	Ⅷ層	A	
3059	F5	円形	0.22×0.20×0.10	Ⅷ層	A	
3060	F4	楕円形	(0.28)×0.22×0.17	Ⅷ層	A	
3061	F5	円形	0.50×(0.40)×0.25	Ⅷ層	A	土・須・陶
3062	F5	円形	0.28×0.24×0.61	Ⅷ層	A	土・須
3063	F5	円形	0.24×(0.12)×0.22	Ⅷ層	A	
3064	F5	楕円形	0.32×0.22×0.58	Ⅷ層	A	弥・須・石
3065	F5	円形	0.22×0.18×0.09	Ⅷ層	A	
3066	F5	楕円形	0.32×0.24×0.23	Ⅷ層	A	土・陶
3067	F5	不整形	0.66×(0.30)×0.50	Ⅷ層	A	土・陶
3068	F5	円形	0.30×0.24×0.41	Ⅷ層	A	土
3069	F5	楕円形	0.58×0.48×0.36	Ⅷ層	A	土・陶・石
3070	F5	円形	0.20×0.20×0.17	Ⅷ層	A	
3071			欠	番		
3072	F5	円形	0.38×(0.30)×0.37	Ⅷ層	A	土
3073	F5	楕円形	0.50×0.40×0.59	Ⅷ層	A	弥・土・須
3074			欠	番		
3075			欠	番		
3076	F5	円形	0.15×0.12×0.05	Ⅷ層	A	
3077			欠	番		
3078			欠	番		
3079			欠	番		
3080			欠	番		
3081			欠	番		
3082			欠	番		
3083			欠	番		
3084			欠	番		
3085			欠	番		
3086			欠	番		
3087			欠	番		
3088	F4	楕円形	(0.56)×0.44×0.10	Ⅷ層	A	
3089	F5	円形	0.16×0.14×0.07	Ⅷ層	A	
3090	F5	円形	0.16×0.16×0.26	Ⅷ層	A	
3091	F5	円形	0.20×0.20×0.22	Ⅷ層	A	
3092	F5	円形	0.14×(0.12)×0.10	Ⅷ層	A	
3093	F-G5	円形	0.18×0.16×0.20	Ⅷ層	A	
3094	G5	円形	0.20×0.18×0.08	Ⅷ層	A	
3095	G5	円形	0.26×0.26×0.09	Ⅷ層	A	
3096			欠	番		

## 3区検出の柱穴一覧

(3)

柱穴 (SP)	地区	平面形	規模 長径×短径×深さ(m)	検出面	埋土	出土遺物
3097			欠	番		
3098	F4	円形	0.32×(0.14)×0.12	Ⅷ層	A	土
3099			欠	番		
3100	D3	円形	0.18×0.18×0.18	Ⅷ層	G	
3101	D4	円形	0.16×0.16×0.21	Ⅷ層	F	
3102			欠	番		
3103	D4	円形	0.16×0.16×0.25	Ⅷ層	A	土
3104	D4	円形	0.28×0.28×0.25	Ⅷ層	F	弥
3105	D4	円形	0.22×0.14×0.26	Ⅷ層	F	
3106	D4	楕円形	0.38×0.30×0.18	Ⅷ層	G	
3107	E4	楕円形	0.26×0.16×0.17	Ⅷ層	F	
3108	E4	円形	0.21×0.21×0.21	Ⅷ層	G	
3109	E4	円形	0.12×(0.06)×0.21	Ⅷ層	F	
3110	E4	円形	0.18×(0.14)×0.11	Ⅷ層	G	
3111	E4	円形	0.18×0.16×0.17	Ⅷ層	G	
3112	E4	円形	0.14×0.13×0.12	Ⅷ層	G	
3113			欠	番		
3114	E5	円形	0.22×0.20×0.16	Ⅷ層	G	
3115	E5	円形	0.21×0.18×0.36	Ⅷ層	F	弥
3116			欠	番		
3117	E5	円形	0.22×0.21×0.13	Ⅷ層	F	弥
3118	E5	楕円形	0.58×0.51×0.26	Ⅷ層	F	
3119			欠	番		
3120			欠	番		
3121	F5	楕円形	0.92×(0.38)×0.11	Ⅷ層	F	
3122			欠	番		
3123	E4	楕円形	0.10×(0.06)×0.21	Ⅷ層	F	
3124	E4	円形	0.22×0.20×0.18	Ⅷ層	G	
3125	E4	円形	0.20×0.18×0.15	Ⅷ層	G	
3126	E4	円形	0.16×0.12×0.18	Ⅷ層	G	
3127	E5	円形	0.50×0.50×0.46	Ⅷ層	C	土
3128	E4	円形	0.60×(0.46)×0.23	Ⅷ層	A	土
3129	E4	円形	0.16×0.14×0.06	Ⅷ層	A	
3130	E4	円形	0.26×0.26×0.34	Ⅷ層	A	
3131	F4	円形	0.16×0.16×0.23	Ⅷ層	A	
3132	F4	円形	0.34×0.20×0.35	Ⅷ層	A	土
3133	F4	楕円形	0.22×0.21×0.11	Ⅷ層	A	
3134	F4	楕円形	0.28×0.26×0.42	Ⅷ層	A	土・須・陶
3135	F4	楕円形	0.50×0.48×0.52	Ⅷ層	C	土・須
3136	E4	楕円形	0.16×0.12×0.26	Ⅷ層	G	
3137	E4	円形	0.18×0.14×0.29	Ⅷ層	G	
3138	E5	円形	0.10×0.10×0.18	Ⅷ層	G	
3139	E5	円形	0.18×0.16×0.11	Ⅷ層	G	
3140	F4	円形	0.14×0.08×0.05	Ⅷ層	G	

## 第12章

# 中村松田遺跡

- 6次調査 -



## 第12章 中村松田遺跡6次調査

### 第1節 調査の経緯

#### 1. 調査に至る経緯（第1図）

2005（平成17）年5月、松山市都市整備部道路建設課（以下、道路建設課）より松山市道中村桑原線（3工区）道路改良工事にあたり、松山市中村二丁目43番3、44番2、45番1の各一部における埋蔵文化財確認願が松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。

申請地内では中村桑原線道路改良工事に伴い、平成11年度から20年度までに数々の発掘調査が実施され、弥生時代から中近世までの集落跡（竪穴住居・溝・土坑等）や生産跡（水田・畠）が多数確認されている。今回の発掘調査を実施するにあたり、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）と道路建設課との間で試掘調査に係る委託契約が結ばれ、2008（平成20）年10月に試掘調査を実施することになった。なお、試掘調査対象地は、松山市が指定する埋蔵文化財包蔵地の「No.110釜ノ口遺跡」内にあたる。

試掘調査の結果、調査地内から溝や柱穴、及び遺物包含層を検出した。この結果を受け、文化財課と道路建設課及び埋文センターの三者は遺跡の取り扱いについて協議を重ね、道路工事によって破壊される遺跡に対して記録保存のために発掘調査を実施することになった。発掘調査は、道路建設課と埋文センターとが委託契約を結び、埋文センターが主体となり文化財課の協力のもと、当該地内における弥生時代集落の範囲や構造解明を主目的とし、2009（平成21）年2月より開始した。

#### 2. 調査の経過（第2図）

平成21年2月中は、道路建設課による調査地内にある建物基礎等の除去作業や、発掘機材の搬入、調査地内の保全及び事前の測量や写真撮影等の準備作業を行い、本格的な発掘調査は3月より開始した。まず、重機（バックホー0.25m）と4tダンプカーを使用し表土の掘削と排土の移動を行った。なお、調査地内には建物基礎が遺存している箇所があり、それらの除去を含め掘削作業に7日間を費やした。3月16日より遺構検出作業及び調査地壁面の精査作業を行い、3月18日、溝や柱穴及び跡跡を検出した。同日、測量会社（株式会社四国測量設計）に4級基準点の設置業務を委託した。3月19日より、溝の調査を開始した。検出した8条の溝のうちSD1を除く7条の溝に、土層確認のためのトレンチ（幅20cmの溝）を設定した。3月25日より7条の溝の掘り下げを行い、3月31日までに溝の完掘及び測量作業を終了する。この後、埋文センターの規定により4月15日まで発掘調査を中断する。

4月16日より、未調査であった溝SD1を中心に発掘調査を再開する。まずSD1にトレンチ〔幅60cm、深さ1.5mの溝〕を掘削し土層堆積状況を確認した結果、溝の埋土は37種類を確認した。堆積状況やトレンチ出土品より溝埋土を上下2種類に分層し、埋土上位部分の掘り下げを行った。4月17日、上位部分の埋土掘り下げ時に完形の小型丸底壺や鉢、高坏が点在して出土し、それらの測量や写真撮影を行う。4月21日、SD1上位部分の掘り下げを終了する。4月24日より埋土下位部分の調査を開始する。トレンチの状況から溝の深さは2mを超えており、埋文センター内で協議した結果、重機の使用により4月28日と30日の2日間で埋土下位部分の掘り下げ及び遺物の取り上げ作業を行った。5月1日より作業員による溝の掘り下げ作業を行い、5月8日、溝内に土層観察用のセクション

ベルトを残した状態で溝の掘り下げを終了した。なお、同日、保存処理業務を担当する埋文センター職員による土層剥ぎ取りを行った。5月11日、検出した遺構の測量作業を終了し、5月12日、高所作業車を使用して完掘状況写真を撮影した。同日、愛媛大学田崎博之教授に出土品の鑑定や調査指導を請う。5月15日、すべての測量及び写真撮影を終了し、5月16日の午後には一般市民対象の現地説明会を開催し、総勢113名の参加者を得た。5月18日から20日までの間には、重機とダンプカーの使用により表土の埋戻し作業を行い、併行して発掘用具等の撤出を行った。5月21日、調査で使用した仮設ハウスの撤去をし、発掘調査を終了した。

## 第2節 層位（第3～5図）

### 1. 基本層位

調査地は松山平野北東部、石手川扇状地の端部にあり、標高約28.5mに立地している。調査以前は既存宅地であった。調査地の基本層位は、以下の10層（Ⅰ～Ⅹ層）である。なお、Ⅵ層以下はトレンチ及び遺構壁体や基底面にて検出した土層である。

Ⅰ層：近現代の造成土や農耕に伴う耕土であり、四種類に分層される。

Ⅰ①層－真砂土や建物基礎除去後の埋戻土で、層厚0.6～1.2mを測る。

Ⅰ②層－青灰色（10BG5/1）土で調査地内に部分的にみられ、層厚3～5cmを測る。

Ⅰ③層－灰色（10Y5/1）を呈する水田耕作土で調査地ほぼ全域にみられ、層厚5～15cmを測る。

Ⅰ④層－黄褐色（2.5Y5/6）を呈する水田床土で粘性が強く、調査地ほぼ全域にみられ層厚2～5cmを測る。

Ⅱ層：土色の違いにより三種類に分層される。

Ⅱ①層－灰オリーブ色（5Y6/2）を呈する土壌で調査地中央部東側にみられ、層厚5～10cmを測る。本層中からは、遺物の出土はない。

Ⅱ②層－灰色（10Y6/1）を呈する土壌で調査地南西部を除く地域にみられ、層厚5～20cmを測る。本層中からは、遺物の出土はない。

Ⅱ③層－暗青灰色（5B4/1）を呈する砂質シルトで調査地中央部にみられ、層厚5～15cmを測る。本層中からは、中世から近世の土師器片や陶磁器片のほか古銭が出土した。

Ⅲ層：土色、土質の違いにより四種類に分層される。

Ⅲ①層－灰黄色（2.5Y6/2）を呈する砂質シルトで調査地中央部にみられ、層厚5～10cmを測る。本層は、調査で検出した溝SD1やSD3の上面を覆う。本層中からは、遺物の出土はない。

Ⅲ②層－灰白色（5Y8/1）を呈するシルト層で調査地南東部に部分的にみられ、層厚3～15cmを測る。本層中からは、遺物の出土はない。

- Ⅲ③層-灰白色(5Y7/1)を呈する砂質シルトで調査地南東部に部分的にみられ、層厚5~15cmを測る。本層は溝SD4の上面を覆う。本層中からは、遺物の出土はない。
- Ⅲ④層-黄灰色(2.5Y6/1)を呈する砂質シルトで調査地南東部に部分的にみられ、層厚3~15cmを測る。本層中からは、遺物の出土はない。
- Ⅳ層:褐灰色(7.5YR5/1)を呈する粘質シルトで調査地南西部に部分的にみられ、層厚3~10cmを測る。本層中からは、土師器片や須恵器片が少量出土した。
- Ⅴ層:黒褐色(10YR3/2)を呈するシルト層で調査地全域にみられ、層厚10~70cmを測る。本層上面が調査における最終遺構検出面であり、本層上面にて溝や柱穴及び鋤跡や小穴を検出した。なお、本層中からは弥生土器片が少量出土した。また、本層中には鉄分やマンガン成分を含む斑点状の染みが無数検出された。
- Ⅵ層:黒褐色(2.5Y3/1)を呈する粘質シルトで調査地全域にみられ、層厚10~35cmを測る。本層中からは、遺物の出土はない。
- Ⅶ層:褐色(7.5YR4/3)を呈する粘質土で、層厚10~80cmを測る。本層中からは、遺物の出土はない。
- Ⅷ層:火山灰または火山灰を含む土壌で、含有物や色調、土質の違いにより四種類に分層される。
- Ⅷ①層-にぶい黄色(2.5Y6/4)を呈する粘質シルトに、黄色(2.5Y7/8)を呈する火山灰がブロック状に混入する土層で、層厚3~12cmを測る。
- Ⅷ②層-火山灰層に灰白色(2.5Y7/1)砂が混入する土層で、層厚4~10cmを測る。
- Ⅷ③層-明黄褐色(2.5Y7/6)を呈する火山灰層に白色砂粒が混入する土層で、層厚4~15cmを測る。
- Ⅷ④層-にぶい黄橙色(10YR7/2)を呈する粘質土であるが、周辺の調査状況よりAT火山灰の1次堆積層と考えられる土層である。層厚1~3cmを測る。
- Ⅸ層:褐灰色(10YR6/1)を呈する粘質のシルト層で、層厚10~15cmを測る。
- X層:浅黄色(2.5Y7/4)を呈する砂質シルト層で、溝SD1基底面は本層となる。
- 検出した遺構や出土遺物より、第Ⅴ層は弥生時代、第Ⅳ層は古墳時代、第Ⅲ層は古代までに堆積した土層と考えられる。なお、調査にあたり調査地内を5m四方のグリッドに分けた。グリッドは北から南へ向けてA・B・C、東から西へ向けて1・2・3……7とし、A1・A2……C7といったグリッド名を付した。なお、グリッドは遺物の取り上げや遺構の位置表示に利用した。

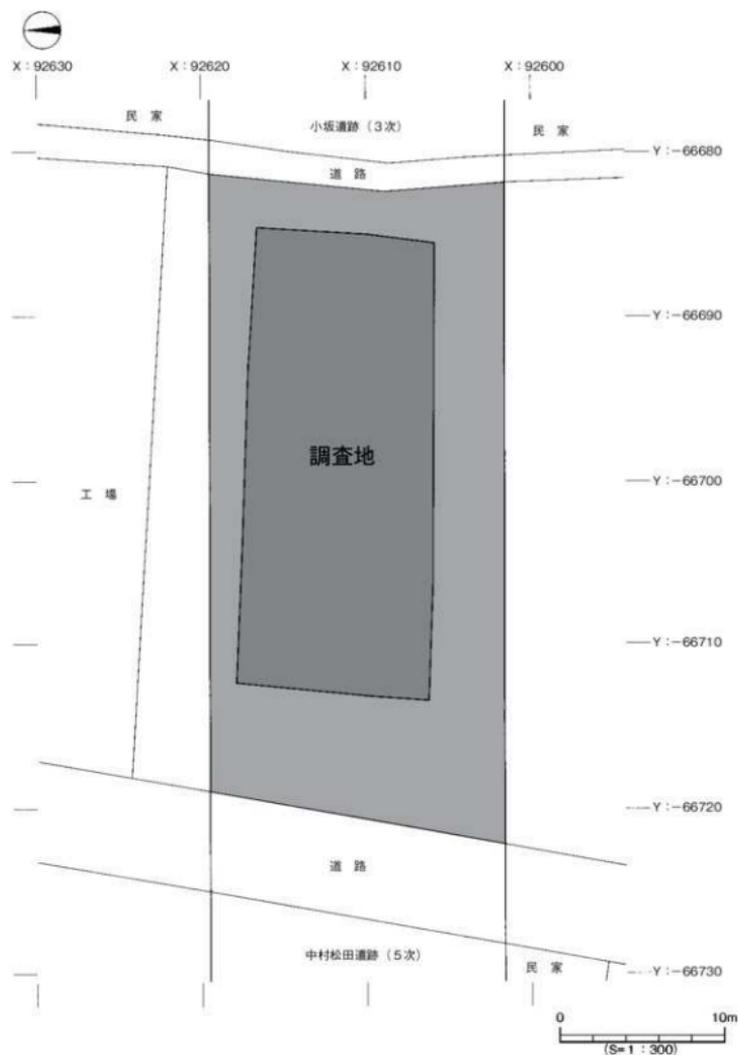
## 2. 検出遺構・遺物(第6図)

調査で検出した遺構は、溝8条、柱穴22基及び鋤跡である。溝は弥生時代から中世までのもので、内訳は以下のとおりである〔弥生時代後期~古墳時代前期:SD1・2・3・5、古墳時代後期:SD6・7・8、中世:SD4〕。また、鋤跡は古墳時代後期以降に掘削されたものと考えられる。

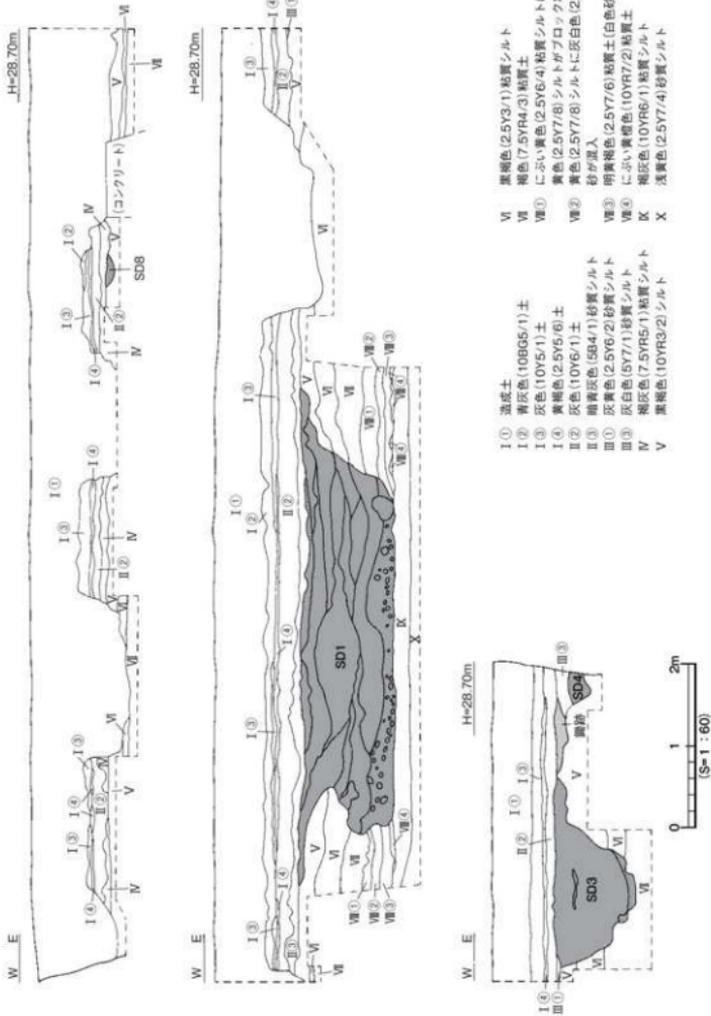
遺物は遺構及び包含層中より、弥生土器(前期・後期)、土師器(古墳時代~近世)、須恵器(古墳時代~中世)、軟質土器(古墳時代)、陶磁器(中世~近世)、石器、古銭〔永楽通宝〕、鉄滓が出土した。なお、出土量は遺物収納用テンパコ(内寸390×550×142mm)に6箱分である。



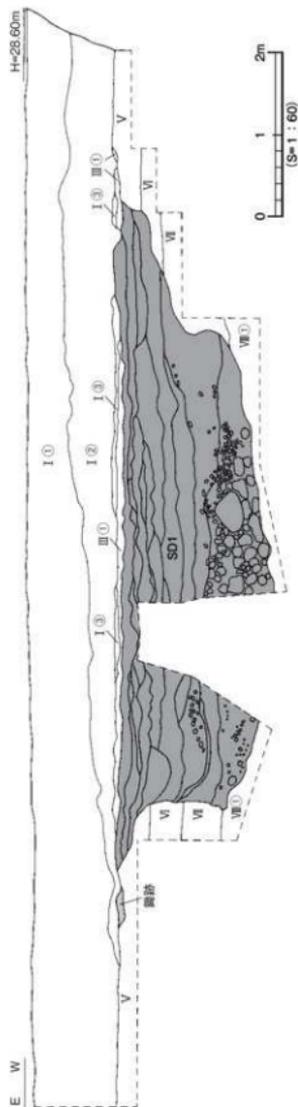
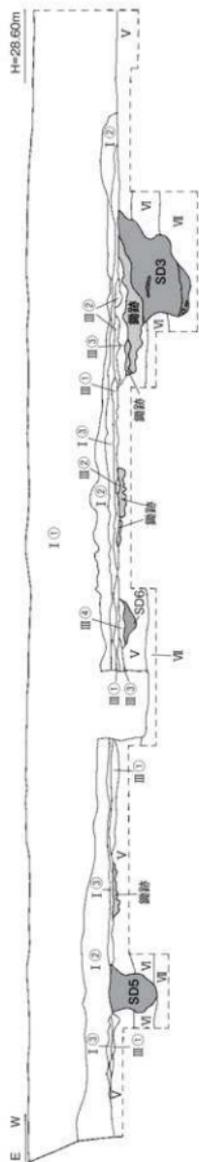
第1図 調査位置図



第2図 調査地測量図

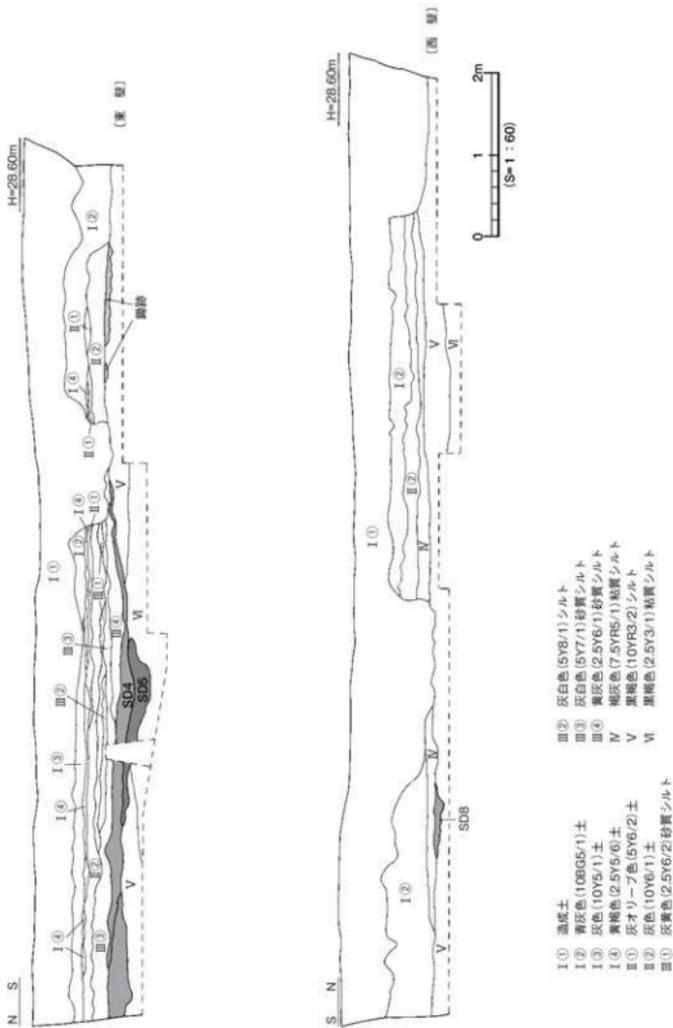


第3図 北壁土層図



- |     |                     |     |                           |
|-----|---------------------|-----|---------------------------|
| I ① | 造成土                 | V   | 黒褐色 (10YR3/2) シルト         |
| I ② | 黄灰色 (10B05/1) 土     | VI  | 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘質シルト       |
| I ③ | 灰色 (10Y5/1) 土       | VII | 褐色 (7.5YR4/3) 粘質土         |
| 面①  | 灰黄色 (2.5Y6/2) 砂質シルト | 面①  | にがい黄褐色 (2.5Y6/4) 粘質シルトに   |
| 面②  | 灰白色 (5Y8/1) シルト     |     | 黄色 (2.5Y7/8) シルトがブロック状に混入 |
| 面③  | 灰白色 (5Y7/1) 粘質シルト   |     |                           |
| 面④  | 黄灰色 (2.5Y6/1) 砂質シルト |     |                           |

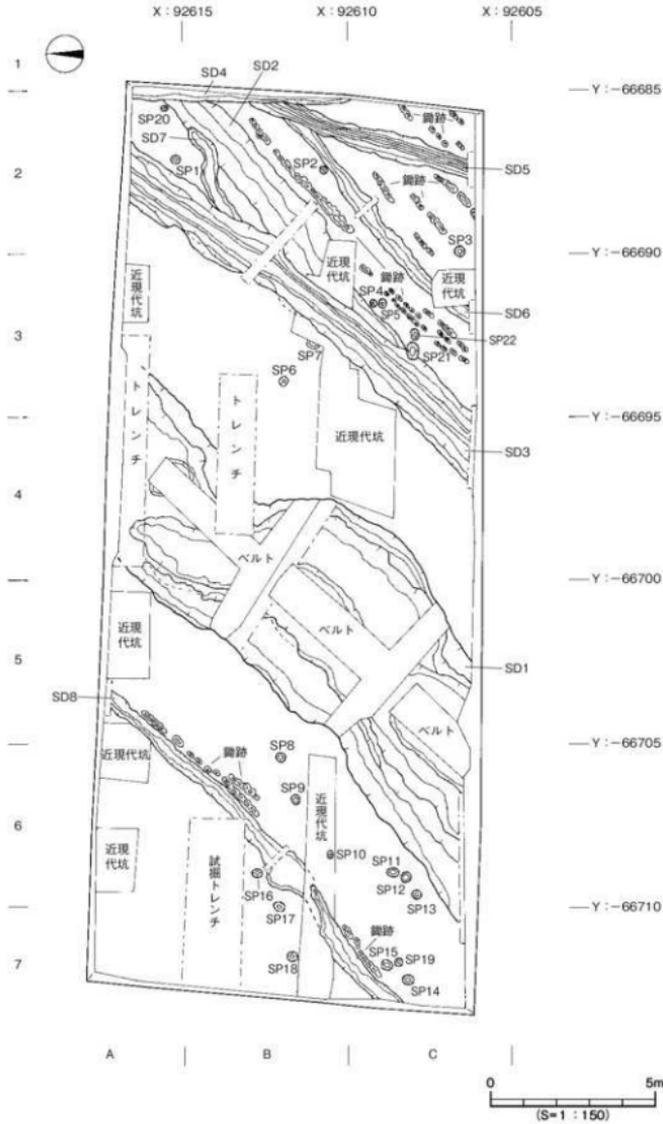
第4図 南壁土層図



第5図 東畷・西畷土層図

- I(1) 造成土
- I(2) 青灰色(10BGS/1)土
- I(3) 灰色(10Y5/1)土
- I(4) 黄褐色(2.5Y5/6)土
- II(1) 灰オリーブ色(5Y6/2)土
- II(2) 灰色(10Y6/1)土
- III(1) 灰黄褐色(2.5Y6/2)砂質シルト
- III(2) 灰白色(5Y8/1)シルト
- III(3) 灰白色(5Y7/1)砂質シルト
- III(4) 黄灰色(2.5Y6/1)砂質シルト
- IV 黄褐色(7.5YR5/1)粘質シルト
- V 黄褐色(10YR3/2)シルト
- VI 黄褐色(2.5Y3/1)粘質シルト

遺構と遺物



第6図 遺構配置図

### 第3節 遺構と遺物

調査では溝8条、柱穴22基及び鋤跡を検出した。

#### (1) 溝

##### SD 1（第7～9図、図版2～5）

調査地中央部A3～C7区で検出した北東～南西方向の溝で、溝東側は試掘調査用のトレンチに切られ、溝北側及び南側は調査区外に続く。なお、溝上面は一部に第Ⅱ③層暗青灰色砂質シルトが覆う規模は検出長21.0m、検出最大幅5.5m、最大深度2.2mを測る。ここでは、調査工程をふまえて溝の概略を説明する。

工程①：溝の深さや堆積状況を確認するため、東西方向に2本のトレンチ〔幅60cm、深さ1.8mの溝〕を掘削した。その結果、溝内には37種類の土砂や礫層の堆積が認められた。また、トレンチ内からは弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉の土器が出土した。土器の出土状況や土層の堆積状況から、溝の埋没までには少なくとも2段階の過程が存在することが分かり、溝上位部分と下位部分とに分けて調査を行うこととなった。なお、溝の掘り下げにあたり、溝内の堆積状況を記録するため東西及び南北方向にセクションベルト〔A・B・Cベルト〕を設定し、SD 1の調査終了時までベルトを残すことにした。

##### 工程②：溝上層部分の調査（第9図）

37種類ある土層のうち2層から8層までを溝上層の埋土とし、掘り下げや遺物の検出作業を行った。なお、1層は基本層位の第Ⅱ③層である。溝上層部分は最大幅5.3m、深さ0.80mを測る直線的な形状の溝であり、断面形態はレンズ状を呈している。遺物は主に5・6層中より完形の小型丸底壺3点と鉢2点が点在して出土したほか、溝北側からは高坏の坏部が2点出土した。なお、小型丸底壺や鉢は完存品または復元完形品であり、出土品の特徴や出土状況からSD 1上層部分が存在した時期に、これらの土器を使用した祭祀儀礼が執り行われたものと推測される。

##### 工程③：溝下層部分の調査（第7図）

溝上層部分の完掘作業及び測量作業終了後、下層部分の調査に移った。調査期間の都合上、作業員による手作業での掘り下げは困難であると判断し、重機の使用により下層部分の掘削を行った。その後、作業員により溝壁面及び基底面の精査を行った。SD 1下層部分の調査では、溝中央部から南側にかけて溝西側壁体には幅60cm、高さ60cmのテラス状の平坦部が存在していた。なお、テラスは一部崩落しており、溝基底部付近には崩落したテラス部分が、そのままの状態でも残存していた。一方、溝東側壁体では本来、溝の壁体部分であったものが水流の影響により崩落した状態となって検出された。このほかにも、溝下部には壁体の崩落と思われる黒色土や黄色土などのブロック塊（径10～50cm）が多数みられた。特に溝基底面から上方60～70cmの地点には、これらのブロック塊を含む土層（36・37層）が堆積しており、おそらく土石流のような激しい流水があったものと推測される。遺物は20層、22層、36層及び37層中から弥生時代後期後葉から末葉に時期比定される甕や壺、鉢などの土器片が出土したが、完形品の出土はみられなかった。なお、出土層位は不明であるが、溝内に設定したトレンチ内からは軟質土器片や鉄滓が出土している。

##### SD 1下層出土遺物（第10図）

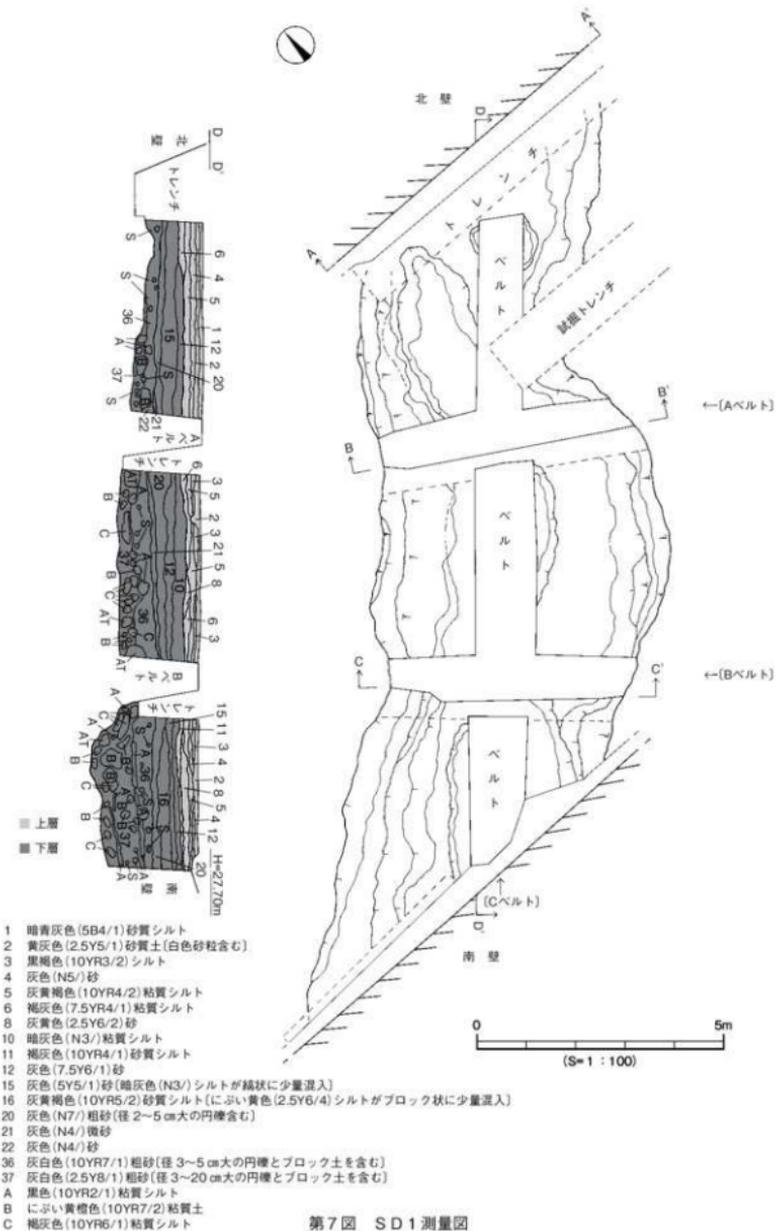
1は推定口径35.8cmを測る大型の鉢形土器。「く」の字状口縁で、口縁端面はナデ凹む。2・3は

壺形土器。2は口縁部が垂下し、口縁端面に1条の沈線が巡る。頸部外面にはタテ方向のハケ目調整、内面はヨコ方向のハケ目調整を施す。3は複合口縁壺で、口縁端部は内傾する面をもつ。口縁部外面には二種類の櫛描き波状文を施す。4～6は高坏形土器。4は坏部片で、口縁端部は丸く仕上げ。5・6は脚部で、5の外面にはタテ方向のヘラミガキを施す。7は甕形土器、8・9は壺形土器の底部である。7は1/2の残存で、小さな平底をなす。内面にはナゲ上げ痕が顕著に残り、外面には煤が一部付着している。10は鉢形土器、11は甕形土器もしくは鉢形土器の底部である。

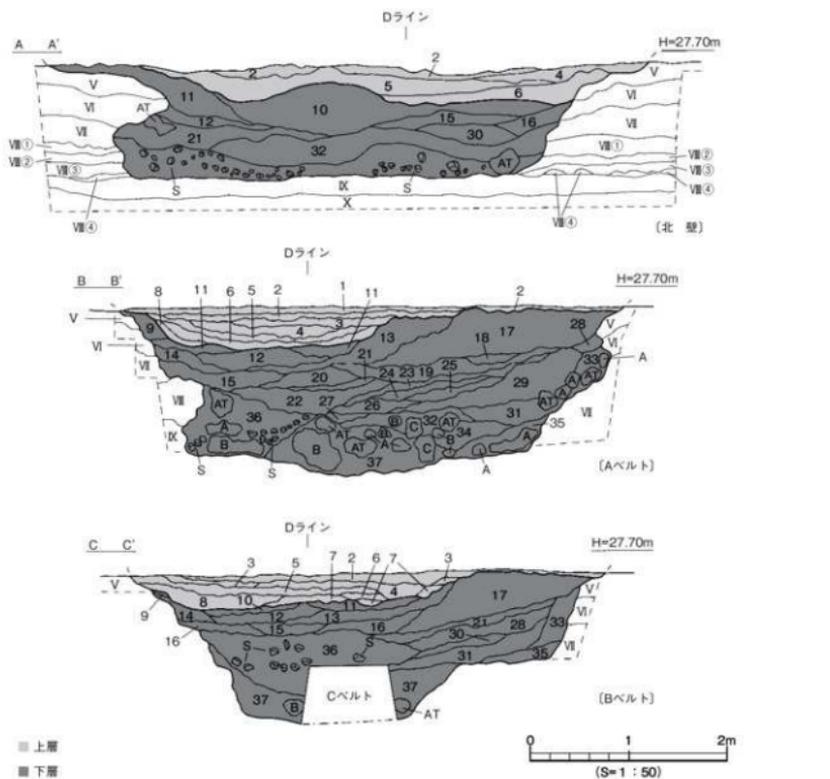
#### SD 1 上層出土遺物 (第11・12図、図版7)

12～15は甕形土器。12は1/2の残存で、口径11.9cm、器高15.9cmを測る。口縁部は内湾し、口縁端部は丸く仕上げ。底部は丸底で、胴底部内面には工具によるタテ方向のケズリ調整を施す。頸部境界内面には、指頭痕が顕著に残る。13～15は口縁部片で、13・14は口縁端部が上内方に肥厚している。16～20は小型丸底壺。16・17は口縁部が一部欠損するが、ほぼ完形品で、16は口径11.5cm、器高7.0cm、胴部最大径は8.6cmを測る。口縁部は内湾し、口縁端部は尖り気味に仕上げ。体部下半部外面には、ヘラケズリ痕が残る。17は口径11.2cm、器高6.8cm、胴部最大径7.9cmを測る。体部外面には、ヨコ方向のヘラケズリを施す。16・17は淡黄褐色を呈する精製品である。18は1/4の残存で、推定口径12.0cm、胴部最大径9.0cmを測る。口縁部はわずかに内湾し、口縁端部は尖り気味に仕上げ。体部外面にはヘラケズリ痕が残る。19は2/3の残存で、口径10.1cm、器高6.8cm、胴部最大径9.1cmを測る。口縁部はわずかに外反し、口縁端部は丸く仕上げ。口縁部と体部の境には凹みがあり、体部内外面には指頭痕が顕著に残る。18・19は乳褐色を呈する粗製品である。20は小片で、口縁端部は尖り気味に仕上げ。口縁部と体部の境内面には稜をもち、口縁部内外面にはヨコ方向の細かなヘラミガキを施す。

21～27は鉢形土器。21は口径13.7cm、器高5.2cmを測る完形品。色調は淡い褐色を呈し、口縁端部は尖り気味に仕上げ、体部内面にはミガキ痕が残る。底部外面には幅5mm、厚さ2mm程度の粘土が紐状に付着している。22は1/4の残存で、推定口径12.7cm、器高3.6cmを測る。口縁端部は丸く仕上げ、底部外面には手持ちヘラケズリを施す。胎土中には、金ウモンや赤色酸化土粒を多く含む。23～25は小片で、23・24は口縁端部を丸く仕上げ、25は尖り気味となる。26は3/4の残存で、口径10.9cm、器高4.7cmを測る。底部は平底風で、口縁端部は波状を呈する。内外面共に、指頭痕を顕著に残す。27は口径7.7cm、器高4.4cm、底径2.6cmを測る完形品で口縁端部は波状を呈し、底部は平底となる。口縁上端部は指オサエによる凹凸をもち、体部内面にはタテ方向のミガキが施される。28～31は高坏形土器。28は3/4の残存で、坏部口径15.6cmを測る。口縁部は外反し、柱部外面にはヘラミガキを施す。内外面共に磨滅が著しく、乳黄褐色を呈する粗製品である。29は坏部の完形品で、口径15.4cmを測る。器壁は厚く内面にはミガキ痕が残り、シワ状のひび割れが外面全体に見られる。30は坏部小片、31は脚部片である。31は裾部が外反気味に開き、柱部外面にはタテ方向のミガキが施される。胎土中には、径1～3mm大の長石を多く含む。32・33は高坏形土器または鉢形土器の脚部で、径0.6cm大の円孔を穿つ。外面には細かなヘラミガキ調整を施す。

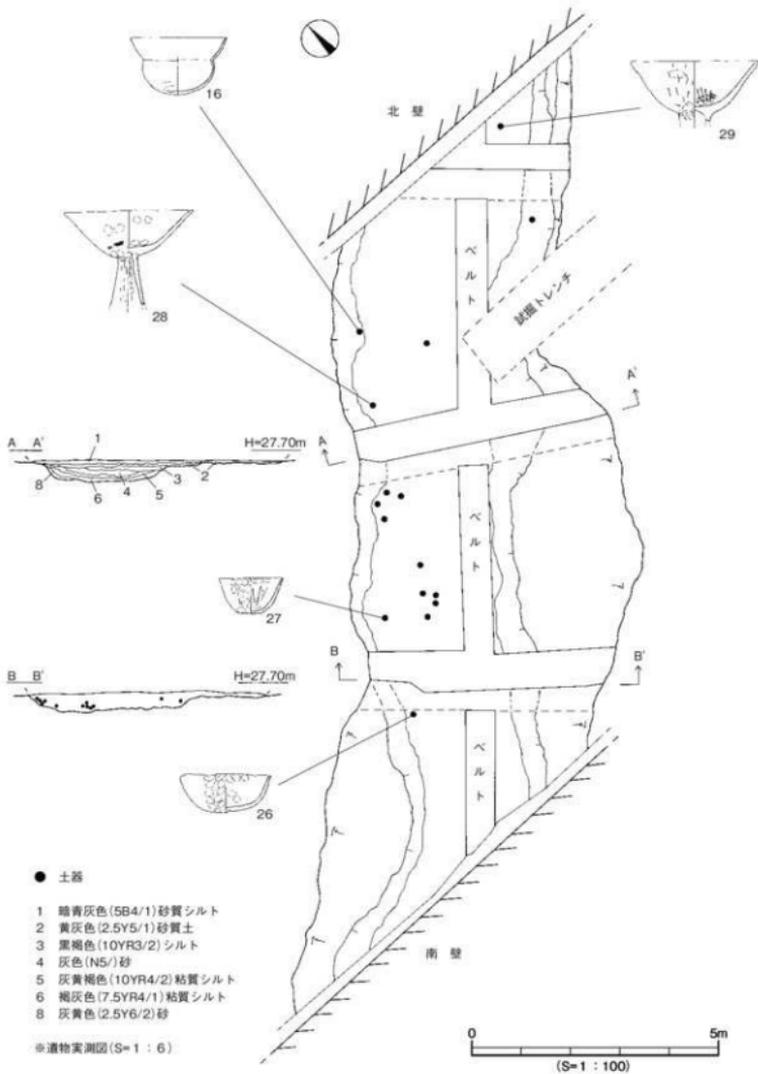


第7図 SD1測量図



- |  |   |   |
|--|---|---|
| <p>1 暗青灰色(5B4/1)砂質シルト</p> <p>2 黄灰色(2.5Y5/1)砂質土(白色砂粒含む)</p> <p>3 黒褐色(10YR3/2)シルト</p> <p>4 灰色(N5/0)砂</p> <p>5 灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルト</p> <p>6 褐色(7.5YR4/1)粘質シルト</p> <p>7 灰黄色(2.5Y6/2)細砂</p> <p>8 灰黄色(2.5Y6/2)砂</p> <p>9 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト</p> <p>10 暗灰色(N3/)粘質シルト</p> <p>11 褐色(10YR4/1)砂質シルト</p> <p>12 灰色(7.5Y6/1)砂</p> <p>13 褐色(10YR4/1)砂質シルト</p> <p>14 黒色(2.5Y2/1)シルトと暗灰黄色(2.5Y5/2)シルトの混合</p> | <p>15 灰色(5Y5/1)砂[暗灰色(N3/)シルトが結核に少量混入]</p> <p>16 灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルト[にぶい黄色(2.5Y6/4)シルトがブロック状に少量混入]</p> <p>17 にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト</p> <p>18 灰色(7.5Y5/1)砂</p> <p>19 明オリーブ灰色(2.5GY7/1)微砂</p> <p>20 灰色(N7/)粗砂[径2~5cm大の円礫含む]</p> <p>21 灰色(N4/)微砂</p> <p>22 灰色(N4/)砂</p> <p>23 黄灰色(2.5Y6/1)砂</p> <p>24 灰色(5Y6/1)砂</p> <p>25 黄灰色(2.5Y5/1)微砂</p> <p>26 灰色(7.5Y5/1)砂</p> <p>27 褐色(10YR5/1)微砂</p> <p>28 黄灰色(2.5Y4/1)シルト[白色砂粒含む]</p> | <p>29 オリーブ黄色(5Y6/3)微砂と灰色(5Y6/1)微砂の混合</p> <p>30 黒色(10YR2/1)粘質シルトと黄色(2.5Y7/8)シルトの混合</p> <p>31 褐色(10YR5/1)砂</p> <p>32 灰白色(2.5YB/2)粗砂[径1~3cm大の円礫を含む]</p> <p>33 にぶい黄色(2.5Y6/4)砂質シルト[灰色(7.5Y6/1)砂が結核に混入]</p> <p>34 にぶい黄色(2.5Y6/4)砂</p> <p>35 灰白色(10YR7/1)砂</p> <p>36 灰白色(10YR7/1)粗砂[径3~5cm大の円礫とブロック土を含む]</p> <p>37 灰白色(2.5YB/1)粗砂[径3~20cm大の円礫とブロック土を含む]</p> <p>A 黒色(10YR2/1)粘質シルト</p> <p>B にぶい黄褐色(10YR7/2)粘質土</p> <p>C 褐色(10YR6/1)粘質シルト</p> |
|--|---|---|

第8図 SD1断面図

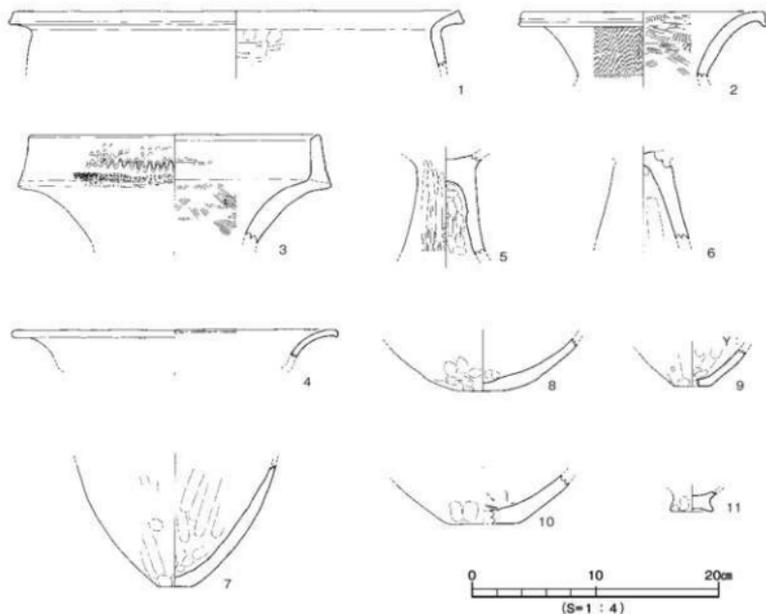


第9図 SD1上層検出状況図

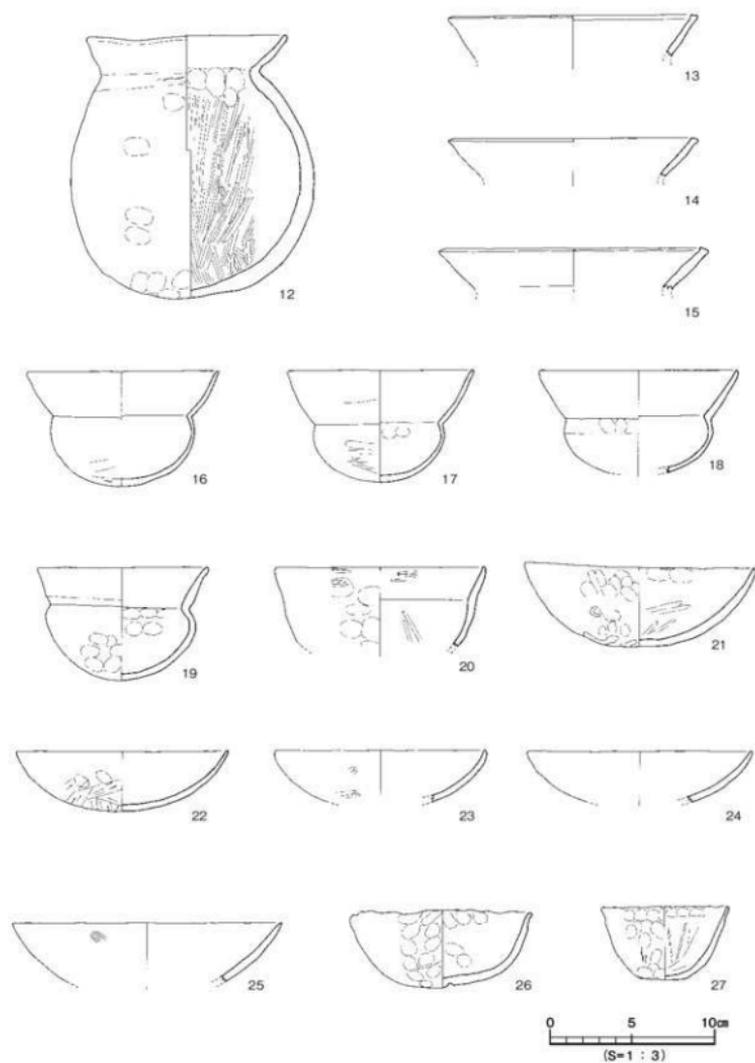
## SD 1 トレンチ出土遺物 (第13図、図版8)

34・35は甕形土器。34は「く」の字状口縁を呈し、口縁端部は「コ」字状に仕上げる。内外面共に、ハケ目調整(12~14本/cm)を施す。35は胴部片で器壁は薄く、外面にはヨコ方向のハケ目調整、内面には頸胴部境より下がった位置よりヘラケズリを施す。36は複合口縁壺で、口縁端部は丸く仕上げる。37は推定口径11.7cmを測る小型丸底壺で、1/3の残存である。口縁部は内湾し、口縁端部は尖り気味に仕上げる。体部下半部には手持ちヘラケズリを施す。38・39は鉢形土器。38は小片で、体部下半外面にはヨコ方向のヘラケズリを施す。39は口径10.0cm、器高5.2cmを測る復元完形品で、口縁端部は尖り気味に仕上げ、体部外面には指頭痕を顕著に残す。40は高坏形土器の脚部片で、柱部外面にはヘラミガキ、内面はシボリ痕を残す。41は器台形土器で、径1.5cm大の円孔を穿つ。42は軟質土器の小片で、外面に5mm四方の格子目叩きを施す。色調は外面が橙褐色、内面は黒色を呈する。43は鉄滓で、重量84.87gを測る。

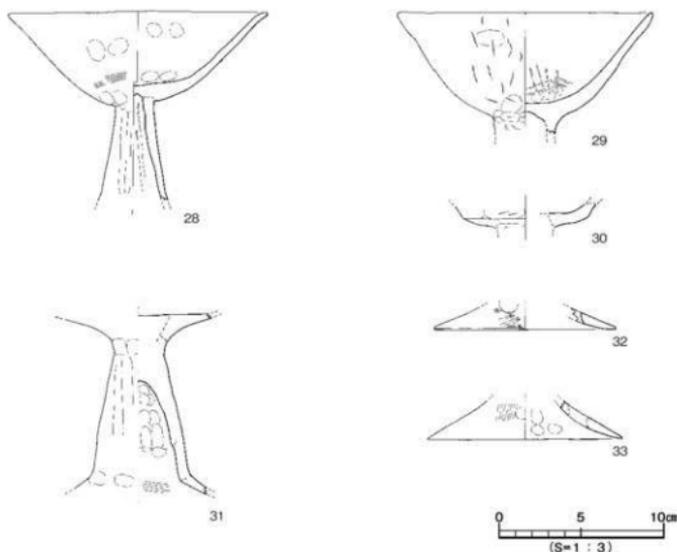
時期：出土遺物の特徴より、SD 1は弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉まで存在した溝と考えられる。



第10図 SD 1下層出土遺物実測図



第11図 SD1上層出土遺物実測図(1)



第12図 SD 1上層出土遺物実測図(2)

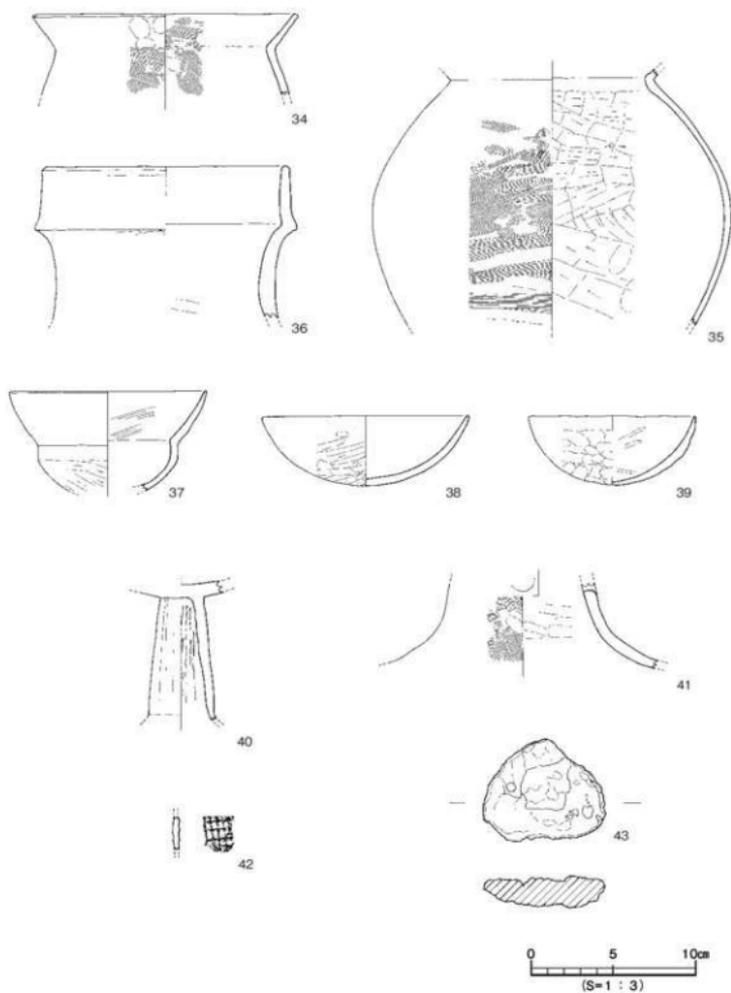
## SD 2 (第14図)

調査地東部B 2～C 3区で検出した北東-南西方向の溝で、溝東側は溝SD 4と溝SD 7に切られ、溝西側は近現代坑や溝SD 3に切られている。SD 2上面には第Ⅲ④層が部分的に堆積しており、第Ⅲ④層上面にて鋤跡と思われる小穴(径5～15cm、深さ3～6cm:灰黄色粗砂)を検出した。溝の規模は検出長10.5m、幅1.2～1.4m、深さは検出面下0.20mを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は暗灰色粗砂の単一層である。溝基底面には凹凸がみられ、北側から南側に向けて緩傾斜をなす(比高差6cm)。溝基底面及び壁面は第Ⅴ層である。埋土の状況や断面形態より、溝内には比較的緩やかな水の流れがあったものと考えられる。溝内からは、少量の弥生土器片が出土した。

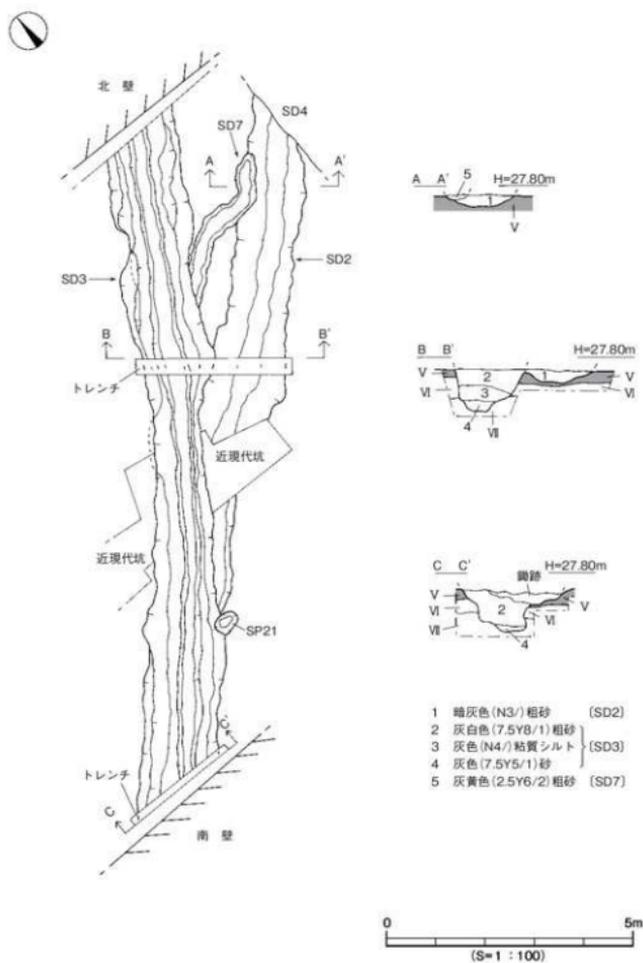
## 出土遺物(第15図)

44は甕形土器の口縁部片。「く」の字状口縁を呈し、口縁端部は尖り気味に丸く仕上げる。45は複合口縁壺の口縁部小片で、櫛描き波状文1条を看取する。46は壺形土器の頸部片で、外面にタテ方向のハケ目調整(6本/cm)を施す。47は高環形土器の脚部片で、柱部外面にタテ方向のミガキ痕を残す。48は高環形土器の脚裾部小片で、端部は尖り気味に仕上げる。

時期:出土遺物の特徴と切り合いより、SD 2は概ね弥生時代末の溝とする。



第13図 SD1トレンチ出土遺物実測図



第14図 SD2・SD3・SD7測量図

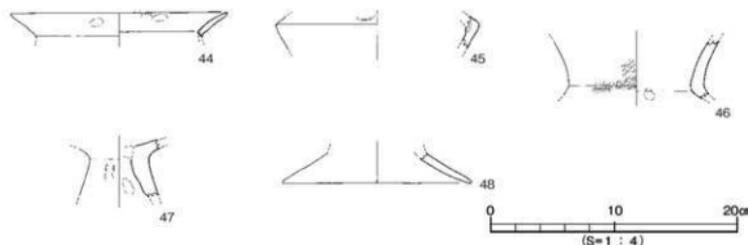
## SD 3 (第14図、図版5)

調査地東側A 2～C 4区で検出した北東-南西方向の溝で、溝東側は溝SD 7と重複し、中央部は溝SD 2を切っており、西側は柱穴SP21に切られている。SD 3上面には第Ⅲ④層が部分的に堆積しており、第Ⅲ④層上面にて鋤跡と思われる小穴を検出した。溝の規模は検出長14.5m、幅1.1～1.7m、深さは検出面下0.88mを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、溝壁体は水流の影響によりオーバーハングする箇所があり内側に凹んでいる部分がある。また、溝基底部付近には段掘り状となる箇所が数ヶ所みられる。さらに、溝基底面では幅10～15cm、深さ5～12cmを測る小溝を検出した。溝の埋土は三種類に分けられ、基底面検出の小溝は灰色砂（4層）、溝下位は灰色粘質シルト（3層）、溝上位は灰白色粗砂（2層）である。溝基底面は北側から南側に向けて傾斜をなし、比高差20cmを測る。なお、溝基底面は第Ⅶ層に及んでいる。遺物は3層中より弥生土器の甕や壺、2層下位部分より土師器の甕や高坏の破片が出土した。遺物の出土状況や断面形態等から、SD 3は人為的に埋め戻された可能性が高い溝と考えられる。

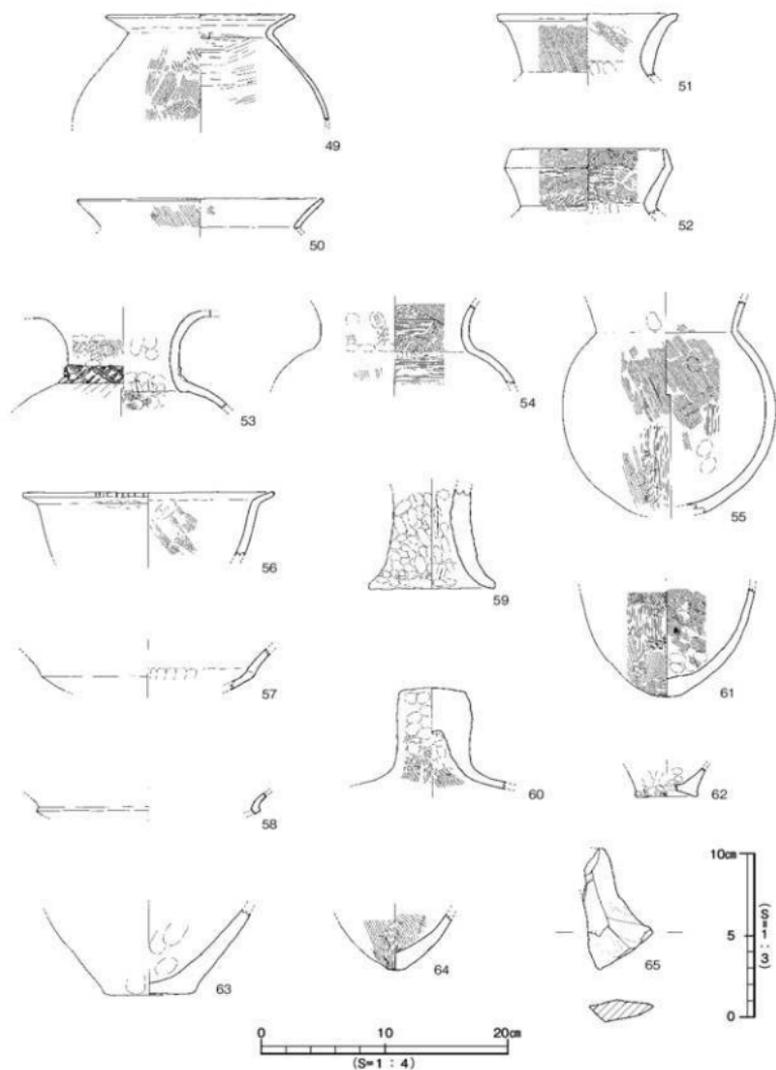
## 出土遺物 (第16図、図版8)

49・50は甕形土器。49は口縁端部がわずかに内方へ肥厚し、胴部外面には細かいハケ目調整（10～11本/cm）、内面は口頸部境付近までヨコ方向のヘラケズリ調整を施す。色調は乳黄色を呈し、器壁は薄い。50は口縁部の小片で、口縁端部は「コ」字状に仕上げる。51～55は壺形土器。51は太頭壺で口縁端部は「コ」字状を呈し、頸部外面にはハケ目調整（7本/cm）を施す。52は複合口縁壺で、1/3の残存である。口縁端部は内傾し、内外面共にヨコないしナメ方向のハケ目調整（9～10本/cm）を施す。53・54は頸部破片で53の頸部には凸帯を貼り付け、凸帯上に斜格子目文を施す。54は頸部破片で、内外面に指頭痕を残し、外面及び内面には細かなハケ目調整（10～12本/cm）を施す。55は頸部破片で、1/2の残存である。胴部上半部外面にはハケ目調整、胴下半部はタテ方向のヘラミガキを施す。56は鉢形土器の口縁部小片で、口縁端部に刻目を施す。弥生時代前期。57・58は高坏形土器で坏部下位には明瞭な稜をもち、口縁部は外反する。59は支脚形土器で、内外面共に指頭痕が顕著に残る。60は蓋形土器で外面には指頭痕が残り、下半部にはハケ目調整を施す。61・62は甕形土器の底部で61は小さな平底、62は上げ底となる。63は壺形土器、64は鉢形土器の底部で、63はわずかに上げ底、64は平底となる。65はサヌカイト製の剥片で、重量24.775gを測る。

時期：出土遺物の特徴より、SD 3は弥生時代末から古墳時代前期前葉の溝とする。



第15図 SD 2出土遺物実測図



第16図 SD3出土遺物実測図

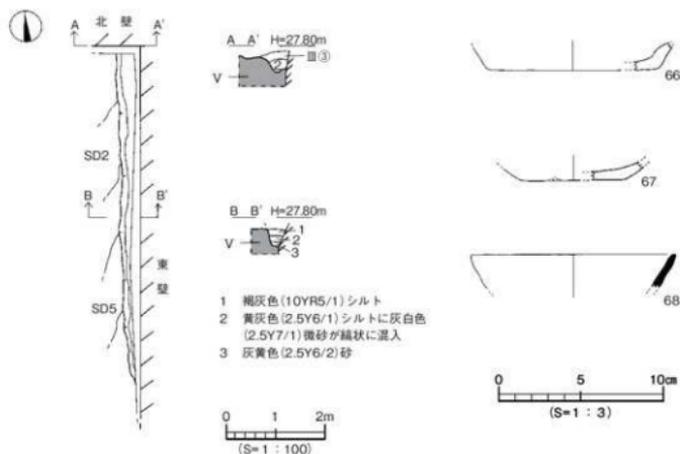
## SD 4 (第17図)

調査地東端 A1～B2区で検出した南北方向の溝で溝SD2と溝SD5を切り、溝両端及び東側は調査区外に続く。溝上面は第Ⅲ③層が覆っている。規模は検出長6.7m、検出幅0.4m、深さは検出面下0.34mを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は三種類に分かれ、上位から褐灰色シルト(1層)、黄灰色シルトに灰白色微砂が縞状に混入(2層)、灰黄色砂(3層)である。埋土の堆積状況から、SD4内には緩やかな水の流れがあったことが想定される。溝基底面はほぼ平坦であるが、わずかに北側から南側に向けて緩傾斜をなす(比高差3cm)。遺物は1層中より土師器皿の底部片(66)や口縁部片のほか、須恵器片が少量出土した。

## 出土遺物(第17図)

66は推定底径10.3cmを測る土師器皿で、口縁部を欠損している。67は土師器杯もしくは皿の底部片で、66・67共に底部の切り離しは回転糸切り技法による。色調は66が乳白色、67は乳褐色を呈する。68は須恵器杯の口縁部小片で、口縁部は直線的に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に仕上げる。内外面共に、回転ナデ調整を施す。

時期：出土遺物が僅少で時期特定は困難であるが、第Ⅲ③層が溝を覆うことからSD4は概ね中世以前の溝とする。



第17図 SD4測量図・出土遺物実測図

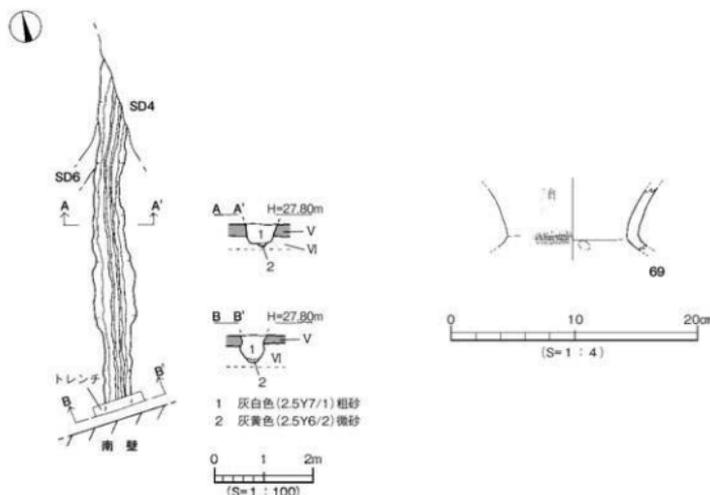
## SD 5 (第18図、図版6)

調査地東側B 2・C 2区で検出した南北方向の溝で、溝北端は溝SD 4に切れられ、北側は溝SD 6(古墳時代後期)と重複し、南端は調査区外に続く。なお、発掘調査時には溝SD 6との切り合いが明確に判断できず、溝SD 6が溝SD 5に先行するものとして掘削したが、整理事業時に前後関係が逆であることが判明した。また、溝南側では溝上面にて鋤跡と思われる小穴3基(径5~20cm、深さ5cm:灰黄色粗砂)を検出した。溝の規模は、検出長6.9m、幅0.46~0.90m、深さは検出面下0.53mを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、壁体は水流の影響によりオーバーハングし、袋状となる箇所が多数みられる。溝基底面では、幅6~10cm、深さ3~6cmを測る小溝を検出した。溝の埋土は二種類あり、基底面検出の小溝は灰黄色微砂(2層)、その他は灰白色粗砂(1層)である。溝基底面は北側から南側に向けて傾斜をなし、比高差10cmを測る。なお、溝基底面は第VI層に及ぶ。遺物は1層中より弥生土器片が少量出土した。このうち、図化しうる遺物を1点掲載した。

## 出土遺物(第18図)

69は弥生土器の壺形土器。広口壺の頸部片で、外面にハケ目調整(6本/cm)を施す。

時期:出土遺物が僅少で時期特定は難しいがSD 6との切り合いなどから、SD 5は概ね弥生時代末頃の溝とする。



第18図 SD 5測量図・出土遺物実測図

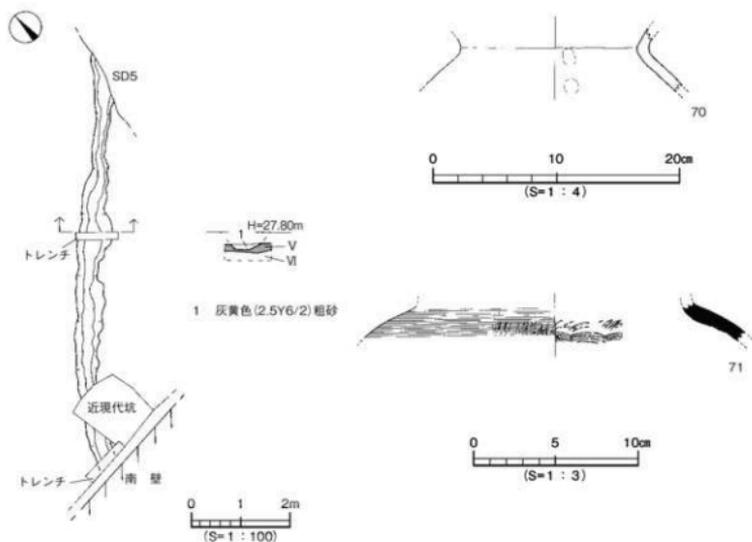
## SD 6 (第19図)

調査地東側B2～C3区で検出した北東-南西方向の溝で、溝北側は溝SD5と重複し、南側は調査区外へ続く。発掘調査時にはSD6がSD5に先行するものと判断し、掘り下げや測量を行ったため、掲載した測量図は切り合い関係が逆に表示されている。なお、SD6上面には第Ⅲ④層が部分的に堆積しており、第Ⅲ④層上面にて鋤跡と思われる小穴(径6～12cm、深さ3～6cm:灰黄色粗砂)を検出した。溝の規模は検出長8.4m、幅0.3～0.7m、深さは検出面下0.10mを測る。断面形態は浅い皿状を呈し、埋土は灰黄色粗砂の単一層である。溝基底面には多数の凹凸がみられ、わずかに北側から南側へ向けて緩傾斜をなす(比高差4cm)。溝壁体及び基底面は第Ⅴ層である。なお、検出状況や基底面の状況などからSD6は農耕に伴う水路的な性格をもつ溝と考えられる。遺物は埋土中より、土師器片や須恵器片が数点出土した。

## 出土遺物 (第19図)

70は土師器の甕形土器の頸部片で、頸部境界内面に稜をもつ。71は須恵器甕の肩部小片で、外面には回転カキ目調整を施した後に平行叩きを施し、内面には円弧叩きを施す。

時期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、出土した須恵器の特徴よりSD6は概ね古墳時代後期の溝とする。



第19図 SD6測量図・出土遺物実測図

## SD 7 (第14図)

調査地北東部B 2区で検出した東西方向の短い溝で、溝東側は溝SD 2を切り、西側は溝SD 3と重複する。なお、発掘調査時には溝SD 3との前後関係は判断できなかった。規模は検出長3.2m、幅0.35～0.45m、深さは検出面下0.08mを測る。断面形態は浅いレンズ状を呈し、埋土は灰黄色粗砂の単一層である。溝基底面には凹凸がみられ、溝壁体及び基底面は第V層である。溝内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、埋土がSD 6と酷似することや他の溝との切り合い関係より、SD 7は古墳時代後期以降の溝とする。

## SD 8 (第20図)

調査地西側A 5～C 7区で検出した北東-南西方向の溝で、溝中央部付近は試掘調査用トレンチや近現代坑に削平され、溝両端は調査区外に続く。溝南半部では部分的であるが溝上面に第IV層が覆っており、第IV層上面にて鋤跡と思われる小穴(径3～15cm、深さ3～6cm：灰黄色粗砂)を数多く検出した。溝の規模は検出長130m、幅0.40～1.20m、深さは検出面下0.11mを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は灰黄色粗砂の単一層である。溝基底面には数多くの凹凸がみられ、溝基底面は北側から南側へ向けて傾斜をなす(比高差13cm)。なお、溝壁体及び基底面は第V層である。検出状況からSD 8はSD 6と同様、農耕に伴う水路的な機能をもつ溝と考えられる。遺物は埋土中より弥生土器片や土師器片、須恵器片などが少量出土した。

## 出土遺物(第20図、図版8)

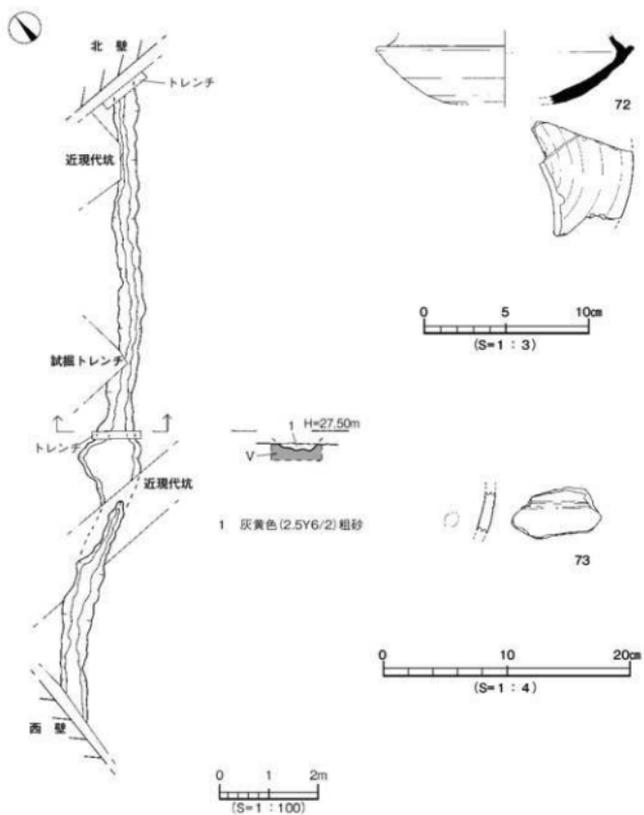
72は須恵器坏身片で、たちあがりは一部欠損している。たちあがり端部には沈線状の凹みが巡り、推定受部径15.6cmを測る。なお、底部外面にはヘラ記号を施す。73は壺形土器の胴部小片で、ヘラ描き沈線文2条を施す。弥生前期。

時期：出土した須恵器の特徴よりSD 8は古墳時代後期、6世紀後半頃の溝とする。

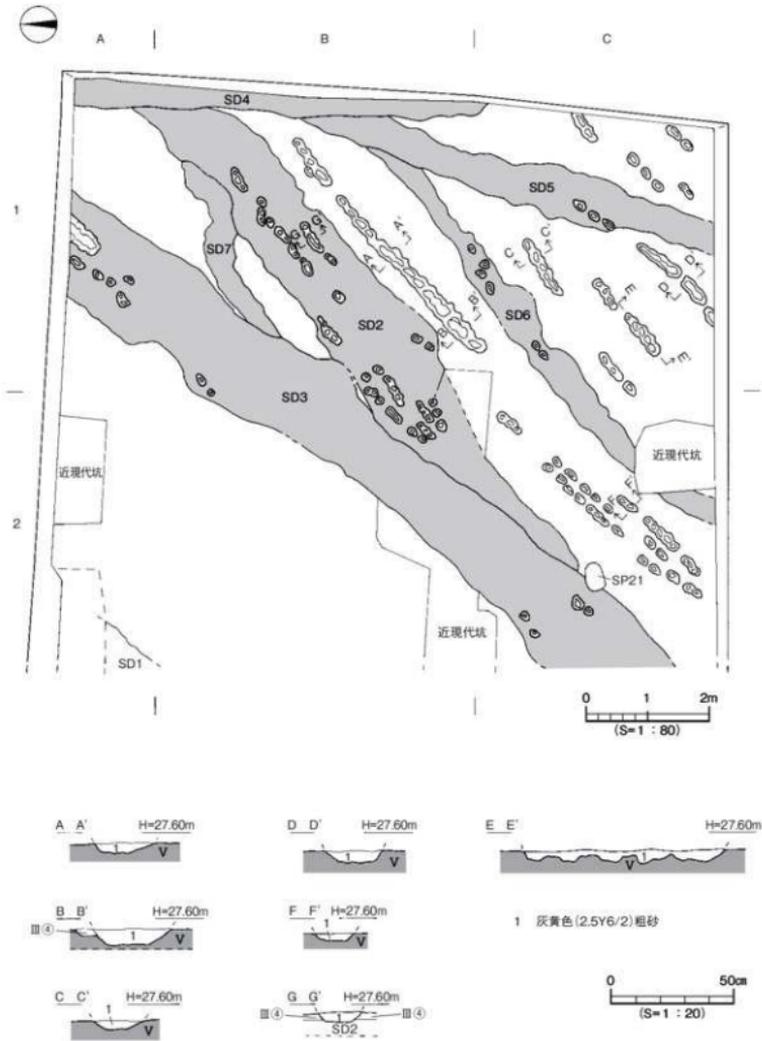
## (2) 鋤跡(第21・22図、図版6)

調査では、調査地東側A 1～C 2区や西側A 4～C 6区にて農耕に伴う鋤跡を検出した。鋤跡は第V層上面で検出したものが大半であるが、溝SD 2・3・5・6・8上面のほか、部分的に遺存している第Ⅲ④層及び第IV層上面から掘削されたものがある。鋤跡はすべて北東-南西方向に向けて掘削されており、径5～15cm、深さ3～8cmを測る鋤や鋤の掘削痕が溝状に点在している。断面形態は皿状を呈し、鋤跡埋土はいずれも灰黄色粗砂であり、洪水等により埋没したものと推測される。なお、鋤跡内からは遺物の出土はない。検出状況から、鋤跡は少なくとも二時期にわたり存在したものと推測される。

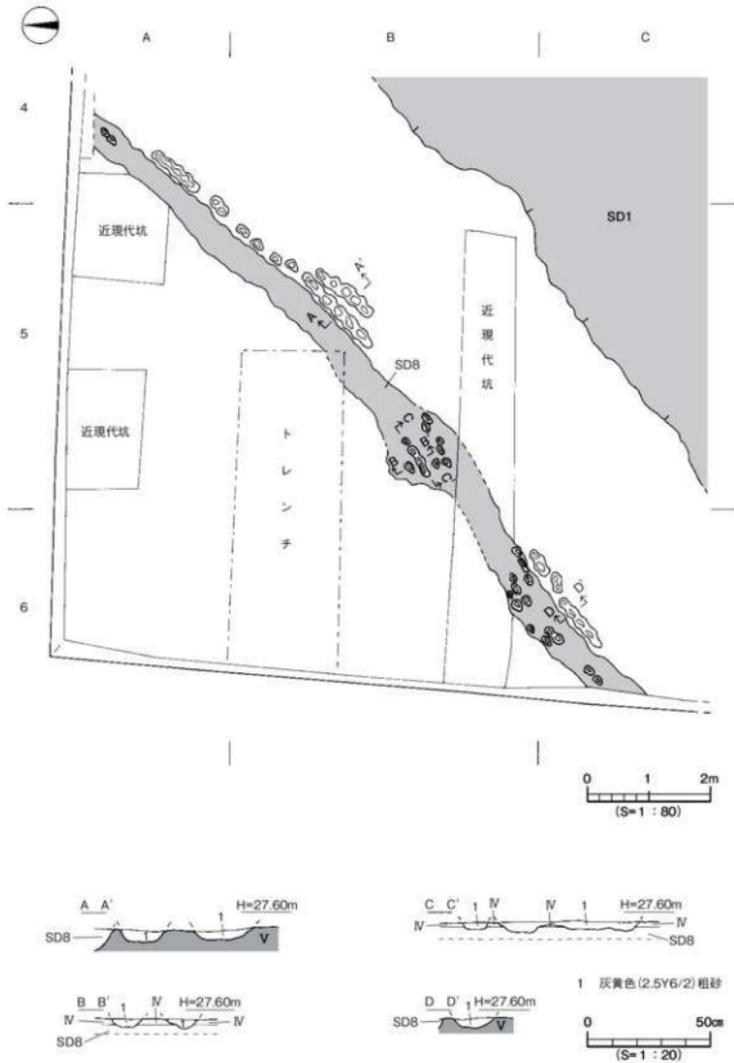
時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、溝SD 6やSD 8を覆う第IV層上面から掘削されていることから、第IV層上面検出の鋤跡は古墳時代後期以降に掘削されたものと考えられる。なお、第Ⅲ④層上面にて検出した鋤跡については、第Ⅲ層の堆積時期が古代と想定されることから、概ね古代以降に掘削されたものと考えられる。



第20図 SD8測量図・出土遺物実測図



第21図 鋤跡測量図(1)



第22図 錫跡測量図(2)

### (3) 柱穴 (第23図)

調査では、22基の柱穴を確認した。柱穴は、第V層及び第VI層上面での検出である。各柱穴の平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径0.15～0.34m、深さは検出面下6～18cmを測る。柱穴掘り方埋土は二種類（1類：暗灰黄色シルト、2類：灰色シルト）あり、柱穴検出数は1類が20基、2類が2基である。遺物はSP11・12（埋土：1類）より、弥生時代後期に時期比定される甕形土器や高坏形土器片が出土した。実測しうる遺物を1点掲載した。なお、各柱穴の詳細は表2に記す。

#### 出土遺物 (第23図)

74はSP11出土の甕形土器の底部で、底径3.1cmを測る。突出部をもち、外面にはタテ方向のハケ目調整（8本/cm）を施す。

### (4) 包含層出土遺物 (第24図、図版8)

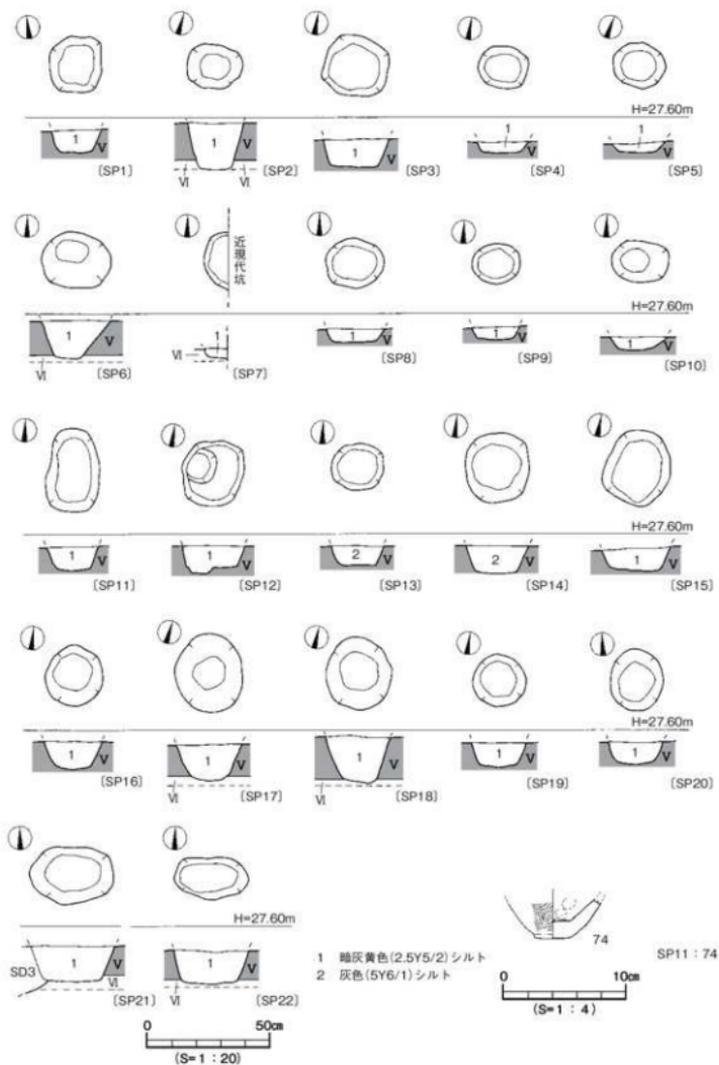
75は土師器こね鉢の口縁部小片で、体部外面には格子叩きを施す。76は土師器杯の底部片で、推定底径9.2cmを測る。77は備前焼の播鉢片で、口縁部に沈線1条を施し体部内面には5条以上の条線が残る。色調は外面が灰色、内面は灰褐色を呈する。78は瓦質土器の播鉢で、内面に条線9条を施す。79は須恵器杯身小片で、受部径は12.8cmを測り、底部外面1/2に回転ヘラケズリを施す。80は陶器製の段皿で、全面に灰白釉が掛けられている。18世紀後半～19世紀前半の製品である。81は甕形土器の頸胴部片、82は胴部片である。外面にはタテ方向のハケ目調整（7～8本/cm）を施し、82の内面には板状工具によるナデ調整を施す。83は永楽通寶で、銭径2.4cm、孔寸0.6cmを測る。初鑄年は1368（永楽六）年である。

## 第4節 小 結

調査では、弥生時代から中近世までの遺構や遺物を確認した。このうち、溝SD1は弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉まで存在した最大幅5.5m、深さ2.2mを測る巨大溝である。SD1は断面形態や壁体の状況から人工的に掘削された溝で、当該期における巨大溝の検出事例では愛媛県内で初例となる。溝内に堆積する土砂や礫の状況からは大量の水流があったことが想定され、SD1は調査地や周辺地域に展開する水田や畠に水を供給するための灌漑水路的な機能をもつ溝と考えられる。狭少範囲の調査であるため溝の全容は把握できなかったが、今後、周辺地域の調査等により溝の形状や構造さらには機能等がより明確になるものと考えている。

このほか、2本の溝（SD3・5）は断面形態や埋土の状況が酷似しており、同一の性格をもった溝と考えられる。出土品から、2本の溝は前述のSD1と同時期に併存した可能性が高く、飲料用などの生活用水路として利用された溝ではないかと推測される。

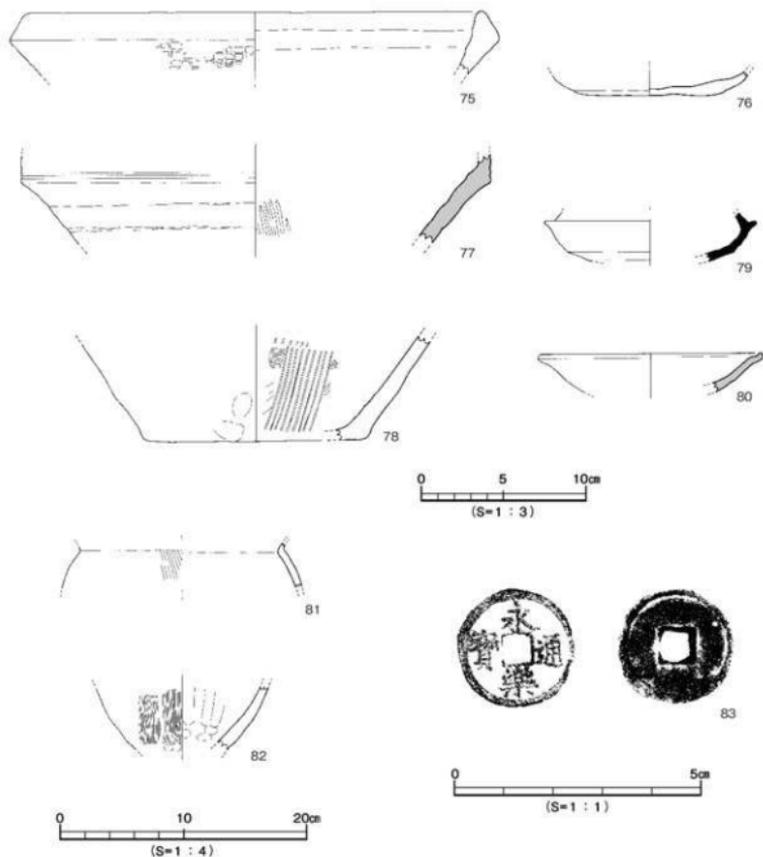
また、これらの溝のほかに古墳時代後期あるいは、それ以降に掘削されたと考えられる3条の溝（SD6・7・8）や鋤跡を検出した。溝は基底面の状況から農耕に伴う水路の可能性が高く、調査地や周辺地域では古墳時代以降、広い範囲に水田や畠が営まれていたものと考えられる。なお、鋤跡の検出状況より、調査で検出された第Ⅲ層や第Ⅲ④層は農耕に伴う土壌の可能性が高く、溝と合わせ古墳時代以降、概ね古代にかけて調査地や周辺地域は居住域でなく生産域として土地利用されたものと推測される。前章で紹介した小坂遺跡や中村松田遺跡5次調査において、中世段階の畠や農耕に伴う溝が



第23図 柱穴測量図・出土遺物実測図

検出されていることから、中世においても調査地内に水田もしくは畠が営まれていた可能性が極めて高いと考えられる。

今回の調査では巨大溝や水田跡と考えられる鋤跡の検出など、これまで中村地区において確認されていなかった数々の遺構を検出することができ多大なる調査成果を得ることができた。今後、中村地区をはじめ周辺地域における弥生時代から中世までの集落構造や様相の解明、及び古環境の復元にあたり、今回の調査成果は貴重な資料となるものである。



第24図 包含層出土遺物実測図

表1 溝一覧

溝 (SD)	地区	断面形	規 模		埋 土	出土遺物	時 期
			長さ	幅×高さ(m)			
1 (上位) (下位)	A3-C7	レンズ状	21.00	5.30×0.80	灰黄褐色シルト 他	土師	古墳前期前葉
	A3-C7	逆台形状	21.00	5.50×2.20	灰白色粗砂 他	弥生	弥生後期後半
2	B2-C3	皿状	10.50	1.40×0.20	暗灰色粗砂	弥生	弥生末
3	A2-C4	逆台形状	14.50	1.70×0.88	灰白色粗砂 他	弥生・土師	弥生末～古墳前期前葉
4	A1-B2	逆台形状	6.70	0.40×0.34	褐灰色シルト 他	土師	中世以前
5	B-C2	皿状	6.90	0.90×0.53	灰白色粗砂 他	弥生	弥生末
6	B2-C3	皿状	8.40	0.70×0.10	灰黄色粗砂	土師・須恵	古墳後期
7	B2	レンズ状	3.20	0.45×0.08	灰黄色粗砂		古墳後期以降
8	A5-C7	レンズ状	13.00	1.20×0.11	灰黄色粗砂	弥生・土師・須恵	古墳後期後半

表2 柱穴一覧

柱穴 (SP)	地区	平面形	規 模		埋 土	出土遺物	備 考
			長径	短径×高さ(m)			
1	A2	円形	0.26	0.23×0.08	暗灰黄色シルト		
2	B2	円形	0.26	0.17×0.17	暗灰黄色シルト		
3	C3	円形	0.29	0.26×0.12	暗灰黄色シルト		
4	C3	円形	0.20	0.15×0.08	暗灰黄色シルト		
5	C3	円形	0.22	0.16×0.08	暗灰黄色シルト		
6	B3	楕円形	0.28	0.26×0.19	暗灰黄色シルト		
7	B3	楕円形	0.26	(0.10)×0.08	暗灰黄色シルト		
8	B6	円形	0.24	0.20×0.11	暗灰黄色シルト		
9	B6	円形	0.20	0.16×0.11	暗灰黄色シルト		
10	B6	楕円形	0.24	0.17×0.09	暗灰黄色シルト		
11	C6	楕円形	0.34	0.22×0.18	暗灰黄色シルト	弥生	
12	C6	楕円形	0.27	0.25×0.16	暗灰黄色シルト	弥生	柱痕
13	C6	円形	0.22	0.18×0.14	灰色シルト		
14	C7	円形	0.27	0.26×0.12	灰色シルト		
15	C7	円形	0.30	0.28×0.09	暗灰黄色シルト		
16	B6	円形	0.25	0.24×0.12	暗灰黄色シルト		
17	B6	楕円形	0.33	0.27×0.14	暗灰黄色シルト		
18	B7	円形	0.29	0.26×0.18	暗灰黄色シルト		
19	C7	円形	0.21	0.21×0.08	暗灰黄色シルト		
20	A2	円形	0.25	0.22×0.07	暗灰黄色シルト		
21	C3	楕円形	0.34	0.23×0.18	暗灰黄色シルト		SD3を切る
22	C3	楕円形	0.30	0.16×0.13	暗灰黄色シルト		

## 第13章 まとめ

今回の調査では、弥生時代～近世に至る遺構と遺物を検出した。以下、土層と注目される遺構と遺物について時代毎に記述する。

### 1. 土層

調査地一帯は、アカホヤ火山灰とA T火山灰が広範に確認されている地域である。これらの火山灰は、平成5年に調査された東本遺跡4次調査において詳しく分析され、A T火山灰層が1次堆積層と2次堆積層からなる事が報告されている。この調査結果をもとに、広がりや堆積状況を確認するために今回の調査においても、これらの火山灰の検出に努めた。東本遺跡4次調査に隣接する東本遺跡9次調査をはじめ、小坂遺跡3次調査、中村松田遺跡5次・6次調査でアカホヤ火山灰層やA T火山灰層を検出した。この成果は、東本遺跡4次調査より西方の、A T火山灰やアカホヤ火山灰の堆積状況と分布域を知る上で貴重な資料となるものである。

### 2. 弥生時代

東本遺跡や隣接する枝松遺跡のほか、中村松田遺跡では都市開発に伴う調査が増加し弥生時代後期後葉～末葉にかけての竪穴住居が多数見つかり、この時期の集落地であったことが知られている。見つかった竪穴住居は、東本遺跡で30棟、枝松遺跡で6棟、中村松田遺跡で7棟が報告されている。検出された竪穴住居は平面形、規模、住居内施設（柱穴数、炉の形態、ベッド状遺構の有無、土坑の有無など）、住居廃棄形態（焼土・炭の有無、多量の土器廃棄など）に共通性と違いがみられている。このうち平面形と規模について概観すると平面形では円形、方形(隅丸)のほか、八角形を呈するものがある。規模では、小型（直径または一辺4m未満）、中型（直径または一辺4m以上）、大型（直径または一辺7m以上）のものが検出されている。

今回の調査では、弥生時代後期に比定される竪穴住居を東本遺跡で2棟、小坂遺跡で1棟、中村松田遺跡で1棟を検出している。検出された竪穴住居は平面形、規模、住居内施設（柱穴数、炉の形態、ベッド状遺構の有無、土坑の有無など）、住居廃棄形態（焼土・炭の有無、多量の土器廃棄など）に共通性と違いがみられている。見つかった住居は、大型の円形住居2棟（東本遺跡）と中型の円形住居1棟（小坂遺跡）、全容が不明の住居1棟（中村松田遺跡）である。大型の円形住居は、東本遺跡9次調査で検出したベッド状遺構を伴うSB101と東本遺跡10次調査のSB1がある。SB101とSB1は、検出状況より建て替えが想定される住居である。SB101には、住居廃絶後に甕、壺、鉢、高坏、器台など多量の土器が廃棄されていたが、SB1には、土器の廃棄は行われていなかった。松山平野では、SB101のように住居内に多量の土器が廃棄される例は、中村桑原線の調査である枝松遺跡8次調査のSB101、中村松田遺跡のSB4、筋違F遺跡のSB5、松山大学構内遺跡2次調査のSB4がある。このうち、枝松遺跡8次調査のSB202と松山大学構内遺跡2次調査のSB4については、遺物の出土状況から捉えられた様子がうかがえるものである。時期は、後期中葉～末葉であることから、この時期の住居廃絶状況の特徴として捉える事ができる。しかしながら、土器が多量に廃棄される住居は限定的であり、その原因を住居廃絶時の一般的な祭祀行為と考える事はできない。住居平面形態・規模・住居構造・住居廃棄形態（焼土の有無）・出土遺物の種類など、類例の蓄積と比較検討を行うことで、土器廃棄に至る社会背景とその要因について解明する事が可能であると考える。

次に集落の立地について考える。これまで中村桑原線の調査は、東の桑原町から西の中村町までの

東西約1.5kmに及んでいる。東本遺跡では、大型の円形住居は、東本遺跡9次・10次調査のある東部環状線と中村桑原線の交差点付近でその多くが検出され、東本遺跡4次調査のSB302より破鏡が出土するなど、住居の規模や出土遺物より集落の中心部はこの付近に所在するものと考えられる。東本遺跡9次調査の東80mには、東本遺跡6次調査で見つかった自然流路SR201がある。SR201は川幅が37mを測る大きな流路である。出土遺物から遅くとも弥生時代後期には流れていたものと考えられる。この流路を境にして東側では、住居を検出していない。このことから、東本遺跡一帯の弥生時代後期後葉～末葉の集落はSR201の西岸に立地し、集落の東限をSR201に求められる。西域については、枝松遺跡7次調査で見つかったSD201が境界を示す遺構とも考えられる。小坂遺跡4次調査で見つかった竪穴住居は、二つの集落から隔絶感があるが枝松遺跡7次のSD201を境界とするならば中村松田遺跡の集落域に属する事となる。いずれにしろ中村桑原線の調査によって、東本遺跡を中心とした集落域と中村松田遺跡を中心とした集落域の境界を想定できる資料は得る事ができたものとする。今後は水田、畑などの生産域と墓域の解明が課題であろう。

### 3. 古墳時代～古代

この時期の遺構には、小坂遺跡3次調査で検出した古墳時代後期に比定される溝や小坂遺跡5次調査で見つかった竪穴住居があるものの、この時期の住居や土坑などの集落関連遺構は少ない。これら調査地の北方には素鷺小学校構内遺跡より掘立柱建物跡や竪穴住居が見つかり、この時期の集落は今回の調査地より北方に展開するものと考えられる。中村松田遺跡6次調査や小坂遺跡3次調査では溝や籾跡などが検出され、水田や畑が営まれていたものと想定されている。

### 4. 中世～近世

この時期の遺構には掘立柱建物跡、土坑、柱穴、井戸、畑、溝などがある。遺構密度は少ないがどの遺跡にも少なからず遺構を検出している。小坂遺跡1次調査では掘立柱建物や土坑、畑などを検出している。掘立柱建物は柱間と柱穴規模は小さい事から小規模な建物である。

土坑は東本遺跡9次調査のSK1、4次調査2区のSK207、6次調査2区のSK201がある。SK1からは13世紀に比定される土師器、瓦器などが出土しており、一括出土遺物として良好な資料となるものである。柱穴は、東本10次調査のSP103がある。埋納されたと考えられる遺物が出土しており、柱穴内祭祀の一例となる。溝は、中村松田遺跡6次調査のSD1がある。SD1からは、土師器、瓦器など13世紀に比定される遺物が出土している。出土した遺物は、当該期の遺物を考える上で良好な資料となるものであった。井戸は、中村松田遺跡5次調査で3基が見つかり、井戸SE201からは青磁や小刀が出土し、SE202からは松山平野では出土が稀な瓦器や木製品が出土している。

調査地一帯は桑原地区と称され、古代においては「和名抄」による温泉郡五郷のうちの桑原郷にあたる。桑原郷は後世に桑原村、正門寺村、樽味村、松末村、三町村、東野村、畑寺村、新百姓村(現東本町)、小坂村、枝松村、中村の11ヶ村に区分され、古来より生活が営まれてきた地域である。今後は、桑原地区の集落範囲や規模、生産域など集落構造の解明が課題である。

#### 【参考文献】

- 高尾和長編 『東本遺跡4次調査・枝松遺跡4次調査』松山市教育委員会・柳松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター 1996
- 相原浩二編 『市道中村桑原線関連遺跡』『桑原遺跡-2次・4次、東本遺跡-6次調査』松山市教育委員会・柳松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター 2005
- 武正良治編 『市道中村桑原線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2』『枝松遺跡-7次・8次・9次・10次調査』松山市教育委員会・柳松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター 2008

# 報告書抄録

ふりがな	つかもとせいせき、こさかいせき、なかむらまつだいせき						
書名	東本遺跡-9次・10次調査-、小坂遺跡-1次~6次調査-、中村松田遺跡-5次・6次調査-						
副書名	市道中村桑原線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3						
巻次	-本文編-						
シリーズ名	松山市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第153集						
編著者名	栗田茂敏・高尾和長・宮内慎一・山之内志郎・相原浩二・相原秀仁・大西朋子						
編集機関	財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団 施設利用推進部 埋蔵文化財センター						
所在地	〒791-8032 愛媛県松山市南斎院町乙67-6 TEL089-923-6363						
発行年月日	西暦2011年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積	調査原因
東本遺跡9次	松山市東本	38201 405-6-A	33° 49' 59"	132° 47' 13"	20070516~20070831	476 m <sup>2</sup>	道路建設
東本遺跡10次	松山市東本	38201 405-6-C	33° 49' 58"	132° 47' 12"	20070903~20071015	190 m <sup>2</sup>	道路建設
小坂遺跡1次	松山市小坂	38201 405-4	33° 49' 59"	132° 46' 51"	20060201~20060428	549 m <sup>2</sup>	道路建設
小坂遺跡2次	松山市小坂	38201 405-5-A	33° 49' 59"	132° 46' 54"	20060601~20060731	600 m <sup>2</sup>	道路建設
小坂遺跡3次	松山市小坂	38201 405-5-B	33° 49' 59"	132° 46' 46"	20061002~20061227	700 m <sup>2</sup>	道路建設
小坂遺跡4次	松山市小坂	38201 405-5-C	33° 49' 58"	132° 46' 56"	20061201~20070131	780 m <sup>2</sup>	道路建設
小坂遺跡5次	松山市小坂	38201 405-6-B	33° 49' 59"	132° 46' 48"	20070516~20070713	550 m <sup>2</sup>	道路建設
小坂遺跡6次	松山市小坂	38201 405-6-D	33° 49' 59"	132° 46' 56"	20071016~20071227	511.61 m <sup>2</sup>	道路建設
中村松田遺跡5次	松山市中村	38201 405-7-A	33° 49' 58"	132° 46' 43"	20081016~20090131	573.165 m <sup>2</sup>	道路建設
中村松田遺跡6次	松山市中村	38201 405-7-B	33° 49' 59"	132° 46' 45"	20090202~20090515	632.6 m <sup>2</sup>	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
東本遺跡9次	集落	弥生 中世	竪穴住居、溝、土坑、柱穴	弥生土器、石包丁、砥石、ガラス小玉、水晶、土師器、青磁、鉄滓、古銭	弥生時代後期後葉の竪穴住居に多量の廃棄土器。		
東本遺跡10次	集落	弥生 中世	竪穴住居、土坑、柱穴	弥生土器、土師器、鉄器、石包丁	弥生時代後期末葉の建替えが行われた竪穴住居。		
小坂遺跡1次	集落	中世 近世	掘立柱建物跡、畑遺構、溝、土坑、柱穴	土師器、須恵器、陶磁器、石器、将棋の駒			
小坂遺跡2次	集落	弥生 中世	溝、土坑、柱穴、畑遺構	弥生土器、土師器、陶磁器、硯			
小坂遺跡3次	集落	古代	溝、自然流路、柱穴	土師器、須恵器、陶磁器、石器、鉄			
小坂遺跡4次	集落	弥生 中世	竪穴住居、土坑、溝、性格不明遺構、柱穴	弥生土器、土師器、石器	弥生時代後期後葉の竪穴住居。		
小坂遺跡5次	集落	弥生 古墳	竪穴住居、溝、土坑	弥生土器、土師器、石錘			
小坂遺跡6次	集落	弥生	溝、柱穴、性格不明遺構	弥生土器、須恵器、土師器、砥石			
中村松田遺跡5次	集落	弥生 中世	竪穴住居、溝、土坑、井戸、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、瓦器(坏)、石器、鉄器、木器	弥生時代後期後葉の竪穴住居。中世の井戸から小刀出土。		
中村松田遺跡6次	集落	古代~ 中世	溝、柱穴	土師器、須恵器、陶磁器、銭貨			
要約	弥生時代後期の竪穴住居4棟や中世の土坑、井戸跡などが見ついている。竪穴住居は建替えが想定されるものや住居内に多種・多量の土器などが廃棄されている住居がある。鎌倉時代の井戸跡からは小刀や土師器、瓦器、青磁などが出土している。						

松山市文化財調査報告書 第153集  
市道中村桑原線道路改良工事伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 3

東本遺跡 9・10次調査  
小坂遺跡 1次～6次調査  
中村松田遺跡 5・6次調査

— 本 文 編 —

---

平成23年3月31日 発行

編 集 財団法人松山市文化・スポーツ振興財団  
発 行 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー  
〒791-8032 松山市南斎院町乙67番地 6  
T E L (089) 923-6363

印 刷 岡 田 印 刷 株 式 会 社  
〒790-0012 松山市湊町7丁目1番地 8  
T E L (089) 941-9111

---



